ソクラテスの思い出

クセノフォン(著)
ヘンリー グラハム ダキンス(~千九百十一)(英訳)

第一巻

第一巻第一章（ソクラテスへの死刑に対する反論）（ソクラテスの信心深さ）（神による前兆の存在）（ソクラテスから友人達への助言）（予知は神の領分）（自身以外への科学よりも自身を含む人と善への哲学の推奨）（神の全知と遍在）

どんな言い分によってソクラテスの命が正当に国に（罪の罰として）没収されたとソクラテスを訴えた者どもがアテナイ市民達を説得できたのか私クセノフォンはよく不思議に思ってきた。

ソクラテスに対する起訴状の趣旨は次のような物であった。

「ソクラテスは国が認めている神々を認める事を拒否する罪を犯している。また、ソクラテスはソクラテス独自のあやしい神々を（国に）持ち込んでいる罪を犯している。さらに、ソクラテスは若者を堕落させる罪を犯している」

第一に、ソクラテスを訴えた者どもは、ソクラテスが国が認めている神々を認める事を拒否したという、どんな証拠を提示したのか？

ソクラテスは（国が認めている）神々に捧げものを捧げなかったのか？

または、ソクラテスは（国が認めている神々の）予言無しで済ましたのか？

逆に、自宅や国の共用の祭壇でソクラテスが（国が認めている）神々に捧げものを捧げている姿が頻繁に見られた。

また、ソクラテスが（国が認めている神々の）予言を信頼しているのは、それに劣らず、明らかであった。

確かに、ソクラテスが「ある神性（、何らかの神のようなもの）が私ソクラテスに教えてくれる」と言っていた事は皆が口にしていた。

私クセノフォンが間違っていなければ、それはソクラテスが新しい神々を(国に)持ち込んだという非難の根拠に成っているほどであった。

けれども、ソクラテスの事例は、鳥達の飛び方や鳴き方(による鳥占い)、人々の発言、偶然の出会い、神に捧げた動物の内臓(の様子による占い)といった、あらゆる種類の前兆によく頼って神託の助けを信じている他の人々の事例よりも、珍しくはなかった。

一般的な大衆の考えでさえも、それは、ただの鳥ではなく、個人が遭遇した偶然ではなく、実に、人にとって何が有益かを知っている、そのような諸手段で同一の前兆を表してくれる、神々によるものなのである。

これはまたソクラテスの見解だったのである。

人々は道で鳥や他の生物に遭遇したら脇に避けたり急いだりすると普通、話すだけだが、ソクラテスの言葉はソクラテスの確信と一致していた。

「その神性は私ソクラテスに合図をくれる」とソクラテスは言っていた。

さらに、ソクラテスは常に友人達に、この同じ神的なお告げの権威によって、(正しい事を)行うように助言したり、(悪い事を)行わないように助言したりしていた。

そして、実際に、ソクラテスの諸々の忠告を聞き入れた者達は栄えたが、一方、ソクラテスの諸々の忠告に聞く耳を持たなかった者は後悔する羽目に成った。

さらに、すぐに認められるであろうが、ソクラテスは普段、自身を悪人や愚者として友人達に見せる事を望まなかった。

仮に、神が(ソクラテスに)もたらしていたお告げ(という物)が実際は虚勢を張るソクラテス独自の傾向を暴露していたのであれば、ソクラテスは悪人や愚者として見えたであろうが(、実際は、そうではない)。

(仮に、ソクラテスの誇りである、天の神からの明示が、実は、ソクラテスの判断の誤りを明らかにしていたのであれば、ソクラテスは悪人や愚者として見えたであろうが、実際は、そうではない。※別の版)

ソクラテスが占いを全く試さなかったのは明らかである。

実に、ソクラテスの確信についてソクラテスが話した諸々の言葉は実際に証明されるであろう。

ソクラテスの確信は、もし神を根源としていなかったのであれば、誰を、または、何を根源としていたというのか？（ソクラテスの確信は神を根源としていた！）

また、もしソクラテスが(国が認めている)神々を信じていたのであれば、どうしてソクラテスが(国が認めている)神々を認めない事ができたであろうか？（ソクラテスは国が認めている神々を認めていた！）

ただし、親しい友人達へのソクラテスの対応方法には別の側面が有った。生きるのに必要な日常の事についてのソクラテスの助言は「あなたが最善であると思う通りに行いなさい」であった。

(確定的な範囲についてのソクラテスの助言は「あなたが最善であると思う通りに行いなさい」であった。※別の版)

ただし、見通せない問題、予想不能な問題の場合には、ソクラテスは「問題に取り組むべきか否か」を神託へ相談するように友人達に命じた。

「家や都市(国家)の統治の成功を望む者で、国家の統治を正しく導こうと望む者で、上の者である神からの助け無しで済ます事ができる者は誰もいないのである」とソクラテスはよく言っていた。

疑い無く、木工、建築、鍛冶、農業における技術、人の統治術の技術、並びに、それらの処理の理論と、数学、経済学、戦略学は、努力して学習する物であるし、人の知力による理解の範囲内に存在する。

しかし、人の知力による理解の範囲内に存在するものと対等な、少なからず重要な、別のもの、神々が神々の物として取って置いてあるもの、人の洞察力からは隠されているものが存在する。

そのため、とんでもなく非常に巧みに、ある人に種を畑に撒かせたり農園に植えさせたりしても、その人は誰が成果を刈り入れるのか予言できない。別の、ある人は自身のために最高に美しく調和している家を建てるかもしれないが、その人は誰がその家に住む事に成るのか知らない。

ある将軍はある戦闘を指揮する事が自身の利益になるかどうか予見できないし、ある政治家は自身の指導が良い結果に成るか悪い結果と成るか確信する事ができない。

また、美しい妻と結婚する男性が、喜びを望んでいても、妻によって悲しまないかどうか知る事はできない。

都市国家で強い繋がりを築き上げた人がその繋がりによって自分の都市国家から国外追放されるかどうか知る事はできない。

超自然的なものを無視して、これらの全ての問題が人の判断力の範囲内にあると思う事は超自然的な愚かさである。

(神が)学習によって決断するように人に与えている、どんな問題についても神意に相談しに行く事は(その超自然的な愚かさに比べると)行き過ぎの程度がより少ない(が、愚かである)。

人が「私は私の馬車の御者として熟練した馬車の御者を選ぶべきでしょうか？　それとも、馬の手綱に触れた事が無い人を選ぶべきでしょうか？」と尋ねるような物なのである。

「私は船乗りを私の船の船長に指名するべきでしょうか？　それとも、陸上勤務者に指名するべきでしょうか？」（と尋ねるような物なのである。）

また、数えたり、量ったり、測ったりして知る事ができる全てのものについても、そうなのである。

そういった問題について神からの助言を求める事は一種の神への冒涜に成ってしまう。

ソクラテスは「人の義務は明らかである。人が人の自然な能力で解決する事が可能な場合は必ず人は人の自然な能力を利用しなさい。しかし、隠されている物事においては、上の者である神からの知恵を(神託という)予言によって得ようと努めなさい。なぜなら、神々は諸々の合図を神々が思いやろうとする(正しい思いやり深い)人に与えてくれる」とよく言っていた。

さらに、ソクラテスは常に大衆の見える所で暮らしていた。

早朝ソクラテスが散歩道の一つかレスリング場の一つに行っている姿が必ず見かけられた。

真昼ソクラテスは集まった友人と共に市場によく現れた。

そして、陽が傾いている間は、人が最も集まっている所に遭遇できるかもしれない所ならばどこでも、ソクラテスは見かけられて、ほとんどの場合ソクラテスは(人と)話していて、(立ち止まってソクラテスの話を聞く事を)選んだ人は皆、立ち止まって聞く事ができた。

しかし、ソクラテスが不信心な、(神に)不敬な何かを話したのを聞いた人は誰もいないし、ソクラテスが不信心な、(神に)不敬な何かを行ったのを見た人は誰もいない。

実に、他の人々とは対照的に、ソクラテスは森羅万象の性質といった高位の(神的な)問題についての全ての議論に反対した。

学者が話すような、どのようにして「コスモス」、「世界」が生じたのか(についての議論にソクラテスは反対した)。

どんな諸々の力によって天体現象が生じるのか(についての議論にソクラテスは反対した)。

「そのような問題について頭を悩ませる事は愚行を演じる事である」とソクラテスは主張した。

ソクラテスはよく最初に次のように尋ねた。

これらの研究者達は人の物事についての知識が非常に完全であると感じて、これらの高尚な推測に没頭しているのか？

または、これらの研究者達は、神の物事について推測するために、このようにして人の物事を無視して、人に相応しい義務を果たしていると主張しているのか？

どの位これらの(神の物である)諸問題が人の理解を超えているのか、これらの研究者達は理解していない事にソクラテスは驚いていた。

なぜなら、これらの(神の物である)諸問題についての議論について最も自慢している者達ですら互いの意見が合わない。狂人どもは互いの意見が合わないように。

「なぜなら、ある狂人どもは本当に恐ろしい物事への恐れが無いのと、全く同じように、別の、ある狂人どもは恐ろしくない物事を恐れる」とソクラテスは言った。

ある人達は少しも恥ずかしげも無く人前で、どんな事でも言ったり行ったりする事ができる。(良くも悪くも恐れ知らずである。)

別の、ある人達は人々の中に足を踏み入れる事すらするべきではないと思う。

ある人達は神殿も、祭壇も、その他の神聖な全てのもの、神の御名まで畏敬しない。

別の、ある人達は木や石まで畏敬するし、動物そのものも畏敬する。

森羅万象の性質についてかまけて頭を悩ませている、これらの思想家も、そうなのである。

ある学派の者は存在が唯一で不可分であると気づいた。

別の、ある学派の者は存在が数における無限であると気づいた。

ある者が万物は絶えず流動していると主張すれば、別の、ある者は何時でも動かす事ができる物は多分、何も無いだろうと応戦する。

生滅の過程としての森羅万象の理論は、何ものも生じたり滅んだりしないという反対の理論と衝突する。

ただし、これらの推測者達の長短についてのソクラテスの質問は時々別の形を取った。

「人の学問の研究者は研究者自身や他者の利益のために研究者が望んだ通りに研究から何ものかを作るつもりである」とソクラテスは言った。

これらの、神の働きの研究者達はどんな諸々の力によって色々な現象が起きるのか発見した時に風や水を思い通りに創造したり豊作な季節を創造したりしようと望んでいるのか？

研究者達は風や水や季節を操作するつもりなのか？　研究者達は風や水や季節に似たものを研究者自身の欲求に合わせるつもりなのか？

または、そのような考えが研究者達の頭には浮かんだ事はもしかして無いのか？　また、研究者達はどのようにそういった物が生じるのかただ知るだけで満足するつもりなのか？

しかし、もし、これらのような問題を弄ぶ研究者達について言ったソクラテスの言い方通りであったならば、ソクラテス自身は人の問題の議論に飽きる事は決して無かった。

信心とは何か？
不信心とは何か？
美とは何か？
醜さとは何か？
高貴とは何か？
下劣とは何か？
正しさの意味、不正の意味とは何か？
冷静の意味、狂気の意味とは何か？
勇気の意味、臆病の意味とは何か？
国家とは何か？
政治家とは何者か？
人々の統治者とは何者か？
支配的な性質は何か？

また、その他の似た諸問題は、貴族の特権を(諸問題の答えの)所有者にもたらす知識であり、一方、その知識が不足している人は当然、奴隷呼ばわりされる。

(また、その他の似た諸問題は、美しさと醜悪さ、善と悪を区別する知識であり、一方、その知識が不足している人は当然、奴隷呼ばわりされる。※別の版)

さて、ソクラテスの諸々の考えが世間に広く知られていない限り、裁判官がソクラテスの諸々の考えについて誤った結論を導き出した事に驚かない。

しかし、全ての人にとって明らかな諸々の事実が無視された事は実に驚きである。

かつてソクラテスは議員であり、議員の誓いを誓って、「議員として諸々の法に従って行動する事」を誓った。

トラシュロス、エラシニデスといった九人の将軍を一回の包括的な投票で死刑にする欲求に民会がとりつかれた時にソクラテスは民会の議長に成る事ができる機会が有った。

そこで、民衆の強い怒りと数人の有力な市民の脅迫にもかかわらず、ソクラテスは、不法に民衆を喜ばせる事よりも、また、有力者の脅迫から身を守る事よりも、誓った誓いを信心深く守る事がより重要であると重んじて、その投票を求める事を拒否した。

事実、神々が人を思いやる事について、ソクラテスの確信は大衆の信仰とは大いに異なっていた。

大多数の大衆は「神々は、ある程度は知っていて、ある程度は無知である」と妄想しているように見受けられるが、ソクラテスは「神々は全てを知っている」と固く信じていた。

「神々は全知ではない」という説と「神々は全知である」という説が唱えられ、実践され、心という静かな部屋で話し合われている。

さらに、神々は全ての場所に存在していて、人の全ての物事について人に合図を与えてくれる。

そのため、私クセノフォンは私クセノフォンの先の諸々の言葉を実に他言する事ができる。

ソクラテスは神々に手を出しているので冷静さが不足していると、どうしてアテナイ市民達が説得されたのか私クセノフォンには不思議である。

我々が畏敬する神々に対して不信心な言動を決して一つもしなかった一人の人ソクラテスの神々についての全ての言動は一字一句、一挙手一投足が厳密に一致していて、我々が最も信心深い信心深さの特徴であると思う全てを備えていた。

第一巻 第二章 (ソクラテスへの死刑に対する反論)(ソクラテスの節制、自制)(暴力と説得の違い)(悪人クリティアスと悪人アルキビアデス)(交流する相手からの影響)

(ソクラテスが神々を認めていないと信じられてしまったという、)それに劣らず、ソクラテスが若者を堕落させたと信じられてしまったのは私クセノフォンには驚きである。

この人ソクラテスは、(私クセノフォンが)既に話してきた事を超越していて、自分の食欲と性欲を厳しく抑制した。

ソクラテスは群を抜いて冬の寒さ、夏の暑さ、全ての種類の労苦を忍耐できた。

ソクラテスは、自分の欲求を少なくするように自身にとても教え込んでいたので、最少の財産で満足しない事が決して無かった。

このような独りの人ソクラテスが他人を無礼者にしたり無法者にしたり放蕩者にしたり戦いを前にしても軟弱な者にしたりできたと信じられるであろうか？ (信じられない！)

ソクラテスは、(他人を堕落させたのではなく、)むしろ、ソクラテスが多数の人達の中に呼び起こしている徳(、善行)への情熱によって、また、「自身を用心して営んでいく事によって真の美しい善い人に成れるかもしれない」というソクラテスが多数の人達に吹き込んでいる希望によって、多数の人達を救っているのではないか？ (はい！)

実に、ソクラテスは善行についての教師に成る事をかつて引き受けたのではなく、明らかにソクラテス自身が徳に適うようにしていく事で、ソクラテ

スは「(ソクラテスの善行を)模倣していく事で最終的にソクラテスに似る事ができるかもしれない」という希望をソクラテスと交際が有った人達に抱かせた。

しかし、(誤って)「ソクラテスはソクラテス自身の肉体について怠慢であった」とか「ソクラテスは、自身の肉体について怠慢であった人達に賛成した」と推測するなかれ。

食べ過ぎたら余分に労働して相殺する事はソクラテスが賛成しなかった食事の規定量である。

精神の育成を妨害しないで肉体の健康な状態へ向かうように、適度な運動と連動している食欲の自然な要求を満足させる事がソクラテスが賛成した方法である。

また、ソクラテスは身を飾ったり見栄を張ったりしなかった。

ソクラテスは肩掛けや靴で身を飾るといった軟弱な生き方に身を任せなかった。

特にソクラテスには友人達を金銭に貪欲にさせる傾向が無かった。

ソクラテスは、性欲を多くの場合、抑制しつつ、自身に他人の責任を伴わせる性欲を利用しなかった。

そして、ソクラテスは「性欲の禁欲によって最もよく自身の自由に助言を求めている」と信じていた。

それで、ソクラテスは社会に対して恩着せがましく給料を受け取る者どもに「自身を売る者ども」という烙印を押した。

なぜなら、社会に対して恩着せがましく給料を受け取る者どもは自分の給料を支払う人達が(給料を支払う事で)得る利益について論じざるを得ないからである。

ソクラテスを驚かせた事は、徳を有している誰もが、真の友人を獲得した報いへ率直に到達せずに、まるで新たに自立した名誉の人が最大の恩人への感謝の恩義を忘れる事ができるように(するためであるかのように)、誇りを捨てて金銭を求めなければいけない事である。

自身のために、そのような明言をしなくても、ソクラテスは「ソクラテスの考えを受け入れた人達は、お互いにとって、また、ソクラテスにとって、一生、善い真の友人の役割を果たしてくれる」と信じるだけで満足した。

再び尋ねるが、このような性格の独りの人ソクラテスが一体どのように若者を堕落させるというのか？ (ソクラテスは若者を堕落させなかった！)

徳の丁寧な育成が他人を堕落させる事でない限り。(ソクラテスは若者を堕落させなかった。)

ソクラテスを訴えた者どもは「しかし、全ての神聖であるものにかけて！」と主張し始めた。

「ソクラテスは、くじ引きによって国家の役人を任命する愚行を長々と話した時に友人達に確立されている法律を軽蔑させたのではないか？」

「ソクラテスは『(くじ引きとは、)案内人やフルート奏者を選ぶ場合といった、政治的な問題よりも失策が災害を引き起こす事が遥かに少ない同様の全ての場合でも、誰も適用を望まない原理である』と言った」

ソクラテスを訴えた者どもによると、「これらのような言葉は、若者を暴力的にして、また、若者を頑固にして、若者が確立されている法律を軽蔑するように扇動する傾向が有る」。

しかし、私クセノフォンは「知恵を育成して自身が同じ都市(国家)の市民に利害について教える事ができると信じている人達は暴力の支持者に最も成りそうに無い」と考えている。

知恵を育成して自身が同じ都市(国家)の市民に利害について教える事ができると信じている人達は、恨みと危険が暴力には伴う一方、安全な平和的な説得は良い結果を得る可能性が有る事にとても良く通じている。

なぜなら、暴力の被害者は大事な何かを盗まれた者であるかのように復讐心で恨みを抱くが、説得されて自発的に成った者は説得してくれた人の手に喜んで口づけする。

このため、強制は、知恵を学んでいる人の方法ではなく、熟考によって手加減無しの権力を行使する人の方法なのである。

再び言うが、暴力を敢行する人は戦うために多数の人達の支持を必要とするが、説得に頼る人は単独で勝利する。

なぜなら、説得に頼る人は(説得が)単独で同意させる巧妙さに気づいている。

このような説得に頼る人は流血とどんな関係が有るというのか？　(説得に頼る人は流血と無関係である！)

なぜなら、生者の頼りに成る貢献を利用しないで人々を殺す事は何とも馬鹿な事だからである。

しかし、ソクラテスを訴えた者どもは二人の人、すなわち、クリティアスとアルキビアデスが「どんな時でも国家にとって最大の害悪」であったと言い、「両方共ソクラテスの友人達であった」と応じた。

クリティアスは寡頭政治の支配者であった。

また、アルキビアデスは(衆愚政治の時代の)民主主義者であった。

一方のクリティアスよりも大泥棒、野蛮人、殺人犯がどこにいるのか？

(いない！)

他方のアルキビアデスのように傲慢な、性欲を節制、自制できない、高圧的な兆候の者がどこにいるのか？（いない！）

私クセノフォンとしても、「国家にとって害悪」であったと言われているクリティアスとアルキビアデスの二人に限っては、私クセノフォンはクリティアスとアルキビアデスのどちらの弁護者としても出廷する事を望まない。

私クセノフォンはクリティアスとアルキビアデスが本当はどんな理由でソクラテスに親しんだのかを説明するだけにとどめる。

アテナイでクリティアスとアルキビアデスの二人よりも野心的な市民はいなかった。

野心がクリティアスとアルキビアデスの気質に有った。

クリティアスとアルキビアデスに決断力があれば、全ての権力がクリティアスとアルキビアデスに掌握されていたはずである。

クリティアスとアルキビアデスの評判は他の全ての人々を凌駕していた。

クリティアスとアルキビアデスがソクラテスについて知っていた事は次のような物でした。

最初に、ソクラテスは最少の財産で絶対的に自立した独立した生活をしていた。

次に、ソクラテスは快楽に関して極限にまで節制、自制していた。

最後に、ソクラテスは議論ではソクラテスを手玉にとる事ができる相手がいないほど恐るべき者であった。

このような物がクリティアスとアルキビアデスの意見であった。

また、より有り得るのは、このような物がソクラテスの評判であった。

クリティアスとアルキビアデスがソクラテスとの交際を求めたのは、クリティアスとアルキビアデスがソクラテスの生き方に魅力を感じたからか？

（いいえ！）　また、クリティアスとアルキビアデスがこの人ソクラテスの忍耐に魅了されたからか？　（いいえ！）

　または、クリティアスとアルキビアデスは「自分達がソクラテスと同盟を結べば、自分達は国政と外交の達人に成るし、言動のわざにおいて無敵に成る」と考えたからか？　（いいえ！）

　私クセノフォンは「仮に、神が、クリティアスとアルキビアデスが見たソクラテスの人生の終わりのような人生を生きるか、死ぬか、を選択する権利をクリティアスとアルキビアデスに与えたら、クリティアスとアルキビアデスは両方とも死を選ぶだろう」と信じている。

　クリティアスとアルキビアデスの行動はクリティアスとアルキビアデスの性格の決定的な証拠である。

　クリティアスとアルキビアデスは自分達が接近した人々の支配者に成れると感じるとすぐにソクラテスと別れ、政治のあの混乱の中に飛び込み、ソクラテスとの交際を決して求めなかった。

　次のような異議が有るかもしれない。

「ソクラテスは友人達に政治について教える前に、クリティアスとアルキビアデスに冷静さについて教えたほうが良かった」

　そのような考え方については議論せずに、私クセノフォンは「教師は教え子のために教えを実践する方法を必ず教え、それと共に、議論を促す」と指摘しておく。

　さて、私クセノフォンは「ソクラテスは自身を友人達に美しい高貴な存在として見せた」と知っている。

　ソクラテスはよく友人達と徳(、善行、善)や、その他の、人にとって利益に成る事について最も高貴な方法で論理的に考えて議論した。

私クセノフォンがクリティアスとアルキビアデスの二人について知っている事は、クリティアスとアルキビアデスがソクラテスと交流していた限りにおいてはクリティアスとアルキビアデスは節度を保っていたが、ソクラテスに罰されたり叩かれたりされる恐怖からでは間違い無くなく、そのような節度を保ったふるまいの当座の長所によって説得されたからである。

ここで、多分、哲学者を自認する人達は次のように応じるかもしれない。

「いいえ。本当に正しい人は正しくない人に成る事が決してできない。節制、自制している人は不節制に成る事が決してできない。どんなテーマの知識でも学んだ人はまるでそのテーマの知識を学んだ事が無いかのように成る事が決してできない」

しかし、クリティアスとアルキビアデスがソクラテスと交際していた時は節度を保っていた事は私クセノフォンだけの結論ではないのである。

クリティアスとアルキビアデスがソクラテスと交際していた時は節度を保っていた事は、肉体的な機能と関係が有るように、精神的な機能とも関係が有る。

器官(、人という機関)の鍛錬不足はあれこれの肉体的な機能や精神的な機能の不能に至る。そう成ると、人はするべきである事をする事もできないし、するべきではない事を控える事もできない。

そして、善人との交際が徳(、善行、善)の鍛錬に成るのであれば、同様に、また、悪人との交際は徳(、善行、善)の喪失に成るのを考えれば、このために、息子がどんなに節度を保っていても、父は悪人どもの手が息子に届かないようにするのである。

ある詩人はこの事についての証人である。その詩人は次のような詩を歌っている。

「高貴な者から高貴さについて教えられるべきなのである。もし下劣な人と交際したら、今、持っている賢明さを損なってしまうであろう」

また、次のような詩を歌っている詩人がいる。

「ただし、善人には下劣な時も善良な時も有るのである」

その詩人の証言に私クセノフォンの証言を加える。

なぜなら、私クセノフォンは「くり返しと実践無しには長い詩を覚える事は不可能である」と知っている。

そして、心の中で、教わった諸々の言葉を大事にしなく成ってしまうと、教わった諸々の言葉を忘れてしまう。

諸々の忠告の言葉の記憶が薄れてしまうと共に、心が神聖さ、高貴さを望んだ当時の精神状態の記憶も薄れてしまう。

一度でも徳(、善)についての言葉や精神状態を忘れてしまうと、その人から徳自体(、善自体)についての記憶も消え去ってしまうのは何か不思議であろうか！？　いいえ！

また、私クセノフォンは「人が酩酊の習慣に陥ってしまったり淫らな性欲に真っ逆さまに陥ってしまったりすると、正しい事を実践していたり悪い事を節制、自制していたりした以前の力を失ってしまう」と知っている。

肉欲に燃えていない間は楽に節約する事を知っている多数の人々は肉欲に陥るとすぐに(節約する)能力を失ってしまう。

そして、富を浪費して、以前は下劣過ぎて手を出さなかった利益をもはや節制、自制しなく成ってしまう。

それでは、「人が今日は節度を保っても明日には翻って節度を保たないかもしれない」と仮定し難い理由は、どんな点に有るのか？

また、「以前は徳（、善）に適った行いをする力を支配下に置いていた人が徳（、善）に適った行いをする力を完全に失ってしまうかもしれない」と仮定し難い理由は、どんな点に有るのか？

私クセノフォンには、いずれにしても、「全ての美しい高貴なものは絶え間無い実践や鍛錬の結果である」と思われる。

そして、節制、自制という徳（、善行、善）は、唯一の他ならぬ肉体という枠に満足を植えつけて魂と共に芽吹かせて「節制、自制を済ませて、急いで魂と肉体を満足させなさい」と魂の耳にささやき続けるので、群を抜いているのである。

しかし、クリティアスとアルキビアデスの話に戻ると、「クリティアスとアルキビアデスはソクラテスと共に過ごしていた限りにおいてはソクラテスの助けによって下劣な欲望を屈服させる事ができていた」と私クセノフォンはくり返し話す。

しかし、ソクラテスと絶縁すると、クリティアスはテッサリアに逃げなくてはならなく成ってしまい、テッサリアでクリティアスは正義よりも不正に慣れている者どもと交際してしまった。

また、アルキビアデスもクリティアスと大して変わらない生き方をしてしまった。

一方ではアルキビアデスの肉体の美しさは身分の高い女どもを刺激してアルキビアデスを美しい獲物として追い求めさせたし、他方ではアルキビアデスの（都市）国家や同盟諸国での影響力によってアルキビアデスは多数の甘言の手管の達人により堕落させられた。

民主主義によって敬われて上位に簡単に上がれたアルキビアデスは、競技場の試合で勝利を確信しているので鍛錬を怠っている競技選手のようにふるまった。

このため、アルキビアデスはすぐに負っている義務を忘れてしまった。

これがクリティアスとアルキビアデスの不幸と成った。

その結果は驚くべきであろうか？　(いいえ!)

(クリティアスとアルキビアデスは)家柄を誇って増長し、財産によって増長し、権力によって増長し、多数の誘惑者によって骨の髄まで心を軟弱にし、さらに長い間ソクラテスから離れた。(クリティアスとアルキビアデスは傲慢に成り、財産によって増長し、権力によって増長し、多数の誘惑者によって骨の髄まで心を軟弱にし、さらに長い間ソクラテスから離れた。※別の版)

クリティアスとアルキビアデスが完全な成長度合いの傲慢さに至ったのは何か不思議であろうか!?　いいえ!

そして、クリティアスとアルキビアデスの二人の罪の責任をソクラテスは負わされてしまう羽目に成ってしまった!

ソクラテスを訴えた者どもはクリティアスとアルキビアデスの二人の罪の責任をソクラテスに負わせた。

初期の、クリティアスとアルキビアデスが若かった時も、(ソクラテスとの)友好関係と節制、自制を放棄したと予想される時も、同じく、ソクラテスはクリティアスとアルキビアデスを謙虚にさせていたし身持ちを良くさせていたという事実について全くソクラテスを訴えた者どもは一言もほめなかった。

これは他では与えられている公正な裁きの基準に反している。

竪琴やフルートの教師も、どんな分野でも達人の教え子を輩出した事が有る教師も、教え子の一人が別の教師の所へ去って落伍者に成ってしまったからといって、責任を問われるであろうか？　（いいえ！）

または、ある(善い教師である)友人と交際していると正直な少年だが、別の友人と交際してしまうと碌でもない少年に成ってしまう息子がいる、どの父が前者の(善い)教師(である友人)を非難するであろうか？　（いいえ！）

その父はむしろ(息子である)少年が後者(の悪友ども)と交際してしまって悪く成ってしまうにつれて、より心からの称賛を前者(の善い教師である善友)に与えるのではないか？　（はい！）

子達と交際を共有している、どの父が、父の善良さだけは確証されていても、子達の罪の責任を負わされるべきであろうか？　（いいえ！）

ここで、仮に、ソクラテスに公正な調査が適用されていたら、ソクラテスはどんな下劣な行動で有罪に成ったのか？

もしソクラテスが下劣な行動で有罪に成ったのであれば、ソクラテスを下劣な人と見なしてもよいが、逆に、もしソクラテスが冷静で終始つまずいた事が決して無かったのであれば、正義の御名によってソクラテスには無かった下劣さを説明する責任をどうしてソクラテスに負わせるべきであるのか？

私クセノフォンは話を更に進めると、

もし、ソクラテス自身の何らかの過失を除いて、ソクラテスが他人の悪行に賛成して黙認したのであれば、非難に値するとソクラテスに判決を下す理由が有ったであろう。

それでは、聴きなさい。

「クリティアスはエウテュデモスに執着している」とソクラテスはよく知っていたし、「クリティアスは愛着が肉欲、性欲である淫らな女のようにエウテュデモスを扱おうと試みている」ともソクラテスは知っていた。

ソクラテスは、クリティアスのエウテュデモスへの試みがどんなに下劣な事であるか指摘して、愛している快く大事に見える人の前で下劣な何かを与える事や下劣な何かを得る事を常に嘆願する乞食のような姿を見せる事は立派な人にはどんなに不相応であるか指摘して、クリティアスにエウテュデモスへの試みをやめさせようと試みた。

しかし、この論理的思考が聞き入れられずクリティアスが矯正を拒否すると、ソクラテスは、伝えられている話によると、全ての友人達とエウテュデモスがいた時に「クリティアスは下劣な愛着で苦しんでいるように見受けられる」と言った。または、「このクリティアス自身をエウテュデモスにこすりつけようとする性欲は何と自身を石にこすりつけている子豚の群れのようである事か！」と言った。

クリティアスのソクラテスへの憎しみは疑い無く、この(ソクラテスがクリティアスを非難した)出来事に遡るのである。

クリティアスはソクラテスに対する憎しみを記憶し続けて、後に、クリティアスは「三十人僭主」の一人に成った時に(同じく「三十人僭主」の一人である)公式の立法者であるカリクレスと結託して、ソクラテスを非難したいという望みだけから(ソクラテスが)言論の技術を(若者に)教える事を禁止する(悪)法を作った。

クリティアスはソクラテスに大衆の哲学者への非難を向ける以外にソクラテスを逮捕する方法を知らなくて困った。ソクラテスに大衆の哲学者への非難を向けてクリティアスは大衆によってソクラテスを害そうと望んだ。

もし私クセノフォンがかつてソクラテス自身の口から漏れ落ちたのを聞いた言葉や他人から伝え聞いたソクラテスの言葉から判決を下して良いのであれば、クリティアスによるソクラテスへの非難は全く事実無根であった。

クリティアスの憎しみは明らかであった。

「三十人僭主」が市民達、高徳な市民達を大量に処刑していた時、「三十人僭主」が市民を扇動して市民に相互に罪を犯させていた時、ソクラテスは次のような意見を述べるに至った。

「もし絶え間無く自分の牛を減少させたり劣化させたりしている牛の群れの管理者が自分で『役に立たない種類の牛の群れの管理者である』と認めなければ、十分に驚くべきである。実に、絶え間無く市民を減少させたり劣化させたりしている都市国家の統治者が恥じ入らなかったり、自分で『役に立たない種類の統治者である』と認めなかったりする事は、より更に驚くべきである」

このソクラテスの意見は「三十人僭主」に報告されて、ソクラテスはクリティアスとカリクレスに呼び出された。

クリティアスとカリクレスは法として示してソクラテスに若者と会話する事を禁止した。

ソクラテスは「若者が(私ソクラテスとの会話禁止)命令を全く知らなかった場合は、その若者は説明を(私ソクラテスに)求める事が可能でしょうか？(私ソクラテスが私ソクラテスと若者の会話禁止命令を説明するために若者と会話する事は禁止されていませんよね？)」とクリティアスとカリクレスに尋ねた。

「もちろん(、ソクラテスがソクラテスと若者の会話禁止命令を説明するために若者と会話する事は許す)」とクリティアスとカリクレスは譲歩した。

すると、ソクラテスは次のように話した。
「私ソクラテスは(ソクラテスと若者の会話禁止命令という)法に従う用意が有りますが、無知による(ソクラテスと若者の会話禁止命令という)法への違反を避けるために私ソクラテスは次の事を説明してもらいたいです」
「私ソクラテスと若者達に会話を禁止するように命じるのは『言葉のわざは言葉の正しさへ進ませる傾向が有る』という仮定に基づいているのか？　または、『言葉のわざは言葉の誤りへ陥らせてしまう傾向が有る』という仮定に基づいているのか？」
「なぜなら、もし『言葉のわざは言葉の正しさへ進ませる傾向が有る』のであれば、私ソクラテスと若者達は正しく話す事を控えなければならなく成ってしまう事は明らかです」
「しかし、もし『言葉のわざは言葉の誤りへ陥らせてしまう傾向が有る』のであれば、私ソクラテスと若者達は自分の言葉を改善するように努力するべきです」
このソクラテスの言葉に、カリクレスは、怒りを激発して、言い返した。
「お前ソクラテスの無知を考慮して、私カリクレスとクリティアスは、お前ソクラテスの無知に、より適した言葉で(ソクラテスと若者の)会話禁止命令を次のように作ろう」
「私カリクレスとクリティアスは、お前ソクラテスにどんな会話であれ若者と会話する事を禁止する」
すると、ソクラテスは次のように話した。
「それでは、全ての曖昧さを避けるために、または、あなたカリクレスが命令してくださる以外の事を私ソクラテスがしてしまう可能性を避けるために、

何歳までの人が若いと見なされるか、あなたカリクレスが定義するように御願いしても良いですか？」

（カリクレスは次のように答えた。）「議員として（議会の席に）座る事が禁止されている間、成熟した知恵に到達していない間（は若いの）である」

「従って、あなたソクラテスは三十歳未満の者と会話するなかれ」

ソクラテスは次のように話した。

「公正に買い物する際、もし販売者が三十歳未満の場合、私ソクラテスは『これの価格はいくらですか？』と質問するべきではないのですか？」

カリクレスは次のように話した。

「チッ！（舌打ち）　そのようなたぐいの事では、実に、ソクラテスよ、お前は現状がどのようであるか知っている時は常に、お前には質問を尋ねる方法が有ると知っている」

「そのようなたぐいの質問はするなかれ」

ソクラテスは次のように話した。

「どうせ何も答えないのでしょう。質問が私ソクラテスが知っている事に関係している場合は。例えば、『カリクレスはどこに住んでいるのか？』のように。また、『カリクレスはどこにいるのか？』のように」

（カリクレスは次のように答えた。）「おお、そうだ。もちろん。そのようなたぐいの事はな」

一方、クリティアスは次のように言い足した。

「実に、同時に、あなたソクラテスは、あなたソクラテスの『靴屋』（による例え話）、『大工』（による例え話）、『銅細工師』（による例え話）で（若者と）会話してきたのでしょうね」

「あなたソクラテスが、それら、『靴屋』(による例え話)、『大工』(による例え話)、『銅細工師』(による例え話)にもたらした通用を考慮すると、それら、『靴屋』(による例え話)、『大工』(による例え話)、『銅細工師』(による例え話)は、もう、かかとで踏みつけられなければいけない」

ソクラテスは次のように話した。

「それでは、私ソクラテスは、それら、『靴屋』(による例え話)、『大工』(による例え話)、『銅細工師』(による例え話)に付随している話題、正しさ(、善)、神的なもの、なども控えるべきですか?」

(カリクレスは次のように答えた。)「最も確実に(控えなさい)。また、特に、(『三十人僭主』を非難する)『牛の群れの管理者』(の例え話)を控えなさい」

「さもないと、牛の群れの数を自分で減少させないように気をつける羽目に成るぞ(。アテナイ市民の数から、お前ソクラテスを減少させないように気をつける羽目に成るぞ。お前ソクラテスを処刑するかもしれないぞ)」

このようにして、その秘密は明らかに成りました。

「牛」(の例え話)についてのソクラテスの言葉は「三十人僭主」どもの耳に届きました。

そして、「三十人僭主」どもは牛の例え話の作者ソクラテスを許す事ができませんでした。

多分、クリティアスとソクラテスの間に存在していた親しさの種類と、クリティアスとソクラテスの相互関係を説明するのに十分な事を(私クセノフォンは)言いました。

実に、私クセノフォンは「教師が教え子を満足させていなければ、そこに教育は無いのである(。教え子を満足させていなければ、実は教師と教え子の関係ではないのである)」と大胆に主張したいです。

さて、クリティアスとアルキビアデスについて、「クリティアスとアルキビアデスはソクラテスに満足していたので、クリティアスとアルキビアデスはソクラテスと交際していた」と言う事はできません。

そして、これは全期間に当てはまります。

最初からクリティアスとアルキビアデスの目は最終目標として国家の指導者の地位にくぎづけでした。

ソクラテスに親しんでいた時の間もクリティアスとアルキビアデスは議論が得意な人よりも自称政治家に会う事を望んだ。

アルキビアデスについて、次のような話が語られている。

二十歳未満でアルキビアデスは、法についての議論で、アルキビアデスの保護者であり、当時の国家の最高権力者である、ペリクレスと関わる事が有った。

アルキビアデスは次のように話した。

「ペリクレスよ、『法とは何か?』を私アルキビアデスに教える事ができますか?」

ペリクレスは次のように話した。

「もちろん、できます」

アルキビアデスは次のように話した。

「あなたペリクレスが『法とは何か?』を教えてくれるならば、とてもありがたいです」

「称賛の意味で適用される『法を遵守している』という形容語句をとてもよく聞きます」
「けれども、私アルキビアデスは『もし、ある人が、法とは何か？　を知らなければ、その人は、法を遵守している、という称賛の言葉に全くふさわしくない』と思います」
ペリクレスは次のように話した。
「幸運にも、あなたアルキビアデスの問題への答えは用意されています」
「あなたアルキビアデスは『法とは何か？』を知りたいですか？」
「ええと、秘密の会議に集まっている、多数派が、『何をする事が正しいか？』、『何をしない事が正しいか？』について、承認して制定するものが法です」
アルキビアデスは次のように話した。
「『正しい事をする事は正しい』という前提で(法を)制定しますか？」
「それとも、『悪い事をする事は正しい』という前提で(法を)制定しますか？」
ペリクレスは次のように話した。
「『正しい事をする事は正しい』という前提です。もちろん。若い貴方よ。『悪い事をする事は正しい』という前提ではありません」
アルキビアデスは次のように話した。
「もし多数派ではなく寡頭政治の場合のように少数派でも、少数派は、集まって、そのような行動の規則を制定しますか？」
ペリクレスは次のように話した。
「熟考の末に(都市)国家を統治している権力者が我々(市民)が義務としてするべき事として制定した物は何であれ、『法』という名前で通用します」

アルキビアデスは次のように話した。
「それでは、(都市)国家で最高権力を握っている専制君主が市民の行動の規則を制定したら、それらの法令は法でしょうか?」
ペリクレスは次のように話した。
「ええ。国家の最高権力者として専制君主が制定した物も『法』という名前で通用します」
アルキビアデスは次のように話した。
「しかし、ペリクレスよ、暴力と不法をどのように定義しますか?」
「説得によってではなく強制によって、強者が強者にとって正しいと思われる事を弱者に行うように強制する場合は法ではないのでは?」
ペリクレスは次のように話した。
「もちろん、そうです」
アルキビアデスは次のように話した。
「そうすると、もし専制君主が、市民を説得せずに、法令によって、ある事を行うようにさせる場合は、不法という事に成るのではないでしょうか?」
ペリクレスは次のように話した。
「その通りですね」
「それでは、私ペリクレスは『専制君主が市民への説得無しに可決した法令でも法である』という発言を撤回します」
アルキビアデスは次のように話した。
「また、多数派の説得によってではなく、権力の行使のみで、少数派が可決した法令についてはどうでしょうか?」
「『暴力』という言葉をこのような場合に適用するべきでしょうか? それとも、適用するべきではないでしょうか?」

ペリクレスは次のように話した。
「私ペリクレスは、法令によってであろうとなかろうと、誰かが説得無しで他者に行うように強制する事は全て、法ではなく暴力である、と思います」
アルキビアデスは次のように話した。
「多数派が、富の所有者へ権力を行使して、富の所有者を説得しないで、制定しようと決める事は全て、法の性質ではなく暴力の性質を帯びているように思われますが？」
（ペリクレスは次のように答えた。）「確かに。それに言い足すと、」
「あなたアルキビアデスの年齢(、二十歳未満)の時には、私ペリクレスたち自身も、そのような屁理屈の巧妙な技量の持ち主でした」
「私達ペリクレスとアルキビアデスが機知を働かせるのに使用した物は丁度そのような巧妙さでした」
「私ペリクレスが誤っていなければ、あなたアルキビアデスが今、機知を働かせているように」
アルキビアデスは、それに次のように答えた。
「ああっ、ペリクレスよ、そのような問題について最も巧妙であった時に私達ペリクレスとアルキビアデスは会う事ができていたら、と私アルキビアデスは思いました」
さて、当時の政治家に対する望んでいた優位性へ到達したと思うとすぐに、クリティアスとアルキビアデスはソクラテスに背を向けた。
クリティアスとアルキビアデス自身の欠点について詰問される苛立たしさは言うまでも無く、クリティアスとアルキビアデスはソクラテスとの交際が魅力的ではないと考えた。

すぐに、クリティアスとアルキビアデスは、国政に専念したが、国政のためにソクラテスへ近づいた事は全く決して無かった。

ええ。

もしソクラテスの真の友人を知る事を求めるのであれば、クリトン、カイレフォン、カイレクラテス、ヘルモゲネス、シミアス、ケベス、パイドンデスなどを見る必要が有る。

クリトン、カイレフォン、カイレクラテス、ヘルモゲネス、シミアス、ケベス、パイドンデスなどは、議会や法廷での弁論に優れるように成るためではなく、家庭や家族への義務、血縁者達や友人達への義務、同胞の市民達への義務、国家全体への義務といった人生における多様な義務を果たしたかったので、実にソクラテスのような美しい良質な精神へ到達したいという気高い大志によって、ソクラテスに付いてまわった。

クリトン、カイレフォン、カイレクラテス、ヘルモゲネス、シミアス、ケベス、パイドンデスなどの(ソクラテスの)真の弟子達のうち、若者の時も老人の時も、悪行を犯して有罪に成ったり有罪であると思われたりした者はかつて誰もいない。

ソクラテスを訴えた者どもは「しかし、ソクラテスは、『あなた達をあなた達の父よりも賢くする事ができる』と若者の友人達を説得して、または、『子が自分の父を精神錯乱で訴えて自分の父を投獄する事を法は許している』と指摘して、若者に自分の父へ侮辱を浴びせるよう教えた。ソクラテスは、『賢者が賢者よりも無知な者を投獄する事は良いかもしれない』事を証明するために、『子が自分の父を精神錯乱で訴えて自分の父を投獄する事を法は許している』法令を証拠として提出した」と主張した。

だが、ソクラテスの考えた事とは「もし、ある人が一種の愚かさや無知よりも正しい理由のためではなく(、つまり、愚かさや無知という理由で)他者を裁判によって投獄できるのであれば、その、ある人は、知恵において自分よりも上の者に自身が投獄された場合、当然、抗議できない」という事であった。

そして、このような問題の根底に到達する事、狂気と無知の違いを発見する事が、ソクラテスが絶え間無く取り組んでいた問題でした。

ソクラテスの意見は次のように成りました。

もし狂人自身や狂人の身内に好都合であるとして狂人を投獄しても良いのであれば、確実に、正しさ(、善悪)の問題として、知るべき事を知らない人は、知るべき事を知っている人の足下で甘んじて耐えるべきであるし、知るべき事を教わるべきである。

しかし、(ソクラテスを訴えた者どもによると、)ソクラテスが「病人や訴訟人は、自分の親族からではなく、病人の場合は自分の医者から、訴訟人の場合は法律顧問から、援助を得る」と話した時、「ソクラテスの弟子達の目の前でソクラテスが侮辱した人は(若者の)父だけではなく残りの(若者の)親族もであった」(とソクラテスを訴えた者どもは主張した)。

ソクラテスを訴えた者どもは次のように話した。「さらに、ソクラテスが友人達と話した言葉を聴いてください」

「『親族が、あなた達にとって何か現実的に役に立つ事ができないのであれば、親族が親切な気質であっても何の役に立つのか？　単なる気質の良さは役に立たない。何が正しいか？　という知恵と、何が正しいか？　を解説する能力を合わせ持つ者だけが称賛に値するのである』。そして、若者にソクラテスを『他者をも賢くする驚くべき能力を(神から)与えられた最高の賢

者』と見なさせて、ソクラテスは、ソクラテスと交際した人の気質に働きかけて、ソクラテスと交際した人に(ソクラテスを)尊敬させて、残りの人々を『ソクラテスと比較して役に立たない』と見なさせた」

さて、私クセノフォンは若者の父や残りの親族についての(ソクラテスの)言葉を認めます。

私クセノフォンは更に進めて、ソクラテスのいくつかの他の言葉を言い足す事ができます。

「(知性の中心に独りで宿っている)魂が人(の肉体)から去ったら、仮に、その人が私達の最も近しい最愛の友人でも、私達は、その人の死体を運んで見えない場所に埋葬します」

ソクラテスはよく次のように話していました。「生前でも、私達の各々は、自分の最高の所有物の全部、つまり、自分の肉体の全部を、もし自分の肉体が使い物に成らなく成ったり不採算に成ったりしたら、手放す覚悟をしている」

「私達の各々は自分で自分の肉体(の一部)を除去するか、自分の代わりに他人が自分の肉体(の一部)を除去する事を容認する」

「このため、人は自分の爪、髪、たこを切り落とす」

「人は、痛くても、外科医が自分の肉体の一部を切ったり焼いたりする事を許す。そして、人は、医者が役に立ってくれた事を医者に感謝して、その上、謝礼金を医者に払う」

「また、ある人は可能な限り口から唾を吐き出す」

「なぜか?」

「なぜなら、唾は、(体)組織内に留まっていると、役に立たないか、むしろ有害だからである」

さて、ソクラテスの(言葉の)目的とは、これらの例によって、父を生きたまま埋葬する義務を教える事ではなく、また、自身をバラバラに切る義務を教える事ではなく、「知性の欠如は(人の)価値の欠如を意味する」と教える事であった。

そうして、ソクラテスは聴衆に可能な限り賢明であるように、役に立つように求めたのである。

そのため、仮に、父でも、兄弟でも、尊敬させたい他の誰でも、人は、ただの親族を頼って自己の利益を不注意に喜ぶべきではなく、尊敬させたいと望んでいる人々にとって役に立つ人であるように努めるべきなのである。

しかし、(ソクラテスを訴えた者どもは次のように追求しました。)「有名な詩人による最も不道徳な節々を用心して選び集めて証拠として利用して、ソクラテスは友人達に悪行を犯す人に成るように、暴君に成るように非道に成るように教えた」

「例えば、次のようなヘシオドスによる一節である」

「『恥と成る仕事など無い。仕事への怠慢が恥と成る』」

ソクラテスを訴えた者どもは次のように話した。

「ソクラテスは、詩人ヘシオドスが人々に『(暗殺などのように)邪悪な仕事や下劣な仕事を控えないように』言っているかのように、詩人ヘシオドスが人々に『利益のためならばどんな事でも行うように』言っているかのように、例として挙げたヘシオドスによる一節を(ねじ曲げて)説明した」

さて、ソクラテスは「人にとって労働者である事はありがたいし有益である」という考えを完全に認めたであろう。

また、ソクラテスは「怠惰で何もしないのは有害で邪悪である」という考えを認めたであろう。

また、ソクラテスは「仕事は善である。そして、怠惰は災いの元である」という考えを認めたであろう。

(さて、)「ソクラテスが『労働者』(という言葉)で示していたのは、どんな者か?」という疑問が生じます。

ソクラテスの用語では、善い務めに取り組んでいる者だけが「善い労働者」なのです。

サイコロなどで賭け事をしている者どもといった、全ての下劣で破滅的な事に取り組んでいる者どもに、ソクラテスは「怠け者」という烙印を押した。そして、このような観点からの、ヘシオドスからの引用は非の打ち所が無いのです。

「恥と成る仕事など無い。仕事への怠慢が恥と成る」

実に、ソクラテスを訴えた者どもが言ったように、ソクラテスはホメロスからの一節をひっきりなしに口にしていた。

そのホメロスからの一節とはオデュッセウスについて話している一節である。

何という王や高名な人物を、オデュッセウスは、既知の逃亡に気づいて、最も優しい非難の言葉で引き止めたであろうか!

「よろしい、貴方達には、逃げないか、恐れているかのようにふるまうのが、ふさわしいのです。貴方達は、自身を留めるだけではなく、人々が留まっているのを見届けるべきなのです」

このように、オデュッセウスは最善の物(、最善の言葉)を使った。

オデュッセウスが最悪の言葉を使っていたら、その言葉で王や高名な人物の士気は崩壊していたであろう。

オデュッセウスは王笏で打ち、叱り、次のように言った。

「留まりなさい、哀れな人達よ、黙りなさい。そして、貴方達よりも賢明な人(である私オデュッセウス)の話を聴きなさい。貴方達は下劣であるし、力や技に乏しいし、話し合いや戦いにおける名声が無い」

私達は、これらの王達のように成ってはいけない。

ソクラテスを訴えた者どもは「ソクラテスは、これらのホメロスの詩の節々を、まるで詩人ホメロスが庶民や貧民に打撃を与える事を認めているかのように、(ねじ曲げて)説明した」と訴えた。

だが、ソクラテスが、そんな発言をした事は決して無い。(仮に、ソクラテスが、そんな発言をしたのであれば、)実に、そんな発言はソクラテス自身がソクラテス自身を叩くべきであると主張するのに等しく成ったであろう。(なぜなら、ソクラテスは庶民であったし、自ら貧民であったからである。)

ソクラテスの言葉(の真意)は、「言葉でも行動でも役に立たない者、必要な時に軍や国家や国民自体に援助を与える事ができない者は、それほど裕福ではなくても、制限されるべきである。無能な上に厚顔無恥である場合は特に」という事でした。

ソクラテスについて言うと、ソクラテスは、これらとは全くまさに正反対でした。

ソクラテスは国民を明らかに愛していたし、実に、全ての人を明らかに愛していた。

ソクラテスには(都市国家の)市民の中に多数の熱心な崇拝者がいましたし、外国人の中にも同様に(多数の熱心な崇拝者が)いましたが、ソクラテスはソクラテスと交際するための、どのような料金も誰にも決して要求しなかった。

実に、ソクラテスはソクラテスの精神という富を全ての人々に分け隔て無く豊かに与えた。

実に、ソクラテスのようではない、(都市国家の)国民を愛していない一部の人は、ソクラテスの精神の諸部分という善い諸物をソクラテスの手によって無料で受け取り、奪い、残りの市民に高い代価と引き換えに売った。

なぜなら、ソクラテスのようではない、(都市国家の)国民を愛していない一部の人は、見返りとして与えるお金が無い人達と話す事を拒否したからである。

実に、ソクラテスについて話すと、ソクラテスは、全世界の目に見える更なる栄光を国家にもたらしたし、名声が評判に成っていて(スパルタとも呼ばれる)ラケダイモン(という都市国家)にまで及んでいるリカスよりも更に豊かな栄光を国家にもたらした。

リカスは、(スパルタの祭りである)ジムノペディアで、(スパルタとも呼ばれる)ラケダイモン(という都市国家)に住んでいた外国人を最も見事にもてなして楽しませた。

ソクラテスは、ソクラテスの本質を受け入れたいと思う全ての人に最も偉大な利益を与えるという形で、ソクラテスの本質を流出する事に一生を捧げた。

言い換えると、ソクラテスは、ソクラテスと交際していた人をより善い人にして、相手に応じた方法で喜ばせて満足させた。

そのため、私クセノフォンは、実に、「善良な人なので、ソクラテスは国家から死よりも名誉を受け取るのがふさわしかった」という結論に至る事ができた。

また、私クセノフォンは、このような結論が、ソクラテスへの訴訟事件への厳密な法的な見解であると理解している。
(さて、)法は何と命じているのか？
「もし人が盗人、衣服の盗人、スリをした盗人、住居への押し込み強盗、奴隷として人を誘拐した犯人、神殿への強盗犯であると証明されたら、その刑罰は死刑である」
たとえ、そうであっても、全ての人のうちで、ソクラテスは、そのような犯罪行為から最も離れていました。
国家にとって、ソクラテスは、あらゆる悪の原因には決して成らなかった。
ソクラテスは、戦争における災害、内紛、国家への反逆、その他の、何であれ、全ての損害の原因には決して成らなかった。
また、ソクラテスの公人としての人生では全ての罪が無かったのであれば、ソクラテスの私人としての人生も、そうだったのである。
ソクラテスは、善行を奪ったり、悪行を加えたりして、一人も傷つける事が決して無かった。
また、ソクラテスは悪行を誰かに責任転嫁する嘘をついた事が決して無かった。
さて、ソクラテスへの訴訟へのソクラテスの法的責任はどこに有るというのか？
ソクラテスへの訴訟で述べられているように(国家が認めている)神々を信じないどころか、ソクラテスは、抜群に全ての人を超越して、(国家が認めている)神々に奉仕していた。
ソクラテスを訴えた者どもが強く主張した非難である「若者を堕落させた」どころか、ソクラテスは、友人達の邪悪な欲望を抑える事だけではなく、

国家や家庭を崩壊させる事無しに、最も美しい女王のような徳、善行への情熱を友人達に抱かせる事に努める事に熱心で有名であった。

このようなソクラテスの行動では、ソクラテスは都市国家アテナイからの高い名誉にふさわしくなかったというのか？

（ソクラテスの最も気高く高貴な徳、善行は国家と家庭を繁栄に導いた。※別の版）

第一巻 第三章 (デルポイのアポロン神殿の巫女の助言)(神への祈り)(神と捧げ物)(ヘシオドスの助言)(節制、自制の助言)(性欲の恐ろしさ)

私クセノフォンがソクラテスとソクラテスの友人達についての色々な思い出を記録すれば、「ソクラテスは、善行を見せて、また、言葉で会話したり議論したりして、友人達に利益をもたらした」という主張を実例で証明するのに役立つかもしれない。

そこで、最初に、宗教についてと、神について(私クセノフォンは記録する)。

行動と言葉においてソクラテスのふるまいはデルポイのアポロン神殿の巫女ピュティアが捧げ物や祖先崇拝や同様の問題点に触れて「どのように人は行動するべきでしょうか?」という質問への返答として定めた規則に従っていた。

デルポイのアポロン神殿の巫女ピュティアの返答とは「あなたの国家の法と慣習に従って行動しなさい。また、信心深く行動しなさい」であった。

ソクラテスは、「(デルポイのアポロン神殿の巫女ピュティアとは)異なる全ての原理に基づいて行動する者どもは実に、おせっかいな者どもや無分別な者どもである」という考えを抱いて、「あなたの国家の法と慣習に従って行動しなさい。また、信心深く行動しなさい」という言葉を手本に、ソクラテス自身もふるまったし、また、他人にもふるまうように熱心に勧めた。

ソクラテスの祈り文句、祈りは次のように単純であった。

「私にとって最善である物を私にもたらしてください」

ソクラテスは「なぜなら、神々は何が善い物であるかを最も良く知っているからである」と話している。

金や銀や独裁的な権力を祈る事は、戦いの際に博打(ばくち)で何か特定の物を投げる事と同然である。

また、(金や銀や独裁的な権力といった、)そのような物を祈りの対象としてしまうと、その未来の結果は明らかに不確かに成ってしまう。

ソクラテスは、貧弱な財力によって、実に、小さな捧げ物を捧げても、「十分な蓄財から頻繁に大きな捧げ物を捧げる者達よりも決して劣っていない」と信じていた。

仮に、神々が小さな捧げ物よりもむしろ大きな捧げ物に喜びを感じてしまうならば、まさに神々御自身にとって確実に都合が悪く成ってしまうであろう。また、多くの場合、(神々は)善人達の捧げ物よりもむしろ悪人どもの捧げ物に喜びを感じなければならなく成ってしまう。

（

神々は善人達の捧げ物であるならば小さな捧げ物でも喜ぶ。

この悪い世の中では悪人が金持ちに成りやすい。

この悪い世の中では大きな捧げ物を捧げる事ができる金持ちは悪人の可能性が高い。

「悪い世の中では金持ちは悪人の可能性が高い」という考えは聖書にも見られる考えである。

）

また、人々自身の観点からも、仮に、正しい人の捧げ物よりもむしろ悪人の捧げ物が天の神の目から見て気に入られてしまうのであれば、人生は生きる価値が無い代物に成ってしまうであろう。

ソクラテスの確信は、「神々の喜びは、(神々に捧げ物を)捧げた人の神聖さ、清らかさ(、善良さ)に比例して、より大きく成る」という物であった。

また、ヘシオドスが言った「あなたの力に応じて不死の神々に捧げものを捧げなさい」という言葉をソクラテスは常にほめたたえていた。

ソクラテスはよく「そうなのです。友人達や良く知らない人々と交流する際も同様に、また、一般の人生の要求についてでも、人にとって『各人は自分の力に応じて行おう』という言葉よりも良い名言は存在しないのです」と話していた。「また、他人の意見を認める際にも(、人にとって『各人は自分の力に応じて行おう』という言葉よりも良い名言は存在しないのです)」。

もし神からの合図がソクラテスにもたらされたようにソクラテスに思われたのであれば、ソクラテスを神の警告に背くようにさせるものは何も無かった。

ソクラテスは、道を知っている人の代わりに、どちらかと言えば、途中で道を知らない盲人を導く事を引き受けるように説得されたかった。

そして、ソクラテスは、人々の間で何らかの不名誉を避けるために、神からの警告に反する事をする他人の愚かさを非難した。

ソクラテスは、自ら、上(の神)からの助言と比べて全ての人からの助けを軽視した。

ソクラテスが自分の魂と肉体を委ねた習慣と生活様式は、普通の境遇下ならば、ソクラテスの習慣と生活様式を採用した誰もが、元気に生活する様子を見る事ができる物であったし、穏やかに日々を過ごす事ができる物であった。

ソクラテスの習慣と生活様式は、費用については確かに問題が無い。

ソクラテスの習慣と生活様式は、とても質素だったので、ソクラテスを満足させていた額も稼ぐ事ができない人は、実に、ほとんど働く必要が無いほどであった。

食べ物に関しては、ソクラテスは、満足するのに十分なだけしか食べなかった。

そうしていたので、ソクラテスは、ソースだけで十分に食欲を催した。

一方、飲む事に関しては、ソクラテスは喉が渇いた時にしか飲まなかったので、飲んだ、どの時でも気分を一新できた。

ソクラテスは、食事の招待を受けても、飲み食いし過ぎる誘惑を難無く避ける事ができた。

そして、食欲を一定に制御できない人々へのソクラテスの助言は、飢えていないのに食べるように誘惑したり、喉が渇いていないのに飲むように誘惑したりする物をとる事を避ける事であった。

ソクラテスは「飢えていないのに食べるように誘惑したり、喉が渇いていないのに飲むように誘惑したりするような物は、体質を破壊するし、同様に、胃、脳、魂に悪い」と話していた。

また、次のように、少し皮肉を込めて、ソクラテスはよく話していた。

「(ホメロスの『オデュッセイア』で)キルケが男どもを豚に変える事ができたのは、非常に多数の美味しい料理で男どもをもてなした事による物に間違いない。オデュッセウスだけが節制、自制と『神ヘルメスからの働きかけ』によって無闇に料理に手をつける事を控える事ができた。そして、同様にして、オデュッセウスだけが豚に変えられなかったのである」

とても多くの回数、ソクラテスは、このように、軽々と、しかし、真剣に、この話題について触れました。

しかし、愛と美の女神アフロディーテ関係(の性欲)に関しては、ソクラテスの助言は、女性の美しい諸形態の魅力から強硬に離れる事という物でした。一度でも指一本でも女性の美しい諸形態の魅力に手を出してしまうと、健全な思考と落ち着いた精神を保つ事は容易ではなく成ってしまいます。

ある個別の実例を取り上げると、

「ある時クリトブロスが美しい若者であるアルキビアデスの息子に口づけだけだが、口づけした」とソクラテスは聞いた。

クリトブロスがいたので、ソクラテスは次のように問題提起した。

「教えてくれ、クセノフォンよ、あなたクセノフォンは『クリトブロスは健全な感覚を持っている人である』、『クリトブロスは理性的であるし身勝手な人ではない』と常に信じる事はできなかったね?」、「あなたクセノフォンは『彼クリトブロスは不注意や無謀さが顕著ではなく用心が見事である』と言う事はできなかったね?」

私クセノフォンは次のように話した。

「確かに、私クセノフォンは『彼クリトブロスは不注意や無謀さが顕著ではなく用心が見事である』とクリトブロスについて言う事はできなかったです」

ソクラテスは次のように話した。

「では、あなたクセノフォンは今でも『彼クリトブロスは、用心などとは全く逆で、短気であるし、無謀な、ふしだらな人である』と考えているんだね」

「このクリトブロスは短剣の中に飛び込んだり火の中に飛び込んだりするたぐいの男である」

私クセノフォンは次のように話した。

「あなたソクラテスは、『彼クリトブロスは、とても悪い人である』という評価を下していますが、彼クリトブロスが、どんな事をしたのを見たからなのでしょうか？」

ソクラテスは次のように話した。

「あなたクセノフォンは見ましたか？」

「奴クリトブロスは、若者達の中で最も美しい、黄金期の、アルキビアデスの息子に図々しくも口づけしなかったか？　した！」

私クセノフォンは次のように話した。

「いえ、でも、美しい若者に口づけする事が無謀にも危険を犯した事に成ってしまうのであれば、私クセノフォン自身もよく出くわす危険です」

ソクラテスは次のように話した。

「何と貧弱な人だ！」

「美しい若者への口づけの後、あなた達の運命が、どう成ると思うか？」

「よく聴きなさい」

「すぐに、あなた達は自分の自由を喪失してしまう」

「あなた達は奴隷に成る契約書に署名する事に成ってしまう」

「強制的に有害な快楽で大金を浪費する羽目に成るが、あなた達の自己責任に成ってしまう」

「あなた達には、全ての気高い研究をする暇な時間など、ほぼ無く成ってしまう」

「あなた達は、誰も、狂人ですら、関わる対象として選ばないものに、自ら、最も熱心に、関わるように駆り立てられてしまう」

私クセノフォンは次のように話した。

「おおっ、（半神半人の英雄である）ヘラクレスよ（、助けてください）！」

「美しい若者への口づけに存在する力は何て恐ろしいんだ！」

ソクラテスは次のように話した。

「美しい若者への口づけの恐ろしさに、あなたクセノフォンは驚いているのか？　いいえ！　驚く事は無い！」

「『タランチュラは硬貨よりも大きくはないが、タランチュラが人の口に触れただけで、タランチュラは犠牲者を痛みで苦しめて平常心を失わさせてしまう』のをあなたクセノフォンは知らないのか？　いいえ！　知っているはずだ！」

私クセノフォンは次のように話した。

「はい、知っています。でも、タランチュラは刺して何らかの毒を注入します」

ソクラテスは次のように話した。

「ああっ、何と愚かな！」

「では、あなた達は『毒が全く目に見えない(物質的な物ではない)から美人達は口づけで何も毒を注入しない』と(誤って)思い込んでしまっているのか？　いいえ！」

「『タランチュラは事前に犠牲者と接触している必要が有るが、美人は、犠牲者が一目、見ただけで、接触すらしなくても、どれだけ離れていても、(性的に興奮した)男にしてしまう何らかの毒を犠牲者に注入してしまう点において、男達が美人と最盛期に呼んでいる、この猛獣は、タランチュラよりも全く恐ろしい』のをあなたクセノフォンは知らないのか？　いいえ！　知っているはずだ！」

「そして、多分、これ(、美人が離れていても心を射抜いてしまう事)が愛の神エロスが『射手』とも呼ばれる理由なのである」

「なぜなら、美人は、とても遠く離れていても(心を)射抜くからである」

「実に、あなたクセノフォンへの私ソクラテスの助言は、美形の者を見かけたらすぐに振り返らずに命からがら逃走するように大急ぎで逃走する事です」

「また、あなたクリトブロスに私ソクラテスは次のように話す」

「一年間、外国へ行きなさい。あなたが恋の矢の傷を治すには、とても長い時間がかかるのである」

また、次のようにソクラテスは話した。

「愛と美の女神アフロディーテに関わる(性欲の)事では、食べ物や飲み物に関してのように、足場が不安定な全ての場所でのように用心するべきである」

「肉体が何らかで必要とする食事は除いて、障害を生じないはずの食事であっても、魂が不要とする食事は制限するように、少なくとも、自身を制限するべきである」

実に、ソクラテスは、自身のために、明らかに、全ての点において用心していて鉄壁でした。

多数の他人が雑草といった無価値なものを断つよりも簡単に、ソクラテスは美中の最美のものを断つ事に到達していた。

要約すると、飲食物や、その他の感覚を誘惑するものに関して、ソクラテスは、魂についての知によって、(感覚を誘惑するものから)独立していた。

このような(感覚を誘惑する)ものによって自分で自分の首を絞める人達に劣らず、ソクラテスは適切な生活様式によって楽しんでいたのを実際に誇る事ができたし、(感覚を誘惑するものによって自分で自分の首を絞める人達よりも、)ソクラテスの労苦は遥かに少なかった。

第一巻 第四章（自然の中に見られる秩序的な神の知恵の痕跡）（神から全ての人への思いやり）（神の全知）

「ソクラテスの発言と文書のどちらの場合でも、推測ではあるが、どんなに強力にソクラテスが理論家として善行へと人々を刺激する事ができていても、ソクラテスは自ら人々の指導者として行動する事ができなかった」という、ソクラテスの発言と文書に関して主張された諸々の意見と一致する確信が現在ある。

この（「ソクラテスは人々の指導者として行動する事ができなかった」という）意見を採用する人達にとって、ソクラテスが反問で非難して「全知を所有している」という思いを自ら抱いてしまっていた人達にもたらした物だけではなく、ソクラテスに親しく近づいて交際して時間を過ごしていた友人達とソクラテスの日常の会話をも、用心して思い量（はか）るのは良い事であろう。

このように（友人達とのソクラテスの会話などを思い量る事を）して、彼ら（、「ソクラテスは人々の指導者として行動する事ができなかった」という意見を採用する人達）が、ソクラテスは友人達をより善い人にする事ができなかったのかどうか決定してくれますように。

私クセノフォンは、最初に、神という話題について「小さい者」と呼ばれていたアリストデモスと（ソクラテスが）議論した際に、私クセノフォンがソクラテスの口から聞いた事を話そう。

（私クセノフォンは、最初に、神の要素という話題について「小さい者」と呼ばれていたアリストデモスとソクラテスが議論した際に、私クセノフォンがソクラテスの口から聞いた事を話そう。※別の版）

アリストデモスが神に捧げものを捧げないし、(神からの)予言を留意しないし、実に、それどころか、神に捧げものを捧げる人や(神からの)予言を留意する人達を笑いものにする傾向がある、とソクラテスは気づいていた。

　ソクラテスは次のように話し始めた。「それでは、私ソクラテスに教えてください、アリストデモスよ。知恵に関して、あなたアリストデモスからの称賛を勝ち得た人は誰かいますか？」

　アリストデモスは次のように話した。

「います」

　ソクラテスは次のように話した。

「名前を挙げてくれますか？」

　アリストデモスは次のように話した。

「叙事詩という形では私アリストデモスはホメロス(の知恵)に最大の称賛を贈る……」

「また、酒神讃歌の詩人としては私アリストデモスはメラニピデス(の知恵)に称賛を贈る」

「私アリストデモスは、また、悲劇詩人としてはソフォクレス(の知恵)に、彫刻家としてはポリュクレイトス(の知恵)に、画家としてはゼウクシス(の知恵)に称賛を贈る」

　ソクラテスは次のように話した。

「あなたは、動かない無意味な像の形成者(である人)と、理解力と動く力を与えて生物を作る事ができている者である神の、どちらが、より称賛に値すると考えているのですか？」

　アリストデモスは次のように話した。

「断然、後者の神です。ただし、生物が神の設計のおかげで誕生しているのであれば、また、生物が何らかの偶然の産物で(誕生したので)なければ、ですが」
　ソクラテスは次のように話した。
「では、もし、あなたが二種類のものについての知識を持っていて、一方は何のために存在するのかについての手がかりを示さず、他方は明らかに有益な目的のために存在する場合、あなたは、どちらが偶然の産物で、どちらが設計によるものである、と判断しますか？」
　アリストデモスは次のように話した。
「明らかに何らかの有益な目的のために生み出されているものは、設計による作品である(、と判断します)」
　ソクラテスは次のように話した。
「では、『(創世の)最初から人を創造してきている者である神は、何らかの有益な目的のために、いくつかの感覚を人に与えてきている』という考えに襲われませんか？」
「あるいはまた、仮に、人に鼻の孔(あな)が与えられていなかったら、香りには、何か、有益さが存在したであろうか？　いいえ！　何の有益さも無かったであろう！」
「仮に、我々、人の(体の口の)中に、甘い物や刺激物の知覚や、味覚による全快楽の知覚を解説する物として、舌が作られていなかったら、甘い物や刺激物の知覚や、味覚による全快楽の知覚には、何か、有益さが存在したであろうか？　いいえ！　何の有益さも無かったであろう！」
「さらに、『この目は遠くまで先を見通すための物のように思われる』と思いませんか？　この目は、折りたたみ式の扉で閉じるように、敏感な眼球を

まぶたで閉じます。何かの目的のために眼球を使用する必要が有る時、まぶたは大きく見開くように動かされますし、眠る時は、しっかりと閉ざされます」

「また、天空からの風が目を乱暴に全く襲わないように、目は、防護する遮蔽物として、まつ毛を立たせています」

「汗が頭から目へ、したたって落ちて目を痛めないように、この目は、眉毛という仕切り、防御構造で目の上の領域に対処しています」

「さらに、耳は、全ての音を聞き取るために、さらに、負荷がかかり過ぎないように、用意されていませんか？」

「全ての動物の前歯は切るための能力、役割として用意されていませんか？　臼歯は食べ物を受け止めて、ドロドロに成るまで、すり潰すための能力、役割として用意されていませんか？」

「また、口の位置は、全ての生物の必需品を入れる入口として、目と鼻の孔(あな)に近いのではありませんか？」

「また、最後に、肉体から排出される物は不快なので、後方へ排泄されるのではありませんか？　また、知覚の手段である目、耳、鼻、口から遠くへ(、肉体から排出される物は)運ばれるのではありませんか？」

「あなたは、このような先見性が示されて構成されている、これらの全ての物(、人の感覚器官)を見て、これらの物(、人の感覚器官)が、偶然の産物であるのか、知的存在である神の作品であるのか、疑問に思う余地など有り得るのか？　私ソクラテスは尋ねたい」

　アリストデモスは次のように話した。

「(神が先見性を示しつつ人の感覚器官を創造してきている事を疑う余地は)確かに無いです！」

「このような見方で見ると、『人の感覚器官は賢い計画者である何者か(である神)の作品である』と思われます」
ソクラテスは次のように話した。
「人の中に植えつけられた子をもうける情熱について、母の中に植えつけられた幼子を育て上げる情熱について、一度、生まれた生物自体の中に植えつけられた生への深い欲求と死への恐怖について、私ソクラテスと、あなたアリストデモスは、どう思うべきでしょうか？」
アリストデモスは次のように話した。
「疑い無く、これら(、人に有る子をもうける情熱、母の幼子を育て上げる情熱、生物の生への欲求と死への恐怖)は、何者か(である神)が生物の存続を熟慮して計画したように思われます」
ソクラテスは次のように話した。
「ええ、また、疑い無く、あなた自身にも『知恵の痕跡が有る』と思いますね？」
アリストデモスは次のように話した。
「(はい。)ソクラテスよ、質問してみてください。私アリストデモスは答えてみるつもりです」
ソクラテスは次のように話した。
「では、『他の所では知恵の痕跡は見つからない』と、あなたは、まだ思いますか？」
「あなたが『大いなる土の元素のほんの小さな一欠片、大いなる水の元素の小さな一雫、その他の大いなる四大元素の小さな一欠片が、あなたの肉体の中に有る』と知ったら、多分、あなたは『各、四大元素の小さな一欠片が、あなたの肉体の組織を構成している』と理解するのでは？」

「『心だけが、どこにも見つからない』ように思われるであろう。あなたは心を掴み取って持って行っている幸運を得ているが、どのように心を掴み取って持って行っているのか、あなたは説明する事ができない」

「また、『我々、人の周囲に有る、これらのものは、莫大な量、無限の数であり、知力による何らかの空、空間のおかげで秩序を持って配置されている』と思われますね？」

アリストデモスは次のように話した。

「人は地上では諸作品の諸作者(である人)が見えるが、多分、(人である)私の肉眼では、これらのものの元と成っている仲介している諸々のものを見る事ができないのです」

ソクラテスは次のように話した。

「あなたは、あなた自身である魂を見る事もできないのです。あなたの魂は、あなたの肉体の元と成っている仲介しているものなのですが」

「そのため、魂に限って言えば、そう言いたければ、あなたは『魂は、知的存在である神によるものではなく、全くの偶然の産物である』と(誤って)主張してしまうかもしれない」

(「そのため、魂に限って言えば、そう言いたければ、あなたは『私の知恵によると、魂は、知的存在である神によるものではなく、全くの偶然の産物である』と誤って主張してしまうかもしれない」※別の版)

この時、アリストデモスは次のように話した。

「私アリストデモスは、あなたソクラテスに約束いたします。私アリストデモスは神の力を軽視しません」

「それどころか、私アリストデモスは『神は偉大過ぎて私アリストデモスに可能な奉仕など全く必要としない』と確信しました」

ソクラテスは次のように話した。

「ただし、かたじけなくも、あなたの面倒を見てくださる、あなたの世話をしてくださる、神の力が偉大であればあるほど、あなたは神に、より称賛を贈る事を求められるのです」

アリストデモスは次のように話した。

「ご安心ください。『神々は全ての人を思いやってくださる』と信じる事ができたら、神々を軽視したりしません」

ソクラテスは次のように話した。

「どうして、あなたは『神々は全ての人を思いやったりしない』と(誤って)思ってしまうのですか？」

「まず、神の直立姿勢(、神とほぼ同じ姿形)を生物のうち人だけに与えている者である神は、人が前方の遠くを見る事ができるようにしているし、人が上方の高みをより自由に観察できるようにしているし、(神が神御自身のような目、耳、口を与えているため、苦しみを回避できるので、)人が苦しむ可能性は他の生物よりも少ないのです」

「次に、『どうして神々は、前進するための手段でしかない(四つの)足を野獣には与えて、(二つの足に)加えて二つの手を人には与えているのか』を考えると、人の手は全ての動物よりも超越しているほどの幸福へ我々、人を高める事を達成しています」

「神々は(人の)舌も(特別に)創造しているのではないか？」

「舌は人と獣に確かに同様に有るが、人の舌が色々な時に口の色々な部分で(音声を)演奏できるように神々が創造しているので、我々、人は明確な音節で発音した言葉を生じる事ができるし、人には人が必要とする全てのものを相互に表し合う表現体系が有る」

「また、性欲による快楽について考えてください」
「(発情期は、)動物界の人以外の動物では特定の季節限定の物ですが、人の場合は、延長されていて、老年まで絶え間無く連続します」
「また、神は人の肉体の面倒を見るだけでは満足しなかった」
「神は、より遥かに高尚で重要なものである魂の、最も気高い最も優れた原型を人の中に植えつけている」
「そのため、第一に、この大いなる美しい世界を手配してきている神々の存在を理解できる魂が他のどの生物に有るだろうか？」
「人以外の、他のどの動物が神々に奉仕できるだろうか？」
「飢えと渇き、寒さと暑さに対して事前に対応策をとる事、病気を軽減する事、力を成長させる事は、人の精神に、何と相応しいのか！」
「学ぶために労苦する事は、人の精神に、何と相応しいのか！」
「見聞きしたり、理解したりした全てのものを、人の記憶力という倉庫の中に、蓄える事ができる何て！」
「他の動物と比べて、優れている自然の摂理によって、肉体と最高の魂の美しさで、人が神々の(ような)生を生きたり行動したりする事は、あなたには最も明らかではないか？」
「でも、人の知力が無かったら、(人の)両手を所有していても無益である、のと同じように、人の知力を持つ被造物が牛の肉体の中に入れられたら、願いを果たそうにも無力であろう」
「さて、生まれていて、これら二つの最も大事な特性を獲得している、あなたは、『神々は、あなたを思いやったり面倒を見たりしない』という考えを話してしまっている」

「なぜ、『あなたも神々の思いやりの中にいる』と信じたり信じさせても
らったりできるように、あなたは何かを神々にしてもらうつもりなのか？」
アリストデモスは次のように話した。
「あなたソクラテスが『神々は、あなたたち人をもてなしている』と我々、
人に教えているように、神々が私をもてなしてくれたら、また、私がしなけ
ればいけない事と、私がするのを止めるべき事を私に忠告してくれる助言者
を、神々が私の所に派遣してくれたら、私は『神々は私を思いやって面倒を
見てくれる』と信じるつもりです」
ソクラテスは次のように話した。
「(神々は、)あなたに助言者を派遣しています！」
「ねえ、アテナイの人々が神託で(神々に)質問すると、神々からの答えが
返って来るが、どうなのか？」
「あなたはアテナイ市民ではないのか？」
「あなたは『あなたにも(神々からの)答えがもたらされている』と思わない
か？」
「神々はギリシャ人が『ヘラス』と呼んでいる『ギリシャ人の地』の諸々の
都市国家に事前に警告するために諸々の前兆を送った時が有ったが、どうな
のか？」
「また、神々は全ての人に神々からの答えをもたらしていますよね？」
「あなたは人ではないのか？」
「あなたはギリシャ人ではないのか？」
「これら(の神々からギリシャ人や全ての人への予言)は、あなたにも向けら
れた物ではないのか？」

「『神からの無視を表す実例として、あなただけが(神からの予言の対象から)除外されている』事など有り得るのか？」
「また、仮に、神々に力が無いのであれば、『神々には人を幸福にしたり不幸にしたりする力が有る』という確信を神々は人の心の中に植えつける事ができているのをあなたはどう思うのか？」
「(『神なんて詐欺である』と主張するのであれば、)この過ぎ去る時の全てにおいて、『(神など)詐欺である』と暴いた事が有る人々なんて、いないではないか？」
「『最も賢く最も永遠不滅な団体は、都市国家であろうと民族であろうと、常に、最も神を畏敬していて信心深い団体である』と、あなたは気づかないのか？」
「また、個人でも、年齢と判断力が熟せば熟すほど、より信心深く成りますよね？」
(ソクラテスは突然、次のように話し出した。)
「ああっ、あなたよ」
「『あなたの中の精神と共に、あなたは変わる事ができるし、あなたは、思い通りに、あなたの肉体を処理する事ができる』と留意して理解しなさい」
「そして、我々、人は『世界の機構の中に宿っている知恵は、思い通りに、全てのものを処理できる』と思うべきである」
「あなたの肉眼には、いくつもの距離を超えると、あちこち見る事が全くできないかもしれないが、神の目には一目で全てのものを悟る全能性が有る」
「また、あなたの魂には、ここや、エジプトやシチリアといった遠く離れた所に有る、諸物についての思考力の存在が全く与えられていないかもしれな

いが、神の知力と思考力は、一瞬で神の手元に全てのものを十分に含む事ができる」
「人に関わる所では、ただ、あなたは自身の行動を手本としてくれたらなぁ、と望む」
(「人に関わる所では、ただ、あなたの習慣の通り、理性を手本としてくれたらなぁ、と望む」※別の版)
「(隣人への)奉仕と思いやりの行動によって、『あなたの仲間の誰もが、同じ種類の物で、あなたに喜んで報いてくれる』と気づきます」
「別の人からの異なる助言をあなたへの助言として受け入れる事によって、別の人の秘訣に通達できます」
「同様の原理で、あなたが(神々への)奉仕の行動を神々に試せば、いつか必ず死ぬ人の洞察力では不明なものについて、神々が、あなたに助言をもたらす事を好むかどうかと、『神々は一瞬で全てのものを見聞きできるし全ての場所に存在できる(、遍在できる)』という神々の性質と偉大さと、神々による注意深い世話から漏れる物は少しも無い事、神々による注意深い世話から漏れる者は少しもいない事に、気づくだろう」
私クセノフォンの考えでは、(ソクラテスは、)これらのような(ソクラテスの)言葉の効力によって、ソクラテスの周囲の人達を悪行、下劣さ、不正から離れさせる事ができた。
それだけではなく、また、人は他人から見られているし、実に人は独りきりでいてさえも神に見られている。
なぜなら、人は「人の行動は全部、天の神の目から漏れる事が無い」と信じなければいけないからである。

第一巻 第五章（節制、自制は善行の基礎）

人にとって（自分の欲望に勝利する）節制、自制、克己は気高い（獲得できた）学識である、と多分、公認されている、と私クセノフォンは思っている。

もし、そうなら（、節制、自制、克己が気高い学識であるなら）、次のような（ソクラテスの）言葉によって、ソクラテスの言葉を聞く耳を持つ人達が、この節制、自制、克己という善行の到達へ前進するように、ソクラテスは導く事ができそうに思われるかどうか、向き合って考えてみよう。

「諸君、」とソクラテスは話し始めた。

「もし我々が、戦争に襲われて、我々を救い、敵を圧倒するのに役立つ最善の人を選ぶ事を望んだら、腹の（食欲の）奴隷であると知っている人、ワイン（といった酒）の奴隷（である酔っぱらい）であると知っている人、性欲の奴隷であると知っている人、労苦に負け（て怠け）やすいと知っている人、眠気に負け（て怠けて眠り込み）やすいと知っている人を選ぶ事は、きっと無い、と私ソクラテスは思う」

「我々は、そのような（欲望の奴隷である）人に、我々を救う事や、敵を克服する事を期待できるだろうか？　いいえ！　期待できない！」

「また、もし我々の一人が人生の終わりに近づいて行って、教師として息子達を任せる事ができて、保護者として処女の娘達を任せる事ができて、保護者として全財産を任せる事ができる誰かを見つけたいと望んだら、放蕩者は、そのような（教師と保護者という）務めに相応しい、と思うだろうか？　いいえ！　放蕩者は相応しくない！」

「自分の羊と牛、自分の倉庫、倉、自分の作業への指導を、節制、自制心の無い(欲望の)奴隷である人に思い通りにされてしまうのを夢見て望む人などいる訳が無いだろう」

「もし、そのような(節制、自制心の無い欲望の奴隷である)性格の執事や使いの少年を提案されても、無料でも受け入れたくは無いだろう」

「また、もし節制、自制心の無い(欲望の)奴隷である人を受け入れなくても、自らが、このような(、節制、自制心の無い欲望の奴隷であるという)非難から免れるために、どれほど労苦しなくてはいけない事だろうか」

(「また、もし節制、自制心の無い欲望の奴隷である人を受け入れなくても、自らが、節制、自制心の無い欲望の奴隷であると分類される羽目に陥らないように、どれほど用心しなくてはいけない事だろうか」※別の版)

「節制、自制心の無い人は、利己的な人や貪欲な人とは異なる」

「いずれにしても、これらの(、節制、自制心が無かったり、利己的であったり貪欲であったりする)人を、『他人から奪って自分を富ませている』と見なすかもしれない」

「しかし、節制、自制心の無い人は、『隣人を苦しめてでも、自分は恩恵にあずかる』というように主張する事はできないのである」

「いやむしろ、節制、自制心の無い人が自業自得で自分にもたらす害と比べると、節制、自制心の無い人が他人にもたらすかもしれない害は大した事は無いのである」

「なぜなら、節制、自制心の無い人が自業自得で自分にもたらす害は、家や財産を損失するかは断言できないが、実に、自分の肉体と魂を悪化させるからである」

「また、社会的な交際から実例を取り上げると、隣の友人よりもワインといった酒と料理に明らかに喜びを感じている客人や、愛人を溺愛するために友人への当然の思いやりを削る客人を、誰も思いやらない物なのである」

「全ての誠実な人は節制、自制、克己をまさに善行の基礎ときっと見なすので、このように(思いやりの対象外の人物と)は成らないのである」

「全ての誠実な人は自分の魂の基礎として、(節制、自制、克己と、欲望の奴隷の、)どちらをすえようと探求するべきなのか？　自分の魂の基礎として節制、自制、克己をすえようと探求するべきである！」

「節制、自制無しでは、克己無しでは、誰が、全ての善い教訓を留意したり、話すに値するくらい少しでも学んだ善い教訓を実践したりする事ができるのか？　いいえ！　できない！」

「また、逆に言えば、どんな快楽の奴隷であれば、魂や肉体の堕落によって苦しまないだろうか？　どの快楽の奴隷も、魂や肉体の堕落によって苦しむ羽目に成る！」

「(家の女主人である、女神の女王である、)女神ヘラにかけて、」

「全ての(欲望から)自由な人が、このような(欲望の)奴隷としての務めから解放されて救われる事を当然の事として祈ってくれますように」

「また、このような快楽の奴隷である人も、(欲望から)自由な善い人を自分の所へ派遣してくれる事を当然の事として天の神に祈ってくれますように」

「なぜなら、これ(、神が、欲望から自由な人を派遣してくれる事)が、快楽の奴隷である人に残された(欲望からの)解放による救いの唯一の希望だからです」

　このように、ソクラテスは温厚に話した。

しかし、ソクラテスの節制、自制、克己は、ソクラテスの言葉の中で、よりも、ソクラテスの行動の中で、さらに、より多く、明らかであった。

ソクラテスは肉体によって生じる快楽の克服者であった、だけではなく、富によって膨張する快楽の克服者でもあった。

「あちこちの人から金銭を受け取る人は、思いがけず、金銭の贈り主を自分の支配者にしてしまうし、自分を憎むべき奴隷にしてしまう」というのがソクラテスの確信であった。

第一巻 第六章（ソクラテスの節制、自制）（必要とする物が無いのは神性）（知恵を金銭で売り渡すなかれ）（知恵を教える報いは善友）（自分だけが政治家に成るよりも多数の善い政治家を教育するべき）

これ（、節制、自制、克己）に関連して、ソフィストのアンティフォンと（ソクラテス）の、ある議論は記録するに値する。

アンティフォンは、ソクラテスの友人達を（ソクラテスから）引き離そうと望んで、ソクラテスの友人達がいる前で、ソクラテスに近づいて、次のようにソクラテスに図々しく話しかけた。

アンティフォンは次のように話した。

「ええと、ソクラテスよ、私アンティフォンは『哲学の学徒は日々幸せが大きく成る事を期待できる』と常々思っていました」

「しかし、あなたソクラテスは、あなたソクラテスの哲学から（不幸という）他の結果を刈り入れているように見えます」

「いずれにしても、私アンティフォンには『あなたソクラテスは生きている』とは言えず、あなたソクラテスは、主人に仕えている奴隷でも我慢できないかのような生活様式で、生きています」

「あなたソクラテスの飲食物は最も安物の類（たぐい）ですし、衣服については、あなたソクラテスは唯一の劣悪なマントを頼りにしてしまっていて、唯一の劣悪なマントを同様に夏と冬の用に供（きょう）してしまっています」

「そして、あなたソクラテスは一年中、靴を足に履かないままでいますし、また、上半身の肌着を身にまとわないままでいます」

「また、あなたソクラテスは金銭をもらったり金銭をもうけたりする事に反対しますが、金銭を求めるだけでも快楽ですし、金銭の所有は生活の甘美さと独立性を全く増やしてくれるのです」
「自身に似せて教え子を作り上げようと試みたり(自身に似せて)友人の人格を形成しようと計画したりする教師の共通規則を、あなたソクラテスが守っているのかどうか、私アンティフォンは知りませんが」
(「自身に似た教え子を作り出そうと試みる教師の共通規則を、あなたソクラテスが守っているのかどうか、私アンティフォンは知りませんが」※別の版)
「しかし、もし、あなたソクラテスが、そうしてしまっているならば、自分の事を『劣悪なわざの教師』と呼ぶべきです」
ソクラテスは次のように話した。
「このように異議を唱えられたのですが」
「(次のように、)私ソクラテスは一つの事を確信しています。アンティフォンよ」
「あなたアンティフォンは、私ソクラテスの生き方を悲惨な物として、とても強烈に想像しているので、私ソクラテスのように生きるよりも、速やかに、死を自ら選ぶでしょう」
「では、私ソクラテスの生き方で何をあなたアンティフォンが非常に耐え難いと思っているのか、私ソクラテスと、あなたアンティフォンは、向き合って考えてみましょう」
「契約上、報酬を受け取る人は報酬が支払われた仕事を終わらせる必要が有るが、報酬を受け取らない私ソクラテスは、私ソクラテスが選んだ相手を除いて、話をするのに制約を受けないのでは?」

「あなたアンティフォンの食事よりも私ソクラテスの食事は健全性が足りないし増強性が足りない、または、あなたアンティフォンの食事量よりも私ソクラテスの食事量は非常に不足しているし非常に高価である、という根拠で、私ソクラテスの食事の規定量をあなたアンティフォンは軽蔑しているのですか？」

「または、あなたアンティフォンが市場で買っている調味料が結果として私ソクラテスが市場で買っている調味料を否定する事が有ったのですか？」

「あなたアンティフォンは、『食欲が激しく成るほどソースの必要性は無く成る』、『渇きが激しく成るほど風変わりな飲み物を求める欲求は無く成る(。渇きが激しく成るほど、例えば水といった、風変わりではない飲み物を求める)』と知らないのですか？」

「また、衣服については、あなたアンティフォンも知っているように、寒さのせいや暑さのせいで衣服を変えます」

「人々は足をすりむいて歩行の妨げと成らないように長靴や短靴を履くだけなのです」

「さて、私ソクラテスは、あなたアンティフォンに質問します。他の人々よりも多く、私ソクラテスが寒さのせいで家の中に留まっていたなんて事をあなたアンティフォンは今までに認めた事が有りますか？」

「暑さのせいで日陰を求めて誰かと争っている私ソクラテスをあなたアンティフォンは今までに見た事が有りますか？」

「『生まれつき病弱な者でも、訓練によって、肉体の管理をおろそかにしている大男を負かすように成る事ができる』と、あなたアンティフォンは知らないのですか？」

「訓練した特定の点において人は自身を創り上げる事ができるし、(前)より簡単に重荷に耐える事ができる」

「しかし、あれや、これや、肉体に降りかかるかもしれない(不運といった)、その他の物事を耐えるために常に自身を訓練している私ソクラテスは、例えば、多分あまり訓練していない、あなたアンティフォンよりも簡単に、全ての不運に勇敢に立ち向かう事ができる、と、あなたアンティフォンは、どうやら、知らないのでしょう」

「それで、腹の胃袋の食欲の奴隷や、眠気の奴隷や、性欲の奴隷から自由に成るために、あなたアンティフォンは、使用時に喜ばせるだけではなく、永続的な有効性により燃え上がらせられる希望によって喜ばせる、強力に興味深いものにとりつかれる事や、誘惑に抵抗する事よりも有効な手段を提案できますか？」

「また、次のように、あなたアンティフォンは知っているはずです」

「『自分が成功している事は何も無い』と感じている人には喜びが無い」

「喜びは『耕作であろうと、船による作業であろうと、人が偶然に従事するかもしれない多数の事のどれであろうと、諸事が自分と共に進歩している』と信じている人の物である」

「『諸事が自分と共に進歩している』と信じている人には、『自分は成功している』と省みる時に、喜びがもたらされる」

「しかし、全ての、このような事から齎(もたら)される喜びは、合計すると、『より善く成っていっているという自意識』、『ますます善い友人達を獲得していっているという意識』よりも、倍、大きいのでしょうか？」

「私ソクラテスとしては、これ(、『より善く成っていっているという自意識』、『ますます善い友人達を獲得していっているという意識』は他よりも

遥かに大いなる喜びであるという事)が、私ソクラテスが大事にし続けている確信なのです」

「さらに、もし自分の友人達や国家を助ける事が問題と成る場合、私ソクラテスと、あなたアンティフォンのうち、どちらに、これらの(、自分の友人達や国家といった)対象に専念できる自由な時間が、より多く有るでしょうか?」

「自分の友人達や国家に専念できる自由な時間が、より多く有る人は、私ソクラテスが今日も送っている人生を送っている人でしょうか? または、あなたアンティフォンが『非常に幸運である』と(誤って)思い込んでいる生活様式で生きてしまっている人でしょうか?」

「私ソクラテスと、あなたアンティフォンのうち、どちらが戦士の生活をより簡単に採用できるでしょうか?」(自分の正しい友人達や正しい国家を守るために戦う事は正しい事である。)

「戦士の生活をより簡単に採用できる人は、(あなたアンティフォンのように)贅沢な生活しか送る事ができない人でしょうか? または、(私ソクラテスのように)手に入る物なら何でも自分にとっては十分である(と少しの物で満足できる)人でしょうか?」

「(私ソクラテスと、あなたアンティフォンのうち、)どちらが、包囲されたら、より速やかに降伏して『ご容赦ください』と泣き叫ぶでしょうか?」

「(包囲されたら速やかに降伏して泣き叫ぶ人は、)(あなたアンティフォンのように)欲しい物が精巧な物である人でしょうか? または、(私ソクラテスのように)最も持ち合わせている手持ちの諸物によって幸せに暮らす事ができる人でしょうか?」

「あなたアンティフォンは、『幸福は贅沢によって成り立つ』と、(誤って、)ほのめかしてしまっているように思われます」

「私ソクラテスは、(あなたアンティフォンとは)違う確信を抱いています」

「私ソクラテスの考えでは、必要不可欠な物が全く無い事は、無上の神の特性の一つなのである」

「可能な限り必要不可欠な物がほとんど無い事は、無上の神に最も近く成る事なのである」

「そして、神聖な者は最強無比であるように、最強無比の次に強い者は、神聖な者に最も近い者なのである」

アンティフォンは、(ソクラテスからアンティフォンへの)非難に別の機会に言い返して、次のように、ソクラテスと議論して戦った。

「ソクラテスよ、私アンティフォンとしては、『あなたソクラテスは善良な正直な人である』と信じています」

「しかし、あなたソクラテスの知恵については、私アンティフォンは『(ソクラテスは知恵が)多い』と言う事ができません(。ソクラテスは愚かであると私アンティフォンは言わざるを得ません)」

「あなたソクラテスは(私アンティフォンから)ソクラテスへの(『ソクラテスは愚かである』という)評価に全く異議を唱える事ができないだろう、と私アンティフォンは考えています」

「なぜなら、私アンティフォンが言っているように、あなたソクラテスは、あなたソクラテスと交際するために金銭の支払いを求めません」

「けれども、もし、あなたソクラテスの今のマントや、家や、その他の所有物であれば、あなたソクラテスは所有物に幾らかの価値を決めているでしょ

うし、私アンティフォンは『無償で所有物を手放しなさい』と言うつもりは無いですが、あなたソクラテスは『(ソクラテス自身が決めた)価値よりも安く(他人の物や金銭と)交換しよう』とは決して夢にも思わないでしょう」
「私アンティフォンの考えでは、もし、あなたソクラテスが『ソクラテスとの交際には何らかの価値が有る』と思ったのであれば、その価値よりも金銭的に高いものを求めるだろう、と明らかに証明できた、と考えています」
「このように、私アンティフォンは既に話した結論に至りました」
「あなたソクラテスは善良で正直かもしれません。なぜなら、単純には利己的には、あなたソクラテスは人々をだまして金銭を奪いません」
「しかし、あなたソクラテスは賢いはずが無いです。なぜなら、あなたソクラテスの知恵には一銭の価値も無いからです」
　この(アンティフォンからの)口撃に、ソクラテスは次のように話した。
「アンティフォンよ、『美しさや知恵を扱うのには正しい手段と間違った悪い手段が存在する』というのが、我々、人が頼りにしている、美しさや知恵に共通の確信です」
「(肉体の)美しさを売りにしている男は悪名を得てしまいます」
「しかし、もし同じ人(、肉体の美しさを売りにしていた男)が愛着している男の中に美しい心を認識して、その(美しい心の)男を友人にすれば、我々、人は『(美しい心の人を友人にした)男の選択は賢明である』と考えます」
「それ(、美しさ)と知恵は一緒なのです」
「最初に金銭的な価値を決めた人に金銭のために知恵を売り渡す男を、我々、ギリシャ人は『ソフィスト』と名づけています。まるで知恵を下品にも金銭で売り渡す男であるかのようにギリシャ人は(『ソフィスト』と)言うでしょう」

「しかし、もし同じ男(、ソフィスト)が、ある他人の気高い性質を認識して、この(気高い性質が有る)他人に全ての善い事を教え、この(気高い性質が有る)他人を自分の友人にすれば、我々、人は、このような人(、ソフィスト)について、『上品な心を持つ全ての善良な(都市国家)市民が行うべき義務を行っている』と言うのです」

「アンティフォンよ、この論理に従って、私ソクラテスにも審美眼が有って、ちょうど、ある人が自分の馬や猟犬に喜びを見出すように、また、ある人が自分の闘鶏に喜びを見出すように、そのように、私ソクラテスも善い友人達から喜びを受け取っているのです」

「そのため、(善い友人達から喜びを受け取っているため、)もし私ソクラテス自身に何か善い物が有れば、私ソクラテスは善い物を善い友人達に教えます」

「また、私ソクラテスは、善い友人達を、私ソクラテスが『これらの他の人達は、善い友人達が徳、善行、善への道で前進するのに役立つだろう』と思う他の人達に推薦します」

「古代の賢者達からの諸々の財産(である知恵)も、古代の賢者達の文書に書かれて後世の人達のために残されていて、私ソクラテスは、友人達と共有して、(古代の賢者達の文書を)ひもといて熟読します」

「(古代の賢者達の文書を読んでいて、)我々、ソクラテスと友人達の目が何か善い物(、知恵)に気づいた場合、我々、ソクラテスと友人達は、(知恵を)熱心に集めます」

「そうして、もし実に相互に友情を育む事ができたら、友情を『大いなる利益である』と思います」

私クセノフォンは、この(ソクラテスの)話を聞いた時に、「師ソクラテスは羨むべき人物であった」事と「ソクラテスは、我々、ソクラテスの言葉を聞き入れた人達を心の美しさと気高さへ導いてくれた」事を省みざるを得なかった。

さらに、ある機会に、アンティフォンは、「ソクラテスは、たとえ知恵が有っても、政治に自分からは関わらない一方、どうしてソクラテスは他人を政治家にするのでしょうか？」とソクラテスに質問した。

次のように、ソクラテスは答えた。

「私ソクラテスは、あなたアンティフォンに一つ質問をします」

「自分から独力で政治を行う事と、可能な限り多くの他の人達をこの政治という務めにふさわしい人達にするのに身を捧げる事のうち、どちらが、より政治家にふさわしい行動でしょうか？」

第一巻 第七章（詐称は不採算）

　ここで、ソクラテスは、友人達に、詐称や虚偽の外見をやめさせる事によって徳、善行、善の追求を直接的に促さなかったかどうかを話題にして考えてみましょう。

　ソクラテスはよく「高名に成るための手段のうち、『優れた者である』と評価されたい領域で優れた者に成るという手段よりも良い手段は無い」と話していた。（「優れた者である」と評価されたい領域で優れた者に成る事は、高名に成るための最良の手段である。）

　次のように、ソクラテスは、（「『優れた者である』と評価されたい領域で優れた者に成る事は、高名に成るための最良の手段である」という、）この考えの正しさを強く主張した。

「実際には、そうではない（、優れたフルート奏者ではない）のに、『優れたフルート奏者である』と思われたい人が、どんな事をするように追い込まれてしまうか熟考してみましょう」

「技術以外で、（技術ではないものによって、）優れたフルート奏者のふりをするように追い込まれてしまうでしょう。そうではないですか？」

「そのため、まず、フルート奏者などの芸術家達は見事な装備を常に持っている事を考えると、また、芸術家達は多数の従者と共に巡業する事を考えると、優れたフルート奏者のふりをする人は同一のもの（、見事な装備と多数の従者）を持たなければいけません」

「次に、芸術家達は大衆からの称賛を思い通りに集める事ができます」

「そのため、優れたフルート奏者のふりをする人は、(称賛の声に似ている)玩具用花火クラッカーの秘密の集合(と言える称賛を偽装する多数のもの)を細工しなければいけません」

「ただ、(次のように、)一つの事は明白なのです。優れたフルート奏者のふりをする人は演奏するように何ものにも誘導されてはいけません」

「さもなければ、優れたフルート奏者のふりをする人は、すぐに真実が暴かれて、お粗末なフルート奏者としてだけではなく、お粗末な詐称者として、気づくと笑いものに成っているでしょう」

「そして、優れたフルート奏者のふりをしていた人は、支払う必要が有る多額の費用を抱える羽目に成ってしまいます」

「しかも、優れたフルート奏者のふりをしていた人が刈り入れる事ができる利益は何も無いのです」

「それ(、詐称のための多額の費用を抱えてしまう事、詐称による利益が何も無い事)は、優れたフルート奏者のふりをしていた人の全ての悪評よりも悪いのです」

「人々から笑いものにされて、味がしなく成った不採算な人生を送る以外に、優れたフルート奏者のふりをしていた人には何が残されていますか?」

「別の場合(の考察)を試してみましょう」

「実際には、そのような者ではない(、優れた将軍や優れた操舵手ではない)のに、優れた将軍か優れた操舵手と思われたい人を考えてみなさい」

「優れた将軍か優れた操舵手と思われたい人にとって、どのように事態が運ぶか想像してみましょう」

「次のように、二つの災いのうち、一つの災いが有ります」

「(軍の指揮や船の操縦といった、)これらの事柄における達人であると思われたいという強い願望によって、優れた将軍か優れた操舵手と思われたい人は、自分に賛同するように他人の心をつかむ事に失敗してしまうでしょう」

「他人の心をつかめない事は十分なほどの悪い事に成ってしまうでしょう」

「また、優れた将軍か優れた操舵手と思われたい人は、成功しても、失敗した場合よりも悪い結果をともなうでしょう」

「なぜなら、必要不可欠な知識無しで、船を操縦するように、または、軍を指揮するように任命された、どの人も、自分が最も傷つけたくないと望んでいる多数の人々を速やかに滅ぼす羽目に成るであろうし、実に凄惨に自身も死んで『この世』という舞台から去る羽目に成るであろう事は、当然の道理です」

このように、まず、一つの例によって、それから、別の例によって、ソクラテスは、外見だけで、実際には、そういった者(、金持ちや勇敢な人や強い人)のふりをして、金持ちに見せようと試みる事、または、勇敢に見せようと試みる事、または、強そうに見せようと試みる事の不採算性を明確に示した。

「(実際には、そうではないのに、ふりをして見せかける人である、)あなたは、遅かれ早かれ必ず、自分の実行能力を超えた命令を課されます。そして、能力によって信頼されていた領域で、ちょっと失敗しても、大衆は何の容赦も与えてくれないのです」(とソクラテスは話した。)

「私ソクラテスは、誰かから説得によって金銭や物を受け取って、そうして、(そのまま、)だまして奪う人を『詐称者』、『大詐称者』と呼びます」とソクラテスはよく話した。

「しかし、常に無価値な奴にもかかわらず、人々をだまして『国家を指導する能力が有る』と思わせる事ができる人は、確実に、全ての詐称者のうち(有害さが)最大規模の詐称者なのです」

第二巻

第二巻 第一章（節制、自制は統治者に必須）（自国の防衛は統治で最重要）（節制、自制は全ての人に必須）（統治するか統治されてしまうかの二択）（悪い統治者である強者は弱者を奴隷状態にして搾取する）（例え話「ヘラクレスへの徳の教育」）

さて、もし、このような（第一巻 第七章の、詐称に対するソクラテスの）話の効果が、私クセノフォンが想像するように、ソクラテスの話を聞き入れた人達に詐称や虚偽の外見をやめさせる事であったならば、次のような（ソクラテスの）言葉は、ソクラテスの弟子達に節制、自制と忍耐の実践を促す事を意図していた、と私クセノフォンは確信している。

飲食、睡眠、性欲に関する節制、自制、克己。

寒さ、暑さ、労苦、苦痛への忍耐。

このような事の全てにおいてソクラテスの知人の一人アリスティッポスが不当に自ら許していたのをソクラテスは気づいた。

そのため、次のようにソクラテスは、その知人アリスティッポスに話した。

（次のようにソクラテスは話した。）

「教えてください。アリスティッポスよ。あなたアリスティッポスに教育を任された二人の子達がいたとして、二人の子達のうち一人は政治への才能を育てる必要が有って、もう一人は政治への性向が最も希薄であった場合、あなたアリスティッポスは、どのように、その二人の子達を教育しますか？」

「あなたアリスティッポスは、どう思うでしょうか？」

「最初の質問から始めましょう。言うのであれば、食べ物という最低限の必須要素の質問から始めましょう」
次のようにアリスティッポスは話した。
「はい。食べ物から始めるべきです。ぜひ。食べ物は第一の要素で、食べ物無しでは、生きる事ができる人はいない、どころか、人々は死んでしまいます」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。では、『二人の子達の両方に、ある時、食べ物を手に入れたいという欲求が自ずと現われる』のは当然だと思います。当然だと思いますよね？」
次のようにアリスティッポスは話した。
「当然だと思われます」
次のようにソクラテスは話した。
「では、二人の子達のうち、どちらの子を、子自身の自由意思によって、腹の胃袋の食欲を満足させる事を遂行するように教育するのではなく、差し迫っている仕事を遂行するように教育する必要が有るでしょうか？」
次のようにアリスティッポスは話した。
「もし、その子の治世で(、その子に)国政を軽視させるつもりが無ければ、疑い無く、政治を行う事ができるように教育している子です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、渇きを癒やしたい欲求が起こった場合にも、その同じ教え子に渇きを忍耐する力を備わらせる必要が有りますよね？」
次のようにアリスティッポスは話した。
「確かに、その子には備わらせる必要が有ります」

次のようにソクラテスは話した。

「では、夜遅くに寝て朝早くに起きる事ができるように、また、もし必要が有れば徹夜で見張る事ができるように、睡眠に関しての節制、自制、克己を授けるべきであるのは、二人の子達のうち、どちらの子でしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「二人の子達のうち、その同じ子に、やはり、この(眠気に対する)忍耐を授ける必要が有ります」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ。では、性の事(、性欲)に関しての節制、自制、克己は、とても大いなる物なので、そのようなもの(、性的なもの)によって自分の義務を果たすのを妨げるべきではないですよね？」

「これ(、性欲に対する節制、自制、克己)を必要とするのは、二人の子達のうち、どちらの子でしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「二人の子達のうち、その同じ子が、やはり、必要とします」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ。では、労苦を避けたり、労苦から逃げたりするのではなく、労苦に立ち向かう自由意思による不屈さをさらなる贈り物として授ける必要が有るのは、二人の子達のうち、どちらの子でしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「これ(、労苦に対する不屈さの教育)も正しく、政治について教育している子に備わらせます」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ。では、敵に対して勝利するために必要な全ての知識の教育を二人の子達のうち、どちらの子に与えるのが、より良いでしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「確実に、私達の未来の統治者(にさせる予定の子に敵に勝利するための知識の教育を与えるのが良い)です」

「なぜなら、知識のうち、これらの(敵に勝利するための)知識無しでは、統治者の他の全ての能力は単なる無駄に成るからです」（自国の防衛、軍事力は重要である。）

次のようにソクラテスは話した。

「そのような(敵に勝利するための)教育をされた人は、敵に、だまされ難い」

「また、（『敵』に勝利するための教育をされた人は、)そうして、（『敵』に、だまされない事によって、)生物に、ありふれている破滅を免れる」

「(我々、人は皆、知っているように、)生物に、ありふれている破滅のうち、いくつかは、自身の貪欲さによって引っかかってしまう事による物であるし、(生物に)先天的な臆病さにすらもかかわらず頻繁に引っかかってしまうのである」

「実に、食欲によって、生物は餌に引き寄せられて、とらわれてしまう」

「一方、別の生物は、同様に、飲み物による罠で、とらわれてしまいますよね？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「疑い無く(、そうです)」

次のようにソクラテスは話した。

「また、別の生物は性欲という熱の虜(とりこ)に成ってしまう」

「例えば、鶉、山鶉の雄は、雌の声を聞くと、性欲と、性の快楽への期待で、興奮して、危険を計算する力を失くして(、とらわれて)しまうように」
「鶉、山鶉の雄は(雌の所へ)急行している最中に、猟師の罠に陥ってしまいますよね？」
　アリスティッポスは同意した。
　次のようにソクラテスは話した。
「では、『人にとって下劣な事とは、(性欲などによって)最も頭が変に成っている鳥や獣のように心を動かされている事である』とは思われませんか？」
「姦通者は、家の最奥の聖所(である夫婦の寝室)に侵入している時に、自身の犯罪がはらんでいる危険性や、法による恐るべき罰や、罠にとらわれてしまう危険性や、自身の犯罪の発覚後に軽蔑されている中で最も恐ろしい苦しみを受ける事に十分に気づいているように」
(「姦通者は、家の最奥の聖所である夫婦の寝室に侵入している時に、法が罰によって罪を犯さないように脅している罰を受ける罪を犯している危険性や、仮に罠に陥ってしまったら、とらわれてしまい、性器などを切断されてしまう危険性を知っているように」※別の版)
「姦通者の頭から離れない全ての恐ろしい罰を考慮すれば、また、性欲の奴隷から自由に成るための手元に有る多数の手段も考慮すれば、破滅への砂地獄へ向こう見ずに入り込んでしまう事を考慮すれば、このような(姦通という性欲による)狂乱について我々は、どう思うべきなのか？」
(「姦通者の頭から離れない全ての恐ろしい罰を考慮すれば、また、性欲の奴隷から自由に成るための手元に有る多数の手段も考慮すれば、危険の顎の中

へ向こう見ずに飛び込んでしまう事を考慮すれば、このような姦通という性欲による狂乱について我々は、どう思うべきなのか？」※別の版）
「そのような犯罪、姦通を犯す事ができる恥知らずな人は、きっと(自分の)邪悪な精神によって苦しむ羽目に成る事は間違い無いですよね？」
次のようにアリスティッポスは話した。
「そのような結論に私アリスティッポスも至ります」
次のようにソクラテスは話した。
「では、例えば、(寒さや暑さとの戦いが可能な事といった)戦いや農業にとって必要不可欠な事のように、人々にとって必要不可欠な事は、より多数であるし、白昼の天空の下で行う必要が有る残りの物事は過半数であるが、人々の大多数は寒さや暑さと戦う教育を全く受けていないのは、不思議な無関心のあらわれであると、あなたアリスティッポスには思い当たりませんか？」
(「では、例えば、寒さや暑さとの戦いが可能な事といった、戦いや農業にとって必要不可欠な事のように、人々にとって必要不可欠な事は、より多数であるし、野外で行う必要が有る残りの物事は過半数であるが、人々の大多数は寒さや暑さと戦う教育を全く受けていないのは、不思議な無関心のあらわれであると、あなたアリスティッポスには思い当たりませんか？」※別の版)
アリスティッポスは、また、同意した。
次のようにソクラテスは話した。
「では、『統治を任命されている人は、(寒さや暑さといった、)これらの事を耐える事ができるように自身を教育する必要が有る』と、あなたアリスティッポスは同意しませんか？」

次のようにアリスティッポスは話した。
「最も確実に(同意します)」
次のようにソクラテスは話した。
「では、我々は、(寒さや暑さといった、)これら全ての事において節制、自制、克己している人達を統治者にふさわしい人達に分類する一方、(節制、自制、克己といった、)このような振る舞いが不可能な者どもを統治者に成る事ができる、どんな資格も無い人達に分類する必要が有りますね？」
次のようにアリスティッポスは話した。
「私アリスティッポスは同意します」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。では、あなたアリスティッポスは、どちらの人の分類の特徴も知っているので、あなたアリスティッポスは、一体、人の二つの分類のうち、どちらに属する資格が最も良く有る、と思い当たりますか？」
(次のようにアリスティッポスは答えた。)
「はい。私アリスティッポスは思い当たります」
「私アリスティッポスは、自身を、統治を望む事ができる人達に分類できるとは、一瞬も、夢にも思いません」
「実際、自身の個人的な需要を満たす事は何と難しい問題であるか考えると、私アリスティッポスは、この自身の個人的な需要を満たさず、それどころか、さらに、社会の自分以外の人達が喜んで望む物事を何でも、社会の自分以外の残りの人達へもたらす義務を自身に負わせるのは愚者のあらわれである、と見なします」

「多数の個人的な快楽を犠牲にして、自身を国家の先頭の地位に置いて、もし国家の望みの遂行を全く少しでも失敗したら、法外な責任を問われるのは、私アリスティッポスには、愚か過ぎる行為に思われます」

「何と、とんでもない！」

「まさに私アリスティッポスが自分の家の奴隷を扱うように、諸々の(都市)国家(の大衆)は自国の統治者を扱う事を求めています」

「私アリスティッポスは、従者達が私アリスティッポスに必需品を豊富にもたらす事を求め、従者達が私アリスティッポスの必需品に一つでも手を出す事は望みません」

「そのため、諸々の(都市)国家(の大衆)は、想像できる限りの全ての善い物事を自国にもたらす事が自国の統治者の義務であるし、その間ずっと、自国の統治者が全ての善い物事に手を出さない事が自国の統治者の義務である、と見なします」

(「そのため、諸々の都市国家の大衆は、想像できる限りの全ての善い物事を自国にもたらす事が自国の統治者の義務であるし、自国の統治者が国家予算に手を出してはいけない事が自国の統治者の義務である、と見なします」※別の版)

「そのため、私アリスティッポスの考えでは、もし誰かが自ら悩みを蓄積したいと望むのならば、また、もし誰かが社会の自分以外の残りの人達に対する邪魔者に成りたいと望むのならば、私アリスティッポスは、その人を(ソクラテスに)勧められた方法で教育するつもりであるし、その人は統治者にふさわしい人達に分類されるように成るべきです」(ソクラテスの勧める統治者は、悩みを蓄積する羽目に成ってしまうし、他人に対する口うるさい邪魔者に成ってしまう、とアリスティッポスは主張した。)

「実に、自分のために、私アリスティッポスは、可能な限り楽に気持ち良く日々を過ごしたいと望む人達に分類される事を望みます」

次のようにソクラテスは話した。

「では、この点について、統治者か、統治される者である大衆か、二つのうち、どちらが、より気持ち良く人生を過ごしそうか、話題にして調べてみましょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「ぜひ、そうしましょう」

次のようにソクラテスは話した。

「では、まず、我々に既知の諸国家と諸人種(において調べてみましょう)」

(「では、まず、我々が知っている全ての、外の世界、非ギリシャ人の諸人種と、その帰属国において調べてみましょう」※別の版)

「アジアでは、ペルシャ人が統治者で、一方、シリア人、フリギア人、リディア人は統治される者である大衆です」

「また、ヨーロッパでは、スキタイ人が統治していて、マエオーティス人が統治されている事を我々は知っています」

「アフリカでは、カルタゴ人が統治者で、リビア人は統治される者である大衆です」

「あなたアリスティッポスの意見では、これらの統治者と大衆という二つの分類のうち、どちらが幸せな人生を過ごしますか？」

「または、ギリシャ本国に、より近づいて。あなたアリスティッポス自身もギリシャ人です。ギリシャ人のうち、統治者か、従属する地位である大衆の、どちらが、より幸せな生活を楽しむでしょうか？　あなたアリスティッポスよ、考えてください」

(次のようにアリスティッポスは叫んだ。)

「いいえ！　『私アリスティッポスはまさに自身を奴隷の地位に決して置かない』と、あなたソクラテスに理解してもらいたい」

(「いいえ！　あなたソクラテスの話を遮って、すみません。しかし、私アリスティッポスは自身を大衆や奴隷の地位に置くつもりは少しもありません。『私アリスティッポスはまさに自身を奴隷の地位に決して置かない』と、あなたソクラテスに理解してもらいたい」

「『統治者と大衆や奴隷の間には中間の道が存在する』と私アリスティッポスは把握しています。統治も奴隷も同様に回避して、統治者と大衆や奴隷の間の中間の道を進む事を私アリスティッポスは熱望しています」※別の版)

「統治者と大衆や奴隷の間の中間の道は自由へと通じています」

「自由へと通じている統治者と大衆や奴隷の間の中間の道は、幸せへと導く高等な道なのです」

次のようにソクラテスは話した。

「なるほど、仮に、あなたアリスティッポスの主張する道とやらが、統治と奴隷を回避するのと同様にして、人々を回避できたら、あなたアリスティッポスの主張には何か価値が有ったかもしれませんが」

「けれども、あなたアリスティッポスは人々の中に(神によって)置かれていて、もし、あなたアリスティッポスが統治しようとも統治されようとも思わないし、できれば、統治者に、こびへつらおうと思わないのであれば、あなたアリスティッポスは『強者には弱者を公的にも私的にも後悔という椅子に座らせる手段が有るし、強者には弱者を奴隷のように扱う手段が有る』のを確実に理解する必要が有ります」

「私ソクラテスは『あなたアリスティッポスは、次のような、ありふれた事例に気づいているはずである』と、あえて言います」

「人々のうち、大衆や奴隷や弱者に分類される人々が種をまいたり植えたりすると、そこに、統治者や強者に分類される人々がやって来て弱者の物であるはずの穀物を刈り入れたり弱者の物であるはずの果樹を刈り入れたりして、あらゆる手段で弱者を執拗に説得する。なぜなら、弱者にもかかわらず、弱者は正式な宮殿の権力者どもに敬意を払う事を拒否するからである。(そして、)ついには、弱者は、強者と戦うよりも、奴隷と成る事を受け入れるように説得されてしまう」

「また、私生活でも、あなたアリスティッポスは私ソクラテスの言葉が正しいと証明してくれるはずですが、大胆な強者は、無力な者や臆病な者を無理矢理、奴隷にして犠牲にして、少なくない利益をもうけます」

次のようにアリスティッポスは話した。

「ええ。けれども、私アリスティッポスは、私アリスティッポスには、そのような全ての不幸に対する簡単な救済手段が有る事をあなたソクラテスに教えなければいけない」

「私アリスティッポスは、どんな俗世の集団にも閉じ込もっていません」

「私アリスティッポスは、外国人として、広大な世界を放浪しています」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、さて、私ソクラテスの言葉に対して、それ(、アリスティッポスの机上の空論)は見事な手際ですね!」

(「アリスティッポスは、そんな机上の空論で、よくも私ソクラテスの言葉を妨害できましたね!」※別の版)

（「アリスティッポスの机上の空論は、見事な決め手ですね！　アリスティッポスは、机上の空論による、言葉のレスリングの王者ですね」※更に別の版）
「確かに、（ギリシャ神話の強盗である）シニス、シロン、プロクルステスの死後ずっと、外国人の旅人達は安楽に過ごせています」
「それにもかかわらず、私ソクラテスが考えるに、今でさえ諸々の自由な社会の構成員達は、（他人からの）悪行に対して自己防衛するために、各々の自国で諸々の法律を通します」
「各国の国民は、私的な縁故に加えて、多数の友人を用意します」
「各国の国民は自国の周りを壁で囲います」
「各国の国民は悪人を撃退するために武器を集めます」
「そして、安全を二重に確保するために、各国の国民は諸外国からの協力者を用意します」
「しかし、このような全ての防御機構にもかかわらず、自由市民達は時々悪行の犠牲に成ってしまう物なのである」
「けれども、あなたアリスティッポスには、このような助けすら全く無いのである」
「あなたアリスティッポスは悪行がはびこっている道で人生の大半を過ごしてしまっている」
（「あなたアリスティッポスは非常に多数の人達が悪行に苦しめられている道で人生の大半を過ごしてしまっている」※別の版）
「あなたアリスティッポスは、どの都市（国家）に入っても、その都市（国家）の自由民のうち最低の身分の人よりも低い身分（の扱いをされる外国人）であるし、さらに、まさに、全ての人が危害を加えようと夢中に成る対象のよう

な人物で(ある外国人にもかかわらず)、独りだけ攻撃の対象外に成るつもりである」

「けれども、あなたアリスティッポスは、外国人の通行証によって、危害や侮辱から免れる事ができるのか？」

「そのため、あなたアリスティッポスは、自惚れているのである」

「それで、なぜ(、あなたアリスティッポスは、自惚れているの)か？」

「国家の権力者達は、あなたアリスティッポスのために、『この人アリスティッポスの人格は安全である。彼アリスティッポスの出入国で危険が無いようにしなさい』という声明を出すだろうか？」

「このような事が、あなたアリスティッポスの自惚れの根拠なのか？」

「または、あなたアリスティッポスを奴隷のようにし続けたいと思う者がいないと示す事ができていると、あなたアリスティッポスは自覚していて、安心しているのか？」

「なぜなら、労働意欲がわずかしか無く、贅沢する傾向が非常に強い奴アリスティッポスを誰が家で雇いたいと思うのか？」

「まさに、この点に留まって、考えたら、どうだろうか」

「主人は、そのような類の(アリスティッポスのような)召使いをどのように扱うでしょうか？」

「もし私ソクラテスが間違っていなければ、主人は、(アリスティッポスのような)召使いの(アリスティッポスのような)節制、自制しない性格を飢えさせて懲らしめます」

「主人は、盗む事ができる何かが有る場所では、かんぬきで施錠して、(アリスティッポスのような)召使いの盗む意欲をくじきます」

「主人は、監禁して、(アリスティッポスのような)召使いの逃亡を妨げます」

「主人は、鞭（ムチ）打ち刑で、(アリスティッポスのような)召使いから怠惰な気持ちを追い払います」

「そうではありませんか？」

「また、あなたアリスティッポスは、自分の召使いの一人に同様の性向を見つけたら、どうしますか？」

　次のようにアリスティッポスは話した。

「私アリスティッポスは、強制して召使いが私アリスティッポスに正しく忠実に仕えるまで、あらゆる苦痛を与えて、召使いを罰します」

「しかし、ソクラテスよ、王者のわざを教育した、あなたソクラテスの教え子の話に戻すと、もし私アリスティッポスが間違っていなければ、あなたソクラテスは(王者のわざの教育をする事を)『幸せに成れる事である』と思っていますね」

「差し支えなければ御尋ねしたいのですが、ただ、やむを得ず苦しんでいるという理由から自分では知らないで悪い場合には嘘をつく他人よりも、王者のわざを教育した、あなたソクラテスの教え子は、どのように善く成るのでしょうか？」

「しかも、王者のわざを教育した、あなたソクラテスの教え子の場合、飢えと渇き、寒さによる身震いと、夜に目を覚まして横たわっている事、全ての変化による苦しみに包囲される事は、あなたソクラテスの教え子、自らの選択なのでしょうか？」

「もし王者のわざの教育が生む違いが、唯一、同じく、鞭（ムチ）打ちの刑を受けている、むき出しの背中だけであれば、自分で決めた鞭（ムチ）打ちの刑であろうとも、

求めもしない鞭(ムチ)打ちの刑であろうとも、私アリスティッポスとしては、私アリスティッポスには王者のわざの教育が生むという、どのような違いも見分ける事ができない」

「また、実際、もし私アリスティッポスの肉体であれば、自分自身の意思によって、このような諸悪という大軍に私が包囲されていようとも、自分の意に反して、このような諸悪という大軍に私が包囲されていようとも、自分で決めた苦しみに付随している愚かさだけを別にすれば、王者のわざの教育は、全体的に私アリスティッポスの肉体とは無関係です」

　次のようにソクラテスは話した。

「アリスティッポスよ、そのような問題に関して、『自発的に苦しむ事と、不本意に苦しむ事は、全く違う』と、あなたアリスティッポスには思われませんか？　なぜなら、自発的に飢えに苦しむ人は望んだ時に食べる事ができますし、自発的に渇いている人は飲む事もできますし、その他についても、そのように同様だからです」

「実に、このように(自発的に)苦しんでいる人は、体調が(苦しむ事をやめる事を)必要とさせる時でも、必然的に苦しむ事をやめる事ができないのでしょうか？」

「また、自発的に苦しんでいる人は、希望に高められて、陽気に労苦に立ち向かいます」

「ちょうど、野獣を追っている猟師は、獲物をとらえる事ができる希望によって、労苦に快楽を見出すように」

「そして、快楽は、労苦の報いである、実に、些細な価値のおまけなのです」

「実に、善い友人達を得るために労苦している人や、敵を圧倒するために労苦している人や、肉体と魂の強さによって家の者達を善く統治し友人達を助け自身を生み出した国家に利益をもたらすために労苦している人への報いについて、どう思うべきでしょうか？」

「『善い友人達を得るために労苦している人、敵を圧倒するために労苦している人、肉体と魂の強さによって家の者達を善く統治し友人達を助け自身を生み出した国家に利益をもたらすために労苦している人も、崇高な目的を求めていて、労苦を軽くとらえる』と考えてはいけないのでしょうか？」

「『善い友人達を得るために労苦している人、敵を圧倒するために労苦している人、肉体と魂の強さによって家の者達を善く統治し友人達を助け自身を生み出した国家に利益をもたらすために労苦している人も、陽気に苦しい生活に立ち向かう』と考えてはいけないのでしょうか？」

「誰が、相手の意識的な善行だけではなく、人々からの称賛で、善い友人達を得るために労苦している人、敵を圧倒するために労苦している人、肉体と魂の強さによって家の者達を善く統治し友人達を助け自身を生み出した国家に利益をもたらすために労苦している人を元気づける必要が有る、と言うのでしょうか？」

（「誰が、自画自賛だけではなく、全ての人々からの称賛と羨望で、善い友人達を得るために労苦している人、敵を圧倒するために労苦している人、肉体と魂の強さによって家の者達を善く統治し友人達を助け自身を生み出した国家に利益をもたらすために労苦している人を元気づける必要が有る、と言うのでしょうか？」※別の版）

「また、体操の訓練指導者が言うように、怠惰な習慣は、短時間のつかの間の快楽と共に、肉体の善い習慣を固める事ができないし、また、どんな重要な知識も魂に教え込む事ができない」

「しかし、善い人達が教えてくれるように、崇高な気高い行い(、善行)を探求して労苦を惜しまず努力する事によって、忍耐によって、我々、人は、最終的には、目標に到達できるのです」

「そのため、次のように、本のどこかで、ヘシオドスは記しています」

「悪徳(、悪行、悪)を大量に簡単に人は取る事ができる」

「悪への道は平坦である」

「そして、悪徳という女性の住処は、とても近い」

「一方、徳(、善行、善、力)の前に、不滅の神々は労苦を置いた」

「善への道は長い」

「また、善へと通じている道は険しい」

「また、善への道は、最初は、過酷である」

「しかし、善への道の絶頂を超えると、善への道が平坦ではないにもかかわらず、善への道は楽に成っていく」

「また、次のように話して、エピカルモスは(労苦によって善へ到達できると)証明している」

「神々は、我々、人に、労苦の報いとして、全ての善いものをもたらしてくれる」

「また、別の一節で、次のように、エピカルモスは宣言している」

「あなた達の心を軟弱な楽な物にするなかれ」
「あなた達は悪人である」
「あなた達は労苦を欠かすなかれ」

「また、あの賢者プロディコスは、同様に、(徳と悪徳という二つのものの間の)緊張によって、徳について、次のような、大衆が聴いた事が有る、ヘラクレスについての詩で、自ら話している」
(「また、あの賢者プロディコスは、同様に、徳と悪徳という二つのものの間の緊張によって、徳について、次のような、プロディコスが生活様式の見本として読むのを好んでいる、ヘラクレスについての詩で、自ら話している」
※別の版)
「次のような話が、私ソクラテスが思い出す事ができる限りの、少なくとも、プロディコスが話している話の内容に成ります」

「ヘラクレスが少年期を抜け出して若さの盛りへ入っていく時に、若者が今にも自立する寸前の状態に成る時期に至って、徳への道に入るべきか、悪徳への道に入るべきか、(迷い)を明らかに示し、静かな場所へ行って、徳への道と悪徳への道という二つの道のうち、どちらを辿るべきか自問自答して座った」
「そうして、そこでヘラクレスが自問自答して座っていた時に、大いに有名な(徳と悪徳という)二人の女性が現れてヘラクレスに近づいた」

「一方の(徳という)女性は、見目麗しく、気質による才能で、寛大で、くつろいでいた」
「(徳という女性は、)手足が清らかさで飾られていた」
「(徳という女性は、)両目が恥じらいで飾られていた」
「(徳という女性は、心の)落ち着きが歩きぶりの周期的運動を整えていた」
「また、(徳という女性は、)白い衣服を着ていた」
「他方の(悪徳という)女性は、一方の女性とは違う種類の女性であった」
「(悪徳という女性の)手足の肉厚な軟弱さは(悪徳という女性の)育ち(の悪さ)を暴露していた」
「また、(悪徳という女性の)肌の色は実際よりも白かったり薔薇色であったりするように見せるために粉飾されていた」
「そして、(悪徳という女性は、)生まれつきの背の高さよりも高く見えるように(厚底の靴などで)粉飾していた」
「(悪徳という女性は、)大きく目を見開いて、じろじろと見てきた」
「また、(悪徳という女性が)着ていた衣服は、実に、(肉体の美しさの)最盛期の成熟を暴露するのに役立っていた」
「(悪徳という女性は、)頻繁に、ちらちらと見て、身の回りを見回したり、他人が自分に注目しているか見るために見回したりした」
「一方、時々、(悪徳という女性は、)自分の影をじっと凝視した」
「さて、これらの(徳と悪徳という)二人の女性がヘラクレスに近づく時、最初に挙げた(徳という)女性は一定の速さで歩いてヘラクレスに向かって進んだが、他方の(悪徳という)女性は(徳という女性を)追い越したいと望んで若者ヘラクレスに向かって走り、次のように叫んだ」

（「さて、これらの徳と悪徳という二人の女性がヘラクレスに近づく時、最初に挙げた徳という女性は態度を変えないでヘラクレスに向かって進んだが、他方の悪徳という女性は徳という女性を追い越したいと望んで若者ヘラクレスに向かって走り、次のように叫んだ。※別の版）

「『私（、悪徳という女性）には分かりますよ、ヘラクレスよ、（徳への道と悪徳への道のうち、）人生という、どの道を選ぶべきか迷って苦しんでいますね』

『私（、悪徳、悪行、悪）をあなたの友にしなさい』

『そうすれば、私（、悪）は、あなたを最も気持ち良い楽な道へ導きましょう』

『次の事を、私（、悪）は、あなたに約束します』

『あなたは人生の快楽の全てを味わって、全ての苦痛を免れるでしょう』

『さて、まず第一に、あなたは戦いや仕事、務めで頭を悩ますなかれ』

『他の問題が、あなたの心を占めるべきです』

『どの飲食物が、あなたの味覚にとって気持ち良いか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『（音楽、女性の音声、絵、女性の肉体といった、）どんなものが、あなたの耳目を気持ち良くするのか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『どんなものが、あなたの嗅覚や触覚を気持ち良くするのか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『最愛の恋人との、どのような性交が、あなたを喜ばせるのか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『最も気持ちの良い睡眠で、どのように、あなたは手足をもたれるべきなのか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『苦痛という不純物無しで、どのように別個の快楽を集めるか発見する事だけをあなたは考えるべきです』

『そして、いつか一連の快楽が無く成るのでは、という疑念が、いつか、あなたに忍び寄っても、私(、悪)が、蓄積された肉体の労苦や、蓄積された魂の労苦をあなたが取り戻す状態に導くつもりは無い、と信じなさい』

『ええ！　他人は労苦するべきであるが、あなたは他人の労苦の成果を刈り入れるべきである』

『あなたに利益をもたらさないものへ手を差し伸べる事を控えるべきである』

『なぜなら、私(、悪)の全ての体現者に、私(、悪)は全ての側面から自由に自分を助ける事ができる権力をもたらすからです』」

「ヘラクレスは、これらの言葉を聞いて、『おおっ、女性よ、あなたが有している名前は何ですか？』と応えた」

「ヘラクレスの質問に、(悪徳という)女性は『私の友人達は私を幸せと呼びますが、私を憎悪する人達は私を悪徳や悪という別名で呼ぶ事を知ってください』と答えた」

「さて、ちょうど、その時、他方の、美しい(徳という)女性が来臨して、次のように話した」

「『ヘラクレスよ、あなたヘラクレスの両親は私(、徳、善行、善)に良く知られていますし、あなたヘラクレスが育っていく中で、私(、善)は、あなたヘラクレスの気質を評価しているので、私(、善)も、あなたヘラクレスに近づきました』

『そのため、もし、あなたが私(、善)へと通じている道を選べば、あなたは自ら大いに奮起して気高い勇敢な行いを多数、行う者に成る、という善い希望を私(、善)は抱いています』

『そうすれば、私(、善)も、正しい、より高い名誉で、あなたのために、評価されて、勇敢な行いが放つ栄光で輝かされる、という善い希望を私(、善)は抱いています』

(『そうすれば、私、善も、正しい、より高い名誉で、あなたのために、評価されて、あなたの善、善行の輝きに浴する事ができる、という善い希望を私、善は抱いています』※別の版)

『私(、善)は、快楽の前触れで、あなたをだますつもりはありません』

(『私、善は、快楽という甘美な提案で、あなたをだますつもりはありません』※別の版)

『私(、善)は、まさに真実によって、神の規則による物事をあなたに説明します』

『さて、見事な善い名声と成る物のうち、労苦と苦痛以外に、神々が、いつか死ぬ者である人々にもたらす物は無い、と知りなさい』

『あなたが神々からの好意を得たいのであれば、神々(、善、愛、思いやり)に仕える必要が有ります』

『あなたが友達に愛されたいのであれば、友達に利益をもたらす必要が有ります』

『あなたが(善い)国家にほめたたえられたいのであれば、(善い)国家の役に立つ必要が有ります』

『あなたが全てのギリシャ人(、徳の高い人々)から自分の徳への称賛を得たいのであれば、ギリシャ人(、徳の高い人々)に何か善行をするように努める必要が有ります』

『あなたが大地(という女神)に実りを豊かにもたらすように望むのであれば、大地(という女神)の機嫌を取る必要が有ります』

『あなたが羊や牛の群れから富を集積したいと求めるのであれば、羊や牛の群れに対して労苦する必要が有ります』

『また、あなたが戦士として強く成りたいし、友人達を助ける事ができるように成りたいし、敵を圧倒できるように成りたいと熱望するのであれば、知識を持つ人々から戦いのわざを学んで、戦場、現場で知識の適用、応用を実践する必要が有ります』

『また、同様に、あなたが手足といった肉体を強くしたいのであれば、手足といった肉体を精神に従うように慣らして、労苦して自身を鍛える必要が有ります』」

(そして、次のように、プロディコスは話している。)

「ここで、悪徳という女性は叫んで話に割り込んだ」

「『さあ、ヘラクレスよ、そこの(徳という)女性が案内しようとしている快楽への道は、どんなに困難で長い事か!』

『しかし、私(、悪)は短い楽な道で幸せへ案内するつもりです』」

「その時、次のように、徳という女性は話した」

「『いいえ、劣悪なものよ、(悪よ、)あなた(、悪)には、どんな善い物が有るというのか?』

『また、あなた(、悪)は、どんな(本当に)気持ちの良いものを知っているというのか?』

『あなた(、悪)は、人の心をかき立てて(本当に)気持ちの良いものを獲得するために手足を動かさせないのに。あなた(、悪と、悪の体現者)は、(真の)快楽への欲望を期待する事すらできないか、快楽への欲望は湧くかもしれないが行動する事には既に飽きている』

『(なぜなら、悪と、悪の体現者は、)飢える前に食べてしまうし、のどが渇く前に飲んでしまう』

『(あなた、悪と、悪の体現者は、)食欲を苦労して得るために、料理人と菓子職人の大群を発明する必要が有ります』

『また、あなた(、悪と、悪の体現者)の、のどの渇きを刺激するためには、最も金がかかるワインを(長い年月かけて)寝かせ(て熟成させ)る必要が有りますし、夏には氷を探し求めて右往左往する必要が有ります』

『あなた(、悪と、悪の体現者)の眠りを助けるためには、柔らかい掛け布団だけでは不十分で、寝台と羽毛の敷き布団を用意する必要が有りますし、眠らせるために軽く、ゆするための、ゆりかごまで用意する必要が有ります』

『なぜなら、あなた(、悪と、悪の体現者)の場合、労苦したからではなく、虚無と、この世でするべき事が何も無い事から、睡眠欲求が湧くからです』

『愛による自然な欲望(、性欲)ですら、あなた(、悪と、悪の体現者)は、あらゆる手段で早まって無理に促成栽培して(駄目にして)しまうし、性交において性別、性交、性器の混乱を発明してしまう』

『このようにして、あなた(、悪と、悪の体現者)は、夜には(愛、異性、性欲を)侮辱する事を、昼の貴重な時間には眠気によって、うとうと過ごす事を友人に教えてしまう』

『不滅の神々は、あなた(、悪と、悪の体現者)を神々の国から追い出しますし、善人達は、あなた(、悪と、悪の体現者)を(正しく)侮辱する』

『全ての音声のうち最も気持ちの良い音声、称賛の音声が、あなた(、悪と、悪の体現者)の耳を震わせる事は決して無いです』

『また、全ての美しい光景のうち最も美しい光景は、自らの手で行った寛大な(思いやり深い)行動を一つも決して見た事が無い、あなた(、悪と、悪の体現者)の目からは(神によって)隠されています』

『あなた(、悪と、悪の体現者)が口を開いて話しても、誰が、あなた(、悪と、悪の体現者)の言葉を信じるというのか？』

『あなた(、悪と、悪の体現者)が何ものかを必要としても、何ものも、あなた(、悪と、悪の体現者)を満足させる事ができないのです』

『分別の有る人の誰が、あなた(、悪)の混乱した暴走した大衆に、あえて加わりたいでしょうか？』

『実際、見てみると、あなた(、悪)に酔っている者どもは、劣悪であるし、肉体が虚弱な若者どもと知性が愚かな老人どもです』

『人生の絶頂では、悪の体現者どもは、金持ちぶった怠惰によって肥え太りますし、顔をしかめる、みじめな時期には、重い足を引きずって疲れて歩く羽目に成ります』

『どうして、顔をしかめる、みじめな時期が有るのか？』

『どうして、重い足を引きずって疲れて歩く羽目に成るのか？』

『悪の体現者どもは、過去に行った行動を考えると恥ずかしくて赤面する(し、顔をしかめる)羽目に成りますし、するべき事が放置されている事を考えると疲れて呻く(し、重い足を引きずって疲れて歩く)羽目に成ります』

『若い時に悪の体現者どもは(偽の)気持ちの良いもののために放蕩な生活にはまっていて、老人の時期に臨んで大量に蓄積された苦しみを自ら抱え込む羽目に成ってしまう』

『しかし、私(、善)と親しく(成って実践)すると、神々と親しくする事に成ります』
『また、(多かれ少なかれ悪い所が有る)人々の中にいても、私(、善)と親しく(成って実践)すると、善人達と親しくする事に成ります』
『私(、善)の助け無しでは、神も人も、寛大な(思いやり深い)行動を行う事はできません』
『そのため、(神々は)天でも超越した名誉を私(、善)に与えていますし、私(、善)をほめたたえる事ができる資格を持つ(善)人達は地上でも超越した名誉を私(、善)に与えています』
『全ての職の達人の、最愛の仲間のように』
『主が称賛する、家と国家の忠実な守護者のように』
『しもべの、思いやり深い助け手のように』
『平和のための労苦における勇敢な助手のように』
『戦いにおける不屈の味方のように』
『全ての友情を共にできる絶対必要なもののように』
『私(、善)の友人達は欲望が成熟するまで忍耐する事ができるので、私(、善)の友人達には、飲食物の快楽がもたらされますし、飲食物自体が快楽ですし問題は無いですし、労苦しない者どもよりも眠気が気持ち良く訪れてくれます』
『けれども、善の友人達は、眠気を失くしても苦悩しません』
『また、眠気のせいで、善の友人達が、自分の務めを果たさない事はありません』
『私(、善)の体現者達の中では、長老からの称賛を若者は喜びますし、長老は若者からの称賛を誇りに思います』

『善の体現者達は、昔の自分の(善い)行動を喜びと共に思い出す事ができますし、今の(自分の)善行を喜ぶ事ができます』

『私(、善)のおかげで、善の体現者達は、神の目から見ても大事で価値が有りますし、友人達から愛されますし、自分が生まれた国家から、ほめたたえられます』

『運命によって定められた終点が到来した時に、(肉体が死んだ時に、)善の体現者達は、恥辱と共に忘却されて横たわらず、新たに(名誉という)花を咲かせます』

『(なぜなら、)善の体現者達への称賛は、人々の口によって、永遠に知れ渡るのです』

(『前記は事実です。そのため、善の体現者達には名誉という花を咲かせる生きている枝が残されているのです。不滅の名誉を善の体現者達の名前に！』

※別の版)

『このような労苦を、おおっ、気高い両親の子、ヘラクレスよ、あなたヘラクレスは経験できるのです』

『そうして、労苦を忍耐していって、あなたは、(不滅の名誉といった)超越的な幸せを保証してくれる伝統に加わる事ができるのです』」

「アリスティッポスよ、これが、大雑把な概要ですが、『Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ ｏｆ Ｈｅｒａｃｌｅｓ ｂｙ Ｖｉｒｔｕｅ(ヘラクレスへの徳の教育)』でプロディコスが追求した話題なのです」

「ただし、私ソクラテスは認めますが、私ソクラテスが挑戦してみた言葉よりも遥かに見事な言葉で、プロディコスは作品『Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ ｏｆ

Ｈｅｒａｃｌｅｓ ｂｙ Ｖｉｒｔｕｅ（ヘラクレスへの徳の教育）』の情緒を美しく飾る事ができていました」

「アリスティッポスよ、これらの言葉を心に留めて、多少は、我々、人の人生の未来を扱っている言葉について考える事に努めるのが良くありませんか？」

第二巻 第二章（恩知らずは悪人）（良き父親と良妻賢母）

さて、ある時、ソクラテスは、ソクラテスの長男ランプロクレスが母クサンティッペに対して短気さを見せたのに気づいて、次のように、その少年ランプロクレスに話しかけた。
「答えてください。我が子ランプロクレスよ、あなたランプロクレスは今まで、ある人々が『恩知らず』と呼ばれているのを聞いた事がありますか？」
（次のように若者ランプロクレスは答えた。）
「聞いた事が有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「では、その人々が、この『恩知らず』という悪名を得てしまっているのは、どんな(悪い)事をしているからか、あなたランプロクレスは理解していますか？」
次のようにランプロクレスは話した。
「はい。理解しています」
「誰かが親切にされて、親切へ報いる力が有るのにもかかわらず、親切にし返す事を怠ると、人々は、その人を『恩知らず』と呼びます」
次のようにソクラテスは話した。
「では、人々が、恩知らずを、悪事を行う者ども、悪人どもに含める、と、あなたランプロクレスは認めますね？」
次のようにランプロクレスは話した。
「はい」
次のようにソクラテスは話した。

「では、恩知らずが善いか悪いかについて、『友人を奴隷にしたり、言ってみれば、捕虜にしたりするような行動は悪いと思われるし、敵を奴隷にしたり捕虜にしたりするような行動は善いと思われる』事とは、もしかしたら似ておらず、『友人に対しても敵に対しても恩知らずな行動は悪いと思われる』か否かを尋ねるべきである、という思いに襲われた事が、あなたランプロクレスには今まで有りますか？」

次のようにランプロクレスは話した。

「はい。自問自答した事が有ります」

「私ランプロクレスの意見では、誰が親切にしてくれたかは無関係で、友人か敵の、どちらが親切にしてくれたかは無関係で、親切にされた人は親切へ報いようと努力するべきで、親切へ報いる事を怠る人は、悪事を行う者ども、悪人どもです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、その(ランプロクレスが言った)状況の場合、恩知らずは完全な悪行の一例に成りますね？」

ランプロクレスはソクラテスの考えに同意した。

次のようにソクラテスは話した。

「では、親切にされた行為の偉大さに比例して、親切へ報いる事を怠っている人の悪行は大きく成りますね？」

ランプロクレスは再び同意した。

次のようにソクラテスは話を続けた。

「では、子が両親から得ている親切にされた行為よりも大きな親切にされた行為を我々、人は、どこから発見する事を期待できますか？」

「父と母は子(の肉体)を無から生み出してくれて、これらの全ての美しい光景を見る力をもたらしてくれています」

「そして、神々が人にもたらしてくれている、これらの全ての天からの恵み、諸物に(父と母と)共にあずかれる事は、我々、人から見ると価格をつけられないほど貴重なので、我々、人は一人残らず、全ての天からの恵み、諸物から離れる事を考えると身震いするほどなのである」

「そのため、諸国家は(殺人といった)最大の重罪への罰を死刑としてきている」

「なぜなら、殺人といった悪行は、死への恐怖によって悪行に留まらせないようにするべきである最大の重罪だからである」

「さて、『人は肉体の快楽だけのために子作りする(、性交する)』と思うなかれ」

「仮に、これ(、肉体の快楽だけ)が(性交の)動機であれば、(娼婦が客を待って立っている)路上や娼館には、この(肉体の快楽の)奴隷を(一時的に、)やめる手段(である娼婦)で満ちあふれている」

「一方、最も立派な子を夫に生んでくれる(立派な貞淑な)妻を探し出すのに労苦する事は最も明らかなのである」

「最も立派な子を夫に生んでくれる(立派な貞淑な)女性と、我々、(正しい)男性は結婚して、人生を営む(べきな)のである」

「男性には果たすべき二重の義務が有る」

「男性の果たすべき二重の義務のうち一方は、自分と共に子を育て上げる妻を大事にする事である」

「そして、男性の果たすべき二重の義務のうち他方は、未だ生まれていない子の幸福に貢献するであろうと自分が考える諸々のものを、可能な限り大量

に蓄えて、未だ生まれていない子にもたらせる事ができるようにしておく事である」
「妊娠している女性は、苦痛と共に(子という)貴重な重荷を負い、女性自身を養う栄養を胎内の子と分け合って命自体を危険にさらす」
「そして、女性は、生み終わるまで大いに労苦して、子を生むと、子を養って、思いやり深く子の世話をする」
「(母が子を思いやり深く世話するのは、)事前に何か良いものを受け取った事に対する返礼ではない」
「なぜなら、実際、幼児自体は恩人(である母)に、ほとんど気づいておらず、(幼児)自身の欲求を(他人に)伝える事すらできない」
「母だけが、幼児にとって良いものは何か推測して、また、幼児を満足させる事ができそうなものは何か推測して、幼児を満足させる事を試みる」
「そうして、母としての全ての労苦の代価として、どんな報いを受け取れるか意に介さず、何か月間も、昼も夜も労苦して、母は子を養うのである」
「また、両親の気づかいや思いやりは養育だけではない」
「実に、子が学ぶべき年であるように思われると、人生の指針として、両親は自らが所有している抜け目無いものは何でも子に教えるし、また、両親は『自身よりも有能である』と感じる人がいると、両親のお金で、その人の所に教えてもらえるように子を行かせる」
「このように、両親は子が可能な限り善人へ成長できるように全力を尽くして子を世話する」
(次のように、若者ランプロクレスは答えた。)
「それなら仕方ありませんが」

「しかし、たとえ母クサンティッペが、その全てを行(おこな)ったとしても、また、その二十倍の事を行(おこな)ったとしても、地上には母クサンティッペの捻(ね)じ曲(ま)がった気性を忍耐できる人はいません」

すると、次のように、ソクラテスは話した。

「あなたランプロクレスは、野獣の粗野と、母の粗野のうち、どちらが、より、耐え難い、と思いますか？」

次のようにランプロクレスは話した。

「私ランプロクレスが思うに、野獣の粗野よりも母の粗野は耐え難いと思います。少なくとも、その母が私ランプロクレスの母クサンティッペのようであれば」

次のようにソクラテスは話した。

「やれやれ！」

「では、このランプロクレスの母クサンティッペは今まで、あなたランプロクレスに対して、人々が頻繁に獣から噛まれたり蹴られたりして受けるような怪我をさせた事が有りますか？」

次のようにランプロクレスは話した。

「母クサンティッペが、そのような事を全くしていなくても、誰もが聞くよりも、速やかに死にたく成る言葉を使います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたランプロクレスは、幼児であった時から、昼も夜も、言葉と行動による短気さで、どれほどの迷惑を母クサンティッペにかけてきた、と思いますか？」

「あなたランプロクレスが病気であった時、どれほどの悲しみと苦しみを母クサンティッペにもたらした、と思いますか？」

次のようにランプロクレスは話した。
「ええと、私ランプロクレスは母クサンティッペが(恥であるとして)赤面するような言動を決して何もしていません」
次のようにソクラテスは話した。
「いや、やれやれ！」
「悪口のはけ口が開かれる時、役者が悲劇の舞台上の役者の(悪口の)話を聞くよりも、あなたランプロクレスが母クサンティッペの話を聞くのは、より難しい、と思うのですか？」
次のようにランプロクレスは話した。
「ええ」
「なぜなら、簡単な理由からなのです。芝居として(悪口は)全て話されていると役者は知っているからです」
「尋問者には反対尋問して良いし、それで、尋問者は罰金を課したりしません」
「脅迫者は脅迫を浴びせるかもしれないが、怪我をさせるつもりはありません」
「このように、役者は全て(の悪口を)、とても気楽に受け取るのです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『他の全ての人達よりも、母クサンティッペは、神の加護が、あなたランプロクレスに降りるように本当に願っているほど、あなたを傷つけるつもりは決して無い』と十分に良く知っている、あなたは、母クサンティッペが何を言うとしても、突然、怒るべきですか？」
「それとも、『母クサンティッペは実際は、あなたランプロクレスに悪意を抱いている』と、あなたは思い込んでいるのですか？」

次のようにランプロクレスは話した。
「いいえ。そんな事は思ってもいません」
次のようにソクラテスは話した。
「そうです。母クサンティッペは、あなたランプロクレスへの思いやりを抱いているし、あなたが病気に成ると、再び健康に成るように思いやり深く世話をするし、あなたが何の助けも必要としないように世話してくれます」
「そして、何よりも、母クサンティッペは、あなたランプロクレスのために、常に神の加護を懇願して、誓いを立てて天の神に捧げている」
「『母クサンティッペは捻じ曲がっていて無慈悲である』と、あなたランプロクレスは言う事ができるのですか？」
「私ソクラテスの考えでは、もし、あなたランプロクレスが、そのような母クサンティッペから離れる事ができないのだとしたら、そのような母による神の加護からも離れる事はできないのです」
（次のように彼ソクラテスは話を続けました。）
「ところで、教えてください。あなたランプロクレスは、『生きている人の誰かに仕える義務を負う』と思いますか？」
「それとも、あなたランプロクレスは独立する覚悟が有りますか？」
「あなたランプロクレスは、独立している人として喜びを求めない覚悟が有りますか？　それとも、喜びを求めようと試みる覚悟が有りますか？」
「あなたランプロクレスは誰にも従わない覚悟が有りますか？」
「あなたランプロクレスは、どのような将軍にも統治者にも従わない覚悟が有りますか？」
「このような物が、あなたランプロクレスの態度でしょうか？」

「それとも、あなたランプロクレスは、誰かに忠誠を誓う、と認めますか？」
次のようにランプロクレスは話した。
「ええ」
次のようにソクラテスは話した。
「確かに、私ランプロクレスは(誰かに)忠誠を誓う事に成ります」
「あなたランプロクレスが困っていたら、あなたのために、隣人が火を起こしてくれるように、幸運である隣人が助けてくれる覚悟を示してくれるように、あなたが不運な目に遭って、つまずいたら、隣人が助けるために味方して親切な態度を取ってくれるように、いずれにしても、あなたランプロクレスには隣人を喜ばせるつもりは有る、と私ソクラテスは理解してもよろしいですか？」
次のようにランプロクレスは話した。
「はい。私ランプロクレスには、そのつもりが有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「ええと、では、他の偶然の道連れ、あなたランプロクレスの陸上や海上の船上の道連れは、どうでしょうか？」
「他の誰かは、どうでしょうか？　あなたランプロクレスは気づけますか？」
「隣人が友人であるか否かは、どうでも良いですか？」
「または、あなたランプロクレスは『労苦してでも隣人からの親切は確保する価値が有る』と認めますか？」
次のようにランプロクレスは話した。
「はい。認めます」

次のようにソクラテスは話した。
「それでは、次のように成ります」
「あなたランプロクレスは色々な(知人である)隣人や見知らぬ人には注意を払う覚悟が有りますが、他の全ての人よりも愛してくれている母クサンティッペには、あなたは仕えたり忠誠を誓ったりして報いる義務は無いというのですか？」
「次の事をあなたランプロクレスは知らないのですか？」
「国家自体は(両親に対する恩知らず以外の)普通の恩知らずには関わらないし、判決文を下す事はありませんが」
「国家は(両親に対する恩知らずといった)親切な待遇へ報いる事を怠る者どもの恩知らずを見過ごしますか？　国家は(両親に対する恩知らずといった)特別な場合、(両親に対する)恩知らずに対する刑罰を差し控えますか？」
「もし人が両親に仕えたり忠誠を誓ったりして報いないと、(両親に対する)恩知らずは法に触れる羽目に成ります」
「(両親に対する)恩知らずの名前は(『執政官』の候補の)名簿から削除されてしまいます」
「(両親に対する)恩知らずは『執政官』の職に就く事を禁止されます」
「次のように言われています」
「そのような(両親に対する)恩知らずな人が国家のために捧げた捧げものは、不信心によって汚染されていて、神への捧げものと成らない。また、何にせよ、(両親に対する)恩知らずが行った事は(神の目から見ても)『正しい』事には成らないのである」
「(両親に対する恩知らずが統治者に成ってしまったら、神を怒らせてしまい、天罰で、)我々は酷い目に遭ってしまう！」

「もし、ある人が死んだ両親の墓を飾る事を怠って、国家が、その(両親に対する)恩知らずによる問題を認識したら、執政官は(両親に対する)恩知らずを尋問します」

「では、あなたランプロクレスは、どうかと言うと、我が子ランプロクレスよ、もし、あなたが落ち着いていて良識が有れば、まさに、あなたを『(両親に対して)恩知らずな人である』と神々が思わないように、そして、『神々のほうからも、あなたに善い事をする事をしないようにしよう』と神々が思わないように、本気で母クサンティッペに懇願するであろう」

「また、人々が『あなたランプロクレスは両親を軽んじている』と気づいて、全員一致して、あなたを侮辱しないように、あなたは人々にも注意を払うであろう」

「そうしないと、あなたランプロクレスは友人もおらず砂漠の中にいるかのように感じる羽目に成ってしまう」

「なぜなら、『両親に対して恩知らずな人である』と、もし一度でも思われたら、『(両親に対して恩知らずな、)あなたランプロクレスに、どんな親切を示しても無駄に成るだけである』と思われてしまうからである」

第二巻 第三章 (兄弟は大事)(してもらいたい事は先にしてあげるべき)(友人の獲得方法)

別の、ある時、ソクラテスが両方共に良く知っている、カイレフォンとカイレクラテスという名前の二人の兄弟が仲違いしている事に、ソクラテスは気づいた。

そのため、二人の兄弟のうち弟カイレクラテスを見かけるとすぐに、次のようにソクラテスは話した。

「教えてください、カイレクラテスよ、あなたカイレクラテスは『財産は、兄弟よりも、良いし貴重である』と思っている変人の一人ではない、と私ソクラテスは思っています」

「また、『財産は守る必要が有る、意識が無い物に過ぎないが、兄弟は財産をもたらす事ができる、気配りできる意識が有る存在である』とも私ソクラテスは思っています」

「また、さらに、兄弟は兄弟しかいないが、財産と同様な物は多数、有る」

「また、次のような事は驚くべき事である」

「ある人が、兄弟の財産は自分の物ではないので兄弟(の存在)は損であると見なしたら(、驚くべき事である)」

「しかも、そういう人は、仲間の都市国家の市民の財産は自分の物ではないが、仲間の都市国家の市民(の存在)は損であると見なさないのである」

「都市国家の市民の場合、そういう人は、都市の全ての財産を所有して孤立して危険に暮らすよりも、大衆と共に安全に暮らして十分なだけの財産を所有するほうが良い、と理解する知力だけは有るように思われる」

「しかし、そういう人々が無視している兄弟にも、この同じ考えを同様に適用できるのである」
「また、ある人が仕事の助手が(、労働力だけが)欲しかったら、もし財産が有れば、召使いとしての奴隷を購入するだろう」
「また、ある人が支援を必要としたら、友人を獲得するだろう」
「しかし、誰が兄弟を大事にするだろうか？　いいえ！　誰も兄弟を大事にしないのである！」
「友人は、(都市国家の)一般市民の中には見つかるかもしれないが、兄弟といった血縁者の中には見つからないかもしれない、と(、そういう人々には)思われてしまっている」
「しかし、同じ(母の)股から生まれた事と、同じ乳房から母乳を吸った事は、友愛への大いなる有利と成るのである」
「なぜなら、一緒に育てられた生物の間には、獣の間にすら、多少の自然な愛情、好意が生まれるのである」
(「なぜなら、乳兄弟の間には、獣の間にすら、乳兄弟は思いやりを表すのである」※別の版)
「さらに、兄弟がいない人よりも多く、兄弟がいる人は他の人々から敬意を集めるのである」
「また、兄弟がいない人は独りで戦う必要が有ります」
(次のようにカイレクラテスは話した。)
「私カイレクラテスは、あえて言いますが、ソクラテスよ、『(兄弟の)仲違いが深くない場合は、願わくば、人は自分の兄弟を我慢するべきであるし、多少の些細な事のためだけで兄弟を避けるべきではない』と論理的に考えます」

「なぜなら、あなたソクラテスが言うように、善い兄弟は、ありがたい者だからである」
「しかし、もし、まさに、兄弟が善とは正反対(の悪)であるならば、どうして人は(悪い兄弟と仲良くするという)不可能な事を遂行しようと着手するべきでしょうか？　いいえ！」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスに教えてください」
「あなたの兄カイレフォンは、あなたカイレクラテスを喜ばせる事ができないのと同様に、兄カイレフォンは誰も喜ばせる事ができないのでしょうか？」
「また、ある人々は、あなたの兄カイレフォンを『十分に好感が持てる人である』と思うのでは？」
次のようにカイレクラテスは話した。
「いいえ(。兄カイレフォンは、私カイレクラテス以外の誰かを喜ばせる事ができます)」
「そこで、あなたソクラテスは思い当たってください」
「まさに、そのため、私カイレクラテスには兄カイレフォンを嫌う権利が有るのです」
「兄カイレフォンは他人を十分に喜ばせる事ができるのに、私カイレクラテスには、兄カイレフォンは、いつ現われても、役に立ってくれないのです。全く役に立ってくれないのです！」
「実に、全ての手段によって、(兄カイレフォンは)正反対(の役立たず)なのです」
次のようにソクラテスは話した。

「まさに、馬を操縦しようとする人が未熟な騎手では馬は何の得にも成らないように、とても同じように、もし人が兄弟を扱おうとしても、無知な無作法な方法では、その兄弟は反抗する事が起こらないでしょうか？」

次のようにカイレクラテスは話した。

「では、そう成っているというのですか？」

「私カイレクラテスは、思いやり深い言葉や善行には思いやり深く報いる方法を知っているのに、どうして兄弟を扱う方法について無知な事が有り得るでしょうか？　いいえ！」

「しかし、全力で言動で私を苦悩させる兄カイレフォンには、私カイレクラテスは感謝する事も利益をもたらす事もできないし、また、さらに、(仲良くしようと)努力するつもりも有りません」

次のようにソクラテスは話した。

「さて、それは驚くべき発言です、カイレクラテスよ」

「あなたカイレクラテスが所有している犬は、あなたが所有する羊の群れの、役に立つ守護者、役に立つ牧羊犬で、あなたに仕える羊飼いの手に甘えて舐めますが、あなたカイレクラテスが近づくと、怒って唸って牙を見せる事しかしません」

「さて、」

「あなたカイレクラテスは、犬の怒りに気づきもしないし、犬を優しくなだめようと試みません」

「では、(あなたカイレクラテスは、)兄カイレフォンに対しては、どうでしょうか？」

「もし、あなたの兄カイレフォンがあるべき(理想の善い兄の)状態であったならば、兄カイレフォンは、あなたカイレクラテスにとって大いに役に立ったであろう」

「このように、あなたカイレクラテスは認めていますよね」

「そして、さらに、あなたカイレクラテスが認めているように、あなたは思いやり深い言動をするための秘訣を知っています」

「しかし、あなたカイレクラテスは、兄カイレフォンを最高の友人にするための諸手段を応用する努力をするつもりが無いのです」

次のようにカイレクラテスは話した。

「残念ながら、ソクラテスよ、兄カイレフォンを、あるべき(理想の善い兄の)状態であるように、私に友好的にするための知恵や機転が私カイレクラテスには無いのです」

次のようにソクラテスは話した。

「難解な趣向や変わった趣向を応用する必要は無いのです」

「あなたが最も良く知っている方法という餌をあなたという釣り針につけるだけで、あなたカイレクラテスは、兄カイレフォンを獲得する事ができるのです」

「その結果、あなたの兄カイレフォンは、あなたカイレクラテスの忠実な友人に成るはずです」

次のようにカイレクラテスは話した。

「『私カイレクラテスが何らかの愛情を引き寄せる魔法を知っている』、『愛情を引き寄せる魔法によって私は幸せに成れるが、愛情を引き寄せる魔法の所有者である事を自分では知らない』と、もし、あなたソクラテスが気

づいているのであれば、ソクラテスよ、どうか、急いで私に教えてくださ
い」
　次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスの質問に答えてください」
「もし、あなたカイレクラテスが、ある知人が次の祭日を守る時に夕食に招
待されたいのであれば、どのような手段を取りますか？」
　次のようにカイレクラテスは話した。
「疑い無く、私カイレクラテスは、その知人を同様の祭日に私自身の夕食に
招待して、その知人に良い前例を示すでしょう」
　次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたカイレクラテスは、あなたが外国にいて不在の間、ある友人
に、あなたが所有しているものの世話をする気にさせたい場合、どのように、
あなたは目的を達成しますか？」
　次のようにカイレクラテスは話した。
「疑い無く、私カイレクラテスは、同じ状況で、その友人が所有しているも
のの世話をする事を約束して、(約束を履行して)前例を示すでしょう」
　次のようにソクラテスは話した。
「では、ある外国の友人に、その友人の国を訪れた時に、その友人の家に招
待されたいと望むのであれば、あなたカイレクラテスは、どのようにします
か？」
　次のようにカイレクラテスは話した。
「疑い無く、私カイレクラテスは、その外国の友人の愛情を得て、さらに、
その友人の国を私が訪れた時の目的を達成するために、その外国の友人が私
の都市(国家)アテナイに来た時に、私の家を先に提供するでしょう」

「同様の場合に相手のために同様の事をする自分の気持ちを先に示すべきであるのは、明らかです」

次のようにソクラテスは話した。

「それならば、『あなたカイレクラテスは、結局、人が知っている媚薬的な物事についての達人である』と思われます」

「あなたカイレクラテスは、いつも、知恵を隠す事を選んでしまっているだけなのです」

「それとも、あなたカイレクラテスは、『思いやり深く、あなたから兄カイレフォンに歩み寄る』事を恥辱として、最初の一歩を踏み出す事から、しり込みしてしまっているのですか？」

「しかし、損害をもたらす事において敵を追い越す事や、思いやりにおいて友人を追い越す事は、普通、『人からの称賛をもたらす』と評価されているのです」

「さて、もし、『兄カイレフォンのほうが、より、兄弟の友情への道へ導くのにふさわしい』と私ソクラテスに思われたのであれば、あなたカイレクラテスの愛情を勝ち取るための最初の一歩を踏み出すように兄カイレフォンの説得を私ソクラテスは試みたであろう」

「しかし、今では、『兄弟の友情への第一歩は、あなたカイレクラテスの物であるし、最終的に兄カイレフォンの愛情を勝ち取るのは、あなたカイレクラテスの物である』と私ソクラテスは説得されています」

次のようにカイレクラテスは話した。

「ソクラテスよ、あなたソクラテスの口から出た言葉は、驚くべき知らせです」

「また、年長者である兄カイレフォンよりも先行する事を年少者である弟である私カイレクラテスに勧めるのは、最も、あなたソクラテスらしくないです」

「それでは、『話す者としても、行う者としても、全ての物事において、年長者が先行して先導するべきである』と思考する、人の普遍の慣習に反してしまいます」

次のようにソクラテスは話した。

「どうして、そう思ってしまうのですか？」

「年少者が、道で年長者に遭遇した時に、年長者に場所を譲るために、(先行して)道の脇に避けるのは、全ての場所で、(普遍的に、)慣習ではありませんか？」

「年少者は、席から立ち上がって席を年長者に譲る事を求められていませんか？」

「年少者は、柔らかい寝椅子を譲って年長者に敬意を払う事を求められていませんか？」

「議論の際に、年少者は、先んじて年長者に譲る事を求められていませんか？」

「私ソクラテスの善い仲間であるカイレクラテスよ、ためらうなかれ。なだめるように手を差し伸べれば、尊敬に値する人である兄カイレフォンは、すぐに速やかに、応じてくれるのをあなたは見るでしょう」

(「私ソクラテスの善い仲間であるカイレクラテスよ、恐れを抱くなかれ。なだめるように扱おうと試みれば、尊敬に値する人である兄カイレフォンは、すぐに速やかに、応じてくれるのをあなたは見るでしょう」※別の版)

「『兄カイレフォンの性格は、誇り高く、率直で、(真の)名誉に敏感である』と、あなたカイレクラテスは気づいていないのですか？」
「兄カイレフォンは、賄賂で虜にできるような劣悪な御粗末な悪人ではない」
「賄賂は、賄賂で虜にできるような人間の屑には、実に、最良の手段ではあるが」
「兄カイレフォンは、全く悪人ではない！」
「思いやり深い上品な性格の人達には、より思いやり深い上品な扱いが必要と成るのである」
「思いやり深い性格の人達には、思いやり深い行いをする事で、最善(の結果)を望む事ができるのです」
　次のようにカイレクラテスは話した。
「しかし、もし私カイレクラテスが、そうしても、もし全力を尽くして試行錯誤しても、兄カイレフォンが改善した態度を見せなかったら？」
　次のようにソクラテスは話した。
「最悪の場合でも、あなたカイレクラテスは善良で、誠実で、兄弟らしい思いやり深い人であると示す事ができるであろうし、兄カイレフォンは思いやっても無駄な御粗末な奴であると示す事に成るであろう」
「しかし、私ソクラテスの推測では、そのような事には成らないだろう」
「『兄カイレフォンは、あなたカイレクラテスの(仲良く成ろうという)試行錯誤に気がつくとすぐに、あなたの(仲良く成ろうという)挑戦を喜んで受け入れるであろう』と私ソクラテスは確信しています」

「負けたくないという誇りに刺激されて、兄カイレフォンは、思いやり深い言動において、あなたカイレクラテスよりも善良な人に成ろうと望むであろう」

「今は、あなた達、二人は、神によって形成された相互に助け合う両手のような状態ですが、兄弟としての務めを放棄してしまってきていたし、兄弟として可能な全ての物事を相互に妨害し合う事に手を染めてしまってきていた」

「あなた達は、相互に働きかけ合うように神の計画によって形成された一対の両足ですが、相互の足並みを妨害し合うために、この神の計画を放棄してしまってきていた」

「さて、利益と成るように意図されたものを損害として用いてしまう事は、無分別な愚行ではありませんか？」

「私ソクラテスが考えるに、兄弟の二人を形成する際に、神は、両手よりも、両足よりも、両目よりも、生まれた時から人の(肉体の)一部である一対の全ての器官よりも、兄弟が相互に助けと成る事を意図した」

「人の(肉体の)両手に、腕を伸ばした長さよりも遠くに離れた二つの地点で力を結合するように求めても何と無力であるか、考えてください」

「また、人の(肉体の)両足は、たった腕を伸ばした長ささえも離して広げる事ができないのである」

「また、人の(肉体の)両目は、人が全ての広範囲を見るように求めても、より近い場所のものでさえも、ものの前後を同時に見る事ができないのである」

「しかし、友好的な絆で結びついている、兄弟は、海を隔てていても、相互に役に立つように働く事ができるのである」

第二巻 第四章（善友は大事）

私クセノフォンは、別の、ある時に、友人との交際という似た話題について、「良く計算された言葉である」と私クセノフォンには思われた言葉で、人が友人を正しく選んだり正しく用いたりするのに役立つ事を、ソクラテスが話したのを聞いた事が有ります。

ソクラテスは「全ての財産のうち、善良で誠実な友人という財産に等しいものなど無い」という意見をよく耳にしてきた。

しかし、こういった主張にもかかわらず、ソクラテスが見た限り、人々の大半は、友人の獲得について、最も些細な事として関わっていた。

（次のようにソクラテスは話した。）

「家、畑、奴隷、牛、全ての種類の備品を、人は、労苦して獲得して、入手したものを保持し続けようと良く努力する」

「しかし、人は『友人は、人にとって最も大いなる、ありがたい者である』と認めているが、『人にとって最も大いなる、ありがたい者である友人』を入手するために、または、人が既に保持している友人を保持し続けるために、考えを費やす人は未だにほとんどいないのである」

「それは、友人のうち一人と、家の者である召使いの一人に同時に病が降りかかった場合、顕著なのである」

「人は、召使いの所へは迅速に医者を連れて来て、多大な労苦を費やして、回復のために必要な全ての処置を取るであろう」

「一方、同じような状況の友人は軽視されてしまうであろう」

「また、両方共に死んだ場合、」

「人は、召使いの死で深い困惑の様子を見せるであろう」
「人が深い困惑の様子を見せるように、召使いの死は、人にとっては、明白な損失なのである」
「一方、『友人に関しては、自分の地位には実質的には影響が無い』（と思ってしまうのである)」
「このように、人は、保持している(、友人以外の)他のものを無視したり軽視したりして放置しようとは夢にも決して思わないが、(友人からの)友情による無言の訴えは露骨な無関心と出くわす羽目に成ってしまう」
(「このように、人は、保持している、友人以外の他のものを無視したり軽視したりして放置しようとは夢にも決して思わないが、丁重な世話を求める友人からの叫びは無視される羽目に成ってしまう」※別の版)
(そして、次のようにソクラテスは話を続けた。)
(また、次のように、ソクラテスは別の顕著な相違を示す事例を話す事を怠らなかった。※別の版)
「また、これ以上無い事例を取り上げると、」
「保持している普通のものに関しては、どんなに多種多様でも、大多数の人々は少なくとも数量に精通しているが、友人の数を数え上げるように求めたら、結局のところ、場合によると友人があまり多くなくても、友人の数を(正確に)数え上げる事ができないであろう」
「また、質問者が人に友人の名簿の作成を試みさせるようにさせたら、人は、先ほど書いた何人かの名前をすぐに取り消す羽目に成るであろう」(人は、無上の財産であるはずの友人について、友人であるか否かの判断が曖昧である。)
「人々が友人に費やしている考えの量とは、こんな程度なのである」

「けれども、人が『保持しているもの』と呼ぶかもしれない他のもので、この友人という最善の保持するべき者、以上のものは存在しないのである！」
「誠実な友人という価値ある者を増やす事と比べると、より善く役立つ物事は存在しないのである！」
「一頭の馬や、一対の牛を考えてください」
「馬や牛には、馬や牛の価値が有る」
「しかし、誰が尊敬に値する友人の価値を評価できるというのか？　尊敬に値する友人は値段がつけられないほど貴重なのである！」
「尊敬に値する友人は、奴隷のうち最も誠実な奴隷よりも、思いやり深く誠実なのである」
「尊敬に値する友人は、『全てにおいて役立つ者』と最もよく呼ばれている」
「尊敬に値する友人は、どのような役割を自身に課しているか考えてください！」
「友人達の幸福の不足に対応して幸福を補充する事、友人達の個人的な利益と公的な利益を増やす事が、尊敬に値する友人が関心を持っている事なのである」
「どのような方面でも思いやり深い行動は必要が有るのでは？　どのような方面でも思いやり深い行動は必要が有るのである！」
「尊敬に値する友人は重点的に援助を(友人達に、)つぎ込むであろう」
「何らかの恐怖によって(尊敬に値する友人がいる人は)困惑するか？　いいえ！」
「尊敬に値する友人は、金銭と行動力を費やして、理性に訴えたり暴力に訴えたりして、すぐに(友人達を)助けて守る用意が有る」

(「尊敬に値する友人は、金銭と行動力を費やして、外交的手段によって、すぐに友人達を助けて守る用意が有る」※別の版)

「尊敬に値する友人の名誉とは、(友人が)成功している時は成功者である友人を喜ばせる事ができる、のと同様に、ほとんど失敗してしまっている友人の立場を支援して友人を元気づける事ができる事なのである」

「人が手によって役立つ事ができる全ての物事、各人が目によって素早く見る事ができる全ての物事、人が足によって巡回できる全ての物事について、尊敬に値する友人は、役立つわざによって、不足する事が無いのである」

「いいえ、(それどころか、)多くの場合、人が独力では達成できなかった物事、(人が独力では)見聞きしたり到達したりできなかった事について、友人のために行動している友人は、友人の代わりに、達成できるであろう」

「けれども、果実のために果樹を得ようと試みて世話をする事は珍しくないのに、この友人という富が豊かな鉱山へ気を配って世話をする事を、人々の大半は、おろそかにしてしまっていて無関心でしかないのである」

第二巻 第五章（善友にとって自分は役に立っているか自問自答しなさい）

私クセノフォンは、ソクラテスの別の議論を聞いたのを覚えています。
そのソクラテスの議論の意図は、反省を促す事であった。
そのソクラテスの議論を聞く人は、「私は、友人にとって、何らかの価値が有るか？」と自問自答する気に成る必要が有ります。
次のように、そのソクラテスの議論は起こりました。
ソクラテスが気づいたように、ソクラテスと共にいた人達の一人が、貧困で難儀していた友人アンティステネスを助けるのを怠っていた。
そのため、アンティステネスを助けるのを怠っていた人と、他の数人の前で、ソクラテスは、貧困に苦しんでいた人アンティステネスに質問をし始めました。
「（次の質問に対して、）あなたアンティステネスは、どう思いますか？」
「家にいる奴隷のように、友人には値段が有るのでしょうか？」
「家にいる奴隷のうち、ある人は、場合によっては、二ミナの値段かもしれませんし、別の、ある人は〇．五ミナの値段しかないかもしれませんし、さらに別の、ある人は五ミナの値段かもしれませんし、他の、ある人は十ミナの値段かもしれません」
「一方、『ニケラトゥスの息子であるニキアスは、ちょうど一タラントも自分の銀山の管理者に支払った』と言われています」
「そのため、次のように、私ソクラテスは自問自答します」
「奴隷のように、友人には市場的な値段が有るのか？」

(次のようにアンティステネスは答えた。)
「疑い無く友人には値段が有ります」
「いずれにしても、私アンティステネスには、二ミナを受け取るよりもむしろ友人にしていたいほどの人がいるのを理解しています」
「また、私アンティステネスには、〇・五ミナという値段もつけたくないほどの(偽の)友人がいます」
「また、十ミナという値段もつけたくないほどの(偽の)友人もいます」
「さらに、友情を買うのに世界の全ての富と労苦がかかっても安いであろうほどの友人もいます」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、そうであるならば、次のように、全ての人は反省したほうが良いのではないでしょうか?」
「結局のところ、私は、友人にとって、何らかの価値が有るだろうか?」
「友人に見限られないように、可能な限り価値が有る者に成るように試みるべきではないか?」
「次のような泣き言をどのくらいの頻度で私ソクラテスは耳にした事であろうか?」
「『友人の誰々に見限られてしまった』」
「または、『友人であると見なしていた人が一ミナのために私を生贄にした』」
「そして、これらの発言、泣き言を聞くたびに、次のような自問自答が私ソクラテスの心に起こります」
「もし無価値な奴隷を売っている人が、売れるなら、どんな値段でも奴隷を売る用意が有るならば、」

「何らかのものと交換できる好機が有ったら、少なくとも、劣悪な偽の友人を売り払うように強く誘惑されないか？」

「(ただし、)私ソクラテスが見る限り、善良な奴隷が(売却されて)落札される事は無いのです」

「また、同様に、善良な友人も軽んじられて見限られる事は無いのです」

第二巻 第六章（善友の発見方法）（善友とは、どのような者か）（友人の獲得方法）（悪人は善人と真の友人には成れない）

また、応用できる（、友人の）分析に関しては、獲得に値する友人の資格を評価するのであれば、次のようなソクラテスの意見は、ために成ると証明できる、と私クセノフォンは考えています。

（また、友人の資質の分析の確立に関しては、保持する価値が有る友人は必ず、ある特定の型に分類できるので、次のようなソクラテスの意見は、ために成ると証明される、と私クセノフォンは考えるしか無いのです。※別の版）

（次のようにソクラテスはクリトブロスに話した。）

「教えてください。我々、人が善い友人を必要としている場合、人は善い友人の発見に、どのように着手するべきでしょうか？」

「私ソクラテスが考えるに、第一に、我々、人は、食欲の（奴隷ではない）主である人、すなわち、腹の胃袋の食欲の支配下に無い人や、ワインの杯の酒に溺れない人や、性欲に溺れない人や、睡眠に溺れない人や、怠惰にふけない人を見出す必要が有ります」

「なぜなら、このような（、食欲、酒、性欲、睡眠、怠惰という）暴君どもの奴隷である人は、自ら、または、友人に従って、自分の義務を果たしたいと望まないからです。そうですよね？」

（次のようにクリトブロスは答えた。）

「確かに望まないですね」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『我々、人は、そのように(食欲、酒、性欲、睡眠、怠惰に)支配されている全ての者どもから離れている必要が有る』と賛同してくれますか？」

次のようにクリトブロスは話した。

「最も確実に賛同します」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「ええ、では、(食欲、酒、性欲、睡眠、怠惰から)独立していなくて隣人達から永遠にせびる放蕩者について、我々、人は、どう思うべきでしょうか？」

「放蕩者が隣人達から何かを得ても、放蕩者は報いる事ができません」

「それにもかかわらず、放蕩者は何かを得る事ができないと、放蕩者は『与えてくれなかった』と、あなた達を憎みます」

「『このような放蕩者は自分が実に嫌な(偽の)友人である事をとても示す』と、あなたは思いませんか？」

次のようにクリトブロスは話した。

「確かに思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、我々、人は、放蕩者からも離れている必要が有りますね？」

次のようにクリトブロスは話した。

「そうする必要が有ります」

次のようにソクラテスは話した。

「では！　金銭の取引に強い人(、金貸し)は、どうでしょうか？」

(「では！　金貸しに強い人は、どうでしょうか？」※別の版)

「金貸しの欲求は唯一、金銭の蓄積だけです」

「このため、金貸しは、(相手にとっては不利でも)一方的に、ひどく値切るのは上手で、(他人を)だましてしまうほど(値切って金銭をもうける事を)喜び、一方、支払いは嫌がる」
(「このため、金貸しは、全ての金銭の取引において相手を困らせるのは上手で、他人をだましてしまうほど金銭をもうける事を喜び、一方、支払いは嫌がる」※別の版)
「金貸しは大金持ちに愛着が有る」
次のようにクリトブロスは話した。
「私クリトブロスの意見では、金貸しは、直前の話の放蕩者よりも、さらに自分が悪い奴である事を示すでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「では！　どうしたら自分のもうけを増やす事ができるか以外の全ての事をする暇が無いほど金もうけに夢中な人は、どうでしょうか？」
次のようにクリトブロスは話した。
「私クリトブロスなら『金もうけに夢中な人から離れなさい』と話します」
「なぜなら、金もうけに夢中な人からは、または、金もうけに夢中な人との交際からは、何の利益も得られないからです」
次のようにソクラテスは話した。
「では！　主な目標が友人達に多数の敵を作る事に成ってしまう、口論好きで党派争い好きな人は、どうでしょうか？」
次のようにクリトブロスは話した。
「神にかけて、我々、人は口論好きで党派争い好きな人に近づかないようにしましょう」
次のようにソクラテスは話した。

「では、私達は、前述の全ての欠点が全く無い人、ただし、思いやりを受けるのを嫌がらず、思いやりをし返すのを念頭に置いて考慮しない人(、恩知らず)を想像してみましょう」
次のようにクリトブロスは話した。
「どちらにしても恩知らずでは何の役にも立ちません」
「では、ソクラテスよ、どのような種類の人を我々、人は友人にしようと努めるべきなのでしょうか？」
「(真の)友人とは、どのような人なのでしょうか？」
次のようにソクラテスは話した。
「私ソクラテスは、(真の)友人は前述とは正反対の人である必要が有る、と話すべきでしょう」
「(真の)友人とは、肉体的な快楽を抑制できる人である」
「(真の)友人とは、思いやり深い性格の人である」
「(真の)友人とは、全ての取引、交渉において正直である」
(「真の友人とは、扱いやすい人である」※別の版)
「(真の)友人とは、思いやりにおいて、恩人に負けないほど、とても熱心である」
「(真の)友人とは、『自分の友人達が自分との交際から何らかの利益を得る事ができれば良いなぁ』と願う」
次のようにクリトブロスは話した。
「けれども、ソクラテスよ、知り合う前に、どうしたら、我々、人は、これらの(真の友人の)資質を分析できるでしょうか？」
次のようにソクラテスは話した。

「どのように、我々、人は、彫刻家の優秀さを分析するでしょうか？　彫刻家の話だけから引き出された推測で分析しないですよね」
「ええ、我々、人は、彫刻家が達成している既存の物に目を向け(て優秀さを分析し)ます」
「彫刻家の過去の彫像群が見事に達成されていたら、『彫刻家は同様に残りの彫像も上手く彫刻するであろう』と我々、人は信じます」
次のようにクリトブロスは話した。
「あなたソクラテスの話の趣旨とは、『我々、人は、古くからの友人達への思いやり深さが確証されている人を見出したら、その人は新しい友人達も思いやり深くもてなす事が確証されていると思って良い』という事ですよね？」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、確かに、私ソクラテスは、馬を扱う巧みさを過去に示した人を見たら、『その人は他の馬も同様に巧みに扱えるであろう』と主張します」
次のようにクリトブロスは話した。
「良かったです！」
「では、我々、人が、保持するに値する友情を示している人を見出した時に、その人をどのように自分の友人にするべきなのでしょうか？」
次のようにソクラテスは話した。
「第一に、我々、人は、ある人を友人にする事が賢明であるか否か、神意を確かめるべきである」
次のようにクリトブロスは話した。
「ええ！」

「では、我々、人は、自分が選び、神々が認めてくれている人を友人として獲得する事をどのように達成するべきでしょうか？」
「私クリトブロスに教えてくれますか？」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「実に、ウサギのように追い詰め(て友人を獲得す)るなかれ。また、鳥のように、おびき寄せ(て友人を獲得す)るなかれ。また、イノシシのように無理矢理に(友人を)獲得するなかれ」
「友人にしたい相手の意に反して友人として獲得する事は、苦労する問題と成ってしまいます」
「また、友人にしたい相手を奴隷のように束縛する事は、絶対に難しい問題と成ってしまいます」
「そのように(意に反して)扱われた人は、友人ではなく、敵に成りやすい」
(「これらの、相手の意に反する手段がもたらす結果は、友情ではなく、憎悪と成ってしまう」※別の版)
次のようにクリトブロスは話した。
「では、どのようにして友人にしたい人を友人に変えるのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「『ある魔法のような言葉が存在する』と、我々は教えられていて、その言葉を知っている人は、その言葉を口にするだけで、望んだ人と友人に成る事が可能なのです」
「また、ある媚薬のような物も存在していて、それの秘密を所有している人は、それを好きな人達に与える事ができて、それらの人達の愛情を勝ち取る事ができます」
次のようにクリトブロスは話した。

「どの出典から、我々、人は、それらを学べますか？」
次のようにソクラテスは話した。
「セイレーン達がオデュッセウスへ歌った魔法のような言葉を学ぶのに、あなた達には、ホメロス(の『オデュッセイア』)以外は不要です」
「次のように、(セイレーン達がオデュッセウスへ歌った魔法のような言葉のうち)最初の言葉が、ホメロスの『オデュッセイア』には書かれていた、と思います」

「こちらへ、こちらへ来なさい、あなた、高名な男、オデュッセウスよ、アカイア人達の大いなる栄光と成っている者よ！」

次のようにクリトブロスは話した。
「では、このような魔法のような言葉が、全ての人々にとって等しく、役立ったのですか？」
「仮に、セイレーン達が、このような魔法のような言葉を一言、口にしただけで、その言葉を聞いた全ての人々は停止するように誘導されたのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「いいえ」
「このような言葉は、『他人に負けない力が有る』という名声を渇望する人々のために用意された魔法のような言葉です」
次のようにクリトブロスは話した。
「聞かせた人が魔法のような言葉を聞かせられた時に、『魔法のような言葉を言った人が、聞かせた人をひそかに心の中で笑いものにしている』と、聞

かせた人に思わせないために、魔法のような言葉は聞かせる人に合わせる必要が有る、と言わんばかりですね」
「自身が小柄で醜くて病弱であると知っている誰かの所へ行って、『あなたは長身で美しくて頑強である』とほめる嘘をその人の耳にささやく事よりも優れて計算された、憎悪を起こさせるための手段を私クリトブロスは確かに思いつく事ができません」
「さて、あなたは、他に、どんな、愛情を勝ち取る事ができる魔法のような言葉を知っているのですか？　ソクラテスよ」
次のようにソクラテスは話した。
「私ソクラテスには『このような魔法のような言葉で愛情を勝ち取っている』と話す事ができません」
「しかし、『ペリクレスは、かなり多くの事が得意で、多くの事に得意である事を我々の都市国家アテナイ市民達の耳にささやいて、都市国家アテナイ市民達の愛情を勝ち取っている』と私ソクラテスは聞いています」
次のようにクリトブロスは話した。
「では、どのようにしてテミストクレスは我々の都市国家アテナイ市民達の愛情を勝ち取っているのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「ああっ、あれは魔法のような言葉によってでは全く無いのです」
「彼テミストクレスがした事とは、我々の都市国家アテナイを守護の力という護符で囲った事なのです」
次のようにクリトブロスは話した。

「ソクラテスよ、『もし我々、人が全ての善良な人の愛情を勝ち取りたいのであれば、我々、人は言行において自ら善良に成る必要が有る』と、あなたソクラテスは、ほのめかしているのでしょう。そうではないでしょうか？」

(次のようにソクラテスは返答した。)

「では、『悪人には、善良な人達と友人に成る事は可能である』と、あなたクリトブロスは思いますか？」

次のようにクリトブロスは話した。

「偉大で高貴な政治家と親友であった、何とも酷く御粗末な雄弁家を私クリトブロスは知っています」

(「はい。思います。大衆の偉大な指導者と親友であった、何とも酷く劣っている雄弁家を私クリトブロスは知っています」※別の版)

「また、指揮官や将軍の天性を持つ、ある人が、指揮する能力が全く無い人達と共に生まれたりします」

(「また、指揮する能力が全く無い、ある人が、同じ時代の最も偉大な名指揮官の同僚であったりします」※別の版)

次のようにソクラテスは話した。

「では、私達が論じていた点に関連して、返礼として役に立つ事無しに、役に立つ友人を自分に繋ぎ止める事が可能である誰かについて、あなたクリトブロスは知っているかどうか、私ソクラテスは尋ねても良いでしょうか？」

「役に立つ者は、恩を仇で返す者と友好を結ぶ事ができますか？　いいえ！」

(「永続的に友好を結ぶには、相互に役に立つ必要が有るのではないか？　はい！」)

次のようにクリトブロスは話した。

「実に、いいえです」
「さて、仮に『下劣な人には(心の)美しい気高い人と友人に成るのは不可能である』と認めたとしても、『自分が(心の)美しい気高い性格の人は、手の一振りで、言ってみれば、全ての他の(心の)美しい気高い性格の人達を自分に友情で繋ぎ止める事ができる』かどうか、すぐに明らかにしたいと思います」
次のようにソクラテスは話した。
「クリトブロスよ、あなたを混乱させているのは、『下劣さから超然としている人達として行動している気高い人達が、時々、相互に、友人に成るのではなく、むしろ戦い相対(あいたい)して、人類のうち最も役に立たない人を取り扱うよりも、より厳しく相互に取り扱い合う』という事実なのです」
次のようにクリトブロスは話した。
「はい。そして、個人に関してだけではなく、気高い政策を最も熱心に実行して下劣な政策を最も熱心に拒絶する諸国家に関しても、この事は事実であり、気高い政策を最も熱心に実行して下劣な政策を最も熱心に拒絶する諸国家は頻繁に相互に相対(あいたい)する関係でいます」
「これらの事について推測するに従って、私の心は私を失望させていくし、『どのように友人を獲得するべきか?』という問題は私を失望で満たしていきます」
「私クリトブロスが見る限りでは、悪人は、相互に、友人に成る事ができません」
「なぜなら、どうしたら、恩知らずな者どもや、無謀な者どもや、貪欲な者どもや、不信心者どもや、淫らな者どもといった、このような悪人どもが、

共に友人として忠実である事が可能であるというのか？　いいえ！　不可能です！」

「ためらいなく、私クリトブロスは、悪人を、生まれながらの友人ではなく、生まれながらの敵とみなしますし、相互に殺し合う憎しみの生まれながらの痣（あざ）が有るとみなします」

「そのため、あなたソクラテスがほのめかしているように、これらのような悪人どもが、善良な人達との友情で調和して一致するのは、もはや不可能です」

「なぜなら、どうしたら、悪事を行う悪人どもが、全ての悪事を憎悪する善良な人達と友人に成れるというのか？　いいえ！　友人に成れない！」

「そして、最後に、もし、美徳を育てる善良な人達が、諸国家の指導者の地位を求めて戦う党派心によって分裂して、相互に嫉妬し、相互に憎んでいるのであれば、誰が友人として残っているというのか？　いいえ！　誰も友人ではない！」

「人の間の、どこに、善意、思いやりや、誠実さが有るというのか？」

次のようにソクラテスは話した。

「実際は、これらの者の組成には、ある巧妙さが有るのです」

「生まれつき、人の中には愛情、思いやりの種が埋め込まれているのです」

「人は相互を必要とし、同情し、協力して相互に助け合い、(協力して助け合うという、)その事実を認識して相互に感謝の気持ちを表します」

「ただし、(人の中には)戦いの種も埋め込まれているのです」

「同一のものが全ての人に同様に美や快楽であると見なされると、その所有を求めて全ての人が戦ってしまいます」

「分裂の精神が入り込むと、諸々の党派は相互に反対の立場に立ってしまう」
「対立と怒りが戦いの音を鳴らしてしまう」
「より多数のものを所有したいという肉欲、揺るぎない貪欲は、対立を引き起こす可能性が有る」
「また、嫉妬は憎むべき悪霊(、悪の精神)です」
「しかし、それにもかかわらず、全ての反対する障害を貫通して、友情は、友情の手段を巧みに手に入れて、人類のうち、(心の)美しい善良な人達を結びつけるのです」
(「しかし、それにもかかわらず、全ての反対する障害を貫通して、友情は、友情の手段を巧みに手に入れて、人類のうち、神に選ばれた人達を結びつけるのです」※別の版)
「戦いによって勝ち取った権利を行使するよりも、むしろ、わずかな財産を苦も無く所有するのが、善良な人達の美徳なのである」
「飢えと渇きにもかかわらず、善良な人達は飲食物を苦も無く分かち合う」
「好色な若さの盛りも、性欲の快楽も、善良な人達の節制、自制、克己を歪める事はできない」
「また、善良な人達は、苦痛を知らない所に苦痛を引き起こそうという気には成らない」
「善良な人達は、富への全ての貪欲を控えるだけではなく、正しく合法的に富を分配するだけではなく、相互に必要なもので不足しているものを提供し合う」
「善良な人達は、戦いを調停して、苦も無く忘却へと一致させるだけではなく、一般大衆の利益へと一致させる」

「怒り過ぎは将来の後悔を必ず引き起こしてしまうが、善良な人達は、怒り過ぎない」
「そして、嫉妬に関しては、善良な人達は、一掃して清浄にし、除去する」
「ある人が所有している諸々の善いものは、その人の友人達の所有するものとも成るし、その人の友人達が所有している諸々の善いものは、その人の所有物と見なされる事に成る」
「では、(心の)美しい気高い人達が、国家の栄光の共有者に、無傷で成るだけではなく、相互の利益にすら成るのが、有りそうも無いのは、どんな点なのか？　いいえ！　そんな点は無い！」
「実際、公金を横領したり、(共犯者)仲間を使って暴力的に対処したり、贅沢をして(他人を)食いものにしたりする自由のために名誉と国家の役人の地位を不当に望む者どもは、不正な、下劣な、相互に仲良くできない人々と十分に見なして良い」
「しかし、もし、ある(善良な)人が、(他人の)悪行から身を守って、正しいものによって友人達を助けるため、また、高い地位に昇って、祖国を助けようとするため、これらと同じ栄光を獲得したいと望むのであれば、その人が同じような精神を持つ他の誰かと仲良く働く事を妨げるものが何か有るでしょうか？　いいえ！　無い！」
「善良な人は、『(心の)美しい気高い人』がそばに共にいると、友人達を助ける事ができなく成るだろうか？　いいえ！　かえって、できるように成る！」
「行動において社会の手本が自分の仲間である、という理由で、社会に利益をもたらす、善良な人の力が減ってしまうだろうか？　いいえ！　減らない！」

「競技試合においてですら、最弱の戦士どもに対して、最も頑強な戦士達が(集団を)組む事が可能であれば、自ら選んだ(最も頑強な戦士達の)集団は、全ての試合で勝利を実現し、全ての賞をさらうのは、明らかである」

「実際は、現実の競技場の規則に反してしまうが」

「しかし、政治の分野では、(心の)美しい気高い人達が統治権を所有しているならば、ある人が国家に利益をもたらさせるために選んだ誰とでも組む事を妨げるものは何も無い事は、明らかな利益と成るであろう」

「国政にたずさわる誰にとっても、最も善良な人達と友人に成るのは、それによって競争相手の代わりに自分の目的の協力者が見つかるだろうし、それ自体が明らかな利益と成るのではないか？　はい！　利益と成る！」

「そして、次のような事が、少なくとも、明らかである」

「対外戦争の場合では人は味方を必要とするが、自分に敵対する集団の人々の中では、なおさら、敵の精鋭に立ち向かうべきである」

「さらに、あなたの戦いの、あなたの敵と自発的に戦ってくれる人達を親切にもてなす必要が有るし、その親切は(、あなたの敵と自発的に戦ってくれる)熱心さを高めるかもしれません」

「そして、多数の悪人よりも、独りの善良な人は、あなたにとって、より善い利益、価値が有ります」

(「そして、多数の悪人よりも、最も善良な人達は、少数ですが、あなたにとって、より善い利益、価値が有ります」※別の版)

「なぜなら、善良な人達に対しては小さな思いやりでも長持ちしますが、悪人どもに対しては、悪人どもに与えれば与えるほど、より多数を悪人どもは要求してくるからです」

「そのため、善良な心を保持しなさい、クリトブロスよ」

「(最初は)『自ら善良に成ろう』とだけ試みなさい。そうして、(『自ら善良に成る』事に)到達したら、(心の)美しい気高い人達(の心)をとらえる事に着手しなさい」

「十中八九、私ソクラテスは、思いやりについての学問の達道者と自ら成って、この(、善良に成る事と善良な人達と友人に成る事という)探求において何らかの助けをあなたに与える事ができるかもしれません」

「誰のためであっても、私ソクラテスの心は燃えます」

「一瞬で私ソクラテスは全く心踊りたいと熱望しているのです」

「熱意によって私ソクラテスは、その目的へ疾走します」

「愛する、思いやる私ソクラテスは、それに応じて更に、愛される事、思いやってもらえる事を要求します」

「私ソクラテスの中の、この思いは、(愛する)相手の中の、逆方向の思いに応じられる必要が有ります」

「この(思いやる)相手との交流の渇きは、私ソクラテスの渇きとは逆方向の渇きに応じられる必要が有ります」

「そして、私ソクラテスが予想するに、あなたが『(善良な人達との)友情の関係を結びたい』という熱望にとりつかれた時はいつでも、これらの(私ソクラテスの)欲求は、あなたの欲求とも成るだろう」

「そのため、あなたクリトブロスが友人として選んだ相手を私ソクラテスから隠すなかれ」

「なぜなら、『私ソクラテスは、私ソクラテスを喜ばせる相手を喜ばせる事に熱中する事について労苦しているおかげで、人(の心)をとらえるわざに精通している』と私ソクラテスは思っているからです」

次のようにクリトブロスは返答した。

「これらは、まさに教えの中の教えです、ソクラテスよ。これらを私クリトブロスは渇望してきたのです」
「そして、この同一の、思いやりについての学問が、人のうち、善良な人達と、(外見の)美しい人達(の心)をとらえる事を私クリトブロスに可能にするのであれば、特に(私クリトブロスが渇望してきた教え)です」
次のようにソクラテスは話した。
「いいえ、ここで私ソクラテスは、あなたに忠告します、クリトブロスよ」
「(外見の)美しい人達(の心)をとらえる事を(外見の)美しい人達に許してもらう事は、私ソクラテスの思いやりについての学問の分野外の事なのです」
「そして、これが(ギリシャ神話で)人がスキュラから逃げた理由なのである」
「なぜなら、(ギリシャ神話の)スキュラは人をとらえ(ようとし)たからである」
「しかし、セイレーン達は(スキュラとは)違った」
「セイレーン達は誰も(物理的に)とらえようとはせず、(人から)遠く離れた所に座って、全ての人の耳の中へ魔法のような言葉を歌ったのである」
「『そのため、全ての人は聞く事を許容してしまって、魅了されてしまった』と言われている」
次のようにクリトブロスは話した。
「私クリトブロスは『誰(の心)も乱暴にとらえない』と約束します」
「そのため、もし、あなたソクラテスが友人達を勝ち取るための善い策を何か持っているのであれば、あなたソクラテスの教え子(に成った)クリトブロス)に教えてください」
次のようにソクラテスは話した。

「では、手を当て(て触)るべきではないのであれば必然的に、両人の口を当て(て口づけす)るのもいけません」
「それに同意しますか？」
次のようにクリトブロスは話した。
「いいえ(、同意できません)」
「(外見の)美しくない(外見の醜い)人なら誰にも口を当て(て口づけし)ませんが」
次のようにソクラテスは話した。
「ほらね！」
「何らかの失言無しには、あなたクリトブロスは口を開く事ができないんだね」
「(心の)美しい人達は、そのような無礼を受け入れません」
「(心の)醜い者は、『人のうち何らかの高い地位の人達が自分を(外見の)美しい人達に分類したに違いない』と信じ込んでしまって、そのような無礼を熱望して求めるかもしれないが」
次のようにクリトブロスは話した。
「それでは、ごきげんよう」
「次のような同意を立てましょう」
「『(外見の)美しい人達には口づけをしましょう。そして、善良な人達には口づけを雨のように降らしましょう』」
「それでは、我々、人に友人達(の心)をとらえるわざを教えてください」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、あなたクリトブロスが誰かの愛情を勝ち取りたいと望む時は、私ソクラテスが、あなたクリトブロスの意に反して、あなたクリトブロスが

『誰々に感心して友人に成りたいと望んでいる』といった趣旨の情報を(あなたクリトブロスが友人に成りたい相手へ)提供するのを許しますか？」
次のようにクリトブロスは話した。
「真心を込めて(言うと)、告発(のような情報)を(私クリトブロスが友人に成りたい相手へ)提供してください」
「誰かが『自分の賛美者達を憎んだ』と聞いた事は決してありません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、もし私ソクラテスが、その告発(のような情報)に『あなたクリトブロスが(誰々に)感心して、誰々に思いやりを向けている』という説明を更に加えたら、『私ソクラテスは、あなたクリトブロスの役割を奪っている』と感じませんね？」
次のようにクリトブロスは話した。
「いいえに決まっています」
「私自身、『私に思いやりを向けてくれている』と思う誰に対しても、心の中に思いやりが湧き上がる、と私は知っています」
次のようにソクラテスは話した。
「次の全てのように、私ソクラテスは、あなたクリトブロスについて、あなたクリトブロスが友人に成りたいと求めている人達へ話す権利が与えられていると感じます」
「また、私ソクラテスは更なる助けを約束する事ができます」
「考慮するべき、包括的な『もしも』だけが存在します」
「もし、あなたクリトブロスが私ソクラテスに更に『あなたクリトブロスは友人達に献身的で思いやり深い』と話す権利を与えてくれるのであれば、」

「あなたクリトブロスには、善い友人ほど、喜びをもたらしてくれるものは無い事と、」
「あなたクリトブロスは、あなた自身の善行を自ら誇りに思うのに劣らず、あなたが愛する人達の善行を自ら誇りに思う事と、」
「あなたクリトブロスは、あなた自身の善い所を自ら誇りに思うのと同様に、あなたが愛する人達の善い所を自ら誇りに思う事と、」
「あなたクリトブロスは、あなたと同じ豊かな収穫をあなたが愛する人達のために手に入れてあげようと計画する事に飽きる事は決して無い事と、」
「最後に、あなたクリトブロスは『思いやりにおいて友人達を超越する事と、戦いにおいて敵を超越する事が、人にとっての美徳である』と見出した事が有る事を、」
「もし、あなたクリトブロスについての、これらの事を(あなたクリトブロスが友人に成りたい人達へ)報告する権利を私ソクラテスに与えてくれるのであれば、『あなたクリトブロスは、私ソクラテスが、友人の探求における、善良な人達の獲得における、役に立つ猟師仲間である、と分かってくれる』と私ソクラテスは思います」
次のようにクリトブロスは話した。
「なぜ、このような事を私クリトブロスに求めるのですか？」
「まるで、あなたソクラテスが私クリトブロスについて好きな所を正確に話す自由な許可が、あなたソクラテスには無いかのように」
次のようにソクラテスは話した。
「いいえ」
「それは、アスパシアの権利に基づいて、私ソクラテスは拒絶します」

「それについて、私ソクラテスは、彼女アスパシアの口から聞いた事が有ります」

「次のようにアスパシアは私ソクラテスに話しました」

「もし人々が保証している人々の諸々の善い美点が真実に正しく報告されているのであれば、善い仲介者は人々の間の同盟を固める事において賢者でした」

「しかし、人々が嘘をつくように成ると、善い仲介者としては、人々をほめる事ができなく成ってしまいました」

「人々にだまされた御粗末なだまされやすい人々は、互いを憎んで、そして、同様に、善い仲介者を憎んで終わった」

「さて、この(アスパシアの)話が真実であると私ソクラテスは自ら全く信じているので、『あなたクリトブロスをほめる言葉で、私ソクラテスが真実であると言う事ができない何かを言うのに全力を尽くせない』と私ソクラテスは感じてしまいます」

次のようにクリトブロスは話した。

「本当に、ソクラテスよ、あなたは私クリトブロスにとって不思議な善い友人です」

「友人を勝ち取る権利をもたらす何らかの長所が私クリトブロスに有る限りは、あなたソクラテスは私クリトブロスを助けるために手を貸してくれるようですね」

「もし、そうでなければ、むしろ、私クリトブロスのために、つまらない作り話を作らないつもりなのですね」

次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスに教えてください。私ソクラテスが、あなたクリトブロスを助けるには、どうしたら最善であるのか？　あなたクリトブロスは、どう思いますか？」
「あなたクリトブロスを偽って、ほめる事によってでしょうか？　それとも、善良な人に成ろうと試みるように、あなたを説得する事によってでしょうか？」
「または、これらのようではなく、もし、あなたクリトブロスにとって不明であるならば、いくつかの例という光で照らして、この問題を見て考えてください」
「私ソクラテスが、あなたクリトブロスを船主に紹介したいと望んだか、船主をあなたの友人にしたいと望んだとします」
「私ソクラテスが初めに『彼クリトブロスは優れた操舵手であると気づくだろう』というように、あなたクリトブロスを偽って、ほめる言葉を歌ってしまったとします」
「船主が、その(嘘の)言葉を受けて、船の舵を取る事への理解が無い、あなたクリトブロスに船を任せてしまったとします」
「船と、あなたクリトブロス自身を共に破滅させてしまう以外に何を予想できるでしょうか？　いいえ！　破滅させてしまう！」
「また、仮に、同様の嘘の主張によって、国家全体の命運をあなたクリトブロスに委ねるように、私ソクラテスが国家全体を説得できてしまったとします」

「私ソクラテスが、(あなたクリトブロスは)『指揮の優れた才能を持った男である』、『熟練した法律家である』、『生まれながらの政治家である』などと(嘘を)言ってしまったとします」
「あなたクリトブロスによって国家と、あなた自身は破滅してしまうだろう」
「また、日常生活から例を取り上げると、」
「私ソクラテスが、(あなたクリトブロスは)『本当に注意深く、てきぱきした、経済に強い人である』という嘘によって、財務をあなたに任せるように、ある個人を説得してしまったとします」
「真価が問われたら、『あなたクリトブロスの経営は破滅的である』と分かってしまうし、『あなたクリトブロスは笑いものにされるに値する』と思われてしまうのではありませんか？　はい！　分かってしまうし、思われてしまう！」
「ええ、私ソクラテスの親愛なる友人クリトブロスよ、実に唯一の最短の最も安全な最善の道が有るのです。次のように、その道は簡単なのです」
「あなたが善良であると思われたいと望む事では何であれ、善良に成れるように努力しなさい」
「なぜなら、熟考すれば、『人の間で名づける事が可能な全ての美徳のうち、学習と実践によって高める事が可能な物は一つだけではない(、全て可能である)』と、あなたは気づくでしょう」
「それで、私ソクラテスとしては、クリトブロスよ、これらは原理であり、これらの諸原理に基づいて(善い友人達という獲物を)狩りに行くべきなのです」

「しかし、もし、あなたクリトブロスが違う考え方を取るのであれば、私ソクラテスは全力で注意して聞きます。どうか私に教えてください」

そのため、次のようにクリトブロスは話した。

「いいえ、ソクラテスよ、あなたが話した話を否定したのを私クリトブロスは恥じるべきなのです」

「もし私クリトブロスがソクラテスと違う考え方をして発言してしまったのならば、それは気高い発言でも、正しい発言でも無いのです」

第二巻 第七章（怠惰は駄目）(羊と犬の例え話)

ソクラテスには、友人達の困難に対処する二つの方法が有りました。

無知が原因である場合は、良識という薬によって、ソクラテスは、その(友人達の)困難に対処しようと試みました。

また、貧困が原因である場合は、「自分の力に応じて、相互に助け合うべきである」と教える事によって(、ソクラテスは、友人達の困難に対処しようと試みました)。

そして、ここで、私クセノフォンは、私が知っている、実際に起こった、いくつかの出来事を話しても良いだろう。

例えば、ソクラテスは、「不機嫌」という気まぐれをわずらっている様子をしているアリスタルコスを偶然、見かけて、次のように、声をかけた。

「心に何らかの苦悩を抱えているようですね、アリスタルコスよ」

「もし、そうなら、その苦悩を友人と共有するべきです」

「多分、共有すれば、その苦悩の重さを軽くできるかもしれません」

次のようにアリスタルコスは答えた。

「ええ、ソクラテスよ、私アリスタルコスは本当に深刻な苦境にいるのです」

「都市アテナイで党派抗争が宣言され、港湾都市ペイライエウスへ人々が殺到し、大規模な国外追放が起こってからずっと、私アリスタルコスは、捨てられてしまった貧しい女性の血縁者達の、かなり言いなりに成ってしまっているのです」

「姉達や妹達、姪達、従姉妹達が皆、保護を求めて、私アリスタルコスへ群がって来ました」
「本当に、私アリスタルコスには一つ屋根の下に十四人の自由民がいて、どう生きれば良いのか？」
「土地から(利益を)得る事はできません」
「土地は敵の(党派の)手中に有るのです」
「(賃貸用の)家を所有していても(貸し賃を)得る事はできません」
「なぜなら、アテナイ市内に残って暮らしている人はほとんどいないからです」
「家具？」
「買ってくれる人がいません」
「金銭(をとりあえず借りる)？」
「借りる事ができる相手がいません」
「あなたソクラテスでも、銀行、両替商から金銭を借りるよりも、路上で金銭を探して見つけるほうが可能性が良いだろう(ほどの国難なのです)」
「ええ、ソクラテスよ、何もしないで傍観して、血縁者達が餓死するのを目にするのは、実に、辛いですが、とても多数の人達を養うのは、こんな苦難では、不可能なのです」
ソクラテスは、この話を聴いた後で、次のように、尋ねました。
「ケラモンは、養う必要が有る、とても多数の人達と共にいても、生活必需品を自分と、とても多数の人達に、どうにかして、もたらすだけではなく、かなりの金銭をどうにかして残せています」
「一方、あなたアリスタルコスは、(ケラモンと)同様の苦境にいて、『生活必需品の不足で、皆、餓死するだろう』と心配しているのですか？」

次のようにアリスタルコスは話した。
「神よ！　ケラモンには奴隷しかいないが、私アリスタルコスには養う必要が有る自由民がいるのをあなたソクラテスは、なぜ理解してくれないのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたアリスタルコスは、アリスタルコスの家の者である自由民達と、ケラモンの奴隷達の、どちらが、『より上位の人である』と、言うでしょうか？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「疑問の余地無く、私アリスタルコスの家の一つ屋根の下にいる自由民達です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ケラモンは、ケラモンを支えてくれる下位の人達と共に、何不自由無い生活をしているはずであるが、あなたアリスタルコスと、上位であるアリスタルコスの家の者達が、苦境にいるのは、恥ずかしくないですか？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「確かに、そうですね。ケラモンには養う必要が有る一群の手工業者しかいないのに、私アリスタルコスと、私の家の者は、(奴隷ではなく)自由で、高い教養が有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「手工業者とは、どのような者でしょうか？」
「『手工業者』という名前は、全ての種類の役に立つ商品を作る事ができる人の全てに当てはまりませんか？」
次のようにアリスタルコスは話した。

「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「大麦の粗引き粉は、役に立つ商品です。そうではありませんか？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「抜群に、そうです」
次のようにソクラテスは話した。
「また、パンも(役に立つ商品)ですね？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「劣らず、そうです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、男性用や女性用のマント、上着、肌着は、どう思いますか？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「ええ、マント、上着、肌着は、大いに役に立つ商品です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたアリスタルコスの家の者は、これらの商品の全ての作り方を知らないのでしょうか？」
次のようにアリスタルコスは話した。
「逆に、私アリスタルコスは、『私の家の者達は、これらの商品の全てを作る事ができる』と思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、これらの商品のうち一つだけである、大麦の粗引き粉の店によって、ナウシキュデスは、自身と召使い達を養っているだけではなく、さらに多数

の豚と牛を養い、頻繁に慈善行為で国に寄付するほど大きな利益を出しているのを、あなたアリスタルコスは知らないのですね」
「一方、パン工場によって、家の全ての人を養えるよりも多くの利益を出して、何不自由無く暮らしている、キュレボスという人もいます」
「また、コリュトスのデメアスは、マントの商売によって、生計を立てています」
「また、メノンは、上着屋として、生計を立てています」
「そして、また、メガラ人の大半は、肌着を作って、生計を立てています」
次のようにアリスタルコスは話した。
「神よ！　ええ！　(知っています！)」
「メガラ人は、働く事を強制してメガラ人が気に入っている物を何でも作らせるために、一群の外国人を購入して雇いました」
「(しかし、)言うまでも無いが、私アリスタルコスの女性の血縁者達は、自由民なのです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『あなたアリスタルコスの家の者である女性達は自由民で血縁者である』という理由で、『あなたアリスタルコスの女性の血縁者達は、食べて寝る以外の事をするべきではない』と思うのですか？」
「または、『時間と関心を生活の役に立つ熟達しているわざに払う人達よりも、私ソクラテスは一般的な自由民について話しますが、食べて寝るだけして生きる(一般的な自由民の)人々は、より幸せに生きて、(神から、)より多くほめられるべきである』というのが、あなたアリスタルコスの意見なのでしょうか？」

「この世界で、あなたアリスタルコスが理解(、誤解)したのは、『十分に知るべき事を学ぶために、そして、教わった知恵を思い出すために、または、肉体の健康と強さのために、または、人生の魅力を人生にもたらす全てのものを獲得して保持するために、怠惰は役に立つが、労苦と学習は全く役に立たない』という事なのでしょうか？」

「あなたアリスタルコスは私ソクラテスに『アリスタルコスの女性の血縁者達は、商品の作り方を知っている』と言いましたが、商品の作り方をアリスタルコスの女性の血縁者達が教わった時、アリスタルコスの女性の血縁者達は、商品の作り方を、現実の利益に変える事ができない、無益な情報として学んだのでしょうか？　または、正反対に、商品の作り方について、いつか真剣に扱うつもりである何物かとして、また、それから利益を獲得する何物かとして、学んだのでしょうか？」

「一般的に、人は、怠惰という方針によって、善い気質の人に到達しますか？　それとも、人は、役に立つだろう物事に用心深く関心を向ける事によって、善い気質の人に到達しますか？」

「立って行動する事か、生存する手段に思いを巡らして腕を組んで何もしないで傍観して座る事の、どちらが、より多く、人が正義と正直において成長するのを助けるであろうか？」

「現状のままでは、私ソクラテスが間違っていなければ、あなた達、アリスタルコスと、アリスタルコスの女性の血縁者達の間で愛情、思いやりが失われて無く成るだろう」

「あなたアリスタルコスは『女性の血縁者達が重荷である』と感じずにはいられなく成ってしまいますし、そして、アリスタルコスの女性の血縁者達は

『アリスタルコスは女性の血縁者達を重荷であると感じている』と理解してしまうに違いありません」

「諸々の状況のうち、これは危険な状況であり、この状況では、(双方共に他方への)憎悪と反感を増してしまう可能性が十分に有りますし、(双方共に)愛の既存の絆を断ち切ってしまう可能性が有ります」

(「諸々の状況のうち、これは危険な状況であり、この状況では、双方共に他方への憎悪と反感を増してしまう可能性が十分に有りますし、最初の思いやりの蓄えを使い尽くしてしまう羽目に成るだろう」※別の版)

「しかし、あなたアリスタルコスが女性の血縁者達の力のはけ口を与えるだけさえすれば、そうすれば、あなたは女性の血縁者達が、どんなに役に立つ事ができるか理解するし、あなたは女性の血縁者達が完全に好ましいと思うように成るだろうし、そして、女性の血縁者達は『女性の血縁者達はアリスタルコスを喜ばせる事ができる』と理解すると、恩人であるアリスタルコスを熱烈に抱きしめるだろう」

「このようにすれば、以前からの思いやりの記憶は、より甘美に成るし、あなたアリスタルコスは、思いやりから湧き出す恩恵を桁違いに増やせるだろう」

「結果、あなた達、アリスタルコスと、アリスタルコスの女性の血縁者達は、より親密で家庭的な愛の絆で結ばれるだろう」

「実に、アリスタルコスの女性の血縁者達は、もし(売春といった)全ての恥ずべき仕事をするように求められたら、(売春といった)恥ずべき仕事をするよりも、むしろ死を選ぶようにさせなさい」

「しかし、アリスタルコスの女性の血縁者達は、『女性にとって、最も愛されるし、最も適している』と見なされる真の技術と知識を知っている、ように思われます」

「言ってみれば、誰でも、我々、人は、知っている事を、実際、簡単に速く最も善く十分に成し遂げる事ができる」

「喜んで行える事は、美しい結果をもたらす」

(「喜んで行える事は、結果を簡単に速く喜ばしく効果的にもたらす」※別の版)

「そのため、あなたアリスタルコスと、アリスタルコスの女性の血縁者達に同様に利益をもたらすであろう事を、アリスタルコスの女性の血縁者達に教える事をためらうなかれ」

「十中八九、アリスタルコスの女性の血縁者達は、あなたアリスタルコスの求めに、喜んで応じてくれるだろう」

(次のようにアリスタルコスは答えた。)

「ええ、(神に)誓って、私アリスタルコスは、あなたの、その話をとても気に入りました、ソクラテスよ」

「私アリスタルコスは、『(借りて)得た金銭を使い果たしたら、(金銭を借りても)返す事ができる(経済)状況ではないだろう』と分かっていたので、(金銭を)借りる気は今まで無かったのです。しかし、」

「今、私アリスタルコスは、(女性の血縁者達の)仕事用の資金を募るために、金銭を借りる気に成りました」

その後すぐに、(アリスタルコスは、アリスタルコスの女性の血縁者達の仕事用の)資金を用意しました。

(そして、アリスタルコスは、アリスタルコスの女性の血縁者達の仕事用の)羊毛を買いました。

善良な人アリスタルコスの女性の血縁者達は働き始めました。

そして、アリスタルコスの女性の血縁者達は、朝食ですら食べながら働き、(その日の)仕事が終わり切るまで延々と働いて、そうしてから、夕食を食べました。

皆、笑顔が、不機嫌な顔に取って代わりました。(皆、不機嫌な顔から笑顔へ変わりました。)

アリスタルコスの女性の血縁者達は、(アリスタルコスを)もはや疑いの目で見る事は無く、双方の目は幸せで満ちました。

アリスタルコスの女性の血縁者達は、アリスタルコスが思いやってくれるので、アリスタルコスを敬愛するように成りました。

アリスタルコスは、女性の血縁者達に協力者としての愛情を感じるように成りました。

そして、ついに、アリスタルコスは、ソクラテスの所へ来て、大喜びで、どのように物事が(上手く)運んだか話した。

次のようにアリスタルコスは言い加えました。

「今では、女性の血縁者達は、『アリスタルコスは、家の中で唯一の怠け者で、座ってパンを得るために何もしていないのにパンを食べている』と私アリスタルコスを非難してくるんですよ」

次のように、ソクラテスは、アリスタルコスの話に応えた。

「犬の例え話を女性の血縁者達に教えては、どうですか?」

昔々、伝説によると、動物達が(人と)話す事ができた時代に、次のように、ある羊が主人に話した。

「我々、あなたが所有している羊、あなたに羊毛と子羊とチーズを与える羊に、あなたは、羊が大地の表面からかじり取る草しか与えてくれないのは、何とも驚くべき事です、主人よ。しかし、こちらの、あなたの犬は、あなたに何も決して与えないが、あなたは、あなたが食べる分から(人の)食べ物を分けてあげます」

その犬は、羊の、これらの言葉を聞いて、すぐに、次のように、答えました。

「ああっ、本当に、あなた達、羊を安全に健全に守っているのは、私、犬ではないか？ あなた達、羊よ。私、犬が守っている、そのために、あなた達、羊は、盗人に盗まれもしないし、狼達に攻撃されもしないのである。なぜなら、もし私、犬が、あなた達、羊を警備しなければ、あなた達、羊は、殺される事を恐れて、野原で草を食べる事すらできなく成るだろう」

「そうして、その羊は、(犬に)敬意を表して、羊よりも、犬に優先権を当然、与える事を認めなければならなく成った」と、この例え話では言われている。

「そのため、あなたアリスタルコスは、『例え話の犬のように、アリスタルコスは、女性の血縁者達の守護者であり監督者で、アリスタルコスのおかげで、女性の血縁者達は、悪事、悪事を行う者どもから守られているし、アリスタルコスに守られている、そのために、幸せに安全に、女性の血縁者達は働けるし、生きられるのである』と、かの羊の群れ(に例える事ができる、女

性の血縁者達)に話しなさい」(羊毛製品を作るアリスタルコスの女性の血縁者達を羊に例えている。)

第二巻 第八章（老後も働ける知識労働者に成りなさい）（虚偽の非難を避ける方法）

別の、ある時、ソクラテスは、長い間、会えなかった古くからの友人エウテロスを偶然、見かけて、次のように、挨拶した。

「世界の、どの地域から来たのですか？　エウテロスよ」

次のように、他方のエウテロスは答えた。

「終戦直前に、外国から戻って来ました」

「しかし、今は、都市アテナイの、ある地区から来ています」

「なぜなら、あなたソクラテスも知っての通り、国境も超えて、財産を奪われたからです」

（「なぜなら、あなたソクラテスも知っての通り、植民地の財産も奪われたからです」※別の版）

「そのため、父は、私エウテロスのために、アッティカに何も残せなかったのです」

「私エウテロスは、自国アテナイに滞在して、肉体労働によって生活必需品を自身にもたらさなければならないのです」

「『他人に物乞いするよりも、肉体労働は望ましい』と思います」

「また、特に、私エウテロスには、金銭を借りるための担保が無いので」

次のようにソクラテスは話した。

「では、肉体を貸し出して生活必需品を自身にもたらすのに、あなたの肉体が見合うのは、どのくらいの期間だと、あなたは予想しますか？」

次のようにエウテロスは話した。

「神だけが御存知です、ソクラテスよ、しかし、長くは無いでしょう」

次のようにソクラテスは話した。

「そうして、あなたが自身が老人に成ったのに気づいた時には、(老人は病気に成りやすいので)出費は減らないだろうが、『(肉体労働に不向きな老人である、)あなたを肉体労働者として雇って給料を支払いたい』と思う人は誰もいないだろう」

次のようにエウテロスは話した。

「それは事実ですね」

次のようにソクラテスは話した。

「では、すぐに、財産の管理の助手を必要としている大金持ちの誰かに申し出て、老いた時に大いに役に立つであろう仕事を当たってみるのが、より良いのではないだろうか?」

「金持ちの仕事を監督したり、金持ちが収穫を得るのを助けたり、金持ちの財産を全般的に守ったりする事によって、財産の継承者である金持ちのために成って、お返しに利益を与えてもらいなさい」

(次のようにエウテロスは声を上げて話した。)

「私エウテロスには奴隷の重圧は耐えられないのです！　ソクラテスよ！」

次のようにソクラテスは話した。

「しかし、国家の諸部門の長(おさ)達は、公共の財産を管理しているので『奴隷である』という評価を受け入れているとは見なされず、『かなりの、より高度な自由民の地位に到達している』と見なされます」

次のようにエウテロスは話した。

「一言で要約すると、ソクラテスよ、他人に対しての責任を問われるのを考える事は、全く、私エウテロスの好みに合わないのです」

次のようにソクラテスは話した。
「しかし、エウテロスよ、何らかの責任を取る必要が無い仕事を見つける事は困難だろう」
「実際、何らかの誤り無しに、何らかの事をするのは困難なのである」（何かをすると、何らかの誤りを伴いやすいのは、実際、仕方が無いのである。）
「それに劣らず、もし完全無欠に、何らかの事をするのに成功しても、敵意による非難から免れる事は困難なのである」（完全無欠に何かをしても、虚偽に非難される場合が多いのである。）
「さて、あなたエウテロスが、非難無しに、完全に、現在の仕事を終わらせるのは、簡単であるかどうか、私ソクラテスは疑います」
「非難無しに、完全に、仕事を終わらせるのは、簡単ではない？」
「あなたが、どうするべきか、私ソクラテスは言っておきましょう」
「粗探しが好きな者どもを避けるべきである」
「そして、思いやり深い人達を慕うべきである」
「また、何事でも、あなたができる事は快く進んで引き受けるべきである」
「そして、『できない』と思う事は断るべきである」
「何でも、心を込めて魂を込めて行って、最高の結果にしなさい」
（「何でも、心を込めて魂を込めて行って、最高の結果と成るように、全くの真心の熱意の表れと成るように、努力して研究しなさい」※別の版）
「それが、粗探しする者どもを黙らせる、と同時に、自分自身の困難への助けをもたらす手段なのである」
「（そして、）人生は円滑に進むだろうし、危険は減るだろうし、老年に対して安全に安定して備えられるだろう」

第二巻 第九章 (善友の獲得方法)

私クセノフォンが知っている限りでは、別の、ある時、ソクラテスは、「自身の個人の問題を気にしたいと望む人には、アテナイでの生活は簡単な事ではない」というクリトンによる発言を聞いた。

(次のようにクリトンは話を続けた。)

「なぜなら、(アテナイには、)例えば、現在、私クリトンを(虚偽の罪で)訴えて脅迫してくる奴の集団がいるからである」

「奴らは私クリトンに対して言い張る事ができる何らかの軽い罪を握っているからではなく、『クリトンが、(無実の罪でも、)さらに困るよりも早く、全額を払うだろう』という(悪い)信念に基づいているだけなのである」

次のようにソクラテスは、クリトンの言葉に対して、応えた。

「私ソクラテスに教えてください、クリトンよ。あなたは、羊の群れから狼を追い払うために、犬を飼っているのではないのですか?」

次のようにクリトンは話した。

「その通りです」

「犬を飼うのは、採算が取れます」(犬を飼うのは、費用よりも、利益の方が多いです。)

次のようにソクラテスは話した。

「では、なぜ、あなたクリトンは、あなたを傷つけようと努める奴らを、自発的に追い払う力が有る番人を雇っておかないのですか?」

(次のようにクリトンは答えた。)

「番人が(飼い主へ)再び向きを変えて飼い主を引き裂くかもしれない事を心配しなくて済むのであれば、心配する必要は全く無いのですが(、心配してしまいます)」

(次のようにソクラテスは言い返した。)

「何と！」

「『クリトンと言い争うよりも、クリトンのような人を喜ばせるのは、打算だとしても、より遥かに気持ちが良い』と分からないのですか？」

「クリトンは『アテナイにはクリトンと友人に成っている事を誇りにしている多数の人達がいる』という自信を持って良い」

それで、クリトンは、ソクラテスと、頭の中で賢明な言葉を考えて賢明に話す力が有るし、実務経験が有るが、貧しい人アルケデモスを探し出した。

実際、アルケデモスは、どんな事をしてでも利益を得ようとする種類の人ではなかったし、誠実さを愛する人であるし、どんな事でもする弁護士として生計を立てるには性格が良すぎた。

それから、クリトンは、(アルケデモスの心を)獲得する好機を捉えて、穀物と油や、ワインや、羊毛製品や、その他の全ての物といった、農場、農園、牧場がもたらす重要な生活必需品をアルケデモスへの贈り物として少し取り分けた。

また、クリトンは、アルケデモスを神へ捧げ物を捧げる祭りの宴に招待した。

また、他の点でも、クリトンは、アルケデモスに明らかに配慮し(て、世話をし)た。

アルケデモスは、「クリトンの家は頼れて安らげる」と感じて、後援者であるクリトンをいくら大事にしても大事にし過ぎる事は無かった。

そのため、間も無く、アルケデモスは、クリトンへの悪徳弁護士ども、クリトンへの迫害者どもを訴える事ができる、クリトンに対する悪徳弁護士ども自身の不法行為の長大な一覧を調べ上げた。

また、アルケデモスは、クリトンに対する悪徳弁護士どもの無数の犯罪だけではなく、クリトンに対する悪徳弁護士どもへの敵対者も調べ上げた。

そうして、すぐに、アルケデモスは、クリトンに対する悪徳弁護士どものうちの一人を、「何らかの苦しみを受ける刑罰か、何らかの罰金刑」という刑を受けるであろう、公的訴訟で起訴した。

「自分が多数の悪事をしている」という自覚が有るので、訴えられた悪徳弁護士は、アルケデモスから免れるために、可能な全ての事をしたが、アルケデモスを排除できなかった。

アルケデモスは、(クリトンへの)告発者である悪徳弁護士に、クリトンへの圧迫を解かせるだけではなく、全額を支払わせるまで、訴訟をし続けた。

さて、アルケデモスは、この訴訟と、他の同様の訴訟の、勝利を達成したので、何が次に起こったかを推測するのは簡単です。

それは、ちょうど、ある羊飼いが、とても良い牧羊犬を得ると、同様に、とても良い牧羊犬の恩恵を受ける事ができる、その羊飼いの近くに、他の全ての羊飼いが、自分の羊の群れを滞在させたいと望むような物なのです。

そのため、多数のクリトンの友人達が、クリトンに対してと同様にアルケデモスが自分達の守護者に成ってくれるように、クリトンの所へ来て頼んだ。

そして、アルケデモスは、クリトンを喜ばせる事ができる何かをできる事に大喜びしたので、クリトンだけではなく、クリトンの友人達も同じく、平穏に暮らせるように成った。

アルケデモスと仲があまり良くない人々のうちの一人が、「アルケデモスは後援者から利益を受け取っているので、後援者に、こびへつらっている」とアルケデモスを非難したら、次のように、アルケデモスは、すぐに言い返した。

「次の質問について、私アルケデモスに答えなさい」
「『誠実な人達からの思いやりを受け取り、思いやりに報いて、結果として誠実な人達と友人に成り、悪人どもと戦う』のと、『誠実な人達に悪事をしようと企てて、尊敬に値する誠実な人達を敵にしてしまって、悪事への協力の見返りに悪人どもの友情を勝ち取るのは全く見込みが薄く、知人達の品格を損ねるのは実に確実である』のは、どちらが、より恥ずべきなのか？」

全ての出来事の最終的な結果として、アルケデモスは現在ではクリトンの右腕に成り、アルケデモス以外の全てのクリトンの友人達はアルケデモスを尊敬した。

第二巻 第十章（善友の獲得方法）

また、私クセノフォンが知っている、次のような議論を、私クセノフォンは挙げる事ができる。

（また、私クセノフォンが個人的に保証できる、次のような議論を、私クセノフォンは挙げる事ができる。※別の版）

その議論は、（ソクラテスから、）ソクラテスの友人の一人であるディオドロスへ話された物である。

次のように教師ソクラテスは話した。

「教えてください、ディオドロスよ。もし、あなたの奴隷の一人が逃げたら、あなたは労苦してでも取り戻しますか？」

（次のようにディオドロスは答えた。）

「それどころか、私ディオドロスは助手として他の人達を呼び集めて、取り戻すために、報酬を大声で話します」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、もし、あなたディオドロスの家の者の一人が病気に成ったら、その人の世話をして、その人の命を救うために医者を呼びますか？」

次のようにディオドロスは話した。

「確かに、私ディオドロスは、そうします」

次のようにソクラテスは話した。

「では、もし、あなたディオドロスの家の奴隷達、全てよりも、あなたにとって遥かに大事である、親しい友人が餓死しそうであったら、『労苦して

でも友人の命を救うのが、あなたの義務である』と、あなたは思います
ね？」

「ええ！」

「では、私ソクラテスが、あなたディオドロスに教えなくても、あなたは
『ヘルモゲネスが木や石で出来ていない』と知っていますね」
「もしディオドロスがヘルモゲネスを助けたら、ヘルモゲネスは同様の種類
の事物によってディオドロスに報いない事を恥じるだろう」
「あなたディオドロスの言った通りに行う能力が十分に有る、自発的な、思
いやり深い、信頼できる、理性と判断力による確実な予想によって役に立つ
考えを自ら考案できる、助手ヘルモゲネスを得る機会です」
「このヘルモゲネスのような人は、多数の奴隷達に相当する価値が有る、と
私ソクラテスは言えます」
「優れた経済学者は、『貴重で高価な物が安い価格で入手できる時は、買う
べきである』と我々、人に教えます」
「そして、とても悪い時代である現代では、とても安く、善い友人達を得る
事ができます」
次のようにディオドロスは答えた。
「あなたは全く正しいです、ソクラテスよ」
「ヘルモゲネスがディオドロスの所へ来るように(ソクラテスはヘルモゲネス
を)誘ってください」
次のようにソクラテスは話した。

「『ヘルモゲネスがディオドロスの所へ来るように(ソクラテスはヘルモゲネスを)誘ってください』だって！」

「実に、私ソクラテスではなく、ディオドロスが自ら誘いなさい！」

「なぜなら、何にしても、『ディオドロス自らがヘルモゲネスの所へ行くよりも、ディオドロスにヘルモゲネスを呼び出す権利が有るのは良くない』し、『ディオドロス自身に利益が無く成ってしまうのと同様に、ヘルモゲネスにも利益が無く成ってしまう』と私ソクラテスは理解できるのです」

このため、ディオドロスは、ヘルモゲネスを探すために、すぐに立ち去った。

そして、ディオドロスは、大した費用無しに、ヘルモゲネスという友人を自ら勝ち取った。

ディオドロスの友人ヘルモゲネスの唯一の関心事、それは、現在では、「言行によって、どうしたらディオドロスを助けて喜ばせる事ができるか」なのである。

第三巻

第三巻 第一章 (高位者に自分の務めの知識は必須)(将軍に戦術と戦略の知識は必須)(名将に必要な性質)

栄光を熱望する人達もソクラテスからの同様の助けを得た。

ソクラテスは、各々の場合に応じて、栄光を熱望する人達の中の、各々の目的への忍耐強い勤勉さを促した。

それを示すのに役立つ次の話のように。

ディオニュソドロスがアテナイへ来た、ある時、ディオニュソドロスが「将軍の全職務を教える事ができる」と主張したのを、ソクラテスは聞いた。

そのため、ソクラテスは、共にいた人達の一人である、ある若者に話しかけた。

その若者は、将軍職に就くのを熱望していて、その望みをソクラテスに知られていた。

次のようにソクラテスは話した。

「将軍に成りたいと努めている全ての人は、将軍職の職務を学ぶ最もわずかな機会をも捨ててしまうのを、恥じるべきである」

「そのような(将軍職の職務を学ぶ機会を捨ててしまう)人は、彫刻の技術の習得無しに彫像する仕事を引き受けた詐欺師よりも、国家によって罰金や処罰を受けて当然である、と私ソクラテスは言わなければいけない」

「戦争中は、戦争に付随する全ての危険と共に、国家の全命運を将軍に委ねる事を考慮すれば、将軍職の職務への、成功に比例して大いなる恩恵が、失敗に比例して大いなる不幸が、結果として生じるのは、当然でしかない」

「『将軍職に選ばれるために労苦している一方で将軍職の諸々の職務を学ぶのを怠った将軍志願者は、高額な罰金刑を受けて当然である』と同意しませんか？　と私ソクラテスは若い、あなた様に求めます」

これらのような諸議論によって、その若者が将軍職の職務の諸々の教えを受けに行くように、ソクラテスは説得した。

その若者が、将軍職の職務の講義の受講を終了した後、戻ってくると、ソクラテスは、その若者に戯れで冗談を言い始めた。

「私達の若い友人である、あの方を見てください。ホメロスがアガメムノンの威厳の有る態度について話しているように、同様に、あの方にも態度に威厳が有ります」

「将軍に成るために学んだ人のように、あの方も、より威厳が有る動きをしているように見受けられませんか？」

「もちろん、」

「ちょうど、仮に(今だけ)竪琴に触っていなくても、竪琴の演奏を学んだ人は竪琴の奏者であるように、」

「また、ちょうど、(今だけ)実践していなくても、医学を学んだ人は医者であるように、」

「そのように、ここにいる、この時から、目の前にいる、私達の友人も、今では、仮に将軍の選挙で一票も得票できなくても、永遠に、将軍であろう」

「逆に、仮に全ての人々が愚か者を指定しても、ええ、ええ、学が無い愚か者は将軍にも医者にも成れない」

(ソクラテスは、その若者の方を向いて、次のように、話を続けた。)

「仮に、いつか私達の誰かが(一部の部隊の)指揮官として(若い、)あなたの下に(部下として)いるであろう事に備えて、聞きかじった戦略や戦術の知識

のいくつかを私達に伝えると、教師は、何を、将軍職について教える出発点と思っていましたか？」

「どうか私達に教えてください」

すると、次のように、その若者は話した。

「将軍職の職務の教師は、初めから終わりまで、同じ事だけを教えてくれました」

「将軍職の職務の教師は、戦術だけを教えてくれて、他には何も教えませんでした」

（次のようにソクラテスは応えた。）

「まさか、しかし、（戦術、）それは、将軍職の微細な一部でしかない」

「将軍は、戦略物資を供給する用意をする必要が有ります」

「（また、）将軍は、食料を兵士達に供給する用意をする必要が有ります」

「（また、）将軍は、策略において頭の回転が速いといった、実用的な資質にあふれている必要が有ります」

「将軍の目から逃れるものは何も無い必要が有るし、また、将軍に我慢し切れない思いをさせるものは何も無い必要が有る」

「将軍は、賢明である必要が有るし、即座の機転が有る必要が有るし、寛大さと激しさを同時に合わせ持つ必要が有るし、誠実さと老獪（ろうかい）な巧妙さを同時に合わせ持つ必要が有る」

「将軍は、番人の役割を果たす必要が有るし、略奪者の役割を果たす必要が有る」

「将軍は、現在は、まるで浪費家であるかのように物惜しみしないでいても、さらに次には、まるで守銭奴であるかのように物惜しみできる必要が有って、将軍の気前の良さと、貪欲なまでの制限は、相並び合う必要が有る」

「将軍は、守備においては鉄壁であり、攻撃においては非常に命知らずで大胆である必要が有る」
「これらの資質と、多数の他の資質を、軍事の優れた長官である、優れた名将に成るつもりが有る人は、所有している必要が有る」
「人には、諸々の資質は、神から与えられた生まれつきの才能としてか、知恵によって、学ぶ事によって、存在する必要が有る」
「疑い無く、戦術も、戦術家に成るためにも、大いなる物である」
「なぜなら、戦場で適切に指揮されている軍隊と、それと同一の軍隊でも無秩序な軍隊は、全く、全く違うからである」
「ちょうど、山のように転がされているタイル、煉瓦、木造部分、石は全く役に立たないが、それらをある決まった順序で配置すると、上と下には陶器製のタイル、石といった崩壊したり腐敗したりしない物を、上下の二つの中間には煉瓦、木造部分を、建築学の原理を考慮して、配置すると、最後には役に立つ所有物、つまり、居住場所(、家)を得られるように」
(次のように、その若者は応えた。)
「その例えは、とても的確です、ソクラテスよ」
「なぜなら、戦いにおいても、最も優れた人達を前と後ろに整列させ、それらの最も優れた人達と共に、中間に平均以下の人達を整列させて、前の人達が中間の人達を先導できるようにし、後ろの人達が中間の人達を押し進ませる事ができるようにするのは、戦術の法則なのです」
次のようにソクラテスは話した。
「もし将軍職の職務の教師が、(兵士としての)良し悪しを見分ける事を教えていたのであれば、疑い無く、とても良いです」
「しかし、もし、そうでなければ、学んだ戦術は、どこで役に立つのか?」

「最良の(本物の)硬貨を上と下にし、最悪の(偽造)硬貨を中間にして、たくさんの硬貨を積み上げて配置する事を教えられても、先に偽造硬貨と(最良の)本物の硬貨を見分ける事を教えられていなければ、到底、役に立たない。そうですよね？」

次のように、その若者は話した。

「ええと、いえ、(神に)誓って、将軍職の職務の教師は、兵士としての良し悪しを見分ける方法を教えてくれませんでした」

「そのため、(兵士としての)良し悪しを見分ける務めは、私達、将軍志願者達(や将軍に成れる力が有る人達)にかかっているはずです」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、将軍志願者達の中で、どうしたら諸々の失敗を最も善く回避できるか、私ソクラテスと、若い、あなたは、考えてみましょう」

(次のように、その若者は応えた。)

「私は、その用意ができています」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、考えてみましょう！」

「『私達が略奪者で、私達に課された職務が、金塊を奪い去る事である』と仮定しましょう」

「仮に利益に最も貪欲である者どもを前衛に配置するのであれば、私達の軍隊の配置は正しいですよね？」

次のように、その若者は話した。

「私も、そうだと思いますが」

次のようにソクラテスは話した。

「では、立ち向かうべき危機が存在する場合は、どうですか？」

「栄光に最も貪欲な人達で前衛を構成するべきでしょうか？」
次のように、その若者は話した。
「そうですね」
「いずれにしても、栄光に貪欲な人達は、称賛や栄光のために危機に立ち向かうでしょう」
「幸いにも、このような(栄光に貪欲な)人達は、隅に隠れていません」
「栄光に貪欲な人達は、どこにいても異彩を放って目立つので、見つけやすいです」
次のようにソクラテスは話した。
「しかし、教えてください、将軍職の教師は、一般的な軍隊の配置方法や、特に、(軍隊の)各種戦術的配置をどの場合に、どのように適用し応用するかを教えてくれましたか？」
次のように、その若者は話した。
「そのような事は何も教えてくれませんでした」
次のようにソクラテスは話した。
「しかし、同一の進軍配置や、同一の戦闘配置が、不適切に成ってしまう無数の状況が必ず存在する」
次のように、その若者は話した。
「将軍職の職務の教師は、全ての細かい区別について話さなかった、と私は断言します」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「将軍職の職務の教師は、各種戦術的配置の適用、応用について、教えてくれなかった。そうなんですね？」
「神よ！」

「また将軍職の職務の教師の所へ戻って、将軍職の職務の教師に、しつこく質問しなさい」

「もし、将軍職の職務の教師に本当に知識が有って、恥という感覚が全く失われていなければ、あなたから金銭を受け取っていながら、あなたをむなしく(世の中へ)送り出した事を恥ずかしく思うだろう」

第三巻 第二章（名将の性質）（善王の性質）

別の、ある時、ソクラテスは、軍事の長官である、将軍に選ばれた人に出会って、次のように、話しかけた。

次のようにソクラテスは話した。

「なぜホメロスはアガメムノンを『国民の羊飼い』と呼んだのか？　あなたは、どう思いますか？」

「それは、多分、次の事を示していますよね？　ちょうど、羊飼いが羊の世話をして『羊が安全で、羊に必要な全ての物が有る』のを確認し、羊の諸々の飼育目的を達成する必要が有るように、同様に、将軍も、『兵士達が安全で、兵士達に補給物資が有る』か注意し、軍務の諸目的を達成する必要が有る」

「最後に、軍務の諸目的とは、兵士達が敵を圧倒して、幸運による財産と幸せを増やせる事である」

「また、教えてください、なぜホメロスは『アガメムノンは善い王である、と共に、大胆な戦士である』と話してアガメムノンをほめたのか？」

「アガメムノンは、独りでも敵と勇敢に戦うので『大胆な戦士』であるだけではなく、同様の勇気を軍全体に吹き込むので『大胆な戦士』である、のを、ホメロスには多分ほのめかす意図が有った」

「また、『善い王』という言葉によって、自身の命、人生を守るために勇敢に立ち向かう人であるだけではなく、統治している国民全てにとって幸せの供給源である人である、のを、ホメロスには多分ほのめかす意図が有ったんですよね？」

「なぜなら、王が地位が高貴であっても、王に王自身を気に留めさせるためではなく、王を選んだ人達が王によって幸せに到達するために、ある人を王に選んでいる」

「また、生活を改善するためを除いて、どうして人々は兵士に成るだろうか？　いいえ！　生活を改善するために、人々は兵士に成る！」

「また、その(生活の改善という)目的のために、人々がその問題にしている(生活の改善という)目的への先導者を将軍達の中に見つけるために、人々は将軍達を選ぶ」

「そのため、将軍を選んだ人達に、(生活の改善といった、)その人達が求める物を入手してあげる必要が有る職務を、将軍は引き受けているのである」

「そして、実に、その(生活の改善という)職務よりも気高い野心を見つけるのは難しいし、また、逆に、その(生活の改善という)職務の放棄よりも劣悪な何かを見つけるのも難しい」

ソクラテスは、このように探求して、「善い指導者の美徳、資質とは何か？」という問題を扱った。

また、ソクラテスは、(指導者の)全ての見せかけの資質を切り捨てて、「全ての指導者の役目とは、先導するように指導者に求められている人達を幸せにする事である」という問題の要点を明らかにした。

第三巻 第三章 (騎兵隊長のすべき事)(部下の忠誠の獲得方法)(アテナイ人の高徳は栄光への愛による)

(ソクラテスと)騎兵隊長に選ばれたばかりの若者との次の会話を、私クセノフォンは挙げる事もできる。

次のようにソクラテスは話した。

「どのような心構えで騎兵隊長に成りたいと望んだのか？　教えてください、若い、あなた様よ」

「(騎兵隊長を志願した)目的は何でしたか？」

「『ただ騎兵達の先頭を馬で進む事が目的ではない』と私ソクラテスは思っています」

「(また、交戦の序盤は、本隊の)将軍達の前にすら出て馬で進む弓騎兵に拒絶されない栄光が目的ですか？　いいえ！　それが目的ではない！」

（

古代ギリシャでは「槍と盾で武装した重装歩兵の密集陣形」である「ファランクス」という戦術で本隊と敵の本隊が衝突していた。

古代ギリシャでは、交戦の序盤は、弓兵や弓騎兵を味方の「ファランクス」の本隊の前に展開させて遠距離攻撃させて敵の「ファランクス」の本隊の陣形を崩そうと試みた。

）

次のように騎兵隊長は話した。

「あなたソクラテスは正しいです」

次のようにソクラテスは話した。

「また、著名に有名に成るためが目的ではないですね」
「なぜなら、狂人も(『狂人である』という)致命的な区別を(『悪い意味ではあるが、有名である』として)自慢できるからである」
(「なぜなら、人は皆、知っているように、狂人じみた愚か者は、『狂人じみた愚か者である』のを『悪い意味ではあるが、有名である』として、自慢できるからである」※別の版)
次のように騎兵隊長は話した。
「またも、あなたソクラテスは正しいです」
次のようにソクラテスは話した。
「次の事が(騎兵隊長を志願した)真相ですね？」
「『騎兵を向上させたい』と考えていますね」
「騎兵について調べた時よりも、より優れた状態で、騎兵を国家に渡すつもりなのが、目的ですね」
「また、もし騎兵が動員される機会が有ったら、騎兵隊長として(自国)アテナイへ何らかの善いものをもたらすつもりですね？」
次のように騎兵隊長は話した。
「最も確実に、そうです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、(神に)誓って、実に、気高い野心です。目的を達成できればば」
「任命された(、騎士隊長という騎兵達への)指揮権は馬と騎乗者に関係します。そうではありませんか？」
次のように騎兵隊長は話した。
「疑い無く、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、馬をどう向上させようと計画しているのか説明してください」

次のように騎兵隊長は話した。

「ああっ、それは、多分、私のするべき仕事の一環ではないだろう、と思います」

「各騎兵が個人的に自分の馬の状態に責任を負うのです」

次のようにソクラテスは話した。

「しかし、騎兵達が自身と自分の馬を見せた時に、ある騎兵達は足が悪い馬を連れて来たり、さもなければ、別の、ある騎兵達は病弱な馬を連れて来たり、他の、ある騎兵達は進軍に遅れずに付いて行く事ができないほどの栄養失調の、やせた馬を連れて来たりしたのを、あなたが知った、と仮定すると、」

「また、他の、ある騎兵達の馬達は(騎兵との関係が)酷く破綻していて管理し難い(暴れ馬な)ので隊列での自分の位置を守るつもりが無かったり、また、他の、ある騎兵達の馬達は隊列での、どの位置にも着く事ができないほど無鉄砲に突っ込む(暴れ)馬であったりしたのを、あなたが知った、と仮定すると、」

「そうすると、騎兵隊長である、あなたの騎兵隊の戦力は、どう成りますか？」

「どうしたら、そんな騎兵隊の先頭で突撃して国家のために栄光を勝ち取れるだろうか？　いいえ！　国家のために栄光を勝ち取れない！」

次のように騎兵隊長は話した。

「あなたソクラテスは正しいです」

「最善を尽くして騎兵隊の馬達の世話をするように試みるつもりです」

次のようにソクラテスは話した。
「ええ。では、騎兵達自体の向上に手を出してみませんか？」
次のように騎兵隊長は話した。
「そうしてみます」
次のようにソクラテスは話した。
「最初は、騎兵達を馬の騎乗に熟練させる事ですよね？」
次のように騎兵隊長は話した。
「それは確かに、そうです」
「なぜなら、騎兵の誰かが(敵に)落馬させられても、そうしておけば、(速やかに乗馬し直して、)自身を救う機会をより良く得られるだろうからです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。では、交戦の危機が来た時、その時、どうするつもりですか？」
「あなた達、騎兵隊が機動演習に慣れている(演習地の)砂地へ敵をおびき寄せるように命令しますか？　それとも、事前に、実際の戦場に似た土地で騎兵達に演習を受けさせさせようと試みますか？」
次のように騎兵隊長は話した。
「疑い無く、『事前に、実際の戦場に似た土地で騎兵達に演習を受けさせさせる』のが、より良いだろう」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。では、騎兵隊のうち、可能な限り多数の騎兵達が馬に騎乗して狙いを定める事ができて矢を放つ事ができるように注意するのは、あなたの義務の一部である、と考えますか？」
次のように騎兵隊長は話した。

「確かに、『可能な限り多数の騎兵達が馬に騎乗して狙いを定める事ができて矢を放つ事ができるように注意する』のは、より良いだろう」
次のようにソクラテスは話した。
「では、騎兵達の勇気を刺激する方法を考えた事が有りますか？」
「敵と交戦するために、騎兵達の(敵への)怒りに火をつける方法を考えた事が有りますか？」
「実に、騎兵達の勇敢な心をより勇敢にする刺激と成るものは何か？　考えた事が有りますか？」
次のように騎兵隊長は話した。
「今まで考えた事が無かったので、すぐに、失った時間の埋め合わせをするように試みるつもりです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どうしたら部下からの服従を確保できるか熟考して少しでも頭を悩ませた事が有りますか？」
「なぜなら、部下からの服従無しでは、騎兵隊長である、あなたは、馬も騎兵も、とても勇敢でも、とても強くても、少しも信用できないからです」
次のように騎兵隊長は話した。
「それは正しい発言です」
「では、ソクラテスよ、服従、従順は美徳ですが、どうしたら人は最も善く、部下が服従する気に成るようにさせる事ができるのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「『どんな物事においてでも、人々は、熟練者と見なしている相手の指導には、より従いやすい』と多分あなたは知っている、と私ソクラテスは思っています」

「このように、病気の場合は、人々は、最も賢明で巧みな医者と見なしている相手には、従う用意が最も出来ている」
「また、同様に、航海では、最も熟練した巧みな操舵手と見なしている相手には、人々は従いやすい」
「また、農業の問題では、最も良い農業従事者と見なしている相手には、人々は従いやすい」
「などのようにね」
次のように騎兵隊長は話した。
「ええ、確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「そのため、騎兵隊からの服従の問題でも、『騎兵隊長の仕事を最も良く知っていると見なされている騎兵隊長は、最も用意が出来ている服従、忠誠を集める』と論理的に考える事ができます」
次のように騎兵隊長は話した。
「では、もし私が『私は騎兵達の全ての人よりも優れている』と騎兵達に示す事ができたら、騎兵達からの服従を勝ち取るのには、十分なのだろうか？」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、それと共に、もし、あなたが『あなたへの服従は、より大いなる栄光と、より確実な安全を騎兵達にもたらす』と思い知らせる事ができたら、ですが」
次のように騎兵隊長は話した。
「どうしたら、そのように騎兵達に思い知らせる事ができますか？」
次のようにソクラテスは話した。

「(神に)誓って！」
「『どうしたら、そのように騎兵達に思い知らせる事ができるか？』」
「私ソクラテスが思うに、『悪は、善よりも優れているし、その上、より有利である』と(いう嘘、誤りを)教えなければいけない羽目に成るよりも、遥かに、より簡単である」
次のように騎兵隊長は話した。
「私が思うに、『騎兵隊長としての他の能力に加えて、騎兵隊長は、演説や議論の自由自在な運用能力も持つ必要が有る』と、あなたソクラテスは言いたいのですね？」
(「私が思うに、『騎兵隊長としての他の能力に加えて、騎兵隊長は、自身の考えを明確に論理的に話す、弁論の技も訓練する必要が有る』と、あなたソクラテスは言いたいのですね？」※別の版)
次のようにソクラテスは話した。
「『指揮官は口を開いてはいけない』とでも思い込んでいたのですか？」
「『慣習として人が学ばざるを得ないし、人生での知識という恩恵を本当に人にもたらしている、全ての気高いものを、全て人は言葉と論理によって学んできたのである』という考えが浮かんだ事は無いのですか？」
「そして、人が学ぶ事ができる全ての他の気高い知識も、存在したら、同一の論理で、言葉と論理によって人は学ぶのである」
「そして、最善の教師とは、思考と言葉の最も自由自在な運用能力を持つ人である」
「そして、最重要なものについての最善の知識を持つ人は、議論の最も優れた教師である」

「また、『例えば、ちょうど、都市アテナイは合唱隊をデロス島へ派遣しているように、都市アテナイが備えている、どの合唱隊でも、都市アテナイの合唱隊に並ぶ事ができる合唱隊は、どの都市にも、世界の、どこにも、存在しない』と、気づいていないのですか」

「また、都市国家アテナイと同じくらい正しく、精鋭の人を集めた他の都市国家を見つける事はできないですよね？」

次のように騎兵隊長は話した。

「あなたソクラテスは正しく話しています」

次のようにソクラテスは話した。

「しかし、それにもかかわらず、アテナイ人が、世界の他の人達との違いがとても大きいのは、声の甘美さにおいてでもなく、肉体の身長においてでもなく、手足の強さにおいてでもなく、栄光への野心と愛においてなのです」

「栄光への野心と愛は、何よりも、(真に)美しいものと大いなる敬意を探求する鋭さを精神にもたらす」

次のように騎兵隊長は話した。

「これも正しい事を言っていますね」

次のようにソクラテスは話した。

「では、もし、ここアテナイでアテナイ人が自国の騎兵隊をも愛するのであれば、ただ『自国の騎兵隊を愛する事によって栄光を獲得できる』とアテナイ人に信じさせる事ができただけで、武器と馬の供給においてでも、陣形、戦闘隊形の秩序正しさにおいてでも、敵との危険だが熱意に満ちた交戦においてでも、アテナイ人は世界の他の人達を遥かに超越する事ができる、と思いませんか？」

次のように騎兵隊長は話した。

「そう思うのは論理的ですね」

次のようにソクラテスは話した。

「そのため、ためらわずに、騎兵達と、あなた自身を『自国の騎兵隊を愛する』という道へ導くように試みなさい」

（「そのため、ためらわずに、騎兵達を『騎兵隊長にとっての利益や、騎兵隊長によって騎兵自身にとっての利益を必ず得られる』行動へ導くように試みなさい」※別の版）

「そうすれば、あなたによって、あなたの同胞の都市国家アテナイの市民達は利益を得られるだろう」

（次のように騎兵隊長は答えた。）

「はい。本当に、私は試みるつもりです」

第三巻 第四章（優れた善い商人は名将に成れる）（人を扱える知恵が重要）

別の、ある時、ソクラテスは、（公職の）選挙から戻る途中のニコマキデスを見て、次のように、ニコマキデスに尋ねた。
「誰が将軍に選ばれたのですか？　ニコマキデスよ」
すると、次のようにニコマキデスは話した。
「いかにも彼ららしい！　いかにも都市国家アテナイ市民らしいではないか！」
「私ニコマキデスが『いかにも彼ららしい！』と言っているのは、選挙に行っても、この私ニコマキデスを選ばない事なのです！」
「（私ニコマキデスの）名前が兵員名簿に最初に載ってからずっと、今でも一指揮官として、私ニコマキデスは、文字通り、兵役で疲れ果てて（しまうほどアテナイ人のために尽くして）きました」
「私ニコマキデスが受けてきた、これらの傷は全て、敵からの物なのです！見てください！」
（言葉と同時に、言葉に合った行動をして、ニコマキデスは腕をむき出して、古傷の傷跡を見せた。）
（次のようにニコマキデスは話を続けた。）
「彼ら、アテナイ人は、この私ニコマキデスを選ばず、驚いた事に、アンティステネスを選んだのです！」
「アンティステネスは、生涯で重装歩兵として貢献した事が一度も無いし、騎兵として異彩を放つ手腕を発揮した事が一度も無いし、私ニコマキデスは、

『アンティステネスは騎兵として異彩を放つ手腕を発揮した事が有る』とアンティステネスについて話されているのを聞いた事が一度も無い」
「無いのです！」
「『実際、アンティステネスは、富を蓄える以外は、全く知識が無い』と私ニコマキデスは思っています」
(次のようにソクラテスは言い返した。)
「しかし、やはり、確かに、それ(、富を蓄える知恵が有るの)は、アンティステネスに有利な点の一つです」
「アンティステネスは、軍隊に補給物資を供給する事ができるはずである」
次のようにニコマキデスは話した。
「ええ、そういう事に関しては、商人は富を蓄えるのが上手いです」
「しかし、その結果、『商人は軍隊を指揮できる』という事には成らないのです」
(次のようにソクラテスは言い返した。)
「アンティステネスは、勝利を求める、大いなる不屈の忍耐力が有る人で、これ(、勝利を求める忍耐力)は、将軍に、とても必要な資質である」
「『アンティステネスは、合唱隊の指導者に成ると毎回、次々と合唱隊を成功させてきた』のをあなたニコマキデスは、どう思いますか？」
次のようにニコマキデスは話した。
「神よ！」
「ええ」
「しかし、歌手達や踊り子達の集団の指導者として立つ事と、兵士達の軍隊の指導者として立つ事には、大きな違いが有るのです」
次のようにソクラテスは話した。

「それでも、歌や合唱の教育の実務経験による全ての技術無しに、どういうわけか、アンティステネスには、最高の熟練者を選び出す事ができる技術が有りました」

次のようにニコマキデスは話した。

「ええ、では、『同様の理由によって、軍事行動中に、アンティステネスは、熟練者を見出す事ができて、ある熟練者達はアンティステネスのために軍隊を配置でき、他の、ある熟練者達はアンティステネスの戦争を戦う事ができる』と推測できるでしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「まさに、そう推測できます」

「合唱隊の事において示したように、軍事的な事においてアンティステネスが同様に最高の手腕を持つ人達を選び出す事ができる技術を示すだけで、アンティステネスが、ここ(、軍事)でも勝利を勝ち取るのは、大いに有り得るでしょう」

「また、『アンティステネスは、唯一の一族と共に、合唱の勝利を勝ち取るために、とても多額の金銭を使ったので、アンティステネスを(将軍として)支持してくれた国家全体と共に、戦争での勝利を確実にするために、より多額の金銭を使う用意が有るだろう』と推測できます」

次のようにニコマキデスは話した。

「『同一の人の唯一の機能が、有能な合唱隊と、指揮官、将軍としての働きをもたらす』と本当に言うつもりですか？　ソクラテスよ」

次のようにソクラテスは話した。

「『供給する必要が有るものを知っている人に、そうするための技術が有れば、家、都市国家、軍隊といった、どんな分野でも、同様に、その人は優れた指導者である、と分かる』と私ソクラテスは言いたいのです」
するると、次のようにニコマキデスは話した。
「(神に)誓って、ソクラテスよ、あなたソクラテスが『家政に優れた者や、優れた財産管理人は、優れた名将に成れる』と言うのを、私ニコマキデスが聞く事に成るとは決して予想できませんでした」
（「神に誓って、ソクラテスよ、あなたソクラテスが『優れた経済学者や、優れた財産管理人は、優れた名将に成れる』と言うのを、私ニコマキデスが聞く事に成るとは決して予想できませんでした」※別の版）
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスと、あなたニコマキデスで、(商人と、将軍の、)それぞれの務めを調べて、それらが同様であるか違うかを明らかにしてもよいですが」
次のようにニコマキデスは話した。
「そうしましょう」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、命令に対する部下からの忠誠をすぐに手に入れる事は、(商人と、将軍の、)両方に共通する務めではありませんか?」
次のようにニコマキデスは話した。
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、特有の務めを成し遂げるための能力が有る最高の人達に担当させる事も、(商人と、将軍の、)両方に共通する務めではありませんか?」

(次のようにニコマキデスは答えた。)
「それも、同様に、両方に共通する物ですね」
次のようにソクラテスは話した。
「さらに、『悪い人を罰して懲らしめ、優れている善い人に報いる事は、同様に、(商人と、将軍の、)両方に共通する物である』と私ソクラテスには思われますが?」
次のようにニコマキデスは話した。
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、部下からの思いやりの気持ちを勝ち取る事は、確実に、(商人と、将軍の、)両方に共通する気高い野心であるはずですね?」
(次のようにニコマキデスは答えた。)
「それも、そうですね」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『味方からの支持を勝ち取るのは、同様に、(商人と、将軍の、)両方の利益と成る』と考えますか?」
次のようにニコマキデスは話した。
「疑い無く」
次のようにソクラテスは話した。
「では、(富や部下や農場などと、兵士、部下という、)それぞれの世話をする対象にとっての善良な守護者であるべき事は、(商人と、将軍の、)両方に密接に関係していますか?」
次のようにニコマキデスは話した。
「とても大いに、そうです」

次のようにソクラテスは話した。
「では、行うべきである全ての事で労を惜しまず労苦するべきである事は、(商人と、将軍の、)両方に等しく関係しますね？」
次のようにニコマキデスは話した。
「ええ、これらの全ての務めは、同様に、(商人と、将軍の、)両方に共通する物です」
「しかし、実際の現実の戦いに至ると、(商人と、将軍の、)類似は終わりを迎えます」
次のようにソクラテスは話した。
「しかし、(商人と、将軍の、)両方共、敵対者達と戦う事は確実ですよね？」
次のようにニコマキデスは話した。
「敵対者達と戦う事は、疑い無く、(商人と、将軍に、)存在しますね」
次のようにソクラテスは話した。
「では、敵対者達を圧倒する事は、(商人と、将軍の、)両方に共通する利益ではありませんか？」
次のようにニコマキデスは話した。
「確かに」
「しかし、実際の現実の戦いに至った時に、軍隊の組織と、経営の技術が何をもたらすかを、あなたソクラテスは故意に教えていませんよね」
次のようにソクラテスは話した。
「何だって」
「まさに、その(戦いの)時に、多分、最も役に立ちます」

「なぜなら、優れた経済学者は、『戦いでの勝利と同じくらい有益な物は無いし、逆に、敗戦と同じくらい悲惨で大損な物は無い』と知っているからである」

「優れた経済学者は、勝利の助けと成る全てのものを熱心に探求して供給してくれるだろう」

「優れた経済学者は、敗戦に役立ってしまう全てのものを、労を惜しまず発見して予防してくれるだろう」

「そして、満足に全てのものを用意して勝利への用意を整えた時に、優れた経済学者は、精力的に戦うだろう」

「そして、それと等しく重要なのは、(戦いに勝利するための)用意が終わりに達する時まで、優れた経済学者は、戦わないように用心する事である」

「経済の天才である人を見下すなかれ、ニコマキデスよ」

「私事に必要な献身と、国事に必要な献身には、規模という唯一の違いしか無いのです」

「私事に必要な献身と、国事に必要な献身は、規模以外は、類似は密接であるし、『両方共、人の手段に関係している』という、この点において類似は顕著である」

「さらに、公事、国事への献身について言ってみても、私有財産の管理について言ってみても、人々の型や性質は唯一なのである(、と言える)」

「(私事と、国事の、)どちらの場合でも、人を扱うための秘訣を知っている人達は、上手くやっていく事ができる」

「逆に、(私事と、国事の、)どちらの場合でも、同様に確実に、人を扱うための知識の不足は、不和の致命的な要素を必ず伴ってしまう」

第三巻 第五章（恐怖は従順と秩序と専心の好機）（慢心による無秩序と反抗に注意）（慢心による堕落に注意）（優れた先祖や最前線にいる競争相手を学べ）（無学な上位者は反抗を招く）（天然の要塞の活用と奇襲の勧め）

ここで、大いなる政治家である大ペリクレスの、息子である小ペリクレスと（ソクラテスの間で）行なわれた会話を（私クセノフォンは）紹介できる。

（ある時、ソクラテスは、小ペリクレスという人へ話しかけた。※別の版）

次のようにソクラテスは話し始めた。

「小ペリクレスよ、あなたが、軍事の長官（である将軍）に成ったので、我々の都市国家アテナイの軍事を大いに向上させるのを、私ソクラテスは、楽しみにしている、と言わなければいけない」

「アテナイの栄光が高まるだろう、と私ソクラテスは期待しています」

「我々の都市国家アテナイは敵対者達を圧倒するだろう」

次のように小ペリクレスは応えた。

「あなたソクラテスの言葉が実現するのを、私、小ペリクレスは、心から望んでいますが、どうしたら、そのような幸せな結果を獲得できるのか、知るのに困っています」

（次のようにソクラテスは話を続けた。）

「賛否を議論して調和させて、可能性が、どの程度、存在するか考えてみましょう」

（次のように小ペリクレスは答えた。）

「ぜひ、そうしましょう」

次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、人数という点では、アテナイ人は、ボイオティア人に劣っていない、と知っていますか？」
次のように小ペリクレスは話した。
「はい、知っています」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ボイオティア人は、(心の)美しい健全な人達のうち、アテナイ人よりも、より優れた選び抜かれた人をもたらす事ができる、と思いますか？」
次のように小ペリクレスは話した。
「その点では、我々アテナイ人は、とても良く持ちこたえている、と思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、アテナイ人と、ボイオティア人という二つのうち、どちらが、より一致団結している、より仲が良い人々である、と思いますか？」
次のように小ペリクレスは話した。
「アテナイ人が、より一致団結している、より仲が良い人々である、と私、小ペリクレスは思います」
「なぜなら、ボイオティア人の非常に大部分の人達が、テーバイ人の利己的な政策に怒っていて、テーバイ人の支配に悪感情を抱いていますが、アテナイでは、そのような事は何も無い、と私、小ペリクレスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『(アテナイ人よりも、)より名誉を大事に守る人々、また、より誇り高い精神の人々はいない』と多分あなた小ペリクレスは思うだろう」

「そして、このような気持ちは、愚鈍な精神の持ち主ですら、栄光のために、また、祖国のために、全てを賭けるように高めるように鼓舞する強さと成るのである」

次のように小ペリクレスは話した。

「そして、この点において、アテナイ人に大きな落ち度は無いのです」

次のようにソクラテスは話した。

「また、先祖の善行を熟考すれば、(善行を)鼓舞する記憶という、とても豊富な伝承に属する人々は、我々アテナイ人以外にはいないのである」

「そして、先祖の善行によって、我々アテナイ人のうち、とても多数の人達が、善行を献身的に追求するように鼓舞されているし、自身も先祖のような勇者であると示すように鼓舞されているのである」

次のように小ペリクレスは話した。

「ソクラテスよ、あなたの話は全て、もっともな真実です」

「しかし、トルミデス指揮下の千人のアテナイ人の重装歩兵によるボイオティア人に対しての紀元前四百四十七年の『コロネイアの戦い』の大失敗からずっと、ボイオティアのデリウムまたはデリオンでの紀元前四百二十四年の『デリウムの戦い』または『デリオンの戦い』でのアテナイのヒポクラテス指揮下の千人のアテナイ人の戦死も重なって、アテナイの栄光は、ボイオティア人と比べて、下落してしまっているのを、あなたソクラテスは気づいていますか?」

「一方、テーバイの気運も、アテナイと比べて、アテナイの栄光の下落に応じて、高まってしまっています」

「そのため、ボイオティア人は、昔は、ラケダイモン人と自称しているスパルタ人と、ペロポネソス半島の他の都市国家に助けてもらえなければ、自分

の領土内でさえも、アテナイ人と戦う危険は冒さなかったが、今では、独力で、アッティカ地方内へ侵略して、アテナイ人を脅かしてしまっています」

「そのため、アテナイ人は、昔は、ボイオティア人だけをあしらうのであれば、ボイオティア人の領土を荒らしたが、今では、『ボイオティア人は、いつか、アッティカ地方を蹂躙してしまうかもしれない』と恐れてしまっています」

　その言葉に対して、次のようにソクラテスは話した。

「ええ、私ソクラテスも、そうであると気づいています」

「しかし、今くらい、都市国家アテナイが、より従順で、真に優れた指導者にとって機が塾している時は無い、と私ソクラテスには思われるのです」

「なぜなら、仮に勇気が不用意、気のゆるみ、不従順の原因に成ってしまうのであれば、恐怖の方は人々をより専念する気にさせるし、従順に成る気にさせるし、秩序良くする気にさせるからである」

「その証拠を船上の人々の行動で知る事ができます」

「恐れるべきものが無い、穏やかな天候の時期には、無秩序が支配的である、と言えます」

「しかし、嵐への恐れが有るか、視界に敵がいると、すぐに、状況は変わります」

「命令の言葉が各々守られるだけではなく、暗黙の期待が静かに存在します」

「合唱隊が指揮者を見るように、船乗り達は次の合図をとらえようと待機します」

　次のように小ペリクレスは話した。

「では、実に、『今が良い潮時として従順に成る好機である』と考えると、今とは、どのような方法で、古くからの勇気、栄光、昔の時代の良い状態を熱望する、古くからの同胞の心の火に、再び火をつけるのか、説明するべき時でもあります」

（次のようにソクラテスは話を続けた。）

「ええ、今は他の民族にとられてしまっている、それらの物質的な富をアテナイ人に獲得させたいと望むのであれば、『それらの富は、アテナイ人には当然の権利が有る、先祖からの財産である』とアテナイ人に明らかにする方法こそが、切望している諸物をアテナイ人に獲得させようと鼓舞する事ができる最良の方法なのです」

「ただし、私ソクラテスと、あなた小ペリクレスの目的とは、高徳な超越へアテナイ人の心を向けさせる事なので、『徳と結びついている、このような主権は、全ての他の民族を超越してアテナイ人に付属されている、古くからの遺産なのである』とアテナイ人に証明する必要が有ります」

「そうして、もしアテナイ人が、それらの富を得ようと真剣に努力すれば、アテナイ人は、すぐに、世界の最高位に成るだろう」

次のように小ペリクレスは話した。

「どうしたら、このような知恵を教え込む事ができるでしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「アテナイ人の記憶に今も残っている、『名前が知られているアテナイ人の最古の先祖達も最も勇敢な英雄達であった』という事実をアテナイ人に思い出させる事によって、『このような知恵を教え込む事ができる』と私ソクラテスは考えています」

（「アテナイ人に今でも知られている、『名前が知られているアテナイ人の最古の先祖達も最も勇敢な英雄達であった』という事実をアテナイ人に思い出させる事によって、『このような知恵を教え込む事ができる』と私ソクラテスは考えています」※別の版）

次のように小ペリクレスは話した。

「『(都市国家アテナイの最初の王である)ケクロプスと家臣達は、ケクロプス達が高徳であったので、(戦闘的な知恵の女神アテナと海神ポセイドンが、どちらかをアッティカ地方のアテナイ人に崇拝させるために競争した)裁判の判決を神々が下すために(証人として)呼ばれた』のをあなたソクラテスは言及する、と私、小ペリクレスは思います」

（

ケクロプスは後に「アテナイ」と呼ばれる都市国家の最初の王に成った。

アッティカ地方のアテナイ人に自身を崇拝させるために、まず、海神ポセイドンはアクロポリスに海水の泉を創造し、次に、戦闘的な知恵の女神アテナはケクロプスを証人としてオリーブの木を植えた。

主神ゼウスがアテナとポセイドンの競争を仲裁して、神々がアテナとポセイドンの競争を裁判した。

神々の裁判でケクロプスはアテナに有利な証言をした。アテナは、ポセイドンとの裁判に勝ってアッティカ地方を所有し、「アテナ」という名前からケクロプスの都市を「アテナイ」と名づけた。

アテナとの裁判に負けたポセイドンは怒ってアッティカ地方を海水で水浸しにした。

ケクロプスは下半身が蛇である象徴的な姿で壷などに描かれている。

ケクロプスは、ゼウスへの捧げ物を動物から菓子へ変えた。

ケクロプスは、アテナを崇拝するようにアテナイ人に勧めた。
)
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、それと、(アテナイの王の一人である)エレクテウスの誕生と生い立ちと、エレクテウスの治世での、ちょうど陸続きの都市エレウシスからの侵略の流れを止めた戦いにも、私ソクラテスは言及します」
「また、ペロポネソス半島の人達に対する『ヘラクレイダイ』の時代の、あの他の戦いにも、私ソクラテスは言及します」
「また、(アテナイの王)テーセウスの時代の、あの一連の戦いにも、私ソクラテスは言及します」
「これらの全てにおいて、我々アテナイ人の先祖の、同時代の人達を超越している、高徳な超越性が明らかにされています」
「また、よろしければ、アジア、いえ、ヨーロッパ、マケドニアまでの王者達との戦いで行われた、アテナイ人の先祖の子孫の後日談や、現在から、あまり古くない時代の英雄達の後日談に、我々アテナイ人は言及する事もできます」
「アテナイ人の先祖の人達は、過去の全ての人達を遥かに超越している力と戦闘手段を所有していました」
「さらに、アテナイ人の先祖の人達は、最も勇敢な行為を成し遂げてきました」
「アテナイ人(の先祖)は、これらの事、陸と海で勝ち取った栄光を、一部は独力で行い、一部はペロポネソス人と共有しました」
「伝説によると、アテナイ人の先祖も、同時代の人達よりも遥かに優れている、英雄であったのである」

次のように小ペリクレスは話した。

「ええ、そのように、アテナイ人の先祖の英雄的行為の話は記されています」

次のようにソクラテスは話した。

「定住者達による多くの変化の最中や、ギリシャ人が『ヘラス』と呼んでいる『ギリシャ人の地』に次々と押し寄せてきた移住者達による多くの変化の最中、アテナイ人の先祖の英雄的行為によって、アテナイ人の先祖は自分達の土地でアテナイ人達を保持し、不動だった」

「そのため、外国人達が、正義という点における訴訟のための法廷として(アテナイに)頼ったり、避難所としてアテナイへ抑圧者の手から逃げたりするのは、一般的な事であった」

すると、次のように小ペリクレスは話した。

「では、『どうして我々の都市(国家)アテナイがずっと衰退してしまったのか?』と私、小ペリクレスには不思議に思われます、ソクラテスよ」

次のようにソクラテスは話した。

「『アテナイ人は自分達の(過去の)成功の虜(とりこ)に成ってしまっている』と私ソクラテスは考えています」

「競技場で楽々と成し遂げてしまった優勢によって、自分よりも弱い競争相手にいつか負けるまで、自身を誤って弛緩(しかん)させてしまった、ある競技選手のように、同様に、我々アテナイ人も、豊かな優勢によって、自身の世話をおろそかにしてしまって、衰退してしまったのです」

次のように小ペリクレスは話した。

「では、以前の美徳を取り戻すために、我々アテナイ人は、どうするべきですか?」

次のようにソクラテスは話した。

「『以前の美徳を取り戻す事について不思議がる必要は無い』と私ソクラテスは考えています」

「我々アテナイ人は、先祖の規則を再発見する事ができます」

「アテナイ人の先祖の規則を我々アテナイ人の人生の規則に幾らか厳密に適用すれば、(アテナイ人の先祖と)同様の成功が可能なはずです」

「また、我々アテナイ人は、現状の最前線にいる人達を手本にできます」

「現状の最前線にいる人達の人生の規則を我々アテナイ人の人生の規則に(手本として)適用した場合、我々アテナイ人が手本の規範に従って行動すれば、我々アテナイ人は、『現状の最前線にいる人達の優勢に匹敵できる』と少なくとも期待できますし、(現状の最前線にいる人達よりも、)より入念に、現状の最前線にいる人達の目的を固執する事によって、(アテナイ人の)優勢を復活させる事ができます」

(次のように小ペリクレスは応えた。)

「『美しく勇敢な男性らしい資質という精神が翼を得て我々の都市(国家)アテナイを去ってしまった』と、あなたソクラテスは、ほのめかしているように思われます」

(「『美しく勇敢な男性らしい資質という精神が翼を得て我々の都市国家アテナイから遥か遠くに離れ去ってしまった』と、あなたソクラテスは、ほのめかしているように思われます」※別の版)

「例えば、『自分の父を軽視の出発点としてしまっている、あるアテナイ人は、白髪(の老人)を軽視してしまっているが、いつに成ったらアテナイ人達は、ラケダイモン人と自称しているスパルタ人のように、老人を畏敬するのだろうか?』のように」

「善い習慣の軽視に満足せず、善い習慣をするように注意している人達を笑いものにしてしまう、あるアテナイ人は、いつに成ったら、同様に、厳密に、肉体に注意を払うのだろうか？」

「言ってみれば、アテナイ人達は権力を軽視する事を誇っているが、いつに成ったらアテナイ人達は、公職の人達に従うのだろうか？」

「さらに、共通の利益を増進するために協力せず、世界の全ての人達に嫉妬する上に、相互に嫉妬し合って、相互に評判を傷つけ合って楽しむ我々アテナイ人達は、いつに成ったら、アテナイ国民として一致団結するのだろうか？」

（「さらに、共通の利益を増進するために協力せず、世界の全ての人達に嫉妬する上に、相互に嫉妬し合って、相互に意地悪く扱い合って楽しむ我々アテナイ人達は、いつに成ったら、アテナイ国民として一致団結するのだろうか？」※別の版）

「また、これはアテナイ人の最悪の失敗であるが、個人的な交流でも公的な交流でも同様に、意見の相違で分裂してしまって、訴訟という迷路にとらわれてしまって、隣人の苦難に自然な援助を与えるよりもむしろ、隣人の苦難を利用してしまうのを好んでしまうのは、誰か？（現在の堕落したアテナイ人である！）」

「アテナイ人は、自分達の行動を一致させるのに、自国アテナイの利益が何らかの外国と利害関係に有る場合は、実に、自国アテナイの利益を外国の利益も同然に扱ってしまう」

「アテナイ人は、自国アテナイの利益を口論の骨子にしてしまって、口論に勝つ味わいを楽しむ事ができる手段と能力を所有する事を何よりも喜んでしまう」

「この口論という悪の温床から、愚かな臆病な盲目の精神が、(都市)国家に生じてしまいます」

「そして、都市国家の市民の心の中に、憎悪と相互の敵意による、もつれが広がってしまいます」

「『国民の心の相互の憎悪と敵意は、いつの日か、国家に降りかかる、何らかの、国家が持ちこたえる事ができないほどの大いなる災いをもたらすだろう』と私、小ペリクレスは時々考えて、身震いしています」

(次のようにソクラテスは応えた。)

「どうか、『非常な不治の堕落のせいでアテナイ人は神罰を受けて滅ぼされる』と思い込む事を自ら許すなかれ」

「全ての船の苦難におけるアテナイ人の節制、自制心をあなた小ペリクレスは認めないのですか?」

「諸々の体操競技でアテナイ人が指導監督者に迅速に規則正しく従うのを見てください」

「アテナイの諸々の合唱隊の訓練でアテナイ人が教師に完全に他の追随を許さずに従うのを見てください」

(次のように小ペリクレスは答えた。)

「ええ、それらを不思議に思っていました」

「全てのアテナイの善良な国民は指導者に非常に従うのを考えると、多分、他の都市国家アテナイ市民よりも上位であるべき、アテナイの重装歩兵達と騎兵隊は、規則に非常に全く素直に従わないのです」

するると、次のようにソクラテスは話した。

「ええ。しかし、『アレオパゴス会議』は、『善良である』と認められた都市国家アテナイ市民で構成されています。そうではありませんか?」

（次のように小ペリクレスは答えた。）

「確かに」

次のようにソクラテスは話した。

「では、（『アレオパゴス会議』よりも、）より栄光が大きく、より厳しく法を守って、より高貴に、より公明正大に、裁判する（『アレオパゴス会議』と）同様の何らかの司法の団体や、裁判以外の他の務めを行う（『アレオパゴス会議』と）同様の何らかの行政の団体の、名前をあなた小ペリクレスは挙げる事ができますか？」

（次のように小ペリクレスは答えた。）

「いいえ。私、小ペリクレスは、その点において、『アレオパゴス会議』に欠点を見つける事ができません」

次のようにソクラテスは話した。

「では、まるで、同胞のアテナイ人達から、秩序正しい全ての感覚や、優れた節制、自制心が、消えて失くなったかのように、絶望するなかれ」

（次のように小ペリクレスは応えた。）

「ですが、唯一の弦しか無い竪琴を奏でる必要が無いのであれば、『落ち着きと節制、自制と、秩序正しさと優れた節制、自制心が、どこでも必要とされる、軍務において、（現在の堕落したアテナイ人は、）節制、自制心といった、これらの必要不可欠な特質に注意を払っていない』と私、小ペリクレスは主張します」

（次のようにソクラテスは尋ねた。）

「多分、この（軍務の）分野では、最も知識に乏しい者どもが、重装歩兵達と騎兵達を指揮してしまうのではありませんか？」

「竪琴の奏者達、合唱の演者達、踊り子達などの例を挙げると、『必須の知識が欠如している場合は、誰も指揮しようとは決して夢にも思わない』と気づきませんか？」

「また、レスリング選手達やパンクラチオン選手達の例を挙げても同様である」

「さらに、竪琴や合唱といった、これらの例では、全ての指揮者は、『指揮する物事の基礎知識をどこで取得したのか』を話す事ができるが、(現在の堕落したアテナイの)大多数の将軍どもは、未熟者どもで、即興で行きあたりばったりで指揮する者どもなのである」

「(ただし、)『あなた小ペリクレスも、そういった類(たぐい)の(無学な)将軍どもの一人である』とは私ソクラテスは全く考えていません」

「『あなた小ペリクレスは、レスリングの物事について明確に説明できるのと同じくらい、戦略や戦術について教わった教育について明確に説明できる』と私ソクラテスは信じています」

「疑い無く、あなた小ペリクレスは、あなたの父である大ペリクレスの『戦略や戦術の法則』を直接、習得して用心深く保持していますし、さらに、将来の将軍の役に立つ全ての知識を得る事ができる世界の全ての地域から大ペリクレス以外の他の多数の戦略や戦術の知識を収集してきています」

「さらに、『あなた小ペリクレスは、無意識ですら、非常に高位な将軍職の自分の役に立つ何らかの知識が無い事を避けようと深く願っている』と私ソクラテスは感じています」

「そして、あなた小ペリクレスは、もし自分に戦略や戦術の何らかの知識が無い事に気づいたら、知識が有る人達の知識によって、無かった知識を補完

するために、また、知識が有る人達の助けを確保するために、(贈り物と感謝を惜しまずに、)戦略や戦術の知識が有る人達を求めます」
その言葉に対して、次のように小ペリクレスは話した。
「ソクラテスよ、私、小ペリクレスは『私、小ペリクレスが戦略や戦術について本当に、とても注意を払っている、と、あなたソクラテスは考えて、これらの言葉を話した』と思うほど盲目ではありません」
「実に、むしろ、あなたソクラテスの目的とは、『将軍志願者は、これら戦略や戦術のような物事に注意を払う必要が有る』と私、小ペリクレスに教えることですよね」
「とにかく、私、小ペリクレスは、あなたソクラテスの話してくれた事を全て受け入れます」
次のようにソクラテスは話を続けた。
「ある高山という防壁が、我々の国アテナイの前の防護壁のように、ボイオティアまで広がっているのを、小ペリクレスよ、あなたは、かつて気づいた事が有りますか？」
「さらに、(その高山に、)裂け目が狭く断崖絶壁で通っています」
「(その高山の裂け目の)道は、アッティカ地方の中心にまで通っています」
「アッティカ地方は、天然の要塞である山々の輪で囲まれています」
次のように小ペリクレスは話した。
「確かに、私、小ペリクレスは、そのように気づいた事が有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、『(ペルシャの)大王の領土の中に住んでいるミュシア人とピシディア人は、天然の要塞である山の中にいて、軽装で、山を急降下できて、急襲によって(ペルシャの)大王の領土に多大な損害を与えるが、自分達の自

由を保持し続けている』と、あなた小ペリクレスは、かつて聞いた事が有りませんか？」
次のように小ペリクレスは話した。
「はい。その状況を聞いた事が有ります」
(次のようにソクラテスは言い加えた。)
「では、『若く健康で丈夫な肉体のアテナイ人の軍団は、より軽装を与えられて、山という天然の要塞である防壁を占拠すると、敵側をすぐに攻撃的に苦しめる事を証明するだろうし、一方、防御的に自国を守る見事な防壁を形成するだろう』と、あなた小ペリクレスは思いませんか？」
その言葉に対して、次のように小ペリクレスは話した。
「ソクラテスよ、『確かに、全く役に立つ手段である』と私、小ペリクレスは思います」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「では、もし、これらの私ソクラテスからの提案が、あなた小ペリクレスの承認を受けられたのであれば、おおっ、人々のうち最優である小ペリクレスよ、実現しようと試みてください」
「もし、あなた小ペリクレスが一部でも成し遂げたら、あなたの栄光と成るであろうし、国家アテナイへの恩恵と成るであろう」
「もし、あなた小ペリクレスが何らかの点で失敗しても、都市(国家)アテナイにとって何の損害にも成らないであろうし、あなたにとって不名誉にも成らないであろう」

第三巻 第六章（国家の指導者に必須の知識）（「一事が万事」）（知識外についての言動は危険）

アリストンの息子であるグラウコンは、国家の指導者の地位を獲得したいという情熱をとても抱いてしまっていたので、何ものもグラウコンを妨げる事ができない始末であった。

実に、グラウコンは、未だ二十歳に成っていないにもかかわらず、公に演説を行いたがってしまった。

グラウコンは笑いものにされて演壇から引きずり降ろされていたが、グラウコンの友人達や血縁者達がグラウコンを止めようと試みても無駄だった。

（グラウコンの叔父であるカルミデス、）グラウコンの祖父である同名のグラウコンの息子であるカルミデスと、グラウコンの弟であるプラトンのおかげで、若者グラウコンに好意的な興味を持っていた、ソクラテスだけが、グラウコンの制止に成功した。

次のようにソクラテスはグラウコンを制止した。

ソクラテスは、グラウコンに同調して、まず、話をグラウコンに聞いてもらうために、いくつかの次のような言葉で、グラウコンを引き留めた。

（ソクラテスは、グラウコンに同調して、まず、グラウコンが聞く事しか選べない次のような言葉で、グラウコンに話しかけて、グラウコンを引き留めた。※別の版）

（次のようにソクラテスは大きな声で話しかけた。）

「ああっ、グラウコンよ、それでは、国家の指導者に成る事を決意したのですか？」

次のようにグラウコンは話した。
「ええ、ソクラテスよ、私グラウコンは決意しました」
次のようにソクラテスは話した。
「また、何と気高い目標だ！」
「そもそも、何か、もし人が『気高い』と呼ばれるのに値するのであれば」
「なぜなら、」
「もし、あなたグラウコンが目的を成就すれば、結果として、」
「あなたグラウコンは、昼が夜のように成るように自分の全ての望みを満足させる事ができるだけではなく、友人達に利益をもたらせる地位にいる事に成るであろう」
「あなたグラウコンは、あなたの父の家(の栄光)を高めるであろう」
「あなたグラウコンは、祖国アテナイの栄光を高めるであろう」
「最初は都市アテナイで高名に成るであろうし、次にギリシャ人が『ヘラス』と呼んでいる『ギリシャ人の地』で高名に成るであろうし、最後に多分テミストクレスのようにギリシャ人以外の間ですら有名に成るであろう、というように、三度、あなたグラウコンは有名に成るであろう」
「実に、ここでも、あそこでも、あなたグラウコンは、どこにいても、全ての人に注目されるであろう」
グラウコンはソクラテスのその言葉に聞きほれて、グラウコンの心は思い上がりで膨らみ、グラウコンは喜んでソクラテスの話を聞くために留まった。
すぐに、次のようにソクラテスは話を続けた。
「では、グラウコンよ、あなたは、都市国家アテナイから栄光を受け取りたいと熱望しているのだから、都市国家アテナイに利益をもたらす必要が有るのは、明らかですよね？　そうではありませんか？」

次のようにグラウコンは話した。
「疑い無く、そうですね」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、全ての神聖であるものにかけて！　あなたグラウコンは、秘密にせず、『第一に、国家に利益をもたらす、どんな方法を提案するのか？』を教えてください。あなたグラウコンの(政策の)起点は、どういった物ですか？」
(「では、全ての神聖であるものにかけて！　あなたグラウコンは、秘密にせず、『国家に利益をもたらす方法の起点は、どういった物であるのか？』を教えてください」※別の版)
グラウコンが、まるで今、初めて「(政策の)起点は、どういった物であるべきか？」を熟慮しているかのように、口を堅く閉ざしたままでいると、次のようにソクラテスは話を続けた。
「多分、もし、あなたグラウコンが友人の財産を増やしてあげたいと望んだら、友人の財産を増やしてあげようと試みますよね？　そうではありませんか？」
「そのため、多分、あなたグラウコンは、国家(自体)の財産を増やしてあげようと試みるつもりなのですよね？」
(次のようにグラウコンは答えた。)
「確かに、そうです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『国家の収入が増えるのに比例して、より豊かに国家は発展する』と思って良いですよね？」
次のようにグラウコンは話した。

「少なくとも、十中八九、そうだと思います」
　次のようにソクラテスは話した。
「では、どうか、『どのような収入源から国家の収入は現在、得られているのか？』、また、『国家の収入の現在の規模は、どれくらいか？』を教えてください」
「疑い無く、あなたグラウコンは、もし国家の収入のうち何かが不足したら不足額を補充できるように、また、もし何らかの理由で無視されていた国家の収入が有れば何らかの新しい法律の条項を作(って課税す)る事ができるように、国家の収入という問題を用心深く調べましたよね」
(「疑い無く、あなたグラウコンは、もし国家の収入のうち何かが不足したら不足額を補充できるように、また、もし課税の対象から抜けていた不注意で見落とされていた他のものが有れば新しい法律へ交代させて課税する事ができるように、国家の収入という問題を用心深く調べましたよね」※別の版)
　次のようにグラウコンは話した。
「いいえ、正直に話すと、私グラウコンは、これらの国家の収入の問題について、全く調べた事がありません」
(次のようにソクラテスは話した。)
「もし、この国家の収入という点について忘れていていても、心配しないでください(。なぜなら、)」
「国家の支出項目を調べているならば人々の期待に応える事ができます」
「当然、不要である全ての支出を撤廃するように提案できますよね？」
　次のようにグラウコンは話した。
「ええと……。いいえ」

(神に)誓って、私グラウコンは、国家という問題のうち、(一方の収入だけではなく、)他方の支出も、どちらも未だ調べた事がありません」

次のようにソクラテスは話した。

「では、国家をより富ませるという問題を当分の間は延期しましょう(。なぜなら、)」

「収入と支出について知らずに、国家をより富ませるという問題に本気で対処する事は、当然、不可能だからです」

(次のようにグラウコンは話した。)

「ですが、ソクラテスよ、敵の金銭によって国家を富ませる事は可能ですよね！」

(次のようにソクラテスは答えた。)

「ええ、確かに、万が一、敵を圧倒した場合には(可能です)」

「しかし、(敵に)負けた場合には、(自国が)所有していたものを喪失する事も有り得るのです」

(次のようにグラウコンは応えた。)

「あなたソクラテスの意見は正しいです」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「そのため、政治家は、どの敵と戦うか決める前に、自国側が優勢の場合には戦争に着手する情勢へ変えるために助言による権力を振りかざす事ができるように、自国と敵国の相対的な力を知るべきなのです」

「また、逆の場合には(、自国が劣勢の場合には)慎重さを発揮する事を選んで主張できるように(、同じく、自国と敵国の相対的な力を知るべきなのです)」

(次のようにグラウコンは答えた。)

「あなたソクラテスは正しいです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスと、あなたグラウコン自身のために、まずアテナイの陸軍と海軍の軍事力を、そして諸々の敵国の陸軍と海軍の軍事力を挙げていってください」
次のようにグラウコンは話した。
「神よ！」
「準備無しでは、すぐには、話す事ができません」
(次のようにソクラテスは言い加えた。)
「または、もし、あなたグラウコンが自国と諸々の敵国の陸軍と海軍の軍事力の数値を紙に書いて学んでいたのであれば、その数値を書いた紙を提出しても良いです」
「私ソクラテスは、あなたグラウコンが提出するかもしれない紙の内容が分かると、とても安心できるはずです」
次のようにグラウコンは話した。
「いいえ、(神に)誓って、私グラウコンは紙に書いて自国と諸々の敵国の陸軍と海軍の軍事力について学んだ事は未だ全く無いのです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、とにかく、『処女演説』、『初当選者による最初の演説』で、平和や戦争という話題についての助言を営むのを延期しましょう」
「戦争という問題は大きいので、あなたグラウコンという国家の指導者には時期尚早で、あなたは、戦争や平和という問題について未だ調べた事が全く無いんですよね」

「しかし、ねえ、きっと『あなたグラウコンは、とにかく、国防について学んでいる』、また、『あなたは、有用な砦や前哨基地の数と、不要な砦や前哨基地の数を、正確に知っている』と私ソクラテスは思っています」

(「しかし、ねえ、きっと『あなたグラウコンは、とにかく、国防について学んでいる』、また、『あなたは、有利な位置に在る砦や前哨基地の数と、不利な位置に在る砦や前哨基地の数を正確に知っている』と私ソクラテスは思っています」※別の版)

「あなたグラウコンは、どの砦の守備隊が十分に強く、どの砦の守備隊が不完全であるかを教える事ができるはずです」

「また、あなたグラウコンは、有用な守備隊の増員と、不要な守備隊の一掃を支持して、あなたの助言という権力を振りかざす用意をしてありますよね？」

次のようにグラウコンは話した。

「ええ、『守備隊を全て一掃しなさい』というのが私グラウコンの助言です」

「実に！　守備隊がもたらす可能性が有る善いもののために！　諸々の農業地域の財産が(敵国の軍隊に)簡単に盗まれてしまう程度にしか(守備隊の)防衛力は維持されていないのです」

(次のようにソクラテスは尋ねた。)

「ですが、『仮に、あなたグラウコンが守備隊を一掃してしまったら、結果は、より悪く成ってしまうのではないだろうか？』と、あなたは考えませんか？」

「全ての悪人が思い通りに自由に完全に(アテナイの財産を)盗んでしまいませんか……？」

「しかし、『こんな意見は、(あなたグラウコンが、)個人的な視察から得た結果なのですか？』と私ソクラテスは尋ねても良いでしょうか？」
「あなたグラウコンは自ら赴いて守備隊について調べた事が有るのですか？」
「さもなければ、あなたグラウコンの言った通りに『(自国の財産が簡単に盗まれてしまう程度にしか)守備隊は全て、維持されていない』と、あなたは、どのようにして知ったのですか？」
次のようにグラウコンは話した。
「私グラウコンは、『そうである』と推測しているのです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、推測の域を出ない間は、国防という問題について、助言する事を延期しましょう」
(「事実、真実を知るための時間は十分に有るだろう」)
(次のようにグラウコンは応えた。)
「多分、その時まで待つのが、より良いでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「では、(アテナイには)諸々の鉱山が有りますが、『あなたグラウコンは、なぜ(アテナイ所有の)諸々の鉱山が以前よりも(鉱物資源の)産出量が少ないのか話す事ができるほど(アテナイ所有の)諸々の鉱山を直接、訪ねた事が無い』と私ソクラテスは当然、知っています」
(次のようにグラウコンは答えた。)
「ええ、いいえ。私グラウコンは自ら、そこ(、アテナイ所有の諸々の鉱山)にいた事が有りません」
次のようにソクラテスは話した。

「神よ！」

「皆の話によると、(鉱山は)健康に悪い地域です」

「そのため、アテナイの諸々の鉱山の鉱物資源の産出量の減少という話題についての助言を求められる機会が来たら、あなたグラウコンには、（『アテナイの諸々の鉱山を視察した事が無い』という、)お手軽な口実が有る事に成りますね」

(次のようにグラウコンは答えた。）

「あなたソクラテスが私グラウコンを馬鹿にしているのを私は理解していますよ」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、次の点を、『あなたグラウコンは怠った事が無い』と私ソクラテスは思っています」

「いえ、(それどころか、)あなたグラウコンは徹底的に調べた事が有って我々アテナイ人に教える事ができるだろう」

「農業地域からの穀物の供給、備蓄は、どのくらいの期間、都市国家アテナイを支える事ができますか？」

「『都市国家アテナイで、この(食料という穀物という)最重要な必需品が不足しないためには、一年間で、どのくらいの量が必要か？』というのを今までに、あなたグラウコンは十分に知っているはずですが」

「それどころか、あなたグラウコンは、完全な知識によって、自国アテナイを助けたり救ったりする事ができる、(食料という)非常に命に関わる問題についての助言を与える地位にいるだろう」

(次のようにグラウコンは答えた。）

「もし前述の全ての、細部にまで注意を払う義務が有るならば、これ(、国家の指導者)には、膨大な務めが有るのですね」

次のようにソクラテスは話した。

「他方、第一に、必要なものについて知らなければ、そして、第二に、必要なものを一つずつ徐々に補充するために労苦しなければ、人は、自分の家や自分の財産すら十分に管理できないのである」

「なぜなら、この都市国家アテナイは一万を超える多数の家庭(という小さい社会集団)で構成されてい(る国家という大きい社会集団であ)る」

「そのため、多数の家庭の全てに同時に細部にまで注意を払う事は簡単ではない」(国家の指導者の務めは簡単ではない。)

「なぜ、あなたは、これらの(一万を超える家庭の)うち、少なくとも一家庭の財産を増やす試みを自ら実践しないのか？　その『一家庭』とは、あなたグラウコンの叔父の家を指しています」

「(あなたは、)務めを放棄しています」

「さらに、もし一つの事で、あなたの力が十分であれば、あなたは、より多数の事を引き受ける事ができる事に成るのである」(「一事が万事」である。)

「もし、あなたが一つの事を改善できなければ、どうして多数の事で、あなたは成功できると期待なんかできるのか？　いいえ！　期待できない！」

(「一事が万事」である。)

「もし、ある重さのものを運ぶ事ができない人が、二倍の重さのものを運ぼうと試みたら、何と愚かな人である事か！」

次のようにグラウコンは話した。

「いえ、私グラウコンとしては、もし私の助言を聞き入れるように(ソクラテスか、誰かが)私の叔父を説得しさえしてくれたら、私は自発的に十分に私の叔父の家を助けます」

次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたは、自分の叔父を説得できない場合、『叔父などの全アテナイ人を自分に従わせる事ができるだろう』と思うのですか？」

(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「名誉、名声を熱望して、逆に、不名誉な人、評判が悪い人に成らないように気をつけなさい、グラウコンよ」

「『人にとって、自分の知識の範疇を超えて話したり行動したりしてしまうのは、何と危険な事であるか』分からないのですか？」

(「『人にとって、知らないものについて話したり、知らないものに手を出したりしてしまうのは、何と危険な事であるか』分からないのですか？」※別の版)

「明らかに自分の知識の範疇を超えて話したり行動したりする者どもについて、知られている事実、真実を挙げると、」

「その『自分の知識外のものについて話したり行動したりする』という理由で、自分の知識外のものについて話したり行動したりする者どもは、『称賛を得ている』と言うべきですか？　それとも、『非難を受けている』と言うべきですか？　非難を受けている！」

「(人は、)自分の知識外のものについて話したり行動したりする者どもをとても、ほめますか？　それとも、軽蔑して嫌いますか？　軽蔑して嫌う！」

「また、さらに、自分が話したり行動したりしている物事について知っている人達について考えてみてください」

「そうすると、私ソクラテスは大胆にも言いますが、『全ての種類の事業において名声と称賛を享受する人達は、(神から)無上の知恵を授かっている者達の位階に属している』と発見するでしょう」

「一方、逆に、評判が悪い者ども、劣悪な者ども、軽蔑に値する劣悪な者どもは、無知、愚鈍さから生じる」

「そのため、もし、あなたが熱望しているものが、政治家としての名声と称賛であるならば、一つの事の達成を確実にするように試みてください」

「言ってみれば、あなたの中に有る知識、あなたの範疇に有る知識は、あなたがしたいと望むものについての知識なのです」

(「言ってみれば、一つの事を達成しようと可能な限り試みてください。そうすると、その試みは、成し遂げるつもりである務めについて知る事、学ぶ事に成るのです」※別の版)

「実に、知識によって、都市国家アテナイという世界の他の全ての人達より自分を有名にしてから、もし大胆に自ら国政に関われば、あなたの大志の目的へ簡単に到達できても、私ソクラテスは驚かないだろう」

第三巻 第七章（「自身を知りなさい」）(政治能力が有る人は政治家に成る国民としての義務が有る)

さて、ソクラテスが見た所、(第三巻 第六章の主要人物であるグラウコンの祖父である同名の)グラウコンの息子であるカルミデスは、影響力と実力が有る人であった。

(カルミデスは、第三巻 第六章の主要人物であるグラウコンの叔父である。)

カルミデスは、事実、当時、政治に専念していた多数の人達よりも大いに能力が有る人であったが、同時に、大衆へ近づくのを避けたり、国家に関わって忙しく成るのを避けたりする人であった。

そのため、次のようにソクラテスはカルミデスに話しかけた。

「教えてください、カルミデスよ、もし、競技場で勝利を勝ち取る力が有って、勝利者への冠を受け取る力が有って、競技場での勝利によって栄光を自ら勝ち取って、ギリシャ人が『ヘラス』と呼んでいる『ギリシャ人の地』で祖国の栄光をより大いなる物とできる、ある人が、競技への参加を拒否するつもりであるならば、あなたカルミデスは、その人をどのような類(たぐい)の人であると見なしますか？」

(次のようにカルミデスは答えた。)

「明らかに、男らしくない臆病な奴ですね」

次のようにソクラテスは話した。

「では、もし、国政に専念する事によって自国を高める事ができるし、自国を高める事によって栄光を自ら勝ち取る事ができる能力が有る、別の、ある

人が、(政治を)避けたり、ためらったり、前へ出るのを渋ったりするつもりであるならば、どうだろう？　その人も臆病者と論理的に見なさないか？」
(次のようにカルミデスは答えた。)
「多分(、そうですね)」
「しかし、なぜ、あなたソクラテスは私カルミデスに、これらの質問をしたのですか？」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「なぜなら、『(政治)能力が有る、あなたカルミデスは、都市国家アテナイの市民であるという理由だけで貢献する義務が有る事(、避ける事ができない事)(、政治)に身を捧げるのを避けている』と私ソクラテスは考えているからです」
次のようにカルミデスは話した。
「あなたソクラテスは、そのような厳しい判決を私カルミデスに下す、(政治)能力を、私のどこに見つけたというのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「私ソクラテスは、次のような人達(、政治家達)の集まりで明らかに十分に、あなたカルミデスの政治能力を見つけました」
「政治家達の集まりで、あなたカルミデスは、当時の政治家達と会っていました」
「私ソクラテスが見ていると、政治家達が、あなたカルミデスに相談するたびに、どんな問題点についても、あなたには与える事ができる常に善い優れた助言の知識が有りました」
「また、政治家達が(知らずに政治的な)失敗をしたら、あなたカルミデスは、すぐに、(政治家として)力不足の点について触れていました」

次のようにカルミデスは話した。
「ソクラテスよ、個人的に話し合って論理的に説得する事と、議会の群衆の中で立ち向かう事は、別なのです」
次のようにソクラテスは話した。
「けれども、計算できる人は、独りだけで座っている時と同じように、群衆の中でも、全ての計算ができます」
「また、内輪(うちわ)でも竪琴の最優の奏者は、公でも勝利を勝ち取ります」
次のようにカルミデスは話した。
「しかし、『謙虚、(慎重さなどをもたらす良い意味での)臆病さは、人の性質の中に植えつけられている感情である』と、あなたソクラテスは考えませんか?」
「そして、(謙虚、慎重さなどをもたらす良い意味での臆病といった、)これらの感情は、親しい友人達の輪の中よりも、群衆の中で、人に対して、より強く成るのです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、しかし、私ソクラテスが、あなたカルミデスに教えようと決めたのは、『あなたは、(政治に)最も通じていて権力が最も強い人達(、政治家達)の前では、そんなに恥じらいを感じない一方、弱者達や愚鈍な人達の中では、笑いものにされそうで口を開かない』という事なのです」
「あなたカルミデスが恐れている群衆の一部は、毛織物をフェルト状に布状に仕上げる労働者達ですし、靴屋達ですし、大工達ですし、銅細工師達ですし、商人達ですし、農業従事者達ですし、商品を交換する、『どうして他の人達は、これを安く買うつもりであり、他の、あれを高く売るつもりであるのか?』と考えている、市場の行商人達ですよね?」

「これらのような人達の前では、『民会を構成している単一最小要素である』などという理由で、あなたカルミデスは恥じらってしまうというのですか？」

「では、訓練している競技選手達のうち上位者であるのに、未熟者どもの一群を前にして臆病に成ってしまっている、ある人の振る舞いと、あなたカルミデスの振る舞いは、どう違うというのか？　いいえ！　違いは無い！」

「(アテナイの)一流の政治家達のうち何人かは、(虚栄心で、)あなたを見下すふりをしますが、都市国家アテナイでも一流の政治家達と気楽に議論できる、あなたカルミデスが、人気が有る熟練の弁論家よりも大いに優れているのに、人生で政治について考えた事が一度も無い国民達、あなたを見下す思いが心の中に浮かんだ事が確実に一度も無い国民達の一群に直面すると、すぐに、『笑いものにされる』という強い恐怖で口を開くのを恐れているのは、事実ではないか？」

(次のようにカルミデスは答えた。)

「ええ、しかし、『正常な議論が頻繁に民会での嘲笑をもたらしてしまう』と、あなたソクラテスは認めるでしょう」

次のようにソクラテスは話した。

「それは、同様に、他の人達(、政治家達)にも当てはまりますよ」

「(嘲笑されるかもしれない過ちを犯しても、)この傲慢な人達(、政治家達)に、とても気楽に上手に対応できる、あなたカルミデスが、『カルミデスは庶民達に立ち向かう事はできない』と、何と、自分に思い込ませているのは、まさに、私ソクラテスを驚かせるのです」

「私ソクラテスの善き友人であるカルミデスよ、自身について無知であるなかれ」(「自身を知りなさい」)(古代ギリシャで神託をもらえる事で知られて

いたデルポイのアポロン神殿の入口には「自身を知りなさい」と記されていた。)

「『自身以外の他の世界のものを調べるために(自身から)急いで離れてしまって、自身に振り返って自身を調べる時間が無い』という、人の最もありふれた誤りに陥るなかれ」

「さらに、『自身を知る』のは、臆病といった種類のものによって手を引いてはいけない、義務なのである」

「それどころか、自身に良く注意を払う用意をする必要が有ります」

「そして、公事、国事、国政、政治に関して、もし、どんな手段でも、あなたが政治を改善できるのであれば、政治を行わない事なかれ」

「最後に、政治の分野での成功は、『多数の同胞の国民だけではなく、個人的な友人達と、あなた自身が、あなたの行動によって利益を得る』という意義、価値が有るのである」

第三巻 第八章 (美しさについて)(善と美しさは一体化している)(役に立つ場合は美しい)(家について)(絵や装飾について)(神殿や祭壇の立地について)

以前、ある時、ソクラテスの手によりアリスティッポスが厳しく追及されたように、かってアリスティッポスがソクラテスを厳しく追及した時に、ソクラテスは、ソクラテスと共にいる友人達に利益をもたらす事ができるように気をつけて、自分の主張が曲解されるのを警戒する議論者風というよりは、正しい指導の無上の重要性に説得されている人風で、(アリスティッポスに)答えた。

アリスティッポスは、ソクラテスが(アリスティッポスの質問に)同意して飲食物や、富や、健康や、力や、勇気のような何か特定の善いものの名前を挙げた場合に、「ソクラテスが名前を挙げた(善い)ものは悪い場合が有る」と指摘するつもりで、「もしソクラテスが何か善いものを知っているならば、その名前を挙げてください」とソクラテスに質問した。

しかし、ソクラテスは、「(人が誤って『あるものは善いものである』と思っても、その、)あるものが人を苦悩させてしまうならば、すぐに、人は苦悩を止めてくれる(別の)ものを必要とする」という事を知っていたので、最善の答え方と成るように、(次のように、)正確に答えていった。

(しかし、ソクラテスは、「人が誤って『あるものは善いものである』と思っても、その、あるものが人を苦悩させてしまうならば、すぐに、人は苦悩を止めてくれる別のものを必要とする」という事を知っていたので、次のように、最も適切に答えていった。※別の版)

「『熱に善い何かを私が知っているかどうか、あなたアリスティッポスは質問している』と私ソクラテスは解釈しても良いでしょうか？」

(次のようにアリスティッポスは応えた。)

「いいえ、それでは私アリスティッポスの質問の意味を誤解、曲解していま す」

次のようにソクラテスは話した。

「では、目の炎症に善い何かを質問しているのでしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「いいえ、それも、また、私アリスティッポスの質問の意味を誤解、曲解し ています」

次のようにソクラテスは話した。

「ええと、では、空腹に善い何かを質問しているのでしょうか？」

次のようにアリスティッポスは話した。

「いいえ、『空腹に善い何か』も、また、私アリスティッポスの質問の意味を誤解、曲解しています」

(次のようにソクラテスは答えた。)

「ええと、もし、『何に対しても善くない、何か善いもの(、という矛盾した有り得ない妄想上のもの)について、私ソクラテスが知っているかどうか』をあなたアリスティッポスが質問しているならば、私は知らないですし、知りたいとも思いませんが」

(ソクラテスが、)そうした所、アリスティッポスは、(別の同様の)追及、質問に戻って、「もしソクラテスが何か美しいものを知っているならば、その名前を挙げてください」と質問した。

次のようにソクラテスは答えた。

「ええ。美しいものは多数、存在します」
次のようにアリスティッポスは話した。
「多数の美しいものは、全て相互に、似ていますか？」
次のようにソクラテスは話した。
「逆に、多数の美しいものは、多くの場合、可能な限り似ていません」
(次のようにアリスティッポスは質問した。)
「では、どうして美しいものと似ていないものが美しい事が有り得るのですか？（ソクラテスは矛盾していませんか？)」
次のようにソクラテスは話した。
「神よ！」
「なぜなら、『ある美しく走る走者が、別の、ある、拳で美しく戦う拳闘士と、(体の動かし方や、美しさの種類が)全く似ていない事は有り得る』という簡単な理由からです」
「また、なぜなら、防御が目的である美しい対抗手段である盾が、速く確実に放射できる美しい対抗手段である投げ槍と、(美しさの種類が)完全に似ていないからです」
次のようにアリスティッポスは話した。
「それでは、(『何か美しいものを知っているかどうか』質問した時の、)あなたソクラテスの答えは、私アリスティッポスが『何か善いものを知っているかどうか』質問した時の答えと、大して違いませんよ」
(「『何か美しいものを知っているかどうか』質問した時の、あなたソクラテスの答えは、私アリスティッポスが『何か善いものを知っているかどうか』質問した時の答えと、まさに同じようですよ」※別の版)

「ソクラテスの答えは、両方共、唯一の決まった型のくり返しなんですね」
（「ソクラテスの知恵は浅はかなんですね」）
次のようにソクラテスは話した。
「ですが、善いものと、美しいものの答えは、そのように、唯一の型に当てはまるべきなのです」
（
善と、美しさは、普遍的に、唯一のものなのである。
美しさとは、神の五感でも、この世のものの五感でも、五感を真に喜ばせる事なのである。
善とは、神を喜ばせる事なのである。
）
「(誤って)『善いものと、美しいものは、別である』と、あなたアリスティッポスは思っているのですか？」
「『同一の基準へと一致していくのに比例して、全てのものは、善く成る、と同時に、美しく成る』と、あなたアリスティッポスは知らないのですか？」
（「『善と、美は、相互に変換し合える言葉』で、『善いものは何でも美しい』、また、『美しいものは何でも善い』と、あなたアリスティッポスは知らないのですか？」※別の版)
「第一に、」
「徳(、善行、心の力)は、(善と美しさの共通の基準ではない、)ある基準へと一致していくのに比例して善いものには成らないし、(善と美しさの共通の基準ではない)別の、ある基準へと一致していくのに比例して美しいものには成らない」

「第二に、」

「複数の人達は、同一の基準へと一致していくのに比例して、同一の原理によって『善いし、美しい』と呼ばれているのである」

「また、同様に、人の体の体格は、同一の基準へと一致していくのに比例して、『善いし、美しい』と見なされます」

「また、一般的に、人が利用できる全てのものは、同一の基準へと一致していくのに比例して、各々のものが役に立つ各自の事へと一致していくのに比例して、『善いし、美しい』と見なされます」

(「また、一般的に、人が利用できる全てのものは、同一の基準へと一致していくのに比例して、『善いし、美しい』と見なされますが、その同一の基準とは、それぞれの当のものが役に立つ事なのです」※別の版)

次のようにアリスティッポスは話した。

「それでは、多分、肥料と成る排泄物を運ぶ籠(かご)ですら美しいものに成ってしまいますが?」

次のようにソクラテスは話した。

「はい!」

「そのため、黄金の槍は、黄金と槍という二つの物のそれぞれの使い道にとっては、醜いものである。(なぜなら、)槍は(武器としては)適切であるが、黄金は(槍の材料としては軟弱過ぎるので)不適切である」

次のようにアリスティッポスは話した。

「あなたソクラテスは、『同一のものが、美しいし、醜い事が有り得る』と主張している、と私アリスティッポスは解釈して良いですか?」

次のようにソクラテスは話した。

「はい！」(ある使い道に対しては適切である場合は「善い」、「美しい」と言えるし、別の使い道に対しては不適切である場合は「悪い」、「醜い」と言える。)

「同じ説明によって、諸物は、(ある使い道に対しては適切である場合は)善い、と共に、(別の使い道に対しては不適切である場合は)悪い、のである」

「なぜなら、例えば、空腹に善い物は(食べると体の発熱を促して)熱に対しては悪いかもしれないし、熱に善い物は(、例えば、解熱薬は胃が空っぽの時に飲むと胃を痛めるので)空腹に対しては悪いかもしれない、からである」

「また、さらに、レスリングでは美しい物(である美しい体の動き)が、時には、競走では醜い物(である醜い体の動き)である事が有ります」

「そのため、一般的に、ある目的を考慮すると十分に適切である全てのものは善いし美しいが、その同一の目的を考慮すると不適切である全てのものは悪いし醜いのである」

ソクラテスは、家について話した時も、同様に、「同一の家が、同時に、美しいし、醜い、事が有るに違いない」と論理的に主張した。

「ソクラテスは、善や美しさという問題について、善い教えを授けてくれていた」と私クセノフォンは感じずにはいられない。

ソクラテスは、次のように、「どのように家を建てる必要が有るか？」という問題について調べた。

次のようにソクラテスは話した。

「『完全な家を建てようと思っている全ての人は、住むために、可能な限り快適に、と同時に、可能な限り有用であるように、家を作るつもりである』と、あなたは認めますか？」

（「『理想的な家を建てようと思っている全ての人は、住むために、可能な限り快適に、と同時に、可能な限り有用であるように、家を作るつもりである』と、あなたは認めますか？」※別の版）

そして、ソクラテスは、この点が認められると、次のように質問した。

「夏は涼しいし、冬は暖かい家を持つのは快適です。そうではありませんか？」

そして、ソクラテスは、この質問も同意を得られると、次のように話した。

「さて、家が南向きなら、冬の間は『一階の屋根が張り出した縁側』の屋根（、または、『柱で支えられた屋根が有る玄関』の屋根）の下に日光が入るが、夏は太陽が人の頭上を横切るので（、日光の入射角が垂直に近く成るため）、屋根が快適な日陰をもたらします。そうではありませんか？　それで、南向きの家の配置を望むなら、冬は日光を受け取れるように家の南側を（他）より高く建てるべきですし、冬は冷たい風の侵入を防ぐために家の北側を（他）より低く建てるべきです。一言で言うと、『最も快適な、最も美しい家とは、家の中で家の持ち主が全ての季節で最も快適に休憩できる場所を見つける事ができるし、最大に安全に所有物をしまう事ができる家である』と考えるのが論理的です」

（また、次のようにソクラテスは話した。）

「絵や装飾は、（盗まれたり破壊されたりする可能性が有るので、）与えるよりも多く、喜びを人から奪いやすい」

（また、次のようにソクラテスは主張した。）

「神殿や祭壇に最適の場所は、遠くから見える、(不信心者である俗)人が足を踏み入れない場所である」

なぜなら、(神の)崇拝者にとって、(神殿や祭壇を)遠くから見上げて(神に)祈りを捧げるのは、喜ばしい事だからである。

また、汚れなき清浄な崇拝者にとって、(不信心者である俗人がいなくて)安穏と、(神殿や祭壇へ、)ゆっくりと進むのも、喜ばしい事だからである。

第三巻 第九章 (勇気などの美徳は生まれつきの差は有るが学習と実践で成長可能)(知恵と節制、自制は一体化している)(正義などの美徳は知恵であると言える)(狂気について)(嫉妬について)(暇について)(統治者の役割について)(善行について)

また、ソクラテスは、ある人に「勇気を教える事は可能でしょうか？ それとも、勇気は生まれつき生じた(ままである物な)のでしょうか？」と質問された。

(また、ある人が、ソクラテスに「勇気を教える事は可能でしょうか？」と質問して反論した時に、※別の版)

次のようにソクラテスは答えた。

「次のように、私ソクラテスは考えています」

「ちょうど、別の人の肉体よりも、ある人の肉体が、生まれつき、労苦に立ち向かえるほど、より強い事が有るように、」

「同様に、別の人の魂よりも、ある人の魂は、生まれつき、危険を物ともせずに、より強く成長する」

「『法律や慣習が同じ条件下で育った人々が、勇気という点では、大きく異なる』のを確かに私ソクラテスは留意しています」

「それでもなお、『学習と実践は、生まれつきの素質を、勇気へと、常に強化できる』と私ソクラテスは確信しています」

「例えば、スキタイ人やトラキア人が、盾と槍を取って、ラケダイモン人と自称しているスパルタ人と、あえて戦うつもりが無いのは、明らかである」

「また、同様に、もし軽装の軽い盾と投げ槍だけに制限されたらラケダイモン人と自称しているスパルタ人がトラキア人と戦うのをためらうのは明らかであるし、弓矢に精通しているスキタイ人よりも、より精通している何らかの武器無しにはスパルタ人がスキタイ人と戦うのをためらうのは明らかである」

(「また、同様に、ラケダイモン人と自称しているスパルタ人が、軽装の軽い盾と投げ槍でトラキア人と戦うのをためらうのは明らかであるし、弓矢でスキタイ人と戦うのをためらうのは明らかである」※別の版)

「そして、私ソクラテスが理解している限りでは、『ある人と別の人の生まれつきの違いは、配慮の結果である人為的な向上によって、補う事ができる』という原理が一般的に有効である」

「前述の全てが、『自然が(他人よりも、)より鋭敏さ、聡明さを人に与えても、(他人よりも、)より愚鈍さを人に与えても、全ての人に等しく求められている義務は、それによって人が自発的に超越性(、超人性)へ到達できる物事を、学んで実践する事なのである』と明らかに示している」

ソクラテスは、知恵と、節制、自制、魂の落ち着きを区別しなかった。

一方では、ある人は、美しい善い事を実践するために、美しい善い物事を十分に認識できているか?

他方では、その人は、劣悪な事を(しないように)警戒するために、「劣悪」についての知識が有るるか?

もし、そうであれば、ソクラテスは、そうしている人を「賢者である」と同時に「健全な人である」(または「節制、自制している人である」)と判断した。

また、さらに、ソクラテスは、「正しい行動についての知識は有るが、その知識を適用しない(、その知識を行動に移さない)者どもを『賢い節制、自制している人である』とソクラテスは見なしますか？」と質問されると、次のようにソクラテスは答えた。

「私ソクラテスは、その者どもを『愚かな節制、自制していない人である』と見なします」

「私ソクラテスが思うに、全ての人は、自分に可能な範囲内で、最も自分の利益になると思う物事を意識的に選んで、その選択に応じた行動をする」

「そのため、『法則に反した不正な行動をする者どもは賢くないし(、愚かであるし)、節制、自制していない』と私ソクラテスは見なすしかない」

さらに、ソクラテスは、「正義と、正義以外の他の全ての美徳(、心の力)とは、知恵である」と話した。(「正義とは、知恵である」「正義以外の美徳も、知恵である」「正義などの心の力は、知恵である」)

「正義と、正義以外の他の美徳(、心の力)によって行われる全ての事は、『美しいし、善い』と言える」(「正義は、『美しいし、善い』と言える」、「正義以外の心の力によって行われる事も、『美しいし、善い』と言える」)

「そして、正義を知っている人達は、正義以外の他の何かを正義の代わりとして意識的に選ぶつもりは無い」

「また、正義についての特別な知識が欠如している者どもは、正義を選ぶ事ができないし、たとえ正義を選ぼうと試みても、的外れで失敗してしまう」

「そのため、賢者だけが、『美しいし、善い』事を行う事ができる」

「愚者どもは、『美しいし、善い』事を行う事ができないし、たとえ試みても、失敗してしまう」

「そのため、『全ての正義と、一般的に全ての美しいし善い事は、美徳(、心の力)によって行われる』ので、『正義と、正義以外の他の全ての美徳とは、知恵である』のは、明らかである」

(同時に、次のようにソクラテスは主張した。)

「狂気は、知恵とは正反対の物なのである」

ソクラテスは、単なる無知を狂気と見なした訳ではなく、次のように狂気について話した。

「人が、自身について無知である事、知らない事について知っていると思い込んでしまって前提としてしまう事は、狂気その物ではなかったとしても、狂気に、とても似ている何物かである」

「しかし、疑い無く、人々の大半は、(狂気についてのソクラテスの考えとは、)異なる考えを抱いてしまっている」

「人々の大半が知らない何かについて、ある人が全く的外れで誤っていても、人々の大半は、その人が『狂っている』とは言わない」

「しかし、ありふれた知識の範疇の事についてだけ、人々の大半は、人の同様の逸脱を『狂気』と呼んでしまいます」

「例えば、」

「人々の大半によると、『高い壁の(高い)門の下をかがまないで通過するには自身は高身長過ぎる』と思い込んでしまっている誰かは、狂人なのである」

「また、人々の大半によると、『とても力が有るので、家を持ち上げられないか試してみよう』と思ってしまっている誰かは、狂人なのである」

「また、人々の大半によると、その他の明らかに不可能な全ての事を試みるのは、狂人なのである」
「ただし、大衆の感性では、その人の逸脱が些細なら、その人は狂っていない事に成ってしまう」
「事実、ちょうど、強い欲望は、大衆の用語では『熱狂』という名前で知られているように、」
「同様に、考えの大規模な逸脱は、『狂気』と呼ばれてしまう」

また、「嫉妬とは、どういった物であるのか？」という質問に対して答える際に、ソクラテスは、「嫉妬とは、ある種の苦悩である」と気づいた。
「友人が逆境で、また、敵が幸運で、嘆きを感じるのは、確実に、嫉妬ではない」

次のようにソクラテスが話したように、「友人の成功に苦悩する人だけが嫉妬を感じる」。
そして、ある人、他の人が「友人への親しみを感じている人の誰が、友人の成功に苦悩するだろうか？」と驚いて見せると、人々に共通する傾向を思い出させるように、次のように、ソクラテスは話した。
「誰かが逆境であると、人々は、同情して、逆境を助けに急行する」
「しかし、他人が幸運であると、どういう訳か、人々は苦悩してしまう」
次のようにソクラテスは言い加えた。
「私ソクラテスは(誤って)『思いやり深い人が他人の幸運に嫉妬する』なんて言うつもりはありません」
(「私ソクラテスは誤って『良識が有る人が他人の幸運に嫉妬する』なんて言うつもりはありません」※別の版)

「しかし、他人の幸運に嫉妬するのは、愚者には、珍しくない(、ありふれた)心理状態である」

また、「(悪い意味で)暇とは、どういった事か?」という質問に対して答える際に、次のようにソクラテスは話した。

「『ほとんどの人が、何かをしている』と私ソクラテスは気づきました」
「例えば、サイコロで遊ぶ者、賭博師、道化師は、何かをしています」
「しかし、サイコロで遊ぶ者、賭博師、道化師は、暇が有る事に成るのです(。なぜなら、)」
「サイコロで遊ぶ者、賭博師、道化師は、望めば、より善い何かに向かって向きを変えて、より善い何かをする事ができる(からです)」
「実に、より善い物事から、より悪い物事へ向かって向きを変えている暇が有る人は誰もいないのです」
「そんな暇は人には無いにもかかわらず、もし、より善い物事から、より悪い物事へ向かって向きを変えたら、実に、その分野で悪い事をしているだけなのです」

(別の定義へ移ると、次のようにソクラテスは話した。)
「王笏を持っているだけの者どもや、同胞の市民達が市民の中から選んだ人達や、くじ引きで任命された人達や、暴力や詐欺で統治者という公職に入り込んだ者どもは、王者でも統治者でもない」
「実に、統治方法についての特別な知識が有る人達が、王者であるし、統治者である」

ソクラテスは、「統治者の役割は、行うべき(義務が有る)事を命じる事である」、また、「統治される国民達の役割は、(統治者に)命じられた事に従う事である」という承認を勝ち取ると、次のように、例えによって指摘を続けた。

「船では、(行うべき事についての)特別な知識を持つ人が、統治者または船長に成る」

「船主自らと、船長以外の他の全ての乗船者は、熟練者としての統治者または船長に従う」

「同様に、」

「農業では、農場の所有者が、(行うべき事についての知識が有る)統治者に成る」

「病気では、(病気の肉体の所有者である)病人が、(行うべき事についての知識が有る)統治者に成る」

「肉体の物質的な鍛錬では、走路を走る、(肉体の所有者である)若い競技選手が、(行うべき事についての知識が有る)統治者に成る」

「そして、一般的に、配慮を必要とする何かに直接的に関係している全ての人は、」

「『自分には(行うべき事についての)特別な知識が有る』と思うなら、個人的に何らかの配慮をするであろう」

「また、自分の学、知識に自信が持てないなら、」

「現場の、熟練者である誰かに熱心に従うであろう」

「または、使者を派遣して遠くから熟練者を連れてきて、熟練者の指導に従って、熟練者の指導で行うべき事を行うであろう」

このため、ソクラテスは、次のように指摘するのを好んでいた。

「羊毛の紡績のわざでは、女性達が、男性達の統治者である」
「なぜか？」
「なぜなら、羊毛の紡績の女性達には羊毛の紡績のわざの知識が有るが、男性達には無いからである」
　また、誰かが「暴君は、権力、軍事力によって、善い正しい助言に従わない」という異議を唱えたら、次のように、ソクラテスは応えた。
「知恵による諸々の言葉に従わない者に残存する報い、罰、不利益を考慮すると、従わないという選択肢が、どうして暴君に有るだろうか？　いいえ！　知恵の言葉に従わないという選択肢は無い！　なぜなら、多分、暴君が善い助言に従わない問題が何であれ、暴君は誤りに陥るであろうし、誤りに陥ったために処罰されて懲らしめられるであろう、ひどい目に遭(あ)うであろう」
　また、「暴君は、望めば、賢者の首を斬る事ができる」という示唆に対して、次のように、ソクラテスは答えた。
「『最善の味方を殺す者は、罰を免れる』と(誤って)思うのですか？　また、『最善の味方を殺す者は、些細な大した事が無い一時的な損失を被(こうむ)るだけである』と(誤って)思うのですか？　『そんな事をしておいても、自身の救いを確実な物に、より、しそうである』と(誤って)思うのですか？　それとも、『自身の速やかな破滅をより達成しそうである』と考えますか？(『そんな事をしておいても、安全な道を選ぶ事ができている』と誤って思うのですか？　むしろ、自分への死刑執行令状に署名していませんか？　※別の版)」
　また、ある人が「ソクラテスが、人にとって最善の追求、最善の務めと見なしているものは何ですか？」とソクラテスに質問した時に、

(ある人が「ソクラテスが、人にとって最も気高い研究と見なしているものは何ですか?」とソクラテスに質問した時に、※別の版)

次のようにソクラテスは答えた。

「(最善の追求、最善の務めは、)行動の成功である」

そして、ある人の「では、ソクラテスは、幸運を、追求するべき目的の一つと見なしますか?」という第二番目の質問に対して、次のようにソクラテスは答えた。

「逆に、」

「私ソクラテスとしては、『幸運と、行動は、正反対である』と考えています。例えば、『そうしようと努力しなくても、行動の望ましい成り行きが成功するためには、幸運が、優れている』と私ソクラテスは考えています。しかし、私ソクラテスの確信では、『学習と実践によって善く行う事が、行動の成功なのである』。そして、『善く行う事ができる人達とは、学習と実践によって善く行う事を、人生での真剣な務めとしている人達である』と私ソクラテスには見受けられるのです」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「例えば、『農場で農業を善く行う人達や、医療業で医療を善く行う人達や、国政で国政を善く行う人達は、最善である、と同時に、最も愛すべきである大事な者達である』と神は見てくれる」

(「例えば、『農場で農業を善く行う人達や、医療業で医療を善く行う人達や、国政で国政を善く行う人達は、最善である、と同時に、最も神聖に愛すべきである者達である』と神は見てくれる」※別の版)

(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「一方、善い事を何も行わない人(、怠惰な悪人)、または、何かを善く行わない人(、悪く行う人、悪事を行う悪人)は、役に立たない人であるし、神にとっては、愛すべきではない(憎悪するべきである)無価値な人である」

第三巻 第十章 (心は目つきなどの表情、顔つき、姿勢、所作に表れる)(絵について)(彫刻について)(胴鎧について)

また、実に、ソクラテスが、偶然、技術を所有している誰かと話す場合、会話を日々の務めとしている目的に利用して、この(技術者という)種類の人の役に立つ事ができた。

例えば、ある時、ソクラテスが、画家パラシオスの仕事場に足を踏み入れて、パラシオスと会話に入ると、次のようにソクラテスは話した。

「『絵とは、目に見えるものの表現である』と定義できる、と私ソクラテスは思います。そうではありませんか?」

「『色や絵の具(の塗り方)という手段によって、あなた達、画家は、表面の浮き沈み、光や影、硬さや柔らかさ、粗さや滑(なめ)らかさ(といった手触り)、若さによる、あざやかさや、老化による皮膚のしわを可能な限り(実物に)近づくように表現して再現する』と言えます。そうではありませんか?」

(次のようにパラシオスは答えた。)

「あなたソクラテスは正しい。そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「さらに、美しさの理想の典型を描く際に、欠点が完全に無い人を偶然、見つけるのは困難なので、あなた達、画家は、見本である人達から、それぞれの最も美しい特徴を選び集めて、完全に美しい外見の姿を作り上げますよね?」

次のようにパラシオスは話した。

「ええ、そのようにしています」

（「ええ、それが私達、画家の創作の秘訣です」※別の版）
（「ええ、それが私達、画家が絵を構成する際の技です」※更に別の版）
(次のようにソクラテスは話を続けた。）
「ええ、では、待ってください」
「あなた達、画家は、特徴的な心の気持ちも、愛という心の深い源泉による心を夢中にさせる(愛の)魅力と甘美さも、慕っている心の情熱も、愛が燃えている瞬間も、完璧同然に、あえて表現しようとしていますか？」
「それとも、前述を全て描くのは完全に不可能でしょうか？」
(次のようにパラシオスは答えた。）
「いいえ(。不可能である、と思います)」
「どうしたら気持ちを模倣できるでしょうか？　いいえ！　模倣できない！　ソクラテスよ。なぜなら、気持ちには、線形の部分も色の部分も無いし、あなたソクラテスが今、名前を挙げた前述の(光や影といった)性質も無いからです」
「一言で要約すると、なぜなら、気持ちは、全く目に見えないですよね？」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。ですが、愛による優しい目つき、誰かに対する憎しみによる怒りの目つきといった表情が、絵の主題である人には有りますよね？　そうではありませんか？」
（「ええ、ですが、ある人が別の人に向けた、愛による目つき、憎しみによる、しかめた顔は、認められている、人の感情による表情ですよね？　そうではありませんか？」※別の版）
次のようにパラシオスは話した。
「疑い無く、それら(、表情)は、そうです」

次のようにソクラテスは話した。
「では、この目つきは、少なくとも、多分、目つきで(心を)模倣していますよね？　そうではありませんか？」
(次のようにパラシオスは答えた。)
「疑い無く、そうです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、愛する人の幸運がもたらす心の安心と、愛する人の不幸がもたらす心の不安では、両方共、同じ表情をするでしょうか？」
(次のようにパラシオスは答えた。)
「決して同じではありません(。違います)」
「『善い事を考えると、人は目つきや表情が明るく成る』し、『悪い事を考えると、表情が曇る』のです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ここでも、また、これらの表情は、絵で表現できますよね？」
次のようにパラシオスは話した。
「確かに、そうですね」
次のようにソクラテスは話した。
「さらに、まるで、何らかの地の裂け目が人の様子を貫いて通過しているかのように、立ち方や動き方といった人の肉体の、まさしく姿勢によって、その人の気高さと自由さと、節制、自制と知恵による心の落ち着き、または、その人の劣悪さと、傲慢と劣悪さによる傲慢な態度も、垣間見えますよね？」
(次のようにパラシオスは答えた。)
「あなたソクラテスは正しい」

次のようにソクラテスは話した。
「では、それら（、姿勢によって垣間見える心）も（姿勢によって）模倣できますよね？」
（次のようにパラシオスは話した。）
「疑い無く、そうですね」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『美しさ、善といった愛すべき性質が刻まれている顔か、醜悪である心、悪、憎むべき心の痕跡、特徴を持っている顔の、どちらが、見るのが、より好ましい顔の種類である』と、あなたパラシオスは思いますか？」
次のようにパラシオスは話した。
「疑い無く（、美しい、善い顔です）、ソクラテスよ。善い顔と醜悪な顔という二つの顔の間には、広大な違いが有ります」

別の、ある時、ソクラテスは、彫刻家クレイトンの仕事場に入って、クレイトンとの会話の最中、次のように話した。
「私ソクラテスは見て知っていますが、あなたクレイトンは、ここ（、仕事場）に、走者達、レスリング選手達、拳闘士達、パンクラチオン選手達のうち美しい人々の美術品（、彫像）を持っていますね、クレイトンよ」
「どのようにして、あなたクレイトンは、特に、視覚を通して見た人の心を魅了する、実物のような不思議な仕上げで、自分の作品を仕上げているのですか？」
クレイトンが困惑して、すぐには答えなかったので、ソクラテスは、次のように言い加えた。

「あなたクレイトンは、生物の形を詳細に模倣して、実物のような仕上げで彫像を仕上げる事に成功しているのでしょうか？」

(次のようにクレイトンは答えた。)

「疑い無く、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「あなたクレイトンは、身振りや姿勢といった動きに従う、肉体の色々な筋肉の収縮、皮膚のしわ、手足の伸び方、(筋肉の)緊張と弛緩を忠実に模倣して、自分の彫像を実物のようにする事に成功している。人々が言っているように、自分の彫像に『命を吹き込む』事に成功している。そうではありませんか？」

次のようにクレイトンは話した。

「疑い無く、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、何らかの動きをしている時の肉体による色々な感情の忠実な模倣は、特別な楽しみを、見る人にもたらしませんか？」

次のようにクレイトンは話した。

「そう思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、戦っている戦士の目つきの恐ろしさを用心して模倣するべきですよね？」

「また、勝利者の、成功によって明るい表情も模倣するべきですよね？」

次のようにクレイトンは話した。

「(目つきや表情は、)特に、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「『彫刻家は、心の作用と精力も、理想の形の彫像に取り込む事を求められている』と思われます」

ソクラテスは、胴鎧の製作者ピスティアスの所を訪ねて、ピスティアスが作品のうち、いくつかの美しい見本を見せてくれた時に、次のように大声で話した。

「(家の女主人である、女神の女王である、)女神ヘラにかけて!」

「見事な作品ですね、これは、ピスティアスよ」

「胴鎧が、人が守る必要が有る部分(の胴体)を覆う、と同時に、腕と手が自由に動く余地を残すように、あなたピスティアスは工夫しています……」

(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「教えてください、ピスティアスよ。他の人達の胴鎧よりも、あなたの胴鎧が、より頑丈ではなくても、また、高価な材料で造られていなくても、あなたの胴鎧を買うのに、あなたが、より高い価格を(客へ)求めるのは、なぜですか?」

(次のようにピスティアスは答えた。)

「ソクラテスよ、なぜなら、私ピスティアスの胴鎧は、大いに、均整が良いからです」

次のようにソクラテスは話した。

「均整!」

「では、より高い価格である正当性を説明するために、どのようにして『あなたピスティアスの胴鎧は高品質である』と客に判断させるのですか?」

「長さ、大きさや、重さによって、あなたピスティアスは、『ピスティアスの胴鎧は高品質である』と客に判断させますか?　いいえ!」

「なぜなら、多分、あなたピスティアスは、胴鎧を（、装備する人の体に、それぞれ、）ピッタリと合っているようにするならば、（それぞれの人の体は異なるので、）胴鎧を全く正確に等しく唯一の型で造るはずが無いからです。もちろん、そうしていますよね？」

（次のようにピスティアスは答えた。）

「実に！　私ピスティアスは、最も、とても、ピッタリと合っているように、胴鎧を造っています。私ピスティアスの言葉を信じてください」

「（装備する人の体に）合っていない胴鎧は役に立たないからです」

（次のようにソクラテスは質問した。）

「では、装備する人の体自体にも、『ある人の体は均整が良いし、別の人の体は均整が悪い（、左右非対称や歪みなどが有る）』という事が有りませんか？」

（次のようにピスティアスは答えた。）

「確かに、そういう事が有ります」

次のようにソクラテスは話した。

「では、もし、均整が良い胴鎧を、均整が悪い体（、左右非対称であったり歪みなどが有る体）にも、ピッタリと合っているようにするなら、あなたピスティアスは、どう対処するのですか？」

（「では、どのようにして、あなたピスティアスは、均整が良い胴鎧を、均整が悪い体に、ピッタリと合っているようにするのですか？　あなたピスティアスは、均整が良い胴鎧という物を、どのようにして造っているのですか？」※別の版）

次のようにピスティアスは話した。

「(均整が良い体と)同じくらいにまで、正確に、私ピスティアスは、胴鎧を(均整が悪い体に、)ピッタリと合っているようにします」

「ピッタリと合っている物が、均整が良い物なのです」

次のようにソクラテスは話した。

「『均整が良い』という言葉を、『あなたピスティアスは、絶対的な意味で、ではなく、装備する人との関係において、利用している』ように思われます」

「ちょうど、あなたピスティアスは、ある盾が、ピッタリと合っている特定の人に対して、『その盾は、均整が良い』と表現するように」

「では、あなたピスティアスの言葉では、軍用のマントも胴鎧と同様に『均整が良い』と表現しますか？　また、他の全ての諸物も胴鎧と同様に『均整が良い』と表現しますか？」

「多分、前述の『ピッタリと合っている事』には、別の考慮に値する利点が有りますよね？」

次のようにピスティアスは話した。

「どうか、教えてください、ソクラテスよ。あなたが知っているなら」

次のようにソクラテスは話した。

「体に合っていない胴鎧よりも、体に合っている胴鎧は、重さによる、わずらわしさが、より少ないのです」

「なぜなら、体に合っていない胴鎧は、胴鎧の全重量を、両肩だけで持ち上げて行く必要が有るか、両肩以外の何箇所かだけで持ち上げる必要が有るからです」

「そのため、体に合っていない胴鎧は、わずらわしくて不快に成ります」

「しかし、体に合っている胴鎧は、一部は鎖骨と肩甲骨に沿って、一部は両肩と胸の全体で、一部は背中と腹の全体で、胴鎧の重さが分散されるので、運ぶ必要が有る余分な荷物というよりはむしろ、別の生まれつきの皮膚のように感じられます」

次のようにピスティアスは話した。

「私ピスティアスが考えるに、異例な価値を私の作品の胴鎧にもたらす、まさにその品質に、あなたソクラテスは名前をつけてくれました」

「(しかし、)未だに、胴鎧に、『体に合っている事』以外の何かを求めてくる客がいる、と言わざるを得ないのです」

「そういう客は、胴鎧を観賞用にしてしまったり、胴鎧を黄金で装飾してしまったりするのに違い無いのです」

(次のようにソクラテスは応えた。)

「しかし、私ソクラテスが思うに、そういう客は、体に合っていない胴鎧を買ってしまうと、変に造られてしまった金箔で粉飾されてしまった邪魔物の所有者に成ってしまうだけです」

(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「人の体は、唯一不変の姿勢では決していなくて、ある時は体を曲げるし、別の時は直立するので、人の体を正確に模倣した胴鎧は、どうしたら、人の体に、ピッタリと合うのですか?」

次のようにピスティアスは話した。

「人の体を正確に模倣した胴鎧は、人の体に、全く合う事ができません」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「あなたピスティアスの言葉の真意とは、『人の体に合っている胴鎧とは、人の体を正確に模倣した胴鎧ではなく、使用中でも装備している人が、わず

らわしさを感じない(程度に全体的に密着している)胴鎧である』という事ですか?」

次のようにピスティアスは話した。

「ソクラテスよ、あなたは、まさに要点を当てています」

(「ソクラテスよ、あなたは、まさに言い当てています」※別の版)

「『あなたソクラテスは、胴鎧という物を最も正確に理解している』と私ピスティアスは思います」

(「ソクラテスよりも、胴鎧の製作者自身である私ピスティアスは、胴鎧という物をより明確に話す事ができませんでしたね」※別の版)

第三巻 第十一章（善友や恋人の獲得方法）（考えを閃くのは神霊による）（必要としていない時に思いやってしまうと嫌われてしまう）（探せば見つかる）（行くなかれ。来させなさい）

かつて、都市アテナイに、テオドテという名前の美しい女性がいた。

テオドテは、美しいだけではなく、テオドテの好意を勝ち取る事ができる求婚者なら誰とでも交際する用意が有った。

さて、偶然、（ソクラテスの）友人達のうち誰かがテオドテについて「テオドテの美しさは言い表す事ができない」と話した。

次のように、そのソクラテスの友人は言い加えた。

「画家達がテオドテの肖像画を描くために群がるほど、テオドテは、とても美しいのです。画家達に対して、適切な範囲内で、テオドテは、自分の驚くべき美しさを見せてくれます」

次のようにソクラテスは話した。

「では、テオドテを見に行くしか無いですね。なぜなら、伝聞によって言葉を超越しているものを理解する事は、明らかに、不可能だからです」

すると、次のように、テオドテの事を紹介したソクラテスの友人は応えた。

「それでは、早速、私に付いて来てください」

こうして、ソクラテスと、友人達は、テオドテの所へ出かけた。

ソクラテスと、友人達は、ある画家に対してテオドテが「姿勢を取っている」のを見つけた。

そして、ソクラテスと、友人達は、テオドテの見物人としての立場を取った。

やがて、その画家は仕事を終わらせた。

そこで、次のようにソクラテスは話した。

「テオドテが自分の美しさを見せてくれたのを私ソクラテスと友人達が感謝するべきか、それとも、私ソクラテスと友人達がテオドテの美しさを見つめに来てくれたのをテオドテが感謝するべきか、あなた達は、どう思いますか？」

「もし、自分の魅力を見せるのが、テオドテにとって、より利益に成るのなら、テオドテ側が私ソクラテスと友人達に対しての借りが有る事に成りますす」

「しかし、もし、テオドテの美しさを眺めるのが、私ソクラテスと友人達に、より大きな利益をもたらすのなら、私ソクラテスと友人達がテオドテに借りが有る事に成ります」

次のように誰かが答えた。

「(ソクラテスの話は)公平な意見ですね」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「ええ、では、テオドテに関する限りでは、私ソクラテスと友人達がテオドテに与える賛美は、直接的な利益という事に成ります」

「また、やがて私ソクラテスと友人達がテオドテの名声を外国に広めたら、さらにテオドテは利益をもたらされた事に成るだろう」

「私ソクラテスと友人達にとっては、私ソクラテスと友人達への直接的な効果は、見た対象者テオドテに触れたいという強い欲望という事に成ります」

「やがて私ソクラテスと友人達も刺激された(、美しさへの愛好という)苦悩を心の中に抱えて立ち去る事に成るだろう」

「そして、私ソクラテスと友人達がまあまあ去った時に、(美しさへの愛好という)欲望にかられる事に成るだろう」

「結果、私ソクラテスと友人達はテオドテに奉仕する事に成るだろうし、テオドテは私ソクラテスと友人達との交際を受け入れてくれるだろう」

するとと、次のようにテオドテは話した。

「おおっ、敬愛するべき者よ！」

「このままなら、私テオドテが、あなたソクラテスと友人達に自分を見てもらえた借りが有る事に成ります」

(「このままなら、私テオドテは、あなたソクラテスと友人達が私を見に来てくれたのを感謝する必要があります」※別の版)

この時、テオドテは、高価な衣服で正装させられていて、正装している自分の母も連れていて、付き添い(の侍女達)の服装も並外れていて(正装していて)、侍女達については言うまでも無く、多数の見た目が美しい侍女達で、にぎわった様子を見せていた。

(この時、テオドテは、高価な衣服で正装させられていて、そこにテオドテと共に正装しているテオドテの母がいて、全身を正装している奉仕者達、侍女達の服装も並外れていて、侍女達については言うまでも無く、多数の見た目が美しい侍女達で、にぎわった様子を見せていた。※別の版)

次のようにソクラテスは質問した。

「どうか、教えてください、テオドテよ。都市国家アテナイに、あなたテオドテには農場が有るのですか？　なぜなら、全ての点で家全体、家自体が壮麗に家具などを備えているからです」

次のようにテオドテは話した。

「いいえ。実に、私テオドテにはアテナイに農場は無いです」

次のようにソクラテスは話した。
「では、多分、あなたテオドテは、(貸)家を持っていて、(貸)家(という財産)と共に(貸)家による大きな収入が有るのですか?」
次のようにテオドテは話した。
「いいえ。ましてや、(貸)家も無いです」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたテオドテは、大規模な、労働者達の雇い主ではありませんか?」
次のようにテオドテは話した。
「いいえ。ましてや、労働者達の雇い主でもありません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どのような収入源から、あなたテオドテは、生活手段としての収入を得ているのですか?」
次のようにテオドテは話した。
「私テオドテの友人達が、私の生活費、幸運による財産と成ってくれるのです」
「なぜなら、私テオドテの友人達は、私テオドテを『思いやってあげたい』と思ってくれるのです」
次のようにソクラテスは話した。
「神にかけて、テオドテよ、多数の友人達は、実に、とても優れた財産であり、多数の羊や山羊や牛よりも、遥かに、より優れて、保持するに値するのです……!」
(次のようにソクラテスは言い加えた。)
「ですが、蝿(ハエ)のように友人が自分の手に止まってくれるかどうかを、あなたは運任せにしますか?」

「それとも、あなたは、友人を引き寄せるために、何らかの工夫を自ら使用しますか？」

(「それとも、あなたは、友人を引き寄せるために、何らかの手段、仕掛けを自ら使用しますか？」※別の版)

　次のようにテオドテは話した。

「どうしたら、私テオドテは、友人を引き寄せるための、何らかの工夫を思いつく事ができますか？」

　次のようにソクラテスは話した。

「神よ！」

「全ての蜘蛛(クモ)よりも、遥かに、より生まれつき(、あなたは、友人を引き寄せる工夫を実践しているの)です」

「どのように、蜘蛛(クモ)が、生きるために食べるための生物をとらえるか、あなたは知っていますよね」

「蜘蛛(クモ)の糸で捕獲網の罠を作り上げて、蜘蛛(クモ)は、生きるために食べるための生物をとらえます。そうではありませんか？」

「蜘蛛(クモ)の仕掛け網の罠、策の中へ飛び込む蝿(ハエ)には災いが有る！」

「蜘蛛(クモ)は蝿(ハエ)を食べ尽くしてしまうからです」

　次のようにテオドテは話した。

「それでは、私が自ら、何らかの種類の捕獲網の罠を作り上げるように、あなたソクラテスは勧めているのですか？」

　次のようにソクラテスは話した。

「おや、まさか、全ての対象のうち最も優れた対象、すなわち、(自分の)愛好者に対して、あなたは、そのような下策、無策で、『(自分の)虜(とりこ)にできるだろう』とは思っていませんよね？」

「(大して優れていない種類の対象について話すと、)兎をとらえるために、どのくらいの数の策を必要とするか、あなたは知りませんか？」

「兎という生き物は、食べ物を求めて、夜に移動します」

「そのため、猟師は、夜用の犬達を用意する必要が有ります」

「夜が明け始めると、兎は、走れる限り速く(巣穴へ)立ち去ってしまいます」

「そのため、猟師は、兎を嗅ぎ当てて兎が草原から巣穴へ、どの道を行ったか発見できる別の群れの犬達を所有している必要が有ります」

「また、兎は、足がとても速いため、走ると一瞬で(人の)視野では見えなく成るほどなので、猟師は、兎を追跡して追い越す事ができるほど足が速い別の犬達をさらに用意する必要が有ります」

(「また、兎は、足がとても速いため、走ると一瞬で人の視野では見えなく成るほどなので、猟師は、兎のかかとまでの距離を縮めて追い詰めて捕らえる事ができるほど足が速い別の犬達をさらに用意する必要が有ります」※別の版)

「そして、兎の何羽かは、前述の策すら失敗させ(て逃れ)るので、最後に、猟師は、兎を捕獲網の罠にはめて、とらえるために、兎の(予想)逃走経路の諸々の要所に捕獲網の罠を設置する必要が有ります」

次のようにテオドテは話した。

「では、あなたはソクラテスは、どのような策によって私に愛好者(の心)をとらえさせるつもりなのですか？」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では！」

「もし、あなたの美しさの裕福な愛好者を探し出して、その愛好者の家を見つけて、そうしたら、あなたという捕獲網の罠に陥れる計画を立ててくれる人を、猟犬の代わりに、あなたが得る事ができたら、どうでしょうか？」

次のようにテオドテは話した。

「いいえ、私には、どのような種類の捕獲網の罠が有るというのですか？」

次のようにソクラテスは話した。

「私ソクラテスが思うに、あなたには一つ有ります。それは、折りたためる捕獲網の罠です」

(「私ソクラテスが思うに、あなたには一つ有ります。それは、正に良く織られて作り上げられた捕獲網の罠です」※別の版)

「すなわち、その捕獲網の罠とは、あなたの(美しい)肉体なのです」

「また、あなたの肉体の中には、ある(神)霊が宿っています」

「その(神)霊は、『どのような目つき、顔つき、服装、外見、様子が(他人を)喜ばせる事ができるか』、また、『どのような言葉が(他人を)元気づける事ができるか』をあなたに教えてくれます」

「また、その(神)霊は、『あなたが、笑顔と共に、真の忠実な愛好者を、どのように喜んで迎え入れるべきか』をもあなたに教えてくれます」

(「また、その神霊は、『あなたが、どのような笑顔と共に、忠実な求婚者を、どのように待ち構えるべきか』をもあなたに教えてくれます」※別の版)

「また、その(神)霊は、『あなたが、どのように全ての好色過ぎる男どもを目の前から排除するべきか』をもあなたに教えてくれます」

(「また、その神霊は、『あなたが、どのように淫らな男どもを目の前から追い払うべきか』をもあなたに教えてくれます」※別の版)

「また、その(神)霊は、『あなたが、恋人が病気の際は、思いやって、お見舞いをするべきである事』、また、『恋人が何らかの気高い行動をした時は、その恋人と共に、あなたが、大いに喜ぶべきである事』をあなたに教えてくれます」
「そして、あなたを熱心に思いやってくれる人に対して、(女性の、)あなたは身も心も任せるべきなのです」
「『真の愛の秘訣をあなたは知っている』と私ソクラテスは確信していますす」
「(真の愛の秘訣によって、)単に思いやるだけではなく、献身して尽くして思いやる事もできる」
(「真の愛の秘訣によって、単に思いやるだけではなく、全身全霊で思いやる事もできる」※別の版)
「また、次のような事も、私ソクラテスは確信しています」
「あなたは、口先だけの言葉によってではなく、思いやりの行動によって、あなたの美しさの愛好者である恋人達を納得させる事ができる」
次のようにテオドテは話した。
「いいえ。(神に)誓って、私は、それらのような策など弄(ろう)していません」
次のようにソクラテスは話した。
「しかし、自然な正しい方法で人に近づくか、否かは、全く違うのです」
「なぜなら、強制によってでは、確実に、あなたは友人(の心)をとらえる事も保持する事も不可能だからです」
「思いやりと喜びだけが、畏敬するべき獲物の鴨(カモ)である人(の心)をとらえて不変に保持できる唯一の手段なのです」
次のようにテオドテは話した。

「あなたソクラテスは正しいです」
　次のようにソクラテスは話した。
「最初に、あなたは、あなたへ好意を寄せてくれる人が後悔しないで容認できる事だけを要求する必要が有ります」
「そして、次に、あなたは、思いやり深い行為を同様に効率的に施して、報いる必要が有ります」
「このようにして、あなたは、最善に、友人と成れるであろうし、その友人の愛情は最も長く続くであろうし、友人は寛大な行いを惜しまないのである」
（「これが、永遠の寛大な友情への正しい道なのである」※別の版）
「また、友人からの好意を得るために、友人の困窮に対して、あなたが気前の良い援助で満たせば、あなたは最善に友人を勝ち取るであろう」
「注意して、よく聞いてください。なぜなら、最も甘美な食べ物をある人に贈っても、その人が(空腹で困窮して)食べ物を必要とする前ならば、最も甘美な食べ物が結果として不味いという羽目に成ってしまうか、既に満腹で満足している人に対しては、最も甘美な食べ物が吐き気すらさせてしまうという羽目に成ってしまいます」(友人や恋人にしたい人が必要としていない時に思いやってしまうと嫌われてしまう。友人や恋人にしたい人が必要としている時に思いやる必要が有る。)
「しかし、空腹、渇望を引き起こせば、粗食ですら、蜜のように甘美に思われるのです」(女性は、愛している男性に愛してもらうために、愛している男性を満足させて喜ばせてあげる前に、あえて焦らして渇望させる必要が有る。)
　次のようにテオドテは話した。

「では、どうしたら、友人の心の中に渇望を引き起こす事ができますか？」
次のようにソクラテスは話した。
「第一に、食欲への飽きが無く成って飢えが施しを強く求めるまで、食欲が飽きている者に対して、あなたの美味しい食べ物を与えたり、提案したりするなかれ」(友人や恋人にしたい人が必要とするまで、あえて思いやるなかれ。思いやる提案すら、するなかれ。)
「その場合でさえ、求めている人に対して、逆に、あなたが喜んで自発的に自ら進んで思いやりたいかのように謙虚に、実に、かすかに提案するべきなのです……」
「見てみなさい！　そのため、(意中の)男性が飢えて、まさに苦しむまで、(この世の)女性は姿を隠して去っておくのです」
「なぜなら、同じ贈り物でも、相手の欲望が最も高まる前は、相手に価値を分かってもらえないのです」
すると、次のようにテオドテは話した。
「おおっ、あら、ソクラテスよ、なぜ、あなたは(猟師の助手のように、)私テオドテが友人や恋人(の心)をとらえるのを助けるために私のそばにいてくれないのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「実に！　あなたテオドテが私ソクラテスを口説いて(心を)勝ち取る事ができた場合だけ、私は、そうするであろう」
次のようにテオドテは話した。
「どうしたら、私テオドテは、あなたソクラテスを口説いて(心を)勝ち取れますか？」
次のようにソクラテスは話した。

「もし、あなたが本当に私を必要としているならば、探しなさい。そうすれば、あなたは手段を見つけるであろう」
次のようにテオドテは話した。
「では、こちらに来てください。また、頻繁に私テオドテを訪ねてくださ い」
すると、次のように、ソクラテスは、いたずらにソクラテスが無職であるのをふざけながら、答えた。
「いや、テオドテよ、私ソクラテスは、自分の暇な時間を主な商品として取り扱っていないのです」
「私ソクラテスにも、専念する必要が有る、私的な、または、公的な、多数の私事が有るのです」
「それから、愛情を引き寄せる魔法と私ソクラテスの口から出る魔法のような言葉を常に学ぶために、私が昼でも夜でも離れるのを許してくれない恋人達である(と言える)愛すべき友人達がいるのです」
次のようにテオドテは話した。
「あら、ソクラテスよ、あなたは本当に愛情を引き寄せる魔法と魔法のような言葉を熟知しているのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「もちろんです」
「そうでなければ、ここにいるアポロドロスとアンティステネスが決して私ソクラテスから離れないのは、どうしてだと、あなたテオドテは考えますか？」
「また、ケベスとシミアスが私ソクラテスと共にいるために、はるばるテーバイから来たのは、なぜだと、あなたテオドテは考えますか？」

「多様な、愛情を引き寄せる魔法と、魔法のような言葉と、魔術的な輪が無くては、前述のような事は起こるはずが無いので、安心してください」
次のようにテオドテは話した。
「あなたソクラテスが魔術的な輪を私テオドテに与えてくれるのを私は望みます」
「そうしてくれたら、私テオドテは、最初に、あなたソクラテスを(糸のように、からめ取って、友人として)獲得するために魔術の輪を回転させるつもりです」
次のようにソクラテスは話した。
「ああっ！」
「しかし、私ソクラテスは、あなたテオドテへ引き寄せられるのは望まないのです(。なぜなら、)」
「私ソクラテスは、あなたテオドテが私ソクラテスの所へ来る事を望みます」(十六世紀の小説家ラブレーは「行くなかれ。来させなさい」と話していた。)
次のようにテオドテは話した。
「では、私テオドテは、ソクラテスの所へ行くつもりです」
「ただし、あなたソクラテスは、私テオドテを喜んで迎え入れてくれますか？」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、私ソクラテスは、もっと、より愛すべき誰かの先約が有って(嫉妬させないためにテオドテを)『喜んで迎え入れない』必要が無ければ、あなたテオドテを喜んで迎え入れるつもりです」

第三巻 第十二章（鍛錬しない怠惰は不利益を招く）（肉体の不健康は不健全な影響を精神に与えやすい）

ソクラテスは、ソクラテスと共にいた人達のうちの一人である、若者であるが肉体が虚弱である、エピゲネスという名前の人を見て、エピゲネスに話しかけた。

「エピゲネスよ、あなたは、鍛錬している若者の競技選手にふさわしい頑丈で強い外見をしていません」

すると、次のようにエピゲネスは話した。

「私エピゲネスは、競技選手ではないし、鍛錬していないので、そう見えるのは正しいです」

次のようにソクラテスは話した。

「私ソクラテスが思うに、その時が来たらアテナイ人が実行する、公の敵対者に対する生死に関わる戦いを軽視するつもりが無ければ、オリュンピア祭典競技に常に参加している全ての競技選手達と同じくらい、競技選手ではない人は、鍛錬が少ないという事が有っては成らない」

「（鍛錬に対して怠惰という）肉体についての悪習慣のせいで、戦争で危険にさらされて、すぐに死んだり、屈辱的に助かったりした者どもは少なくない」

「同一の原因のために捕虜と成ってしまった者どもは多数であるし、もし、そう成ったら、捕虜と成ってしまった者どもは余生に奴隷の苦しみを耐える必要が有る」

「また、(捕虜と奴隷という)痛ましい苦境に陥った後、(捕虜から解放されるための身代金として、)全所持金額のうち最高金額を払ってしまったら、またた、全所持金額よりも高い金額を払ってしまったら、死が肉体の命から解放してくれるまで、最低限の必需品も不足してしまう悲惨な(貧乏)生活が延々と続くに違い無い」

「虚弱な肉体によって、『(戦争などの危機に)臆病な行動をする(はずだ)』と思われてしまって、悪い評判を得てしまう者どもも多数いる」

(鍛錬に対して怠惰という)悪習慣に加えられる前述の罰、不利益を軽く見てしまう事ができますか？」

「『鍛錬に対する怠惰に対する罰、不利益を軽々と耐える事ができる』と思い込んでしまっているのですか？」

「私ソクラテスが思うに、(鍛錬しない者どもが受けるであろう労苦と)比較すると、健康な肉体の状態へ適切に鍛錬する人が受けるであろう労苦は、遥かに、より軽い。いや、快適ですらある」

「それとも、『(肉体を鍛錬する)良い習慣よりも、(肉体を鍛錬しない怠惰な)悪習慣は、より健康的であるし、一般的に、より役に立つ』という主張でもしますか？」

「次のような、健康な状態から湧き出す恩恵を軽く見ているのですか？」

「悪い病弱な状態に降りかかる災いとは、まさに正反対の恩恵が、健康な状態には伴います」

「まさに、健康は、健康と同時に、強さを暗示して意味していませんか？」

「この健康という護符だけで、多数の人達は、戦争という苦難を無事に乗り越えてきています」

「(健康によって、多数の人達は、)気高く、全ての戦争の恐ろしい事を乗り越えても、無傷でした」
「この健康という支えだけで、多数の人達は、友人達を救い出したり、祖国への援助者として進み出たりしてきています」
「それによって、健康な人達は、『感謝に値する』と思われて、大いなる高名を獲得して、国家からの無上の栄光という報いを受け取りました」
「健康な人達には、余生をより幸せに、より輝かしく過ごす事も約束されている」
「また、死に際して健康な人達は、より良い見通しの人生の起点という財産を子供達に残せる」
「我々の都市国家アテナイは軍事的な鍛錬を公的に行（おこな）っていない。これは、個人的な軍事的な鍛錬を怠る理由には成らず、むしろ、軍事的な鍛錬を最も重く見る理由に成る」
「『全種類の競技でも、全ての商取引でも、(健康な)肉体によって良く用意が出来ていると、(行動の結果が)悪く成る事が無い』と保証します」
「また、実際、人の行動で、(健康な)肉体が役に立たない事など無い」（「実際、人の全ての行動で、健康な肉体は役に立つ」）
「そのため、肉体に対する全ての要求において、(肉体が虚弱であるよりも、)肉体が最良の状態であるのは、大いに、より良いのである」
「なぜなら、(誤った)推測で『肉体の必要性は些細である』と思い込んでいても、『(肉体の)不健康は恐るべき失敗をもたらす』と誰が知っているのか？　いいえ！　誰も知らない！」

「『忘れやすさ、気落ち、不機嫌、狂気は、(肉体の)不健康という機会に、知能を頻繁に非常に激しく襲ってしまうので、知能から全ての知識を追い払ってしまう』と話せば十分であろう」

「しかし、良い肉体の状態の人は、大いに安全である」

「どのみち、肉体が健康な人は、不健康による前述のような失敗を被る危険に晒されない」

「肉体が健康な人は、むしろ、『(肉体を鍛錬する)良い習慣は、(肉体を鍛錬しない怠惰な)悪習慣による結果とは、正反対の(良い)結果をもたらす』と期待できます」

(「肉体が健康な人は、肉体を鍛錬する良い習慣によって、正反対の、悪い習慣が伴う悪い結果とは反対の、良い結果が保証されていると十分に期待できます」※別の版)

「そして、確実に、この(良い)結末、結果を迎えるまでに、(肉体の鍛錬という過程で、)人の感覚で人に耐えられないような事は何も無いのである……」

「『自身を創造して、完全に完成させた強い美しい肉体が、どのような様子であるか』を見上げて見ないで、杜撰にも自身(の肉体)を軽視して老いるのは、人にとって、劣悪な事なのである」

「前述の栄光は、自身(の肉体)を軽視する罪を犯している人には、与えてもらえないのです」

「なぜなら、肉体を鍛錬しない怠惰な者どもは、求められなくても自発的に(自分の心が)燃え上がるのを習慣としていない」

(「なぜなら、肉体を鍛錬しない怠惰な者どもは、自発的に自身の力を見せるのを習慣としていない」※別の版)

第三巻 第十三章（怒るなかれ）（劣悪な人は無作法に陥りやすい）（一時的な断食は有益である）（気難しい、うるさい人に成るなかれ）（他人を反面教師にして自身を反省しなさい）（旅について）

かつて、ある人が、通りがかりの人に挨拶しても、挨拶し返してもらえなかったので、（偽の）義憤で怒った時に、次のようにソクラテスは話した。

「あなたは、十分に、他人に笑いものにされてしまう！　あなたは、肉体が劣悪な状態の人に会っても、怒りに陥ったりしないだろう。それにもかかわらず、あなたは、無作法に多少陥りやすい劣悪な魂の人に会うと、怒りを感じるというのだから」

別の、ある人が、「食事を取っても（味覚の）快楽を感じない」と訴えたのに対して、次のようにソクラテスは話した。

「（医者）アクメノスは、それに対する良い指導を知っています」

すると、他の人が「それは、どういった物ですか？」と尋ねたので、ソクラテスは「（一時的に一定期間、）食事をやめるのです」と話した。

（次のようにソクラテスは話した。）

「快楽、節約、健康という理由からの、（一時的な）完全な断食は、大いに有益である」

また、他の、ある人が「私の家の飲用水は熱い」と嘆いた時に、次のようにソクラテスは応えた。

「それならば、あなたは、温(あたた)かい湯が欲しい時に、(湯が沸くのを)待つ必要が無いだろう」
次のように、その人は話した。
「入浴目的には、私の家の飲用水は冷たいのです」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたの家の者達は、あなたの家の飲用水を飲んだり、あなたの家の飲用水で(体を)洗ったりする事を嫌だと思っているように見受けられますか？あなたは分かりますか？」
次のように、その人は話した。
「全く逆なのです」
「私の家の者達が、私の家の飲用水を、飲用と入浴用の両方の目的に、何とも満足そうに利用するのを、私は、いつも驚いて不思議に思います」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたの家の水と、医神アスクレピオスの神殿の温泉の、どちらが、口にするには、より熱いですか？」
次のように、その人は話した。
「医神アスクレピオスの神殿の水のほうが、口にするには、より熱いです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたの家の水と、アムピアラオスの洞窟の冷泉の、どちらが、入浴するには、より冷たいですか？」
次のように、その人は話した。
「アムピアラオスの洞窟の冷泉のほうが、入浴するには、より冷たいです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どうか、次の事に、注意して気づいて認めてください」

「あなたは、気をつけないと、あなたの家の者達に『家の使用人よりも、また、病人よりも、気難しくて、うるさい』と非難されるだろう」

ある人が、自分に付き添っていた奴隷を、激しく鞭（ムチ）で打っていたので、次のようにソクラテスは尋ねた。

「なぜ、あの人は、自分の召し使いに、とても怒っているのですか？」

その人は「この奴隷の奴は、怠惰であるし、大食いであるし、何の役にも立たない馬鹿であるし、仕事よりも金銭が大好きである」という口実で自分の言い訳をした。

その言葉に対して、次のようにソクラテスは話した。

「そういう理由の場合、『主人である、あなたと、その召使いの人の、二人のうち、どちらが鞭（ムチ）で打たれるのに、よりふさわしいか？』という考えが、今まで、あなたを襲いませんでしたか？」

また、ある人がオリュンピアへの旅について心配していると、次のようにソクラテスは尋ねた。

「なぜ距離が長いのを心配しているのですか？」

「ここに居ても、家に居ても、あなたは、一日中、歩くのに近い、過ごし方をします」

「ええ、オリュンピアへの途中、あなたは、歩き、その日の初めての食事を取り、さらに歩き、食事を取り、寝るでしょう」

「『五日間か六日間の歩行距離を結合して一つの長い線として伸ばせば、すぐにアテナイからオリュンピアへ到達するだろう』と思いませんか？」

「私ソクラテスは、あなたに、どの方法でも、一日でも出発が遅過ぎるよりも、むしろ、一日でも余分に早く出発する事を勧めます」
「適正な量よりも一日の行程を無理に長くする必要が有るのは、(旅の)妨げに十分に成ってしまうかもしれません」
「けれども、必要(な日数)よりも一日の行程が(多く余分に)かかっても、(旅の日数の制限が)全く緩和するだけです」
「実に、急いで出発しなさい。また、途中で、急ぐなかれ」

また、他の、ある人が、「私は、長旅の後で完全に疲れ果てています」と話すと、次のように、ソクラテスは、その人に尋ねた。
「あなたには、運ぶ必要が有る手荷物が有ったのですか？」
次のように、その愚痴をこぼした人は応えた。
「いいえ」
「自分のマントだけです」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたは独りで旅をしたのですか？　それとも、あなたと共に男性の使用人もいましたか？」
次のように、その人は話した。
「はい。私には、男性の使用人がいました」
次のようにソクラテスは話した。
「男性の使用人は手ぶらでしたか？　それとも、男性の使用人は運ぶ必要が有る何かを持っていましたか？」
次のように、その人は話した。
「もちろん」

「男性の使用人は、私の上掛けと、他の手荷物を持っていました」
次のようにソクラテスは話した。
「では、男性の使用人は、旅によって、結果として、どのような様子に成りましたか？」
次のように、その人は話した。
「私が思うに、私よりも、男性の使用人は、より元気でした」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、仮に、あなたが、(実際は男性の使用人が運んだ)自分の手荷物を運ぶ必要が有ったら、あなたの様子は、どのように成ったであろうか？」
次のように、その人は話した。
「『とても大変であっただろう』と言えます」
「と言うよりは、私では全く手荷物を運ぶ事ができなかったであろう」
次のようにソクラテスは話した。
「何て自認だ！」
「まさか、貧弱な奴隷の少年には、とても言うにも及ばず、『あなたは労苦して歩く事ができない』だって！」
「あなたの、その発言は、競技選手にふさわしい鍛錬による完全な人の発言として適いますか？　いいえ！　あなたは、競技選手にふさわしい鍛錬による完全な人ではない！」

第三巻 第十四章（贅沢に大食いするのは悪習慣）（主食と惣菜を一対多で食べるのは悪習慣）

共同の宴会の時で、友人達のうち何人かが料理を自ら少なく提供し、他の人達が料理を多く提供した時に、ソクラテスは、「少なく提供された料理を共有の在庫（、おかわり）に投入するように」と使用人達へ命じるか、少なく提供された料理を共有の料理として「（全員に）満遍なく、宴会にいる、それぞれに、よそってあげるように」と使用人達へ命じた。

このため、料理を多く提供した人達は、共有の在庫（、おかわり）として共有してもらえない時に恥じたし、全員に、よそってもらえない時にも恥じた。（このため、料理を多く提供した人達は、共有の在庫、おかわりとして共有するのに結果として適さない事と、全員に一盛りの料理を提供するのに結果として適さない事を恥じた。※別の版）

そのため、（料理を多く提供した人達は、）多く提供した料理を共有の在庫（、おかわり）にし（てみ）た。

そうすると、料理を多く提供した人達は、料理を少なく提供した人達よりも、（食べる量が）良く（多く）成らなかったので、高価な美味しい料理を（多く）提供する事をすぐにやめた。

（贅沢に大食いする悪習慣をソクラテスはやめさせた。）

ある宴会で、ソクラテスが偶々気づいたように、友人達のうちの、ある人は、何も付いていない（パンといった）主食をよけて、（肉料理といった）特定の美味しい料理（、惣菜だけ）を食べるのに専念していた。

（その宴会では、）名前と定義と、言葉（、名前）をものに適切に適用する事についての議論を続けていた。

（その宴会では、「何々の言葉、名前が意味する厳密な正確なものとは何か？」、「言葉、名前によって、何々の意味を定義してください」といった、名前についてへ会話が向かいました。※別の版）

そこで、ソクラテスは、友人達に訴えかけて、次のように話した。

「なぜ人々が、ある人を『（食事が）贅沢な奴』と呼ぶのか、説明しましょうか？」

「『（食事が）贅沢』という言葉を適用する、特定の行動とは、何ですか？」

「なぜなら、全ての人は、得る事ができるならば、（パンといった）主食に、いくつかの料理（、惣菜）を加えるからです」

「しかし、私達は『（食事が）贅沢』の定義に完全に思い当たった事が未だ無い、と私ソクラテスは思っています」

「私達がバターを塗ったパンを好きだからといって、私達は『贅沢に食べる者ども』と呼ばれるべきでしょうか？」

（次のように、友人達のうち、ある人は応えた。）

「いいえ！　全く！」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、さて、仮に、ある人が、鍛錬のため（、筋肉を増強するため）ではなく、食べる快楽のために、何も付けていない全ての（パンといった）主食を全く食べないで、鹿肉や他の料理（、惣菜だけ）を食べるように限っているならば、そんな人は『（食事が）贅沢な奴』という名前を得る事に成ってしまいませんか？」

次のように、ある人は答えた。

「他の全ての人々には、そんな人に(食欲の強さで)対抗できる見込みは無いでしょう」
(「そんな人よりも、『食事が贅沢な奴』という名前を受けるのに、よりふさわしい人は全く誰もいないでしょう」※別の版)
次のように別の人が口を挟んだ。
「また、ある人が貪り食った料理(、惣菜)の量が、穀物による主食の残り(の量)と全く、つり合っていなければ、その人は、どうでしょうか?(『食事が贅沢な奴』でしょうか?)」(「主食と惣菜を一対多で食べる人は『食事が贅沢な奴』でしょうか?」)
次のようにソクラテスは話した。
「いずれにしても、その人は、(『食事が贅沢な奴』という、)まさに適正な名前を確立しています」
「また、他の全ての人々が、良好な収穫を求めて、『私達の穀物と油(が取れる実)が増えますように!』と神へ祈る時、」
「その人は、論理的に当然、『私の肉鍋の肉が増えますように!』と叫ぶかもしれない」
このソクラテスの急な口撃の最後の言葉で、その若者は、「この会話は、いくらかは、自分に向けられている」と気づいて、美味しい料理(、惣菜)を食べるのを実際は思い留まらずに、たっぷりと一切れのパンを取っ(て、ごまかそうとし)た。
ソクラテスは、その全てを見ていて、次のように、言い加えた。
「その友人から目を離さないでください、あなた達、その友人の隣の他の友人達よ。そして、(惣菜を付けて)濡れたパンと、味を添える食べ物(、惣菜)を均等に食べるか見張ってください」

別の、ある時、ソクラテスは、友人達のうちの一人が実に一つのパン(、主食)だけで数種類の美味しい料理(、惣菜)を試して食べているのを見て、次のように、話した。

(ソクラテスは、主食と惣菜を一対多で一口で食べている人を見つけた。)

「その、とても多数の料理(、惣菜)を同時に大量に食べる方法よりも、より贅沢な、料理を食べる方法が存在するでしょうか？　また、より殺人的な、料理を食べる方法が存在するでしょうか？」

「神よ！　多数の種類の味を添える食べ物(、惣菜)を一口で食べる何て！」

「第一に、実際、その人は、料理人が(一つの料理の材料に)定めている(数)よりも、より多数の材料を(口の中で)混ぜる事に成ります。これは、贅沢です」

「第二に、その人には、料理人が調和しないと思った複数の料理の材料を混ぜる大胆さが有ります。それによって、もし料理人が正しければ、その人は、誤っている事に成りますし、結果として、料理人のわざを台無しにした者という事に成ります」

「さて、先に、私達のために料理してくれる最も偉大な名人の料理人達を招いておいて、その後、その料理人達の技術に対して何も要求しないのに、料理、料理方法を奪って変えてしまうのは、おかしくありませんか？」

「同時に多数の種類の料理(、惣菜)を食べるのを習慣にしてしまっている大胆な人には、より悪い事が待っています」

「出された料理が少ない時に、不純な食習慣によって、その人は自ら、中途半端な飢えを感じる羽目に成ってしまうであろう」

「一方、(その時に、)その人と、隣で共に食べる人は、唯一の惣菜だけをパンに付けるのを習慣にしているので、楽しむであろうし、料理(、惣菜)が、とても少ない事など決して無いであろう」

また、次のように、ソクラテスは話していた。

「アテナイ人の言葉で『善く食べる』という言葉は『食べる』という言葉と同義語であった」

「(アテナイ人の言葉の『善く食べる』の、)接頭語の『善く』(、修飾語の『善く』)は、『魂や肉体を苦悩させせない食べ物を食べる』、『魂や肉体を苦悩させせないように食べる』事と『近くで見つかる食べ物を食べる』事や『見つけやすい食べ物を食べる』事を暗示している」

そのため、ソクラテスの言葉の「善く食べる」(、「食べる」)に当てはまるのは、質素な秩序正しい生き方である。

(主食の穀物は近場で大量生産されやすいので、主食は安く成りやすいし手に入りやすい)

第四巻

第四巻 第一章（生まれつきの才能が有る人は、かえって善悪の教育が必要）

また、ソクラテスは、次のような人であった。

ソクラテスが全ての状況下で、全ての点で、とても役に立ったので、普通の感性を（神に）与えられて（持って）いる観察者は、「（どこでも関係無く、どのような状況でも関係無く、）ソクラテスと共にいる事、ソクラテスと交際して長い時間を過ごす事は、実に、（知恵といった）価格をつけられないほど貴重な物を得られる」という事実を理解できた。

ソクラテスと共にいる事を習慣として成熟した人達、ソクラテス（の知恵）を受け入れた人達には、ソクラテスがもういなくても、ソクラテスの思い出すら、大いなる利益と感じられる。

実に、ソクラテスは、より真剣な気分の時に劣らず、より軽やかな気分の時にも、知恵によって役に立った。

「私ソクラテスは誰々を愛している」という、とても頻繁にソクラテスの口に上（のぼ）っていた、ソクラテスの言葉を例として取り上げよう。

いつもソクラテスの心から出ていた、この言葉は、美しさの盛りの時の肉体の美点に対しての言葉ではなく、むしろ、善行で明らかに成っている心の諸々の能力に対しての言葉であるのは、明らかでした。

（いつもソクラテスの心から出ていた、この言葉は、美しさの点での肉体の美点への言葉ではなく、美徳の点での心への言葉なのである。そして、生まれつきの善い資質の所有者の学ぼうとする心構えは、次のような生まれつきの善い資質を見つけるであろう。※別の版）

ソクラテスは、特定の諸々の証拠によって、次のような「諸々の(生まれつきの)善い資質」を見つけた。

関心を向けているものを学ぼうとする心構え。

学んだ知恵を記憶に留める力。

特に、家や国家の善い統治に役立つ物事を学ぶのを熱心に好む事と、一般的に、人や人事を正しく扱うのに役立つ物事を学ぶのを熱心に好む事。

「前述のような『生まれつきの善い資質』が有る人には、自らが幸福に成るための教育や、自分の家族の幸福な統治者に成るための教育だけではなく、国家や一人一人の人々のような他の人々も幸せにするための教育が必要なだけなのである」とソクラテスは主張した。

(「前述のような『生まれつきの善い資質』が有る類の人には、教育するとすれば、自らが幸運に恵まれた個人である力量を示すための教育や、自分の家族の幸福な統治者である力量を示すための教育だけではなく、国家や一人一人の人々のような他の人々も幸せにするための教育が必要なだけなのである」とソクラテスは主張した。※別の版)

実に、ソクラテスには、色々な種類の人々を扱うための色々な方法が有った。

(実に、ソクラテスの非難の方法は、一様な同一の方法ではなかった。ソクラテスの非難の方法は、非難する相手によって変化するのである。※別の版)

「自分には生まれつきの優れた才能が有る」と思い込んでしまって学ぶ事を軽んじている者どもには、ソクラテスは「(逆に、かえって、)生まれつきの最も優れた才能が有る人には、鍛錬と教育の必要が最も有る」と教えた。

(誰かが、自分の生まれつきの能力を頼ってしまって、学ぶ事を軽んじる気に成ってしまったら、ソクラテスは「逆に、かえって、まさに、生まれつき

の優れた才能が有る人には、鍛錬と教育の必要が最も有る」と教えようと試みた。※別の版)

そのため、「馬の場合では、まさに、元気の良い馬は、子馬の時に適切に調教されたら、役に立つ優れた馬に成長するが、調教されないまま放置されたら、結果として、全く扱い難い、何の役にも立たない馬に成ってしまう」とソクラテスはよく教えていた。

また、次のように、ソクラテスは犬の場合も取り上げた。

「高度な品種改良の特徴である、戦う熱意、野生動物を攻撃する熱意を見せる、子犬は、善く育てられたら、狩猟のための優秀さや、他の全ての役に立つ目的のための優秀さを示します」

「しかし、子犬への教育を軽んじると、愚鈍な、狂暴な、簡単な命令にも従う事ができない犬に成ってしまいます」

「前述は、まさに、人でも同一なのです」

「ここでも、(人でも、)生まれつきの最も優れた(、神に授けられた)才能が有る若者、最も強固な心という資質と着手した事は何でも成し遂げるという確固とした決意を所有していると言える若者は、行うべき正しい事を教わって鍛錬したら、最高に善良で役に立つ人である力量を示すであろう」

「実際、生まれつきの才能が有る上に、善を教わって鍛錬した人は、最大規模で最善の事を成し遂げる」

「しかし、生まれつきの才能が有る人を、鍛錬を受けさせずに無作法な無知なまま放置したら、非常な邪悪さを示すだけではなく、非常に周囲に害悪をまき散らすであろう。そして、行うべき正しい事を見分ける知恵が欠如しているため、邪悪な劣悪な残酷な行為に頻繁に着手するであろう」

(「しかし、生まれつきの才能が有る人を、鍛錬を受けさせずに無作法な無知なまま放置したら、非常な邪悪さを示すだけではなく、非常に周囲に害悪をまき散らすであろう。そして、最も有害な類の悪人の長に簡単に成ってしまうかもしれない」※別の版)

「まさに、大悪人の資質(、才能)の盛大さと激しさは、自分の悪を抑える事や、自分を悪い方向から逸(そ)らす事を不可能にしてしまいます」

「こうして、生まれつきの才能は有るが、教育と鍛錬を受けない人の場合、成し遂げる事は最大規模ではあるが、成し遂げる事は最悪な事なのである」

また、「金銭が人を作る」という(誤った)理由で、また、「自分の富によって、自分が望む事を十分に成し遂げる事ができるし、自分の財力による行動力に感心した人々から栄光を十分に勝ち取る事ができる」という(誤った)理由で、富を誇ってしまって、「自分を何か更に教育する必要は無い」と思い込んでしまう類(たぐい)の者どもを取り上げると、

ソクラテスは、「教わる事無しに、行動において、何が有益か、何が有害かを区別するのは、可能である」と思い込む愚かさを教えて、そのような者どもを正気に戻した。

また、ソクラテスは、「善悪の区別以外の、富だけが、人が望む事や、人にとっての有利な簡単な方法を見つける事という、何事においてでも、人の役に立つ」と思い込む愚かさを教えて、そのような者どもを正気に戻した。

また、「有益に労苦できる力無しで、人が、成功したり、人生での戦いに対して全ての種類の方法で十分に用意したりできる」と思い込むのは、最も、まさに、愚鈍ではありませんか?

また、「真の知恵無しに富だけで何らかの優秀さに対する高名を勝ち取ったり、何らかの優秀さに対する高名無しに栄光と高名を勝ち取ったりできる」と思い込むのも、最も、まさに、愚鈍ではありませんか？

第四巻 第二章（「自身を知りなさい」について）

また、「自分は最優の教育を受けた」と思い込んで自分の知恵を思い上がっている類の者ども、第三の類の者どもに話を移すと、ソクラテスが、これらの者どもを扱った方法を、私クセノフォンは今から説明するつもりである。

（次の事をソクラテスは理解していた。）

「美しい」エウテュデモスは、最も高名な詩人達と哲学者達による多数の書物を集めていて、それらの蔵書のせいで「知恵において同胞よりも上である」と自ら既に思い込んでいて、実に「話す能力と行動する能力において同胞の全てよりも優れる事ができる」と、やがて思い込むように成ってしまったようであった。

ソクラテスが気づいていたように、最初は、この若者エウテュデモスは、若いので未だ「アゴラ」に足を踏み入れなかったが、何か用事が有れば、馬具販売人の店のすぐそばに座るのを習慣にしていた。

（都市アテナイの「アゴラ」は広場で市場が有り「民会」が行われた。）

そのため、ソクラテスは、ソクラテスと共にいた友人達のうち何人かと、その同じ馬具販売人の店へ行った。

そして、まず、次のように、ソクラテスの友人のうち、ある人が質問し始めた。

「同胞の(都市国家アテナイ)市民達よりも、テミストクレスは、とても優れていたので、才能が有る人による貢献が必要と成った時に、都市(国家アテナイ)の全市民の目が思わずテミストクレスに向けられたのは、テミストクレス

が賢者と交際した事による物であったのですか？　それとも、他者からの助力無しのテミストクレス自身の才能による物であったのですか？」

エウテュデモスの心を動かすために、次のようにソクラテスは答えた。

「『能力が有る教師達の助けによってのみ、比較的、価値が小さいわざにおける優秀さには、到達する事ができるが、全ての国民にとって最も重大である、国家の指導者の地位は、偶然の、棚からぼたもちのように、誰にでも転がり込む運命に有る』という思い込みには、確実に、赤裸々な愚鈍さが存在する」(国家の指導者に成るには、教師に学んで、優秀さに到達する必要が有る。)

別の機会に、エウテュデモスは、その場にいたが、明らかに見て取れるように、まるで知恵という点でソクラテスに感心していると思われる以外の事なら何でも選ぶつもりであるかのように、(ソクラテス達に)親しく合流する事からは身を引く気に多少、成っていたようなので、次のようにソクラテスは話した。

「ここにいる我々の友人エウテュデモスが成人して、国家が解決したい何らかの問題を提起したら、エウテュデモスは助言という利益をもたらすつもりであるのは、エウテュデモスの習慣的な探求から、明らかである。そうではありませんか？　あなた達、私ソクラテスの友人達よ」

「『(エウテュデモスは)誰からも何も学んでいない』と思われたいというエウテュデモスの強い願望で、(エウテュデモスが議会で演説する、)その時のために、エウテュデモスは議会での演説の見事な前置きを用意しているのを、誰でも想像できるはずである」

(「『エウテュデモスは誰からも何も学んでいない』と思われたいというエウテュデモスの強い願望で、エウテュデモスは議会での演説の見事な前置きを用意していて、現在、構成の最中であるのを、誰でも想像できるはずである。エウテュデモスは、どんな危険を冒しても、『誰かから何らかの知識の欠片を得ている』という疑惑を避けたいのです。そのため、どうしたら、エウテュデモスは、このように疑われずに演説の前置きを済ませられますか？」

※別の版)

「明らかに、演説の前置きで、次のように、エウテュデモスは自身について話すであろう」

「アテナイの人々よ、私エウテュデモスは、誰かから何かを学んだ事が一度も決して有りません」

「また、私エウテュデモスは、誰かについて『(誰々は、)有能な政治家であるし、言葉や話す事に良く精通しているし、行動における才能が有る』と聞いた事がかつて有っても、その人に個別に会おうと努めた事が有りません」

「私エウテュデモスは、知識を持つ人達の中から教師を得ようと労苦する事すら、した事が有りません」

(「私エウテュデモスは、学術的な熟練者達の中から教師を得ようと労苦する事すら、した事が有りません」※別の版)

「逆に、私エウテュデモスは、(他人から学ぶ事を)執拗に避けてきているので、『他人から学んでいる』とは言えず、そうしている(、『他人から学んでいる』)と疑われる余地は正に最も、わずかしかないと言えます」

「しかし、私エウテュデモスは、自然の光によって私に生じた全ての考えを、進んで、(助言として、)あなた達が自由にできる物として任せます……」

「例えば、国家の医者の公職といった公職を求めている誰かの口から話された、このような前置きは、どれくらい適切に思われるというのか？　適切ではないですよね？」
「次のような前置きで、どれくらい有利に話し始める事ができるというのか？」
「アテナイの人々よ、私は、誰かの助けによって、治療の技術を学んだ事が決して有りません」
「また、私は、医者の中から、誰をも教師として得ようと努めた事が有りません」
「実際、要約すると、私は、永遠不変に、医者から何か学ぶ事を警戒するだけではなく、医学を学ぶという考えを正に完全に警戒しています」
「しかし、もし、あなた達が、よろしければ、私に、この医者という公職を与えてくれるならば、私は、あなた達の体で実験して、医療技術を学ぶために最善を尽くすと約束します」
その場にいた全ての人が、この演説の前置きに笑いました。
(そして、エウテュデモスは、他人から学ばない、という、その問題行為をやめたようであった。)
やがて、エウテュデモスが、まるで「沈黙によって『エウテュデモスは賢明である』という高名にあずかる事ができる」と期待しているかのように、未だ自ら話そうと努めないが、とりあえずソクラテスの話に注意を払う気に成ったのが明らかに成ると、ソクラテスは、「エウテュデモスの、このような欠点を直そう」と思って、次のように、話を続けた。
「竪琴やフルートを演奏するために、また、馬に乗るために、また、同様の全ての技術の熟練者に成るために、学ぶのを熱望している人々が、個人的に

自ら絶え間無く、自分が優れたいと熱望している事の範疇ならば、どんな事でも学ぶのを喜ばなかったら、驚きませんか？」

「ただし、学ぶのを熱望する人々は、まるで別の方法では高名に成る事ができないかのように、最良であると評価されている教師達の全ての物事における意見に従って全ての物事を行い全ての物事に耐えて、教師達の教えを請う必要が有ります」

「一方、演説者として政治家として政治的に優れたいと熱望している人々の中には、政治が要求する全ての物事は、すぐには、言ってみれば、閃きによってでは、準備のための全ての労苦無しには、どんな準備でも無しには、行うのは不可能である理由を理解できない者どももいるのである」

(「一方、政治の範疇において話す事と行動において強く成りたいと熱望している人々の中には、政治が要求する全ての物事は、すぐには、言ってみれば、閃きによってでは、準備のための全ての労苦無しには、どんな準備でも無しには、行うのは不可能である理由を理解できない者どももいるのである」※別の版)

「学ばない者ども、『政治には学ぶなどの準備が必要である』と理解できない者どもが心配するのは、政治という分野での競争相手が、より多く成るのに比例して、学ぶ人達よりも、実現が、より困難である事に違い無いし、『他の分野に乗り込んだ人々が求められるよりも、政治という海に乗り込んだ人々のほうが、より長く、配慮する労苦の継続が必要である』と言わんばかりに、実に、野心の目標に到達する人は、より少数である事である、と(私ソクラテスには)思われます」

ソクラテスが、エウテュデモスとの交流の初期に、聞き耳を立てているエウテュデモスへ聞かせるのを習慣としていた話題とは、このような物であった。

実に、哲学者ソクラテスは、「若者エウテュデモスが議論の変化を(前)より容易に許容できるだけではなく今では、ある程度、熱心な聴講生に成った」と気づくと、独りで馬具販売人の店に行き、エウテュデモスがソクラテスのそばに座ったら、次のような会話を行（おこな）った。

「どうか、教えてください、エウテュデモスよ」

「『賢者と呼ばれている人達の文書をあなたエウテュデモスが多数、収集している』と人々が私ソクラテスに教えてくれましたが、本当の事実でしょうか？」

(「『古代ギリシャの作者達や哲学者達の、いくつかの作品をあなたエウテュデモスが収集している』と人々が私ソクラテスに教えてくれましたが、本当の事実でしょうか？」※別の版)

次のようにエウテュデモスは答えた。

「全くの事実です、ソクラテスよ」

「また、私エウテュデモスは、可能な限り手に入れる事ができる全ての書物を所有するまで、収集を続けるつもりです」

次のようにソクラテスは話した。

「(家の女主人である、女神の女王である、)女神ヘラにかけて！」

「あなたエウテュデモスが金銀よりもむしろ知恵という宝の所有を望んだのを私ソクラテスはほめます」

「あなたエウテュデモスが金銀よりも知恵を望んだのは、『金銀は人をより善くできる手段ではなく、賢者の考えだけが善行によって人の所有物を豊かにできる』と、あなたが信じている事を示しています」

すると、エウテュデモスは、このソクラテスの言葉を聞いて、喜んだ。

なぜなら、エウテュデモスは、「ソクラテスの目には、『私エウテュデモスは知恵の獲得への高等な道の上にいる』と見えている」と思い込んだからである。

しかし、ソクラテスは、エウテュデモスがほめられて喜んでいるのに気づいて、話を続けた。

「では、エウテュデモスよ、何に、あなたは優れたいと熱望して、書物を収集しているのですか？」

すると、エウテュデモスは、何と答えるべきか考えて、沈黙したので、次のようにソクラテスは言い加えた。

「あなたエウテュデモスは、偉大な医者に成りたいのですか？」

「薬物類の処方箋は、それだけで、かなり大規模な蔵書を形成するであろうからです」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「いいえ！　実に、私エウテュデモスは医者に成りたい訳ではありません！」

次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたエウテュデモスは建築家に成りたいと思っているのですか？」

「建築家は、十分に蓄えられた機知と見識を持つ人をも意味するからです」

（「建築家に成るとは、十分に集められた知恵が、かなり蓄えられている事を意味するからです」※別の版）

（次のようにエウテュデモスは応えた。）

「私エウテュデモスには、そのような建築家に成る野心は無いです」

次のようにソクラテスは話した。

「ええと、あなたエウテュデモスは、テオドロスのような数学者に成りたいと思っているのですか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「いいえ、ましてや、私エウテュデモスは、数学者に成りたい訳ではありません」

次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたエウテュデモスは天文学者に成りたいと思っているのですか？」

（若者エウテュデモスが不同意を示したので、次のようにソクラテスは尋ねた。）

「では、吟遊詩人ですか？」

「なぜなら、『あなたエウテュデモスはホメロスの全作品を所有している』と私ソクラテスは聞いているからです」

（次のように若者エウテュデモスは大きな声で話した。）

「いいえ。神よ！　私エウテュデモスは吟遊詩人に成りたい訳ではありません」

「吟遊詩人は叙事詩に、とても正確に精通しているのを、もちろん、私エウテュデモスは知っています」

「しかし、吟遊詩人ども自身は、もう十分なほど頭が空（から）っぽの奴らです」

（「しかし、吟遊詩人どもは、叙事詩を歌う技術が単に完全なだけであり、吟遊詩人ども自身は最も正に愚者に成りやすい」※別の版）
ついに、次のようにソクラテスは話した。
「エウテュデモスよ、あなたは優れた人に成って、統治するのにふさわしい、自身や他の全ての人達に利益をもたらす能力が有る、政治家や行政官に成る事を熱望しているのですか？」
（「エウテュデモスよ、あなたは優れた人に成って、政治家や経済の専門家に成って、統治して、自身や他の全ての人達の恩人に成る事を熱望しているのですか？」※別の版）
(次のようにエウテュデモスは応えた。）
「はい。私エウテュデモスが成りたいと熱望しているのは、政治家という計り知れないほど優れた人です」
(次のようにソクラテスは話した。）
「神に誓って！」
「では、あなたエウテュデモスは、実に、野心の目標として、最も気高い徳、善行、力と、諸々のわざの中の最も大いなるわざを選んだのです」
「なぜなら、政治、統治は王者達の所有物だからです」
「そのため、政治、統治は『王者のわざ』と呼ばれています」
(次のようにソクラテスは話を続けた。）
「しかし、あなたエウテュデモスは、『正しさと高潔さ無しで、諸々の物事において、優れる事ができるか否か？』を考えた事が有りますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「もちろん、私エウテュデモスは考えた事が有ります」

「そして、私エウテュデモスは、『正義と高潔さ無しでは、善い都市国家の市民、善い国民に成る事すら不可能である』と思います」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「では、疑い無く、あなたエウテュデモスは、(正義と高潔さという)最初の一歩を達成しているのですか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「ええ、ソクラテスよ、私エウテュデモスは、『全ての政治家志願者と対しても、正しい高潔な人のままでいる事ができる』と考えています」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、正しい高潔な人には、大工や靴屋のように、正しい人に特有の、正しい人にふさわしい務めが有るでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確かに、正しい人には、正しい人に特有の、正しい人にふさわしい務めが有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ちょうど大工が大工の作業と作品を見せる事ができるように、正しい人は、正しい人の務めと成果を説明できるべきです。そうではありませんか？」
(次のようにエウテュデモスは応えた。)
「私エウテュデモスは理解しました！『私は正しい務めを説明できない』と、あなたソクラテスは心配しているのですね！」
「ああっ、神よ！」
「もちろん、私エウテュデモスは、正しい務めを説明できます」
「また、その上、不正な務めも説明できます」

「なぜなら、私エウテュデモスの目と耳が届く範囲内で、毎日、不正な種類の物事が少なからず存在するからです」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、(地面の、)こちら側に『善』と書き、そちら側に『悪』と書きましょう」
「そして、『善による成果である』と私達に思われる全ての物事を『善』と書いた所に書いて置き、『悪行による成果である』と私達に思われる全ての物事を『悪』と書いた所に書いて置きませんか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「あなたソクラテスが、『それが物事の役に立つ』と考えるならば、どうぞ、そうしましょう」
そのため、ソクラテスは、提案したように、文字を(地面に)書いて、話を続けた。
「人々の間には、嘘をつく事が存在します。そうではありませんか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確かに」
(次のようにソクラテスは尋ねた。)
「では、嘘をつく事を、善と悪の、どちら側に置きましょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「嘘をつく事は、明らかに悪の側です」
次のようにソクラテスは話した。
「だます事も珍しくありませんよね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「決して珍しくありません」

次のようにソクラテスは話した。
「だます事を、善と悪の、どちら側に置きましょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「だます事は、明らかに悪の側です」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、全ての種類の、金銭を盗るためにだまして損害を与える事は？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「それも悪の側です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、自由民を奴隷にする事は？」
次のようにエウテュデモスは話した。
（「では、人を誘拐して奴隷にする事は？」※別の版）
「それも悪の側です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、前述の物事を善の側に置く事はできません。エウテュデモスよ、そうですよね？」
(次のようにエウテュデモスは応えた。）
「前述の物事を善の側に置くなんて恥じるべきです」
次のようにソクラテスは話した。
「よろしい」
「では、もし、将軍に選ばれた、ある人が、邪悪な敵国の奴隷化に成功したら、私達は、『その人が悪行を犯している』と思うべきでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。

「決して思うべきではありません」
次のようにソクラテスは話した。
「『その人は善行をしている』と認めませんか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、さらに、もし、その人が、戦闘で敵をだましていたら？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「戦闘で敵をだます事も全く正しいでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「では、敵の所有物を盗んで略奪するのは？」
「その人は、正しい事をしていないのでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確かに」
「あなたソクラテスが話を始めた時、『あなたソクラテスは質問を友人達の場合にのみ限定している』と私エウテュデモスは思っていました」
次のようにソクラテスは話した。
「それでは、悪の側に置いた前述の全ての物事を、今では、善の側に置くべきですね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「どうやら、そうですね」
次のようにソクラテスは話した。
「よろしい。ええ、では、そうしましょう」

「では、ぜひ、『敵に対しては、そのようにするのが善である事』という物を新たに定義しましょう」
「『敵に対しては、そのようにするのが善である事』とは、友人に対しては、そのようにするのが悪である事です」
「実に、友人に対しては、我々、人は、可能な限り正しく在る必要が有ります」
（「実に、友人に対しては、絶対に正しく在る必要が有ります」※別の版）
（次のようにエウテュデモスは応えた。）
「私エウテュデモスは、完全に、それに同意します」
（次のようにソクラテスは話した。）
「ここまでは、良いですね」
「では、もし、ある将軍が、自軍の士気が落ちているのを見て、『援軍が来る』という趣旨の嘘をねつ造して、この嘘によって自軍に勇気を取り戻させる必要が有ったならば、私達は、この作り話をした行動を善と悪の、どちらに置きましょうか？」
（次のようにエウテュデモスは応えた。）
「私エウテュデモスの考えでは、善の側です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、さらに、もし、ある人に偶然、病気で薬が必要だが薬を飲むのを拒否している息子がいて、その父親が『美味しい食べ物である』という嘘でだまして薬を息子に飲ませたら、そして、その嘘が息子に健康を取り戻させるのに役立っていたら、私達は善と悪の、どちらに、この詐欺を置きましょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。

「同様の理由で、善に、これも置くべきです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、もし、あなたに、ひどく意気消沈している友人がいて、その友人が自殺するのをあなたが恐れて、そのために、その友人から包丁、短剣や他の自殺の道具を盗んだら、私達は、この盗みを善と悪の、どちらに置くべきですか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確実に、これも善に置く必要が有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「『単純な善の(側と思われる)方法を、全ての場合においては、友人達を扱う場合ですらも、取るべきではない』と、あなたは言っている、と私ソクラテスは理解しましたが(、この理解は正しいですか)？」
(次のように若者エウテュデモスは大きな声で話した。)
「神よ！」
「もし、あなたソクラテスが私エウテュデモスに許してくれるならば、私は前言を撤回します」
次のようにソクラテスは話した。
「もちろん、あなたエウテュデモスが、そうしても良いと、許すとも！」
「(誤りを)偽って善や悪とするよりもむしろ、(誤りならば)全ての物事を(改めるべきである)……」
「ただし、私達が調べるべき点が、ちょうど、もう一点、有ります」
「友人をだまして損害を与えた場合を取り上げましょう」
「意図して、そうした場合と、意図せず、そうした場合の、どちらが、より悪でしょうか？」

次のようにエウテュデモスは話した。
「実に、ソクラテスよ、私エウテュデモスは自分の答えを信じるのをやめました」
「なぜなら、私エウテュデモスの前述の全ての自認や考えは、『最初に考えていたのとは違ってしまった』と私には思われるからです」
（「なぜなら、私エウテュデモスの全ての最初の見解は、『最初に考えていたのとは違ってしまった』と今では私には思われるからです」※別の版）
（「なぜなら、私エウテュデモスの全ての最初の主張は、『真逆の曲解であった』と今では私には思われるからです」※更に別の版）
「それにもかかわらず、もし私エウテュデモスが更に意見を大胆に言っても良いのであれば、『意図せず、だます人よりも、意図して、だます人は、より悪い』と私は言うつもりです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ちょうど文字には文法が存在するように、『善には善の知識が存在する』のでしょうか？　あなたエウテュデモスの意見は、どうですか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「『善には善の知識が存在する』というのが、私エウテュデモスの意見です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、意図して文字を書き間違えたり読み間違えたりする人と、意図せず文字を書き間違えたり読み間違えたりする人の、どちらが『より文学者である』と、あなたエウテュデモスは思うべきでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。

「『意図して文字を書き間違えたり読み間違えたりする人のほうが、より文学者である』と私エウテュデモスは思うべきです」
「なぜなら、意図して文字を書き間違えたり読み間違えたりする人は、選んだ場合は必ず、正しく文字を書いたり読んだりできるからです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、意図して文字を書き間違える人は文学的教養が有る人であり、意図せず文字を書き間違える人は文学的教養が無い人であるのでしょうか？」
（「では、実際、意図して文法に違反する人は文学的教養が有る人であり、意図せず文法に違反する人は文学的教養が無い人であるのでしょうか？」※別の版）
次のようにエウテュデモスは話した。
「それが正しいです。そうです」
「そのような結論を避ける方法が私エウテュデモスには分かりません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、意図して嘘をついてだます人と、意図せず嘘をついてだます人という、二人のうち、どちらが善について知っているでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「明らかに、意図して嘘をついてだます人は、善について知っています」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、『文字についての知識が無い人よりも、文字について知っている人は、より文学的教養が有る』と、あなたエウテュデモスは言っている事に成りますね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「はい」

次のようにソクラテスは話した。
「では、『善についての知識が欠如している人よりも、善について知っている人は、より正しい』ですね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「『そうである』と私エウテュデモスは思います」
「しかし、一生の間、私エウテュデモスは、自分が認めた物事を理解する事ができないでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「ええと、(次のように考えてください)」
「『正しい事を話したいと熱望している、ある人が、二分間ずっと前言を守る事ができない』と仮定してください」
「その人は、最初は『この道は東へ向かう』と話して、それから、『いや、この道は西へ向かう』と話します」
「または、その人は、数字の羅列を合計して、今、ある結果にして、更に、次には、より少ない結果にします」
「このような人について、あなたエウテュデモスは、どう考えますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神よ！」
「明らかに、その人は、『自分は知っている』と思い込んでいる物事について、知らないのです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたエウテュデモスは、『奴隷のような者ども』という、特定の人々に与えられている呼称を知っていますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。

「知っています」
次のようにソクラテスは話した。
「『奴隷のような者ども』という言葉は、賢者を暗示しているのでしょうか？　それとも、無知な者どもに適用されるのでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「明らかに、『奴隷のような者ども』という言葉は、無知な者どもを暗示しています」
次のようにソクラテスは話した。
「無知とは、例えば、鍛冶についての無知でしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いいえ。明らかに違います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、大工についての無知でしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いいえ。大工についての無知でも決してありません」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、靴屋についての無知でしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いいえ。前述のような全てについての無知ではありません」
「むしろ逆です」
「なぜなら、前述の物事しか知らない者どもの大多数は、『奴隷のような者ども』なのである」
次のようにソクラテスは話した。

「あなたエウテュデモスの言葉の真意とは、『美しさ、善、正義について無知な者どもは、特に、奴隷のような者ども、である』という事ですか？」
(次のようにエウテュデモスは応えた。)
「それが、私エウテュデモスの意見です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、我々、人は、『奴隷のような者ども』という非難を避けるために、全ての手段によって、全神経を緊張させる必要が有りますね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いや、ソクラテスよ、全ての神聖であるものにかけて」
「私エウテュデモスは、『とにかく、私は哲学の学徒であるし、進んで美しさと善を探求する人に必要不可欠な全ての物事を教わっているため、正道の上にいる』と思い上がっていました」
「そのため、今、費やしてきた全ての労苦にもかかわらず、何よりも人が知っているべきである物事(である善)についての質問に答える事すらできない時の、私エウテュデモスの絶望をあなたソクラテスは十分に想像できるでしょう」
「そのため、進歩、向上の道は私エウテュデモスには開かれていないですし、改善の道も残されていません」
すると、次のようにソクラテスは話した。
「教えてください、エウテュデモスよ、あなたはデルポイのアポロン神殿に行った事が有りますか？」
(次のようにエウテュデモスは話した。)
「はい。確か、二回、行った事が有ります」
次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたエウテュデモスは、デルポイのアポロン神殿の、ある箇所の、『自身を知りなさい』という碑文に気づきましたか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「はい。気づきました」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたエウテュデモスは、その碑文(の真意)を留意しなかったのですか？」
「それとも、あなたエウテュデモスは、その碑文(の真意)に留意して、『自分は、どのような者であるか？』を知ろうと試みましたか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「私エウテュデモスは『しなかった』と思って良いです」
「とにかく、私エウテュデモスは『自分は、どのような者であるか？　を完全に確実に知っている』という程度にしてしまいました」
「なぜなら、もし、自身についてすら知らなかったのなら、世界の何を知っているというのでしょうか？」(自身について知らない人は、世界の何も知らない。)
次のようにソクラテスは話した。
「自分の名前しか知らない人は、『自身について知っている』と言えると、あなたエウテュデモスは思いますか？」
「それとも、むしろ、馬の利用と用途に関連して、馬が従順で扱いやすいか扱い難いか、強いか弱いか、速いか遅いか、その他の諸々の点でどのくらい耐えられるか、役に立つか役に立たないか、を知るまで、『必要不可欠な知識を知った』と確実に考えない、馬を買おうとする人のように、(『自身を知る』事に)正確に着手する必要が有りませんか？」

「そのため、同様に、実に、『人は、人に求められている事に関連して、自身の性質について自問自答する必要が有る』。そうではありませんか?」
次のようにエウテュデモスは話した。
「ええ、『そうである』と私エウテュデモスも思います」
「自身の能力について知らない人は、自身について知らないのです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、次のような事も明らかです。そうではありませんか?」
「自己認識によって人は(神からの)無数の恩恵に出会いますし、自身についての無知によって多数の害悪に出会ってしまいます」
「なぜなら、自身について知っている人は、自身にとって(真に)利益であるものを知っています」
「自身について知っている人は、自身の能力の限界を知っていて、自身が知っている事を行う事によって、自身が必要としているものを自身にもたらしますし、そのため、成功します」
「また、逆に、自身について知っている人は、自身が知らないものを避ける事によって、誤りを避けますし、誤りを避ける事によって災難も避けます」
「また、自身について知っている人は、(自身についての知を)他人を判断する試金石にして、善いものを自身にもたらし、悪いものを避ける手段として、他人の欲求を利用します」
「一方、自身について知らない者ども、自身の能力について誤解している者どもは、他の全ての人と、他の全ての人の問題に対して、同様の苦境に陥ってしまいます」

「自身について知らない者どもは、自身の欲求についても知らないのであるし、自身のしている事も知らないのであるし、自身が扱っている他人についても知らないのである」

「自身について知らない者どもは、前述の諸々の物事において全く間違えてしまっているので、善いものについて的を外してしまいますし、悪いものに巻き込まれてしまいます」

「また、自身がしている事について知っている人は、成功という成果によって、高名と栄光に到達します」

「友人達は喜んで、自身について知っている人を活用します」

「一方、成功が、より少ない隣人達は、自身の問題で失敗すると、自身について知っている人の助言、導き、庇護を確保したいと熱望します」

「隣人達は、幸福への希望を自身について知っている人にかけます」

「そのため、前述の全ての理由のために、思いやりの主な対象として、自身について知っている人だけを選び出します」

「逆に、自身のしている事について知らない者ども、選択を誤ってしまって着手している事に失敗してしまう者どもは、自身の失敗によって損害を受けてしまって非難も受けてしまうだけではなく、徐々に名声を失ってしまって笑い者に成ってしまって、最終的に恥辱と侮辱を受ける人生を生きる運命に成ってしまいます」

「個人での真実である物事は、集団、社会(、国)での真実でもある」

(「あなたは気づくでしょうが、この法は、政治的な集団、国にも当てはまります」※別の版)

「自国の軍事力について知らなくて自国より強い国と戦争してしまう国は、絶滅させられて終わってしまうか、奴隷状態に陥ってしまって終わってしまいます」

すると、次のようにエウテュデモスは話した。

「私エウテュデモスは、あなたソクラテスの意見に完全に同意しますので、ご安心ください」

「『自身を知りなさい』という教えは、高く評価しても、し過ぎではありません」

「しかし、(『自身を知りなさい』を)どのように応用すれば良いのでしょうか？」

「自身について考察する起点とは、どのような物でしょうか？」

(「自身について調べる手順は、どのような事から始めるべきでしょうか？分からないのです」※別の版)

「もし、あなたソクラテスが思いやり深くも説明を与えてくれるのであれば、私エウテュデモスは、説明を求めて、あなたを仰ぎ見ます」

(「もし、あなたソクラテスが説明しても良いのであれば、私エウテュデモスは、あなたを仰ぎ見ます」※別の版)

(次のようにソクラテスは応えた。)

「ええと、『あなたエウテュデモスは、善い物事と悪い物事の区別については、完全に十分に知っている』と私ソクラテスは思っています」

「今までの、あなたエウテュデモスの知識は信頼できる物ですか？」

(次のように若者エウテュデモスは応えた。)

「ああっ、はい、確実に、信頼できます」

「なぜなら、その重要な(善悪の)区別(についての知識)無しでは、私エウテュデモスは、実に、全ての『奴隷のような者ども』よりも、悪い、という事に成ってしまいます」

(次のようにソクラテスは話した。)

「では、あなたエウテュデモスは、善や悪と呼ばれている物事について私ソクラテスに説明してください」

(次のように若者エウテュデモスは応えた。)

「幸いにも、それは簡単です」

「最初に、私エウテュデモスは、『健康は善であるし、病気は悪である』と考えています」

「次に、私エウテュデモスは、前述の(健康と病気の)、どちらかの原因である、飲食物や、(娯楽と仕事や、)生活習慣を、健康か病気のどちらかの一因に成るのに応じて、善か悪と考えます」

次のようにソクラテスは話した。

「では、健康や、病気は、何らかの善の原因であると証明されたら善であるし、何らかの悪の原因であると証明されたら悪である、のですね？」

(次のようにエウテュデモスは尋ねた。)

「では、どのような場合に、健康が悪の原因に成り得たり、病気が善の原因に成り得たりするというのですか？」

(次のようにソクラテスは応えた。)

「神よ！　頻繁に十分に有り得るのです」

「例えば、ある不運な遠征や、ある不運な航海や、その他の、そのような種類の事故といった出来事において、健康と強さのせいで、そのような出来事

に参加していた人々は亡くなってしまう場合が、実に、あり余るほど有るのです」
「一方、負傷して戦闘力を失ったせいで、または、その他の病弱による病気のせいで、置き去りにされた人達は命が助かる場合が有る」
次のようにエウテュデモスは話した。
「ええ、あなたソクラテスの話は正しいです」
「しかし、強さから得る事ができる利益が存在する事と、弱さから失ってしまう利益が存在する事を、あなたソクラテスは認めますよね」
次のようにソクラテスは話した。
「それでさえも、」
「実に、ある場合には利益をもたらし、別の場合には損害をもたらす前述の物事を、全く厳密な意味で、悪よりもむしろ、善であると考えるべきでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いいえ。確かに、前述の一連の理由によって、善であると考えるべきではありません」
「しかし、ソクラテスよ、あなたの側でも認めるに違い無いが、疑い無く、知恵は善です」
「なぜなら、知恵によって、愚者よりも、賢者は、より善く行動するからです」
次のようにソクラテスは話した。
「あなたエウテュデモスは、次のような事について、どう思いますか？」
「あなたエウテュデモスは、(ギリシャ神話の)ダイダロスについて聞いた事が無いのですか？」

「どのようにして、ダイダロスは、自身の知恵のせいでミノス王にとらえられてしまって、ミノス王の奴隷に成るように強制されてしまって、祖国と自由を一気に奪われてしまったか(、あなたエウテュデモスは聞いた事が無いのですか)?」
「そして、どのようにして、ダイダロスは、息子のイカロスと共に逃げようと試みた時に、息子イカロスの死を引き起こしてしまい、ダイダロス自身の救いも達成できず、外国人に囲まれて誘拐されてしまって、再び奴隷にされてしまったのか(、あなたエウテュデモスは聞いた事が無いのですか)?」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「はい。私エウテュデモスは、その昔の話を知っています」
(「ああっ、はい。もちろんです。その話は現在も通用しています」※別の版)
次のようにソクラテスは話した。
「また、あなたエウテュデモスは、『パラメデスの災い』という最も一般に知られている歌の題目について、聞いた事が無いのですか?」
「どのようにして、パラメデスは、自身の知恵のせいで、オデュッセウスに憎まれてしまって、殺されてしまったのか(、あなたエウテュデモスは聞いた事が無いのですか)?」
次のようにエウテュデモスは話した。
「その話も現在も通用しています」
次のようにソクラテスは話した。
「また、どのくらい多数の他の人達が、自身の知恵のせいで、とらえられてしまって、(ペルシャの)大王の所へ送られてしまって、(ペルシャの)大王の

法廷で奴隷にされてしまったのか、どうか、あなたエウテュデモスは考えてください」
（次のようにエウテュデモスは大きな声で話した。）
「ええと、幸運は、確実に、善いに違い無いですし、議論の余地が無いですよね？　ソクラテスよ」
（次のように哲学者ソクラテスは応えた。）
「もし、偶然、その他の疑問の余地が有る善の複合物でなければ、そうかもしれません」
次のようにエウテュデモスは話した。
「では、ある幸運と、別の幸運という、諸々の構成物の幸運のうち、どの幸運に、疑問の余地が有り得るのですか？」
（次のようにソクラテスは返した。）
「いいえ。無いですよ」
「もちろん、前述の、ある幸運と、別の幸運という諸々の構成物の幸運の中に、美しさや、強さや、富や、高名や、その他の、そのような種類の何かを盛り込まない限りは、ですが」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神よ！」
「もちろん、前述の美しさや、強さや、富や、高名などを幸運に盛り込むべきです」
「なぜなら、前述の美しさや、強さや、富や、高名などが無い幸運など、何に成るというのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「神よ！」

「ええ」

「それだけで、（美しさや、強さや、富や、高名などを幸運に盛り込んでしまうだけで、）人に降りかかる害悪の最も共通する原因を盛り込んでしまう羽目に成ってしまうのです」

「美しい盛りの姿によって、乱心に駆り立てられてしまった、求婚者どもの手で、自身の美しい顔によって、堕落してしまった人々は、何と多いのか！」

「自身の強さによって、自身の能力を超えた行為を試みる気に成ってしまって、大きな不運に巻き込まれてしまった人々は、何と多いのか！」

「富のせいで、男性らしく無く成ってしまって、陰謀を計画されてしまって、破滅してしまった人々は、何と多いのか！」

「名声と政治的権力によって、多数の災いを被ってしまった人々は、何と多いのか！」

（次のように若者エウテュデモスは応えた。）

「ええと、もし幸運をほめる事すら正しくないのであれば、『人が何を神々に祈って祈願するべきなのか私エウテュデモスには分からない』と私は告白しなければいけません」

（次のようにソクラテスは話を続けた。）

「いいえ。前述は、多分、あなたエウテュデモス自身の知識への過信のせいで、あなたが調べるのを怠ってしまっていた問題なのです」

「しかし、あなたエウテュデモスが自ら指導しようと用意していた、国家アテナイは民主政治制で構成されているので、もちろん、あなたは、民主政治制とは何かについて知っていますよね」

　次のようにエウテュデモスは話した。

「確かに、私エウテュデモスは、『知っている』と思います」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、国民とは何者かについて知らないで、民主政治制の国家とは何かについて知る事は可能ですか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「確実に、不可能です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どのような人々が『国民である』と、あなたエウテュデモスは考えていますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「『貧者の国民が国民である』と私エウテュデモスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、もちろん、あなたエウテュデモスは、『貧者とは何者であるか』を知っていますね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「もちろん、知っています」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『あなたエウテュデモスは、金持ちとは何者であるか、も知っている』と私ソクラテスは思っています」
次のようにエウテュデモスは話した。
「私エウテュデモスは、『貧者とは何者であるか』と同じくらい確実に、『金持ちとは何者であるか』を知っています」
次のようにソクラテスは話した。

「では、あなたエウテュデモスは、どのような人を『貧者である』とか『金持ちである』とか見なすのですか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「生活必需品に金銭を十分に支払えない人々を『貧者である』と私エウテュデモスは言います」

「また、全ての生活必需品に金銭を十分に支払えるよりも、より多くの富が有る人々を『金持ちである』と私エウテュデモスは言います」

次のようにソクラテスは話した。

「『わずかな金銭だけ所有している、ある人は、それ(、わずかな金銭)で十分であると感じるだけではなく、実際に、わずかな金銭から余剰金を得る事に成功する』と、あなたエウテュデモスは気づいた事が有りませんか？」

「一方、他の、ある人は、幸運による大きな富を『十分に大きな富である』と感じません」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「最も確かに、気づいた事が有ります。思い出させてくれて、ありがとうございます」

「最貧の貧者達のように、王冠をかぶった国の指導者どもや独裁者の支配者どもが、貧困によって悪事を犯すように駆り立てられた、と聞いた事が有る人もいます」

(次のようにソクラテスは話を続けた。)

「では、国の指導者どもが貧困によって悪事を犯すようであるならば、私達は、貧困によって悪事を犯すような同様な国の指導者どもを、国民、庶民に分類する必要が有りますね」

「では、わずかな富を所有している、ある人達が、もし優れた経済学者であるならば、金持ちに所属するでしょうか？」

すると、次のようにエウテュデモスは話した。

「私エウテュデモスは、知恵の貧困によって、そう認めるように強制されます」

「私エウテュデモスは、『私は完全に沈黙し続けるべき潮時である』と思います」

「もう少しで、『私エウテュデモスは全く何も知らない』と証明されるでしょう」

そして、エウテュデモスは、「自身は、まさに、実に、『奴隷のような者ども』に過ぎない」と思い込んで、自身を軽蔑して苦しみながら、意気消沈して去った。

ソクラテスによって(エウテュデモスと)同様の状態に陥った人々のうち、多数の者どもが、再びソクラテスに近づくのを拒絶したが、ソクラテスとしては、その多数の者どもを「愚鈍である」と見なした。

しかし、エウテュデモスには、「重んじるに値する人に成るための最善策は、可能な限り多くソクラテスと交流する事である」と理解できる知恵が有った。

そのため、それからは、何らかの緊急の必要な場合を除いて、エウテュデモスは、いくつかの点でソクラテスの習慣や探求を模倣すらしながら、ソクラテスから離れなかった。

ソクラテスの側では、前述が「若者エウテュデモスの素質である」と理解して、可能な限りエウテュデモスの心を乱さないようにして、最も単純で明

確な方法でエウテュデモスに「知る必要が有ったり、実践する必要が有ったりする」とソクラテスが考えた全ての物事を教授した。

第四巻 第三章（神は人を思いやってくれている）（神は神を見ずに畏敬する事を人に求める）（人は人の目には見えないものを軽視せず知る事ができるように学ぶ必要が有る）（人は能力に応じて神へ捧げものを捧げて神へ報いる必要が有る）

「ソクラテスと共にいた友人達が、とにかく、節制、自制という基礎を十分に整備しないで、話す才能や行動の才能や、考案の才能を見せるように、ソクラテスは急かさなかった」と推測できる。

（「ソクラテスと共にいた友人達が、話す才能や行動の才能や、考案の才能を見せるように、ソクラテスは急かさなかった。なぜなら、それらの長所より先に、節制、自制という徳、力と、心の健全さを、自身の心の中に植えつける必要が有るからである」と推測できる。※別の版）

なぜなら、「同程度に節制、自制という徳を守れないで、前述のような（話す事や行動の）才能を所有している者どもは、害悪のための、より大いなる力を持った、より悪い人に成るだけである」とソクラテスは信じていたからである。

ソクラテスの第一の目標とは、神々に関しての賢明な精神を、ソクラテスと共にいた人々へ染み込ませる事であった。

ある個別の時に、その場にいた人々と（ソクラテス）の話から、「ソクラテスの第一の目標とは、神々に関しての賢明な精神を、ソクラテスと共にいた人々へ染み込ませる事であった」事が、人々に対してのソクラテスの話の趣旨であった、と理解する事ができる。

私クセノフォンが、その場にいた、(ソクラテスの、)エウテュデモスとの個別の議論に限定して取り上げる。
次のようにソクラテスは話した。
「教えてください、エウテュデモスよ。『人の必要なものを全て人にもたらすために、神々が、何とも思いやり深く労苦している』のをあなたは、かつて気づいた事が有りますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「実に、いいえです。私エウテュデモスは、『かつて気づいた事が無い』と思います」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「ええ、あなたは気づく必要が無いのです。第一に、人は光を必要とします。そして、神々は光を人にもたらしてくれています」
次のようにエウテュデモスは話した。
「最も正しいです」
「人は、光が無かったら、(光が有れば)人の目が人に(映像を)見せて役立つ事ができる範囲内でも、生まれながらの盲人のように成ってしまうでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「それから、さらに、人が安息と休養を必要とするので、神々は、『静かな夜という神聖な癒やす物』を人にもたらしてくれています」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「はい。我々、人は、その恩恵をとても受けています」
次のようにソクラテスは話した。

「では、太陽が、輝いて昼の時刻を人に明らかにしてくれますし、明るさを全てのものに浴びせてくれますが、一方、やがて夜が、闇で区分を消してしまうので、神々は、星々という諸天体を空高くに見せてくれます」

「(神々による、)星々は、夜の時刻を人に教えてくれます」

「星々による夜の時刻によって、人は、多数の必要な物に達する事ができます。そうですすよね？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「また、(神々による、)月は、夜の時刻を人に明らかにしてくれるだけではなく、一か月間も明らかにしてくれるのを、人は忘れないようにしましょう。そうですすよね？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「確かに」

次のようにソクラテスは話した。

「では、次のような事については、どうでしょうか？」

「人は食べ物を必要とするが、天の神の力が、これ(、食べ物)も人にもたらしてくれているのでしょうか？」

「神々は、大地の内部から、人に利益をもたらすために、善いものを湧き出させてくれています」

「また、神々は、人に利益をもたらすために、多数の色々な必要な物だけではなく喜びの源も人にもたらすために、適切な諸々の季節を順に(人へ)もたらしてくれています。そうですすよね？」

(次のようにエウテュデモスは熱心に答えた。)

「はい。それらの諸物は、正に、(神々から)人への愛の証拠をもたらしてくれます」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、価格をつけられないほど貴重な別の(神々から人への)贈り物である、水については、どうでしょうか？」

「水は、人に役立つ全ての物を生じると共に増やすために、大地と諸々の季節と協力します」

「いや、むしろ、水は、正に人自身を育ててくれますし、また、人を養う物を、全ての物と混ぜ合わせて、より消化しやすく、より健康に良く、より味覚に心地良くしてくれます」

「また、人が必要とする多量さに応じて、(神々によって、)水は、過分に提供されているのを、留意してください」

「これらのような恩恵について、あなたは、どう思いますか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「これらの中にも、神意の思いやりの証拠が見られます」

次のようにソクラテスは話した。

「さて、同じ天の神の力が、火を人にもたらしてくれている、のは事実である」

「火は、寒さに対しての人への助けと成ってくれますし、闇の中で人への助けと成ってくれますし、役に立つので、いつか死ぬ運命の人が作る、と同時に、もたらす、全ての道具と、全ての技術において、同胞である人の職人達への助けと成ってくれます」

「要約すると、『火くらい話すに値するほど人の生活に役立つ物は無いし、火で作られた物は火のおかげである』のについては、どうでしょうか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「ええ、神の思いやり深い計画、意図の、超越的な一例です」

次のようにソクラテスは話した。

「さらに、太陽の動きを考えてください」

「太陽は、冬に自身の身を翻(ひるがえ)すと、ある果実は実らせたり熟させたりしながら、また、別の、ある果実は旬を過ぎさせて枯らしながら、再び我々の所へ近づきます」

「太陽は、務めを果たすと、それより近づいて来なくて、まるで人を焦がして過度に損傷させるのを恐れるかのように、背を向けて去ります」

「また、太陽は、もし太陽の後退が長引いたら、人が明らかに寒さで凍死してしまうであろう点に到達すると、温暖な最善の影響を人に及ぼす事ができる軌道で天空の領域を横断して自身の身を翻(ひるがえ)して接近を再開する事に、注目してください」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「はい。神に誓って!」

「前述のような太陽の動きが見られる事は、人のために、無上の存在である神が、そのように命じている痕跡をもたらしてくれます」

次のようにソクラテスは話した。

「それから、また、焼けつくような暑さか、凍えるような寒さが、人を突然に不意に襲ったら、人が耐えられないのは、明らかです」

「どのように最終的に暑さや寒さの両極にまで来たのか人が気づかないほど、太陽は、徐々に接近してくれるし、徐々に後退してくれる事に、気づいてください」

（「暑さや寒さの両極にまで過酷さに人が気づかずに来るほど徐々に、太陽である神は、接近してくれるし、後退してくれる事に、気づいてください」※別の版）

（次のようにエウテュデモスは応えた。）

「私としては、必要な物を人にもたらす事しか神々には務めが無いのか否か疑問に思ってしまいます」

「ただ、人以外の動物も、これらの(神からの)利益を人と分かち合っているので、そう思うのをやめました」

次のようにソクラテスは話した。

「ああ、確かに」

「しかし、人のために、人以外の動物が生まれて増えるのは、明らかではありませんか？」

「いずれにせよ、羊や山羊、馬や牛やロバ、他の動物達から、非常に多数の喜びを得る生物は、人だけなのである」

「私ソクラテスが思うに、野菜達などの植物達よりも、人は、動物達に、より依存している」

「いずれにせよ、植物達と同様に、動物達は、生活手段として、また、商品として、人の役に立っている」

「実は、人の諸家族のうち大部分は、大地からの産物(である植物)を食べ物として全く利用しなくて、羊や牛の、ミルクやチーズや肉で生きるのである」

「一方、全ての場所で、全ての人が、もっと役に立つ種類の動物に成るように飼い慣らして家畜化しているし、戦争や、その他の目的のために、仲間の労働者として動物を利用している」

（次のようにエウテュデモスは答えた。）
「ええ。私は、あなたソクラテスの話に同意せざるを得ません」
「なぜなら、人よりも非常に強い動物達が、人が思い通りに、それらの動物達を利用できるほど、人に服従しているのを、私は知っているからです」
次のようにソクラテスは話した。
「また、人が自然の無限の美しさと有用さと多様さを熟考する限りでは、自然の多様さと調和している五感が(神々によって)人に与えられている事実について、人は、どう思うべきなのでしょうか？」
（「また、『人の役に立つ美しい諸々のものが、どれくらい存在するのか？それにもかかわらず、人の役に立つ美しい諸々のものが相互に、どれほど違うのか？』を人が熟考すると、諸々のものの各分類に適応している五感が神々によって人に与えられている事実について、人は、どう思うべきなのでしょうか？」※別の版)
「(神々によって)人に与えられている、自然の多様さと調和している五感によって、『人は、神からの全ての恩恵に満たされている』と人は理解するのである」
（「神々によって人に与えられている、諸々のものの各分類に適応している五感によって、幸せな一世界に入っているのである」※別の版)
「また、この(、神々によって人に)植えつけられている論理的に思考する能力は、人が知覚する諸物について結論を導き出す事を人に可能とさせますし、また、記憶力の助力によって『どのように諸物の各群が人にとっての善い物に変わるのか？』を理解する事を人に可能とさせますし、また、善い物を楽しみ、悪い物を退けるために無数の手段を考案する事を人に可能とさせます」

「また、最後に、(神々によって)人に与えられている理解し合うための話し合える能力について熟考すると、理解し合うための話し合える能力によって、人は、相互に教え合う事が可能であるし、前述の全ての恩恵を分かち合う事が可能であるし、諸々の社会を形成する事が可能であるし、法を確立する事が可能であるし、洗練された生活を手に入れる事が可能である事について、どう思うべきでしょうか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「ええ、ソクラテスよ」

「確かに、『神々は、多大な配慮を、いや、思いやり深い配慮を人に示している』と思われます」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、人には有益な未来を予見する力が無い時期に、神々は自ら、予言(、神託)によって起こりそうな出来事についての知識を質問者に教えて、また、『どのような手段によって、起こりそうな出来事を最善に利用できるか？』を質問者に教えて、人に協力してくれている事実について、あなたは、どう思いますか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「ああっ、そして、神々は、他の人よりも更に、より思いやり深く、あなた、ソクラテスを大切に扱っているように思われます。神々は、あなたからの質問すら待たずに、事前に、『何をする必要が有るか』を、また、『何をしてはいけないか』を合図によって示してくれているならば」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ。また、神々御自身の(、人の)目に見える姿形を見るのを待たずに、神々の働きを見るだけで満足するならば、『(神霊が合図を示してくれる、という)私ソクラテスの話が真実である』と自分の目で知る事に成るであろう」

「また、あなたの前の諸物によって、諸物の創造者である神を畏敬するべきです」

「『正に神々御自身が、この(、見ずに畏敬しなさい、という)教えを暗示している』事を私ソクラテスは、あなたに熟考させるつもりです」

「神は、諸々の恩恵のうち一つだけではなく、神の諸々の恩恵を多数、人にもたらしてくれています」

「しかし、神々は、一つの恩恵を与えるのにも、ヴェールの奥から踏み出しては来ません」

「また、超越的に、神は宇宙を整理して保守していますし、宇宙の中の全てのものは美しいし善いのです」

(「また、超越的に、神は宇宙を整理して保守していますし、神の中の全てのものは美しいし善いのです」※別の版)

「神は、宇宙を病気や腐敗から解放し続けて疲弊させずに終わり無く宇宙を用いるために、宇宙を創造したし再創造してくれているので、人の思考よりも速くて正確に宇宙は神意を執行します」

「この神は、最強の働きをすると理解されるが、現実の中では、同じ神の統治は、いつか死ぬ運命の人の目には見えないのを甘受している」

「次のような事をさらに熟考してください」

「人が思うに、全ての人の目に見える、人の頭上にある、太陽は、人が太陽を(直視して)詳細に見過ぎるのを許容するつもりが有りません」

「実に、太陽は、厚かましく凝視して(直視して)太陽を見るのを試みた全ての人の視力を奪います」

「また、このように、神々御自身が人の目には見えないのであれば、同様に、神々の使い達も人の目からは隠されているであろう」

「雷は、高き天の高みから明らかに発射されて、衝突する全ての物に勝利するが、全ては人の目には見えないし、人の目は、雷の急降下の瞬間に、雷の去来の全てを感じ取る事ができない」

「風の働きは明らかですが、また、風の接触によって人は風に気づきますが、風自体も、人の目には見えません」

「また、特に更に、人が神と分かち合っている、人の魂自体は、明らかに人の内部で王座についているが、魂以外の全て(の精神的な物)と同じくらい完全に人の目からは隠されているのを、忘れないようにしましょう」

「あなたは、前述の事を心に留めるべきですし、人の目には見えないものを軽視せず、神々の力を認知できるように学ぶ必要が有るし、人の目に見える諸物で明かされているので、神の影響力を知る事ができるように学ぶ必要が有る」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「いえ、わずかでも神の影響力に対して聞く耳を持たない可能性は有りません」

「私エウテュデモスには、そのような可能性は有りません」

「ただ、いつまでも、ふさわしい感謝の気持ちで神々の思いやりに報いない、人の心について考えると私エウテュデモスは意気消沈してしまいます」

(次のようにソクラテスは話した。)

「そのせいで、意気消沈するなかれ」

「デルポイの神アポロンが『どのように神へ感謝を返せば善いのですか』と質問してくる各人へ、どのように答えるのか知っていますか？」
「『あなたの都市国家の法律と慣習に応じて神へ感謝を返しなさい』」
「私ソクラテスが思うに、『人は、その人の能力に応じて捧げものを捧げる事によって、神々を喜ばせるべきである』というのが、全ての国家で、法律であり慣習である」
「では、どうしたら、神々が人に命じている事を行うよりも美しく、または、神聖に、人は、神々を畏敬する事ができるというのか？」
「人は、(捧げものを捧げるのを、)決して、怠けたり、能力に対して不十分であったりしてはいけない」
「なぜなら、人が、捧げものを捧げるのを怠けたり、能力に対して不十分であったりした時に、人は、神々を畏敬していない事に成ってしまうからである」
「そのため、能力に対して不足せずに、あなたの能力に応じて、あなたは、神々を畏敬する必要が有る」
「能力に応じて捧げものを捧げて神々を畏敬したら、元気に成って(神々からの)諸々の恩恵を最大に受け取る事ができると期待しなさい」
「なぜなら、どうして、論理的な感性の人は、最も人を助ける事ができる者達である神々以外の誰かから、諸々の恩恵を最大に受け取る事ができると期待できるというのか？」
「また、どうして、論理的な人は、助けてくれる者達である神々を喜ばせるように努める以外に、諸々の恩恵を手に入れる事ができると期待できるというのか？」

「また、どうして、最も従順に服従する以外に、助けてくれる者達である神々を喜ばせる事ができると期待できるというのか？」

ソクラテスは、前述のような話によって、また、言行一致の行動によって、ソクラテスの友人達の心をより信心深くする、と同時に、より高徳にして、ソクラテスの友人達の心を形成した。

(ソクラテスは、前述のような話によって、また、言行一致の行動によって、ソクラテスの友人達の心をより健全にする、と同時に、より信心深くする、のと同じくらい、より節制的、自制的にして、ソクラテスの友人達の心を形成した。※別の版)

第四巻 第四章 (正しさを行動で表しなさい)(法に従う人が正しい人である)(国家や家庭では法に従って全員一致しなさい)(不文律の法は神が創造した)(親子の近親相姦は奇形児という罰を受ける)(全盛期の肉体同士で性交しなさい)(思いやりを返すのは神による不文律の法である)

実に、ソクラテスは、正義について抱いていた意見を秘密にしなかっただけではなく、個人的には法に従う事と全ての人に対して役に立つ行動によって、公的には都市国家での生活においても軍務においても法が命じている全ての物事においては公職の人達に従う事によって、公私の両方で、正義を実践して見せた。

(実に、ソクラテスは、正義について抱いていた意見を秘密にしなかっただけではなく、個人的には全ての人に対しての法と不文律の法である慣習の観点で清浄である行動だけではなく実際に役に立つ行動によって、公的には都市国家での生活においても軍務においても法が命じている全ての物事においては公職の人達に従う事によって、公私の両方で、正義を実践して見せた。

※別の版)

そのため、ソクラテスは、他の全ての人々に対して(法への)忠実(、法に従う事)の見本と成った。

そのため、次のような、三つの時のそれぞれにおいては、特に(、ソクラテスは、他の全ての人々に対して法に従う見本と成った)。

最初に、ソクラテスは、議会の議長の時に、主権者である民衆が法に違反している投票によって多数決するのを許さず、法の味方をして、私クセノ

フォンが思うにソクラテス以外の全ての人の心をくじくのに十分なほど強い、民衆の感情の流れに、危険を覚悟で対抗した。

また、例えば、「三十人僭主」どもが若者との会話をソクラテスに禁止した時のように、「三十人僭主」どもが、法に違反して、いくつかの禁止命令をソクラテスに課そうと試みた時に、ソクラテスは従う事を拒否した。

その上、「三十人僭主」どもが、ある人を処刑するために捕まえるようにソクラテスと都市国家アテナイ市民の何人かに命令した時に、「ソクラテスに課された命令は法に違反している」という理由で、ソクラテスは、独りだけ不屈に抵抗した。

最後に、メレトスが起こした訴訟で、ソクラテスが被告として現れた時に、法廷で原告や被告が(裁判官に)こびへつらった主張と法に違反している嘆願を行う上で裁判官の機嫌を取るのは慣習的であったにもかかわらず、また、法廷で被告が同様に裁判官の機嫌を取るという手段を採用して無罪に成る慣習的な事が有ったにもかかわらず、ソクラテスは、法廷で、どんなに慣習的であっても、厳密には法に違反している事は一様に拒否した。

そうして、ソクラテスは、厳しい正道から、わずかに外れるだけで簡単に裁判官によって無罪にされたかもしれないのに、法に違反して生きるよりもむしろ、法に従って死ぬ事を選んだ。

ソクラテスは、色々な時の色々な相手との会話の中で、前述のような考え方を頻繁に支持した。

また、私クセノフォンは、正義という話題についての、エリスのヒッピアスと(ソクラテス)の、ある独特な議論を聞いた事が有る。

ヒッピアスは、久しぶりにアテナイに来た直後、ソクラテスが何人かの人達に「もし人が、靴屋や大工や銅細工師や騎手に成れるように、ある人を教えたかったら、その目的のために、その人を送り出すべき場所を迷わないであろう事は、何とも驚くべき事なのである！（なぜなら、）」と話している所に、偶々居合わせた。

次のようにソクラテスは言い加えた。

「『もし人が、馬や牛を正しく調教したかったら、世界は教師で満ちあふれている』と人々は話している。しかし、もし人が、自身や息子や奴隷に正道、正義を教えたくても、正義の教えが見つかる所を教える事ができないのである」

ヒッピアスは、そのソクラテスの話を聞くと、冗談を言うような口調で大きな声で、次のように話した。

「何と！」

「ソクラテスよ、私ヒッピアスが大昔によく、あなたから聞いたのと同じ話を未だくり返しているのですか？」

（次のようにソクラテスは答えた。）

「ええ、ヒッピアスよ、さらに意外であるのは、昔と同じ話である事だけではなく、昔と同じ問題についての話である事なのです」

「さて、多分、あなたヒッピアスは、多才な知識によって、同じ問題について同じ事を二度も決して話さないのですね？」

（次のようにヒッピアスは答えた。）

「確かに、その通りです。毎回、新しい事を言うように私ヒッピアスは努めています」

（次のようにソクラテスは尋ねた。）

「例えば、『つづり』、『文字の並び』の場合のように、あなたヒッピアスが知っている物事について、もし誰かが『ソクラテス、という名前には、何文字有って、文字の順序は、どのようですか？』と、あなたに尋ねたら、『あなたは、今日は、ある一連の文字群を、明日は、別の一連の文字群を書き上げようと試みる』と私ソクラテスは考えても良いですか？」
「または、『五の二倍は十に成りますか？』という計算の問題に対して、あなたヒッピアスは、今日は昨日とは違う答えをするつもりなのですか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「いいえ」
「ソクラテスよ、それらのような話題については、あなたがしているように、私ヒッピアスも自ら同じ話をくり返します」
「しかし、正義についてへ話を戻すと、『私ヒッピアスは、今、あなたソクラテスも他の全ての人も反論できない(正義についての、)いくつかの言葉をあなたに話す事ができる』と私は自画自賛します」
(次のようにソクラテスは大きな声で話した。)
「(家の女主人である、女神の女王である、)女神ヘラにかけて！」
「正義についての知恵を発見できたとは、何と幸運なのか！」
(「何と、正義についての知恵という万能薬を発見できたのか！」※別の版)
「もう、我々、人には、正義という問題についての意見の分裂は無く成るであろう」
「裁判官達は、全員一致して決定できるであろう」
「都市国家の市民達は、論争をやめるであろう」
「もう、訴訟は、無く成るであろう」
「もう、党派争いは、無く成るであろう」

「諸国は和解して、諸々の戦争は終わるであろう」
「私ソクラテスとしては、あなたヒッピアスが成した偉大な(正義の知恵の)発見についての全てをあなた自身の口から聞くまで、どうしたら、あなたから離れる事ができるのか分かりません」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「あなたソクラテスは、適切な時機に(正義についての知恵の)全てを聞けるであろうが、あなた自身の(正義についての知恵についての)確信をあなたが明確な言葉にして話すまで、聞かせません」
「正義とは、何ですか?」
「あなたソクラテスが、最初に(相手へ)質問してから、(相手に答えさせて、相手の答えを)問い詰めて、ソクラテス以外の全ての人達を笑いものにするのは、もうたくさんです(。もう飽き飽きしました)」
「しかし、あなたソクラテスは、誰かへ(最初に)自ら答えたり、話題についての明確な意見を(相手へ最初に)話したりする事は、決して少しも一度も無いのです」
(次のようにソクラテスは返した。)
「ヒッピアスよ、何と、私ソクラテスが『正義とは何か?』という私の考えを常に習慣として(行動で)明らかにしているのに、あなたは気づいた事が無いのですか?!」
次のようにヒッピアスは話した。
「では、どうぞ(答えてください)。正義という話題についての、あなたソクラテスの自説は何ですか?」
「『正義とは何か?』を言葉で話しましょう」
次のようにソクラテスは話した。

「私ソクラテスは、言葉で明らかにしなくても、いずれにせよ、行動で明らかにしていますし、事実で明らかにしています」
「それとも、『証拠として、言葉よりも、(行動という)事実は、より価値が有る』と、あなたヒッピアスは思わないのですか？」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「『言葉よりも、行動という事実は、遥かに価値が有る』と私ヒッピアスは思います」
「なぜなら、多数の者どもが正義を口にしながら悪事を犯します」
「しかし、善行を行う者が、悪事を犯す者どもであった事はかつて無いですし、また、多分、悪事を犯す者どもに成り下がる事は有り得ないでしょう」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスは尋ねますが、私が、虚偽の証言、証拠をもたらしたり、悪意の有る情報をもたらしたり、友人達の間に不和を引き起こしたり、都市国家アテナイの中に政治的な不和を引き起こしたり、その他の何らかの悪事を犯したりしたのを、あなたヒッピアスは、かつて、聞いたり、見たり、その他の方法で知覚したりした事が有りましたか？」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「いいえ。私ヒッピアスが『かつて見聞きした』と言う事は不可能です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『悪事をしない事は、正義である』と、あなたヒッピアスは考えませんか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「ソクラテスよ、今あなたが明らかに明確に話すのを避けようと試みているのに、(私ヒッピアスは)気づいていますよ」

「あなたソクラテスは、『正義とは何であると、あなたは確信しているのか？』と質問されると、『正しい人は何をするか？』ではなく、『正しい人は何をしないか？』を私達に教え続けますよね」

(次のようにソクラテスは答えた。)

「ああ、私ソクラテスが考えるに、『悪事を犯す事への拒絶は、正義である』と十分に保証されているのです」

「しかし、もし、あなたヒッピアスが同意しないのであれば、この(『悪事を犯す事への拒絶は、正義である』という)考えが、あなたをより善く満足させるかどうか確認してください」

「『法に従う事は、正義である』と、私ソクラテスは断言します」

(次のようにヒッピアスは尋ねた。)

「『法に従う事と、正義は、意味が同じ言葉である』と、あなたソクラテスは断言するつもりですか？」

次のようにソクラテスは話した。

「はい、断言します」

(次のようにヒッピアスは言い加えた。)

「あなたソクラテスが、『法に従う事』という言葉で何を示しているのか？また、『正義』という言葉で何を示しているのか？私ヒッピアスは、分からないので、質問します」

次のようにソクラテスは話した。

「『都市国家、国家の法が何を示しているのか？』をあなたヒッピアスは理解していますよね？」

(次のようにヒッピアスは答えた。)

「はい」

次のようにソクラテスは話した。
「あなたヒッピアスは、『国家の法とは何である』と思いますか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「(国家の法とは、)都市国家の市民達か、国家の国民が『するべき事』や『しないままでいるべき事』について合意して作った法律です」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、私ソクラテスが思うに、国家の法に従って自分の生活を規則正しくしている国民は『法に従っている事』に成りますし、一方、国家の法に違反している者どもは『法に違反している事』に成りますよね？」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスが思うに、『法に従っている』都市国家の市民は善行を行いますし、一方、『法に違反している』者どもは悪事を犯しますよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスが思うに、善行を行う人は正しい人ですし、悪事を犯す者は悪人ですよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「もちろん」
次のようにソクラテスは話した。

「では、『法に従っている』人は正しい人ですし、『法に違反している』者は悪人ですよね？」
するると、次のようにヒッピアスは話した。
「ええと、しかし、ソクラテスよ、法に従っている当人達や、法を作った当人達が絶えず否定して廃棄したり変更したりしている法を、どうしたら、誰が、『重要な物である』と思えるというのか？」
(次のようにソクラテスは応えた。)
「それは、戦争にも当てはまります」
「都市国家同士は、絶えず、戦争してから和解しています」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「最も、そうですね」
次のようにソクラテスは話した。
「そうであれば、『法は撤回されるかもしれないからと、法に従うのを軽視する事』と、『いつか和解するかもしれないからと、戦時中の善い規則を軽視する事』は、何が違うというのですか？」
「しかし、戦時中に自分の家庭や祖国を守るために発揮された熱意に対して、もしかして、あなたヒッピアスは反対するのですか？」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「いいえ！　実に、私ヒッピアスは反対しません！　私は心から認可します」
次のようにソクラテスは話した。
「では、立法者リュクルゴスがラケダイモン人と自称しているスパルタ人に教えた教えを、あなたヒッピアスは熟考した事が有りますか？」

「そうしていたら、立法者リュクルゴスが都市国家スパルタを他の諸国家よりも優れさせる事に成功したのであれば、他の全てよりも、(都市国家スパルタが他の諸国家よりも優れるように成ったのは、立法者リュクルゴスが)法に従う精神を都市国家スパルタに教え込んだ事だけによる物ですよね？」

「また、色々な諸国家における公職の人達や統治者達のうち、同胞の都市国家市民達を法に従わせる事に最も貢献した人達の優秀さへの栄光を、あなたヒッピアスは、きっと拒絶しないですよね？」

「また、『法に従っている事が都市国家市民達の最大の特徴である、全ての特別な国家は、平時には最も栄えるし、戦時中には圧倒的である』と、あなたヒッピアスは認めますよね？」

「実に、国家が享受できる全ての恩恵のうち、全員一致という恩恵は最高である」

「『都市国家市民達の一致』は、『長老会』と社会の選ばれた人達が重視して奨励している不変の話題です」

「常に、全ての場所で、ギリシャ人が『ヘラス』と呼んでいる『ギリシャ人の地』の全てで、都市国家市民達は、一致の誓いを共にする義務が有るのが、法として確立されています」

「全ての場所で、都市国家市民達は、実際に、この一致の誓いを誓っています」

「もちろん、(ギリシャ人の一致の誓いは、)都市国家市民達が皆、同一の合唱隊だけに投票したり、同一のフルート奏者だけをほめたり、同一の詩人だけを選んだり、同一の快楽だけに制限したりするのではなく、ただ法に従う事を意味しています」

「なぜなら、最終的に、都市国家市民達が法に従っている国家は、最強である事と最も栄える事を証明するからです」

「一致が無いと、国家を十分に統治できないし、家族を十分に統治できないのである」

「また、私生活に目を向けても、人に有る庇護のうち、何が、法に従うよりも優れているというのか？　いいえ！　法に従う事は最高の庇護と成る！」

「法に従う事は、人にとって、罰に対する予防策である」

「法に従う事は、人にとって、社会の手によって与えられる、栄光を保証してくれる」

「法に従う事は、人にとって、迷わずに法廷という迷路を通過できる道の道しるべであるし、敗訴に対する安全であるし、勝訴を保証してくれる」

「財産であれ、息子や娘であれ、最も尊重している預けものの守護者を探している場合に、人々が信頼して目を向けるのは、法に従っている都市国家市民である」

「国家の全ての人々の目から見て、法に従っている国民だけが、信頼に値する」

「法に従っている国民だけが、両親、血族達、従者達、友人達、同胞の都市国家市民達、外国人達といった全ての人を公平に扱うと信頼できる」

「一時的な停戦や平和条約を解決するために、敵が最速で信頼する相手は、法に従っている国民である」

「外国人達は、法に従っている国民の味方に成って、法に従っている国民の味方として戦いたいと思う」

「味方の諸外国が最も自信を持って(攻撃)軍の指揮や、守備隊の指揮や、国自体を任せる相手は、法に従っている国民である」

「また、『感謝して(自分からの)思いやりに報いてくれる』と信頼できる相手は、法に従っている国民である」

「そのため、感謝の気持ちに満ちているだけの他の人々よりも、法に従っている国民は、『思いやり深く扱ってもらえる』と確信できる」

「法に従っている国民は、最も望ましい友人である」

「法に従っている国民は、他の全ての人々にとっての敵ですら敵対を避ける相手である」

「明らかに、法に従っている国民は、外国が争う事を選ばない相手である」

「多数の友人達に囲まれて守られた、敵がいない、法に従っている国民の性格には友人や味方に成らざるを得ない魅力が有って、法に従っている国民の前では、憎悪や敵意が徐々に消えます」

「では、ヒッピアスよ、私ソクラテスは、自分の務めを果たしました」

「前述が、『法に従う事と、正義は、意味が同じ言葉である』という私ソクラテスによる立証です」

「もし反対の意見を持っているなら、教えてください」

すると、次のようにヒッピアスは話した。

「いいえ。神に誓って！　ソクラテスよ、私ヒッピアスには、正義についての、あなたの話に対して、反対の意見を持つつもりは有りません」

次のようにソクラテスは話した。

「では、ヒッピアスよ、あなたは、いくつかの不文律の法に、気づいていますか？」

(次のようにヒッピアスは答えた。)

「ええ、世界の全部で、同一の意味で、(人は、)不文律の法を持っています」

(次のようにソクラテスは尋ねた。)
「では、不文律の法について、『人が不文律の法を作った』と主張できますか?」
(次のようにヒッピアスは答えた。)
「いいえ。どうして人が不文律の法を作れたであろうか!?　いいえ!　人が不文律の法を作ったのではない!」
「なぜなら、どうしたら、世界の果てからでも全ての人が集合できたというのか?　いいえ!　世界の果てからでも全ての人が集合できる訳が無い!」
「もし全ての人が集合できても、全ての人が唯一の話に一致できませんよね?　はい!」
(「もし全ての人が集合できても、全ての人が相互に理解し合うのは困難であろうし、全ての人が話す言語は唯一ではありませんよね?　はい!」※別の版)
次のようにソクラテスは話した。
「では、何者が『不文律の法の創造者である』と、あなたヒッピアスは信じているのですか?」
次のようにヒッピアスは話した。
「私ヒッピアスとしては、『神々が人のために不文律の法を創造した』と考えています」
「また、『全ての場所で、神々を畏敬する事は、第一の最重要な法であり慣習(、不文律の法)である事』が、『神々が人のために不文律の法を創造した』事の証拠であると考えています」
次のようにソクラテスは話した。

「では、私ソクラテスが思うに、両親を敬う事も、全ての場所で慣習的な不文律の法ですよね？」
（次のようにヒッピアスは答えた。）
「はい。両親を敬う事も、不文律の法です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、私ソクラテスが思うに、親子間の近親相姦の禁止も、不文律の法ですよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「いいえ」
「この問題で、私ヒッピアスは、あなたを止めます。ソクラテスよ」
「親子間の近親相姦の禁止は、神による不文律の法であるとは、私ヒッピアスには思えないのですが」
（次のようにソクラテスは尋ねた。）
「えっ！　なぜですか？」
（次のようにヒッピアスは答えた。）
「なぜなら、親子間の近親相姦の禁止に違反している者どもが稀にいるのに、私ヒッピアスは気づいているからです」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。しかし、人々が違反している、その他の善い多数の法も存在しますよね」
「私ソクラテスが思うに、神による法への違反に対して罰が加えられるのは、確実である」
「人が正義の手を密かにすり抜けて罰を受けずに人による法を違反できる、のと同様には、神による法への違反者には逃げ場が無いのである」

次のようにヒッピアスは話した。
「では、親子の関係で性交する者どもが受ける不可避の罰とは、どういった物ですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「全ての罰のうち、最大の罰である」
次のようにヒッピアスは話した。
「なぜなら、出産で人が被り得る最悪の災いは奇形児ですよね？」
「しかし、どうして、親子で近親相姦する者どもは、(男性が)良い血筋であったり、良い血筋(の女性)から産んだりして、妨げが何も無いのに、(最悪の)災い(である奇形児)を産んでしまうのですか？」
次のようにソクラテスは話した。
「実に、なぜなら、良い子を産むためには、両親が良い血筋で健康である事が必要であるだけではなく、両親の両方の肉体が全盛期である、と同時に、両親の両方の肉体の気力が必要だからである」
「『全盛期の肉体の精子は、未熟な肉体の精子や、全盛期を過ぎてしまった肉体の精子と、同じ品質である』などと、あなたヒッピアスは思うのですか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「いいえ。『全盛期の肉体の精子は違う』のが当然と考えるのが論理的です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どちらが、より良いですか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「明らかに、全盛期の肉体の精子のほうが、より良いです」

次のようにソクラテスは話した。
「『未熟な肉体の精子や、全盛期を過ぎてしまった肉体の精子は、劣っている』と思いますよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「『未熟な肉体の精子や、全盛期を過ぎてしまった肉体の精子が良いのは、最も有り得ない』と思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、未熟な肉体や、全盛期を過ぎてしまった肉体と性交する方法は、子を産むには悪い方法ですよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「はい。未熟な肉体や、全盛期を過ぎてしまった肉体と性交する方法は、子を産むには悪い方法です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、奇形児は、するべき方法の通りに産み出されなかったのですよね？」
次のようにヒッピアスは話した。
「『そうである』と私ヒッピアスには思われます」
(次のようにソクラテスは尋ねた。)
「では、親子での近親相姦が、奇形児を産むのですよね？」
(次のようにヒッピアスは応えた。)
「私ヒッピアスも、そのソクラテスの意見に同意します」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ。善い物事には善い物事を返し、思いやりには思いやりで返すのは、普遍的に守られている慣習(、不文律の法)です。そうではありませんか？」

次のようにヒッピアスは話した。
「はい。慣習(、不文律の法)の一つです」
「しかし、この慣習(、不文律の法)も違反されやすいです」
次のようにソクラテスは話した。
「恩へ報いる法に違反している人は、自分が孤立して罰を受けます」
「恩へ報いる法に違反している人は、善友を失ってしまいますし、(友人に)求めた人が自分を思いやってくれない羽目に追いやられてしまいます」
「また、交流して自分を思いやってくれるような人が、自分の善友には成ってくれない羽目に成ってしまいます。そうではありませんか？」
「実に、自分が恩人に対して思いやりを返さなかったら、自分による恩知らずのせいで恩人が自分を憎悪してしまって、恩人との交流による多大な利益を目当てにして、それでも、自分は必要な者として(自分を憎悪している)恩人を追い求め、つきまとう必要が有ります。そうではありませんか？」
次のようにヒッピアスは話した。
「はい。ソクラテスよ」
「前述の全ての場合において、『神の力の暗示が存在する』と私ヒッピアスは認めます」
「『(不文律の)法が違反への罰を備えているのは、(不文律の法の)立法者が、人という種類よりも上位の種類の者(である神)である事を暗示している』と私ヒッピアスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ヒッピアスよ、あなたの意見では、神々による(不文律の)法は正しいのでしょうか？　それとも、正義の逆である悪でしょうか？」
次のようにヒッピアスは話した。

「神よ！　ソクラテスよ、正義の逆である悪の訳が有りません！」
「なぜなら、神ではない、その他の全ての者が法律を正しく作るのは、到底、不可能だからです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、ヒッピアスよ、『法に従う事と、正義は、意味が同じ言葉である事は、良く神々御自身の意に適っている』と思いますよね？」
前述のように、ソクラテスは、言葉による教えと、行動による見本を、ソクラテスに近づいた人達をより正しくするために役立てた。

第四巻 第五章（節制、自制は善行に必要不可欠の基礎である）（節制、自制して肉体の快楽から自由に成らないと思考を制限されて悪事を犯してしまう）（節制、自制して食欲、性欲、睡眠欲が満ちるまで我慢しないと本来の快楽を味わえない）（善、善行を熟考しなさい）

さて、「ソクラテスが、どのような方法で、ソクラテスと共にいた友人達を、行動において、より強く（、正しく）したか？」を私クセノフォンは説明するつもりである。

最初に、ソクラテスは、「全ての気高い行為（、善行）には節制、自制という基礎が必要不可欠である」と確信していて、その確信にふさわしく節制、自制している人であったので、ソクラテスの友人達に、超越的に（節制、自制の鍛錬で）自身を鍛錬した人として自身をあらわした。

そして、次に、ソクラテスは、会話と議論によって、ソクラテスと同様に、他の全てよりも、節制、自制を、ソクラテスの友人達に勧めた。

このため、ソクラテスは、徳、善行の役に立つ諸々の物事（である節制、自制）を、自分に常に思い出させ続けたし、出会った全ての人達に常に思い出させ続けた。

私クセノフォンが知る限りでは、実例による証明として役に立つであろう、議論の主題が節制、自制である、次のようなエウテュデモスと（ソクラテス）の議論のように。

（次のようにソクラテスは話を始めた。）

「教えてください、エウテュデモスよ。『自由は、人にとっても、国家にとっても、気高いし、大いなる獲得物である』と、あなたは思いますか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「私エウテュデモスは、自由よりも気高いものや大いなるものを思いつく事ができません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『肉体の快楽に支配されていて最善の事を行う事ができない人は、自由な人である』と、あなたエウテュデモスは思いますか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「確実に、思いません」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ！」
「なぜなら、『最善の事を行うのは、自由の特徴である』と、多分あなたエウテュデモスは思っているからです」
「また、『何らかのものが最善の事をするのを妨げているのは、自由を奪われているのである』と、あなたエウテュデモスは思いませんか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「最も、確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「『節制、自制しない事は、不自由に成る事である』というのが、確実に、あなたエウテュデモスの意見である、と思いますが？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神に誓って！」
「私エウテュデモスは、『そうである』と、とても思っています」

次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたエウテュデモスが思うに、節制、自制しない人は、最も気高い事を行うのを妨げられているだけでしょうか？　それとも、さらに、最も恥ずべき事を行うようにも駆り立てられてしまうでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「『節制、自制しない人は、最も気高い事を行うのを妨げられてしまう、のと同じくらい、最も恥ずべき事へ駆り立てられてしまう』と私エウテュデモスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたエウテュデモスが思うに、最善の事をやめさせ、最悪の事を行うように強いる者どもは、どのような種類の主人でしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神よ！」
「最悪の事をやめさせ、最悪の事を行うように強いる主人は、まさに最悪の主人です」
次のようにソクラテスは話した。
「では、どのような種類の奴隷に成るのが、『最悪である』と、あなたエウテュデモスは思いますか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「『最悪の主人の奴隷に成るのが、最悪である』と私エウテュデモスは思います」
(次のようにソクラテスは話を続けた。)
「では、『節制、自制しない人は、最悪の種類の奴隷状態に縛られている』と思います。そうではありませんか？」

（次のように、他方のエウテュデモスは答えた。）

「『そうである』と思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『知恵は、全ての物のうち、最善の物である』が、『魔女（に例える事ができる）、節制、自制しない事は、人に知恵を捨てさせてしまうし、人を知恵とは正反対である愚かさに陥れてしまう』と、あなたエウテュデモスは思いませんか？」

「『役に立つし利益をもたらしてくれる物事に関心を持ったり理解するために学んだりするのを、魔女に例える事ができる、節制、自制しない事は、妨げてしまう』と、あなたエウテュデモスは思いませんか？」

「『魔女に例える事ができる、節制、自制しない事は、人を、（役に立つし利益をもたらしてくれる物事から、）快楽へ引き離して、役に立つし利益をもたらしてくれる物事に関心を持ったり理解するために学んだりするのを妨げてしまう』と、あなたエウテュデモスは思いませんか？」

「また、人は善悪を十分に意識しているが、魔女に例える事ができる、節制、自制しない事は、頻繁に、人の機知を圧倒してしまって困惑させてしまって、最善の代わりに最悪を人に選択させてしまいますよね？」

（次のようにエウテュデモスは答えた。）

「はい。そう成ってしまいます」

次のようにソクラテスは話した。

「では、健全な精神、節制、自制している精神は、どうでしょうか？」

「節制、自制しない人よりも節制、自制している健全な精神が少ない人がいるでしょうか？　いいえ！　いない！」

「『節制、自制している精神の働きと、節制、自制しない心の働きは、正反対である』と私ソクラテスは思うのですが？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「私エウテュデモスは、それも認めます」

次のようにソクラテスは話した。

「節制、自制という徳、善行について、そうであれば、我々、人が専念するべき全ての物事(である善行)に対して徹底して専念する事に関連して、次のような事は、どうでしょうか？」

「節制、自制しない事よりも深刻に、何らかの物事が、人が専念するべき事(である善行)に専念するのを妨げてしまう事ができますか？　いいえ！　節制、自制しない事が、最も深刻に、人が専念するべき事(である善行)に専念するのを妨げてしまう！」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「『最も深刻に、人が専念するべき事(である善行)に専念するのを妨げてしまうのは、節制、自制しない事しか無い』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『節制、自制しない事は、人を襲う最悪の災いであり得る』と、あなたエウテュデモスは思いませんか？」

「節制、自制しない人が、役に立つ物事の代わりに、有害な物事を選ぶように誘惑されてしまうよりも有害な感化を受けてしまう事は有り得るでしょうか？　いいえ！　節制、自制しない人は、役に立つ物事の代わりに、有害な物事を選ぶように誘惑されてしまう最も有害な感化を受けてしまう！」

「節制、自制しない事によって、人は、(心の中で)言いくるめられるような形で有害な物事に専念させせられてしまうし、役に立つ物事を怠らせられてしまう」

「節制、自制しない事によって、人は、自分の意に反して、全ての人が冷静な感覚では避けるであろう事をするように強いられてしまいますよね？」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「『節制、自制しない事は、最悪である』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「『節制、自制は、節制、自制の欠如、節制、自制しない事とは、正反対の結果を人にもたらしてくれる』と考えるのは論理的ですよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「そう考えるべきです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、この節制、自制は、まさに最悪とは正反対の結果をもたらす原因であるので、正に最善の物ですよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「それが自然な結論ですね」

次のようにソクラテスは話した。

「エウテュデモスよ、まるで『節制、自制は、人が獲得できる最善の物である』かのように見えます。そうではありませんか？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「実に、そうです、ソクラテスよ」

次のようにソクラテスは話した。

「ただ、さて、エウテュデモスよ、かつて、ある事実に気づいた事が、あなたには有りますか？」

(次のようにエウテュデモスは尋ねた。)

「どのような事実でしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「結局、人を、ある人々が『節制、自制しない事に固有の世界である』と(誤って)考えてしまっている甘美な快楽の世界へ導く事ができる能力が節制、自制しない事には無いという事実です」

「節制、自制しない事ではなく、『節制、自制だけに(人にとっての)最高の快楽へ到達するための手段が有る』のです」

(次のようにエウテュデモスは尋ねた。)

「どのような手段で、節制、自制は人を(人にとっての)最高の快楽に到達させるのですか？」

「どうしたら、そう成るのですか？」

(次のようにソクラテスは答えた。)

「ああ、次のような手段によってです」

「節制、自制しない事によってでは、人は、飢え渇き(という食欲)や、性欲や、睡眠不足(という睡眠欲)を我慢できません」

(「禁欲、節制、自制は、飲食による本来の快楽、愛による快楽、甘美な幸せな睡眠への唯一の手段です。禁欲、節制、自制によって、食欲、性欲、睡眠欲による快楽が満ちるまで忍耐強く我慢する人が、食欲、性欲、睡眠欲による本来の快楽を勝ち取ります」)

「その理由は、次のように成ります」

「節制、自制しない事によってでは、人は、より明らかに、より頻繁に、繰り返し生じる快楽の完全な結晶から隔絶してしまいます」

(「節制、自制しない事によってでは、人は、最も必要な、全てに浸透している、喜びの源泉について何か話せるほど味わえる事から隔絶してしまいます」※別の版)

「節制、自制によってのみ人は前述の労苦を我慢する事ができるし、節制、自制だけが、前述の食欲、性欲、睡眠欲という人に共通の、ありふれた事例において記憶するに値する全ての(人にとっての本来の)快楽を人にもたらしてくれる力の一部なのである」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「あなたソクラテスの話は正しいです」

次のようにソクラテスは話した。

「さらに、『美しい善い』何かを学ぶ事に何らかの喜びが存在するならば、」

「また、自分の肉体を人に正しく管理させる事ができたり、自分の家族を人に善く統治させる事ができたり、自分の友人達と自国の役に立つ事を人に自ら証明させる事ができたり、自分の敵を人に圧倒させる事ができたりするかもしれないような法則、規則を自身に忍耐強く応用する事に何らかの喜びが存在するならば、」

「美しい善い何かを学ぶ事、自分の肉体を正しく管理する事、自分の家族を善く統治する事、自分の友人達と自国の役に立つ事を自ら証明する事、自分の敵を圧倒する事は、利益の源泉、だけではなく、最も深い充足感の源泉に成るし、」

「美しい善い何かを学ぶ事、自分の肉体を正しく管理する事、自分の家族を善く統治する事、自分の友人達と自国の役に立つ事を自ら証明する事、自分の敵を圧倒する事で、節制、自制している人は、善行の成果を獲得できる」
「節制、自制しない人には、(人にとっての)本来の快楽、善行の喜び、真の利益、最も深い充足感、善行の成果のうちの、いずれか一つのうちの、一部も一塊も無いのである」
「なぜなら、『節制、自制しない人は、(肉体の快楽という)最も手近な快楽に関心を持つように(肉体の快楽によって)縛られてしまっているので、前述のような善行への関心が最も低く成ってしまうため、善行を行う能力も最低に成ってしまう』と断言して良いに違いないのである」
次のようにエウテュデモスは応えた。
「ソクラテスよ、あなたはよく、『私ソクラテスが思うに、肉体の快楽に支配されてしまっている人は、善行に全く関心が無い』と話していますね」
(次のようにソクラテスは尋ねた。)
「では、エウテュデモスよ、節制、自制しない人と、最も愚鈍な野獣は、何が違うというのですか？」
「全ての高みを目指す事を放棄してしまっている人、最善の探求をあきらめてしまっている人、快楽によって自分の五感を喜ばせようとだけ努めてしまっている人は、最も愚かな牛よりも優れているというのか……？　いいえ！」
「実に、節制、自制している人だけが、『隠されている宝』を発見できるのである」

「言動については、節制、自制している人は、善を熟考して選択して、また、悪から離れて、前述の、善行を理解して、善行(と悪行)の分類に従って、善行を選択する」

(「言動については、節制、自制している人は、『黄金』、『善』を選択して、また、『滓』、『無価値なもの』を捨てて、前述の、善行を理解して、善行と悪行の分類に従って、善行を選択する」※別の版)

(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「このようにして、言ってみれば、人は善と幸福の絶頂に到達するし、このようにして、人は論理的な思考と議論の能力が最大に成るのである」

(「このようにして、人は、幸福と完成へ、より近づいて、真理を明かして話す能力が最大に成るのである」※別の版)

「まさに『議論』という名前は、人々が集合して協力して熟考して、理解し、物事の分類に従って物事を選択する、『選択』という言葉に由来している」

「そのため、人は、この(善行という)務めのために可能な限り自ら(節制、自制を)用意する義務が有るし、本気で決心して、他の全てよりも、善行(、善)について探求する義務が有る」

「なぜなら、善行は超越への正道であるし、善行は同胞を指導するのに最もふさわしい人(として自身)を創造するし、善行は議論の教師に成るのに最もふさわしい人(として自身)を創造するからである」

第四巻 第六章（知恵、 知識は他人に定義として説明できるはずである）（信心深さの定義）（正しい人の定義）（知識と知恵の関係）（勇気の定義）（知識と能力の関係）（統治形態について）（本来の出発点から議論しなさい）（意見が一致している、ある物事から他の物事へ意見を一致させていって議論しなさい）

ここで、ソクラテスが、どのような方法で、ソクラテスの親しい友人達の中の「議論して真理に到達する」能力を、より大いに成長させたのかを、私クセノフォンは説明しようと努めるつもりである。

ソクラテスは、「人は、『それぞれの事実が何であるか？』を知っているならば、その知っている知識を他人に説明できる」という意見を固持していた。

（ソクラテスは、「何らかのものの性質について知っている人は全て、他人をその秘密に入門させる事ができる」と信じていた。※別の版）

（ソクラテスは、）逆に、「『それぞれの事実が何であるか？』についての知識の所有ができていないと、人は自らつまずいて失敗してしまったり、他人もつまずかせて失敗させてしまったりしても、驚くべきではない」（という意見を固持していた）。

そのため、ソクラテスは、ソクラテスと共にいた友人達と共に、存在するものの真の性質について調べるのを決してやめなかった。

（「諸物のうち、このものは何であるか？」と「このものの定義は何であるか？」というような常に質問をくり返されている問題への答えをソクラテスは探求した。※別の版）

ソクラテスが到達した定義の全てを詳細に見ていくのは、確実に長大な作業に成るであろう。

そのため、ソクラテスの（、ものの定義に到達した）手順、方法を説明するのに役立つような（、いくつかの）実例（だけを説明する事）に、私クセノフォンは自ら、とどめるつもりである。

第一の実例として、私クセノフォンは、信心深さについて、という問題を取り上げるつもりである。

次に示すように、（定義を）調べる方法は、多分、正しかった。

（次のようにソクラテスは話した。）

「教えてください、エウテュデモスよ。あなたは、信心深さとは、どのような種類の事であると思うのですか？」

（次のように、他方のエウテュデモスは答えた。）

「疑い無く、『信心深さとは、最も正しい優れた何かである』（と思います）」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『どのような種類の人が、信心深い人であるのか？』をあなたエウテュデモスは私ソクラテスに教えてくれますか？」

（「では、『信心深い人』の定義をあなたエウテュデモスは私ソクラテスに教えてくれますか？」※別の版）

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「『(信心深い人とは、)神々を敬礼する人である』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、人が好き勝手に、どのような方法ででも、神々を敬礼するのは、許されますか?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「いいえ、許されません」

次のようにソクラテスは話した。

「(神々を敬礼する時の)法が存在していて、(神々を敬礼する時の)法に従って人は神々を敬礼する必要が有ります」

次のようにソクラテスは話した。

「では、神々を敬礼する時の法を知っている人は、『どのように神々を敬礼する必要が有るか?』を知っていますよね?」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「『そうである』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『どのように神々を敬礼する必要が有るか?』を知っている人は、『知っている方法以外で神々を敬礼するべきではない』と思考しますよね?そうではありませんか?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「それは、そうですね」

次のようにソクラテスは話した。

「では、誰が『そうするべきである』と思う方法以外で神々を敬礼するというのでしょうか？　誰も『そうするべきである』と思う方法以外で神々を敬礼しない！」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「『そうである』と私エウテュデモスも思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、次のような結論に至りますね」

「『神々に関して法が何を命じているのか？』を知っている人は、法に従った方法で神々を敬礼しますよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「確かに、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、法に従って神々を敬礼する人は、するべき(方法)通りに神々を敬礼しますよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「『それしか無い』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、するべき(方法)通りに神々を敬礼する人は、信心深い人ですよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「確かに」

次のようにソクラテスは話した。

「『神々に関して法が何を命じているのか？』を知っている人を『信心深い人』として正しく定義できると思います。これが我々の定義ですよね？」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)
「とにかく『そうである』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。
「さて、人に関しては、ある人が、好き勝手に、どのような方法ででも、他人を扱っても許されるでしょうか?」
次のようにエウテュデモスは話した。
「いいえ、許されません」
「(神に関してと)同様に、人に関しても、『人に関して、どのような事が法に従っている事に成るのか?』を知っている人は、法に従っている人に成れますし、法に従っている相互の扱い合い方を実践する必要が有ります」
次のようにソクラテスは話した。
「では、法に従っている方法で相互に扱い合う人達は、そうするべき(方法)通りに相互に扱い合いますよね?」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「もちろんです」
次のようにソクラテスは話した。
「では、そうするべき(方法)通りに相互に扱い合う人達は、正しく思いやり深く気高く他人をもてなしますよね。そうではありませんか?」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、他人を正しく思いやり深く気高くもてなす人達は、人にとっての物事に関して、善行を行う人達ですよね?」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「『当然、そう成る』と思います」

次のようにソクラテスは話した。

「私ソクラテスが思うに、法に従っている人は、正しい事を行いますよね?」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「疑い無く、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『正しい事』という言葉によって、『どのような種類の事を意味しているのか?』をあなたエウテュデモスは分かりますか?」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「『法が命じている事』(が、『正しい事』)です」

次のようにソクラテスは話した。

「『法が命じている事を行う人達は、正しい事と、行うべき事の、両方を行う事に当然、成る』と思いますよね?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「『それしか無い』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、正しい事を行う人は、正しい人ですよね?」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「『そうである』と私エウテュデモス自身も思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『誰かは、法が命じている事を知らないで法に従う事ができる』と思うべきでしょうか?」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「思うべきではありません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『行うべき事は何であるか？　を知っている誰かが、自分は行うべき事を行うべきではない、と思う』と、あなたエウテュデモスは思いますか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「いいえ、私エウテュデモスは、そうは思いません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、行うべきであると思う事以外を行う誰かをあなたエウテュデモスは知っていますか？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「いいえ、私エウテュデモスは、知りません」
次のようにソクラテスは話した。
「『(神に関してと)同様に、人に関して、どのような事が法に従っているか？　を知っている人は、正しい事を行う』と思いますよね？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「疑い無く、そう思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、正しい事を行う人は、正しい人ですよね？」
(次のようにエウテュデモスは応えた。)
「そうでなければ、他に、誰が、正しい人であるというのですか？」
次のようにソクラテスは話した。

「では、『(神に関してと)同様に、人に関して、法に適う事について知っている人達は、正しい人達である』と我々が定義するならば、我々は正しい定義に到達している、と思いますよね？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「それが、私エウテュデモスの意見でもあります」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『知恵とは、どのような物である』と思いましょうか？」

「私ソクラテスに教えてください。『賢者は賢者が知っている物事について賢い』と、あなたエウテュデモスは思いますか？　それとも、知らない物事について賢い誰かなんて存在するというのでしょうか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「明らかに、賢者達は、知っている物事について賢いです」

「なぜなら、どうして、人に、知らない物事についての知恵が有るというのでしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「では、実際、『賢者は知っている知識について賢い』のですよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「どうして、知っている事ではなく、知らない事について賢い人なんて存在するというのでしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「では、知恵とは、それによって人が賢く成れる物ですよね？　あなたエウテュデモスは、どう思いますか？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「ええ。『それが知恵である』し『それだけが知恵である』と私エウテュデモスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『知識と知恵は同一である』と当然、成る、と思いますよね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「『そうである』と私エウテュデモスは思います」
次のようにソクラテスは話した。
「私ソクラテスは質問しても良いでしょうか？　『存在する全てのものを知る事は、人には可能である』と、あなたエウテュデモスは思いますか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「実に！　いいえ！」
次のようにソクラテスは話した。
「『一端を知る事も不可能である』と私エウテュデモスは思います」
「では、『全知に成る事は、人には不可能である』と思いますよね？」(人が神に成れれば、全知に成れる。)
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「『全く不可能である』と思います」
次のようにソクラテスは話した。
「『それぞれの人の知恵は、その人の知識の範囲内に制限される』、『それぞれの人は、その人が知っている事についてだけ賢く成れる』と思いますよね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「それが、私エウテュデモスの意見でもあります」

次のようにソクラテスは話した。
「ええ！」
「さて、エウテュデモスよ、同様に、善に関しては、同様の方法で、我々は、善を探求するべきでしょうか？」
（次のようにエウテュデモスは尋ねた。）
「どのような方法でしょうか？」
次のようにソクラテスは話した。
「『同一の物事が全ての人々に対して同じく有益である』なんて、あなたエウテュデモスは思いますか？」
（次のようにエウテュデモスは答えた。）
「いいえ。私エウテュデモスは、そうは思いません」
次のようにソクラテスは話した。
「『ある人にとって利益に成る、ある物事が、時には、（場合によっては、）他の人にとって有害である』と、あなたエウテュデモスは思いますよね？」
（次のようにエウテュデモスは応えた。）
「確かに」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『利益に成る物事以外の何かが善い物事である』なんて事が有ると、あなたエウテュデモスは思いますか？」
（次のようにエウテュデモスは答えた。）
「利益に成る物事以外の、善い物事なんて存在しません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『利益に成る物事は、それが利益に成る人に対しては、善い物事である』という事に当然、成ると思いますよね？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「私エウテュデモスも、そう思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、美しさに関しては、『ある物事は、それが美しい物事に対しては、美しい物事である』という定義以外の定義を何か話す事ができますか?」

「それとも、肉体であれ、器であれ、それが何であれ、『普遍的に美しい物事である』として、あなたが知っている何らかの美しい物事を話す事ができますか?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「『そのような美しさの定義について、私エウテュデモスは何も知らない』と私は自ら認めます」

次のようにソクラテスは話した。

「私ソクラテスが思うに、ある物事を、その物事に適した使い方で使う事は、その物事を美しく適用する事ですよね?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「疑い無く、それが、『美しく利用する』という事です」

次のようにソクラテスは話した。

「では、美しく適用できる事以外の何かのために用いられる、(その物事に適した使い方で使う事以外の何かのために用いられる、)あれこれの全ての物事は美しいでしょうか?」

次のようにエウテュデモスは話した。

「(美しく適用できる事、その物事に適した使い方で使う事という)唯一の事以外に用いられる全ての物事は美しくありません」

次のようにソクラテスは話した。
「では、『役に立つ物事は、それが役に立つものに対しては、美しい』と思いますよね？」
「『そうである』と私エウテュデモスは思います」
（次のようにエウテュデモスは答えた。）
次のようにソクラテスは話した。
「では、勇気に関しては、どうでしょうか？　エウテュデモスよ」
「私ソクラテスが思うに、あなたは、勇気を美しい物事に分類しますよね？」
「勇気は、気高い資質ですよね？」
（次のようにエウテュデモスは答えた。）
「いえ、（それどころか、）勇気は最も気高い資質の一つです」
次のようにソクラテスは話した。
「思うに、『勇気は大いなる目的の役に立つ』と、あなたは考えていますね？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神よ！　いや、むしろ、勇気は、全ての目的のうち、最も大いなる目的の役に立ちます」
次のようにソクラテスは話した。
「では、『恐怖と危険に直面して、恐怖と危険について無知である事は、有利である』なんて考えますか？」
（次のようにエウテュデモスは答えた。）
「確実に、無知は、不利です」

次のようにソクラテスは話した。
「『単に、何が危険であるのか？　について知らないせいで、危険に直面しても恐れない者どもは、勇敢ではない』と思いますよね？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「最も、正しいです」
「そうでなければ、同様に見える事によって、狂人どもと臆病者どものうちの大部分も勇敢である事に成ってしまいます(が、実際は勇敢ではありません)」
次のようにソクラテスは話した。
「ええ、では、恐ろしくない物事を恐れる者どもについては、どうでしょうか？」
次のようにエウテュデモスは話した。
「神よ！　『勇敢である』なんて私が思うと、あなたは思っているのですか、ソクラテスよ？」
「狂人どもと臆病者どもよりも、恐ろしくない物事を恐れる者どもには、勇気が有りません」
次のようにソクラテスは話した。
「では、あなたは、恐怖と危険に直面しても善良で優れている人達を『勇敢である』と考えますし、恐怖と危険に直面して劣悪な者どもを『臆病者どもである』と考えますよね？」
(次のようにエウテュデモスは答えた。)
「確実に、私エウテュデモスは、そう考えます」
次のようにソクラテスは話した。

「では、『勇気に関しては、恐怖と危険に立ち向かって上手く対処できるし、気高い利益に変える事もできる人達だけが、善良であるし、勇気に優れている』と、あなたは思いますか？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「ええ、恐怖と危険に立ち向かって上手く対処できるし、気高い利益に変える事もできる人達が勇敢ですし、これらの人達だけが勇敢です」

次のようにソクラテスは話した。

「では、実に、『恐怖と危険に下手な対処をしてしまう種類の者どもは劣悪である』と思いますよね？」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「もし恐怖と危険に下手な対処をしてしまう種類の者どもが劣悪でなかったとしたら、他に、誰が劣悪なのでしょうか？」

次のようにソクラテスは話した。

「両方共、恐怖と危険に対して、自分が『行う必要が有る』とか『行うべきである』と考える通りの方法を利用するのでしょうか？」

(次のようにエウテュデモスは応えた。)

「他に、どのように、恐怖と危険に対処するというのですか？」

次のようにソクラテスは話した。

「『恐怖と危険に上手く対処できない、または、気高い利益に変える事もできない者どもは、行う必要が有る、または、行うべきである方法について知っている』と思いますか？」

(次のようにエウテュデモスは答えた。)

「私エウテュデモスは、そうは思いません」

次のようにソクラテスは話した。

「『行うべきである方法について知っている人達は、能力が有る人達でもある』という事に当然、成る、と思いますよね？」

（次のようにエウテュデモスは話した。）

「ええ、行うべきである方法について知っている人達は能力が有る人達ですし、これらの人達だけが能力が有る人達です」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、さて、恐怖と危険への対処に失敗しない人達については、どうでしょうか？」

「恐怖と危険への対処に失敗しない人達が、恐怖と危険に下手な対処をしてしまう事なんて有り得るでしょうか？」

（次のようにエウテュデモスは答えた。）

「『恐怖と危険に下手な対処をしてしまう事は無い』と私エウテュデモスは思います」

次のようにソクラテスは話した。

「逆に、『恐怖と危険に下手な対処をしてしまう者どもが、何らかの、とても酷い大失敗をしてしまう』と思いますよね？」

次のようにエウテュデモスは話した。

「実に、十中八九、『当然そう成る』と思います」

次のようにソクラテスは話した。

「では、『恐怖と危険に立ち向かって上手く善良に優れて気高く対処する方法を知っている人達は勇敢である』し、『恐怖と危険への対処に全く失敗してしまう者どもは臆病者どもである』と思いますよね？」

（次のようにエウテュデモスは答えた。）

「『そうである』と私エウテュデモスも判断します」

さて、「王政と独裁政治は、両方共、統治形態であるが、違う統治形態である」とソクラテスは確信的に考えていた。

王政は、自発的に国家の法に従っている人々を統治します。

一方、独裁政治は、法に従うのではなく、意に反して支配者の気まぐれや願望に従っている人々を支配します。

「さらに、国民の形態、または、統治形態には、三つの形態が存在する」（とソクラテスは考えた。）

「法によって定められている義務を果たした国民を公職に任命する場合は、貴族政治である（。または、最善の人達による統治である）」とソクラテスは考えた。

「公職への(任命の)根拠が課税できる財産に左右されてしまう場合は、金権政治である（。または、富による支配である）」（とソクラテスは考えた。）

最後に、「無差別に全国民が公職の任命権という手綱を握っていた場合は、民主政治である（。または、国民による統治である）」（とソクラテスは考えた。）

また、論争をしかけてきた相手が、明確に話さずに、証明しようとも試みずに、名前を挙げた、ある人は、他の、ある人よりも、「より賢い」、または、「より政治家らしい」、または、「より勇敢である」などと主張した時に、ソクラテスが答えた方法を、私クセノフォンは説明しよう。

次のように、ソクラテスは、議論全体を基礎の根本の問題へ戻す方法を用いた。

次のようにソクラテスは話した。

「あなたがほめている誰々は、私ソクラテスがほめている人よりも、より優れた都市国家市民である、と、あなたは話していますよね？」

次のように論争をしかけてきた相手は話した。

「ええ。他言していますが」

次のようにソクラテスは話した。

「では、第一に『優れている都市国家市民の務めとは、何であるのか？』を調べる方が、より良くありませんか？」

次のように論争をしかけてきた相手は話した。

「そうしましょう」

次のようにソクラテスは話した。

「では、最初に、(国家の)支出という問題に関しては、ある都市国家市民が、国家の財源を増やす事や、国家の支出を軽減する事によって、その都市国家市民が優れている事を示しますよね？」

(次のように論争をしかけてきた相手は答えた。)

「確かに」

次のようにソクラテスは話した。

「また、戦争に関しては、敵国よりも自国を優勢にする事によって、その都市国家市民が優れている事を示しますよね？」

次のように論争をしかけてきた相手は話した。

「明らかに、そうです」

次のようにソクラテスは話した。

「また、私ソクラテスが思うに、外交官としての外交という職務に関しては、敵の代わりに味方を確保する事によって、その都市国家市民が優れている事を示しますよね？」

(次のように論争をしかけてきた相手は応えた。)

「私も、そう思います」

次のようにソクラテスは話した。

「ええ、では、議会での議論に関しては、党派争いをやめさせる事や、都市国家市民達の一致を促す事によって、その都市国家市民が優れている事を示しますよね？」

次のように論争をしかけてきた相手は話した。

「それが、私の意見でもあります」

前述のような、議論をその本来の出発点へ戻す方法によって、論争をしかけてきた相手ですら自ら心を動かされて、論争をしかけてきた相手の心にも、真実が明らかに成ります。

また、ソクラテスによる論理的な議論を導く方法とは、一般的に意見が一致している、ある物事から、他の物事へ、(意見を一致させていって)徐々に前進する事でした。

ソクラテスはよく「ここ(、意見の一致)に、論理的思考の真の保証を置く」と話していた。

このため、私クセノフォンが知っている全ての人よりも、ソクラテスは、聴衆からの共通の意見の一致を勝ち取る事に、より成功していた。

「オデュッセウスには、一般的に認められている、ある意見から他の意見へ(意見を一致させていって)議論を導く事ができる才能が有ったので、ホメロスは『誤りが無い雄弁家』という呼称をオデュッセウスに与えた」とソクラテスは話していた。

第四巻 第七章（人生は短いので自然を研究し過ぎるなかれ）（健康のために自身の個性的な体質を観察しなさい）（神託に注意を払いなさい）

「最終的に、ソクラテスが、正直に簡潔に、話している相手へ、自分の考えを明言しようと努めたのは、前述の実例で証明されている」と私クセノフォンは思っています。

（「ソクラテスが、正直に簡潔に、ソクラテスと交流していた友人達へ、自分の考えを明言しようと努めたのは、前述から、明らかに成っている」事を、私クセノフォンは願っています。※別の版）

同時に、ここで、私クセノフォンが示したいと思っているように、ソクラテスは、（ソクラテスと）同様に、他人の自立している精神を成長させたいと熱望していた。

自立している精神を持つ人は、自分の力に応じた全ての務めにおいて、自立している事ができます。

私クセノフォンが知っている全ての人々の中で、最も熱心に、ソクラテスは、ソクラテスの周囲の全ての人々が本当は何に精通しているのかを確かめた。

また、ソクラテスは、知る事が真の美しい善い人にふさわしい、知っている範囲内の全ての物事を、教える事に最大の熱意を見せた。

また、ソクラテスは、ソクラテスの知識が不足している（ため、友人達を教える事ができない）場合には、友人達を、（ソクラテスが知らない知識を）知っている人達に紹介した。

また、ソクラテスは、何らかの個別の物事の経験的な知識を、教育を受けている人が学ぶのに好ましい程度までは、友人達に教えた。

その一例として、幾何学を取り上げると、(次のようにソクラテスはよく話していた。)

「全ての人は、とにかく、必要であれば、全ての場合で幾何学の法則によって、土地の一部を受け継いだり、譲ったり、土地を分担したり、土地の一部を耕作させるために担当させたりできる程度までは、幾何学を教わるべきである」

(「全ての人は、とにかく、必要であれば、全ての場合で正確な測量によって、土地の一部を受け継いだり、譲ったり、土地を分担したり、土地の一部を耕作させるために担当させたりできる程度までは、幾何学を教わるべきである」※別の版)

「前述の程度までの幾何学は、実に、とても簡単であるし、学ぶのも簡単であるので、測量方法に普通に関心が有るだけで、幾何学の学徒は、土地の一部の大きさを確かめる事ができる、と同時に、土地の測量方法を無事に知る事ができる」

ただし、ソクラテスは、諸々の難解な図形を研究する程度まで幾何学を研究する事には、賛成できなかった

次のようにソクラテスは話した。

「前述の幾何学の難解な図形の研究が、何の役に立つのか、私ソクラテスには理解できません」

ただし、ソクラテスは、前述の難解な問題に精通はしていたのであった。

次のようにソクラテスはよく話していた。

「前述の幾何学の難解な図形の研究のような事は、人が、人生を使い果たしてしまって、より役に立つ他の多数の物事を学ぶのを妨げてしまうほど、膨大である」

また、「ある程度までの天文学の実践的な知識、星々の研究における、ある程度までの技術を学ぶべきである」とソクラテスは強く主張した。

「行軍、航海、見張りの管理といった陸や空の移動のために、夜の時刻や、一年間や一か月のうちの時期を知る事ができる学問(である天文学)について、全ての人は十分に知るべきである」

「一般的に、夜の時刻や、一年間や一か月のうちの時期が関係している全ての物事に関して、多数の時刻や時期を見分けるのに役立つ信頼できる知識を十分に持つべきである」

「また、前述は、簡単に夜の漁師や猟師、船の操舵手、天文学を知っていて仕事に利用している他の多数の人達から学ぶ事ができる知識の一部である」

変わった動きの外惑星であれ、星々であれ、我々の地球の公転軌道の外の諸天体の動きについての知識を含む程度にまで、または、地球から外惑星や星々までの距離、外惑星や星々の諸々の周期、距離や周期などの諸々の原因を知ろうと努めて疲れ果てる程度にまで、天文学の研究を押し進める事に関しては、ソクラテスは全て強く反対した。

(次のようにソクラテスは話した。)

「なぜなら、『前述の研究以下の利益しかない』と私ソクラテスは思います」

ただし、ソクラテスは、幾何学の微妙な部分と同じくらい、天文学の微妙な部分には精通していた。

またも、次のようにソクラテスは主張した。
「前述の天文学の微妙な部分の研究だけでも、人が、人生を使い果たしてしまって、より役に立つ多数の物事の研究から離れてしまうほど、膨大である」
大まかに言うと、天空の物事に関して、神の力が天空の物事のそれぞれの動きを形成している仕組みを熟考する試みに、ソクラテスは強く反対した。
神の力が天空を動かす仕組みは、ソクラテスが信じていたように、人の知力を超越している、だけではなく、神々が明らかにしない事を選んだものを暴く試みは、ソクラテスが考えていたように、神々の目から見て神意に適わないのである。
実際、ちょうど、神による仕組みを説明しようと試みた、全ての推測者のうち最も大胆な推測者である、アナクサゴラスが少々、正気を失って狂気じみてしまったように、前述のような問題について考えて自分の頭を悩ませた人は、正気を失って狂気じみてしまう可能性がかなり有る。
アナクサゴラスは、「人は、簡単に火を見る事ができるが、太陽の表面をじっと見つめる事ができる能力を(神から)与えられていない」という事実を無視してしまって、「太陽と火は同一である」と言い張ってしまった。
また、アナクサゴラスは、「太陽光線の影響下で肌の色は変化するが、火の光線下で肌の色は変化しない」という事実も無視してしまった。
また、アナクサゴラスは、「太陽光の助けによって大地の内部から植物は芽吹いて健康に成長するが、火の影響力は全てのものを乾き切らせてしまって命を破壊してしまう」という事実も無視してしまった。
また、アナクサゴラスは、太陽について「赤熱した石である」と言い張ってしまうように成ってしまった時、火中の石は光らないし(崩壊して)無く

成ってしまうが、太陽は減衰しないで最も激しく輝くし、太陽神は半永久的に太陽に宿る事ができる」という事実も無視してしまった。

また、ソクラテスは、論理的に思考する手順の研究について教え込んだが、ここでも、他の全てと同じく、無益に研究し過ぎる事に用心するように、弟子に命じた。

ただし、ソクラテスは、役に立つ程度までは、全ての研究に加わる用意が有ったたし、ソクラテスと共にいた友人達と議論を最後までやり通す用意が有った。

実に、ソクラテスは、その程度までに留めた。

また、ソクラテスは、健康に最大の注意を払うように、ソクラテスと共にいた友人達へ熱心に勧めた。

「あなた達、ソクラテスと共にいた友人達は、熟練者達から学べる事は全て学ぶであろう」

「しかし、それだけではなく、あなた達、ソクラテスと共にいた友人達は各自、自身の場合を生涯、観察する事によって、『どのような食習慣、どのような飲食物、どのような仕事が自身に最適であるか？』を知ろうと労苦するべきである」

「あなた達、ソクラテスと共にいた友人達は各自、可能な限り最も健康的な人生を送るために、前述の自身への観察による自身の健康についての知識を役に立てるべきである」

「診断によって、または、必要な治療によって、改善できる医者を見つける事は、前述の私ソクラテスの助言に従って、自身の特異体質を学ぶ全ての人にとっても、簡単な事ではないであろう」

また、誰かが、人知には不可能な助けを求めて来た場合、ソクラテスは、「(神による)予言」(、「神託」)に注意を払うように、勧めた。

「人事に関して、神々が合図を人にもたらす手段の秘密を知っている人には、必ず、神による導きが有るのである」

第四巻 第八章（ソクラテスが死刑を甘受した理由）

さて、もし誰かが、「行うべき事や行うべきではない事を教えてくれる神性についてのソクラテスの発言」を、「裁判官どもの会議がソクラテスを死刑にした事実」と比較して、「ソクラテスは、『神性』について、嘘をついたせいで、また、他人を惑わしたせいで、有罪に成った」と言い張ってしまう気に成ってしまったら、私クセノフォンは、その人に、第一に、「裁判の時点で、ソクラテスは既に年を取っていて、とても老いていたので、仮に、その時に殺されないで死ななかったとしても、その後すぐに、ソクラテスの命は寿命に到達したであろう」と気づかせるであろう。

また、第二に、事態が進んで、ソクラテスは、知力の減少を全ての人にもたらす何年間かを免れる事で、人生という最も苦痛な重荷から免れた。

その代わりに、ソクラテスは、ソクラテスの誠実さ、自由、正しさにふさわしい、ソクラテスの弁明のし方によって、また、無限の従順さと大胆さ、男性らしさで死刑判決を受けた受け方によって、心の強さを完全に示すように、また、更なる栄光を獲得するように、(神によって)求められた。

なぜなら、「人についての記録の中で、かつて、ソクラテスは、最も気高く死に対して頭を垂れた」と認められているからである。

ソクラテスは、死刑判決後、「デリア」という祭りの月間であったため、法律が、神聖な使節団がデロス島から戻るまで、全ての人が、公の死刑執行者の手によって死ぬ事を、許していなかったので、三十日間生きる必要が有った。

(ソクラテスの友人達が例外無く証言しているように、)その全期間中、ソクラテスは、いつもの生き方を続けた。
ソクラテスは、勇気が一定である生き方で、当時と以前で違いが見られなかった。
(以前からの)ソクラテスの生き方とは、常に、不思議と陽気である事であったし、満足感で穏やかである事であった。

さて、さらに、私クセノフォンは、ヒッポニコスの息子であるヘルモゲネスから聞いた、ソクラテスについての、いくつかの事を話すつもりである。
ヘルモゲネスの話では、次のような事であった。
メレトスが起訴状を作った後ですら、迫っている訴訟以外の全ての物事について、ソクラテスがよく会話したり議論したりしていたのを、ヘルモゲネス自身は聞いて、ヘルモゲネスは思い切って「ソクラテスは、弁明の言葉について熟考しているべきである」と提案した。
ヘルモゲネスの言葉に対して、第一に、次のように、教師ソクラテスは答えた。
「『人生で、ずっと私ソクラテスが弁明を実践してきている』と、あなたヘルモゲネスは思いませんか?」
そして、ヘルモゲネスが「どのようにしてですか?」と尋ねるとすぐに、次のような説明をソクラテスは言い加えた。
「私ソクラテスは、善悪を見分け悪行をせず善行を行う事だけして、生きてきました」
(次のようにソクラテスは言い加えた。)

「私ソクラテスは、『善悪を見分け悪行をせず善行を行う事が、私ソクラテスの弁明のための、可能な限り最良の実践である』と考えているのです」

　すると、ヘルモゲネスは、再び話を戻して、次のようにソクラテスに(弁明の用意を)懇願した。

「アテナイの裁判官どもが、議論の影響下、無実の人達に死刑を宣告し、本当の犯罪者どもを無罪にする事が、何とも普通に起こっているのを、ソクラテスよ、あなたは知りませんか？　いいえ！　知っていますよね？！」

　次のようにソクラテスは応えた。

「裁判の前に、私ソクラテスが、自分の考えを、するつもりである弁明にしようと試みるたびに、神性が私ソクラテスに反対したのを、私ソクラテスは、あなたに保証します、ヘルモゲネスよ」

　すると、ヘルモゲネスが「何と不思議であるのか！」と大きな声で話したので、次のようにソクラテスは話を続けた。

「『私ソクラテスにとって、すぐに死ぬほうが、より優れている』と神が思った事を、あなたヘルモゲネスは不思議に思うのですか？」

「『私ソクラテスの生き方よりも優れている幸せな生き方をした』と私ソクラテスが認めている人が現在までにいない事を、あなたヘルモゲネスは知らないのですか？」

「なぜなら、私ソクラテスは、可能な限り善く成るために最善を尽くして学ぶ人達の生き方が『最善の生き方である』と考えているし、善良さを成長させている事を最も活発に感じている人達の生き方が『最も幸せな生き方である』と考えているからです」

「前述が、今まで、私ソクラテスが『そうしてきている』と気づいている幸せな成功なのです」

「私ソクラテスは、他人と思いがけなく交流して、だけではなく、他人と自身を厳密に比較して、前述の結論に至っていますし、前述の結論を今日まで確信し続けています」
「そして、私ソクラテスだけではなく、私ソクラテスの友人達も、私ソクラテスについての前述の結論を確信し続けてくれています」
「『ソクラテスの友人達が、私ソクラテスの友人であり、私ソクラテスを愛してくれている』という粗末な理由のためではありません」
（「そうでなければ、他の人々も、自分の友人について、同様にするであろう」）
「実に、私ソクラテスの友人達は、『私ソクラテスと共にいる事で、自分も、善良さの完全な高みへ到達するであろう』と確信しているからなのです」
「仮に、私ソクラテスが生き延びる運命であったら、私ソクラテスは、目や耳が鈍感に成る事、知力が落ちる事、学んだ知識を忘れる事、学んでも知識を忘れやすく成る事といった、老化による罰の全てを受けるように強いられる羽目に成るかもしれない」
「一言で要約すると、私ソクラテスは、(知識や徳が)高い状態から落ちてしまうかもしれませんし、以前は抜群に優れていた事において、日々、劣悪化してしまうかもしれません」
「しかし、実際、仮に、老化という変化に気づかないままでいる事が可能であっても、その人生は、ほとんど生きる価値が無く成ってしまっているであろう」
「ただし、仮に、老化という変化に気づいても、余生は、比較的、面白くないであろうし、人生の死のような代物であろうし、人生の魅力が欠如しているであろう」

「実際、私ソクラテスが不正に殺されて死ぬ運命であるならば、私ソクラテスを不正に殺す者どもには恥辱が待ち受けている」
（「なぜなら、不正が劣悪であるならば、どうして、何であれ、全ての不正な行為が劣悪であり得ないであろうか？」）(不正が劣悪なので、不正な行為も劣悪である。）
「しかし、どうして、他人が私ソクラテスに関して正しい判決と正しい行動に至れない事が、私ソクラテスにとって恥辱でしょうか？　いいえ！」
「私ソクラテスの前に、この人生という道を歩いた人生の先輩達の長い間の成り行きを、私ソクラテスは知っているし、人生の先輩達が残した後世の名声にも、私ソクラテスは留意しています」
「『悪い事をしたか、それとも、悪い事をされたか、に応じて、どのように後世の名声が変化するか？』に私ソクラテスは気づいています」
「そのため、私ソクラテスとしては、『たとえ私が今日死んでも、私を殺した者どもへの配慮とは遥かに違う配慮を、私も他人から得られるであろう』と私は知っているのです」
「『私ソクラテスが、全ての人に対して常に決して悪事を犯さなかったし、全ての人をより悪人にしなかったし、私ソクラテスと共にいた友人達をより善人にしようと常に試みた』という不滅の永遠の証明は、私ソクラテスに、前述の後世の名声をもたらしてくれる事を保証してくれるであろう」
　前述が、ヘルモゲネスや他の友人達との会話で、ソクラテスが話した言葉であった。

ソクラテスを知っていて「ソクラテスがどのような人であるか？」を認知していた人達のうち、善行と(自身の)完成を探求している全ての人達は、ソクラテス以外の人には不可能なくらい、ソクラテスが善行の探求において自分達を助けてくれた人であるので、未だに、今でも、ソクラテスの喪失を最大の悲しみで悲しむのをやめられないのである。

私クセノフォンとしては、ソクラテスは、(本書「ソクラテスの思い出」で)私クセノフォンが自ら説明しようと努めてきた通りの人であった。
ソクラテスは、とても信心深かったので、神意から離れなかった。
ソクラテスは、とても正しかったので、わずかな傷すら、全ての生きている人達につけなかった。
ソクラテスは、とても節制、自制していたので、より甘美な快楽の代わりに、より善い物事を常に選んだ。
ソクラテスは、とても賢かったので、より悪い物事から、より善い物事を、正しく見分けた。
また、ソクラテスは誰の助けも必要としなかった。(ソクラテスは自立していた。)
善い物事についての知識のおかげで、ソクラテスの判断は、誤りが無かった、と同時に、自給自足であった。
ソクラテスは、倫理道徳的な問題について、論理的に話す事ができたし、定義できたので、他人を試す事もできたし、他人が誤っていた場合は問い詰めて誤りに気づかせたため、他人を善行と気高い男性らしさへの道へ促したり導いたりできた。

前述の特徴によって、ソクラテスは、まさに、完成している幸せな人の正に典型であるように思われる。

前述が、私クセノフォン達、ソクラテスの友人達の意見である。

私クセノフォン達、ソクラテスの友人達の意見に納得、同意できなければ、その人は、前述のソクラテスの特徴の正確な詳細な説明と共に、他の全ての人々の特徴を並べて、判断するように、私クセノフォンは求めるであろう。